

423
541



* 0047782000 *

1

0047782-000

特 224-654

体育としての薙刀

中山つた・著

第一印刷所

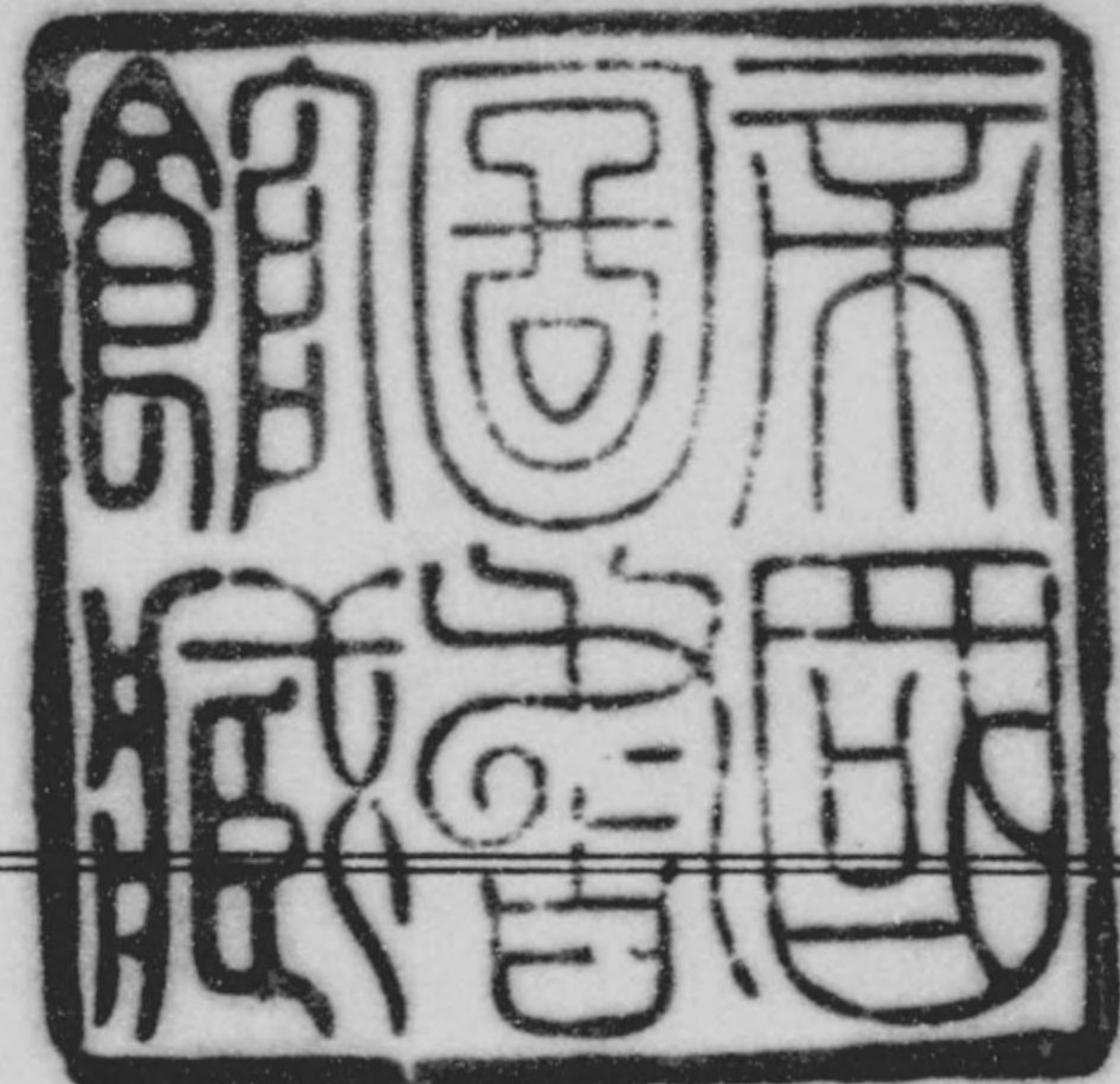
昭和 17

AHH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
1日付で文化庁長官の裁定を受け使用するもので



特 224
654



刀薙のてしと育體

著 た つ 山 中





序

近年各學校における武道が愈々隆昌に赴き、男子と言はず女子と言はず上は大學専門學校から下は國民學校に至るまで普及發達を見るに至り、國民學校に於てすら正科として採り入れるやうになつて來たことは、國民精神の高揚が叫ばれ、國民體位向上の要求される折柄眞に慶賀に耐へないところである。

凡そ劍道といひ柔道といひ、弓道薙刀等夫々の武道には、各の長所があり面目があることは勿論であるが、就中女子に適當したものととして、それが過激な運動に失せず、而も婦徳に即應し精神修養上價值大なるものとして先づ薙刀と弓道とをあげることが出来ると思ふ。

殊に、同時に多數の生徒に之を課しうる點に於て、又その設備に多額の經費を要せず、體育と精神陶冶との双目的を達しうる點に於て薙刀は最適

のものといふ事が出来よう。

惟ふに、事に處する靜觀の態度を養ひ、忍耐、決斷、機敏、視機、正義、謙讓、禮節の性情諸徳を涵養し、落ち着きと勇氣、深き注意力を養ひうる等精神陶冶上の價値を眺めると、薙刀は女子の武道的修練として誠に相應はしく、今後益々女子中等學校方面に普及して然るべきものと思ふ。

本校が數年前から之を正科として採用してゐる所以も實にこゝにあるのであつて、幸ひ師範にその人を得、武道による女性の修練に大きな足跡を残して來たのも、實に中山先生に負ふ處が甚だ多いのである。こゝに同先生に對し深甚の敬意を表すると共に、斯の道に志す人々が、平易簡潔に鏡心流薙刀の眞髓を敘述せられある本書により、廣く啓發されんことを希望してやまぬ次第である。

函館高等女學校校長

奥村季吉

本書ヲ世ニ送り出スニ際シテ

私ハ幼ニシテ劍道ヲ父ニ學ビ長ズルニ及ビ之レヲ薙刀ニ應ジ明治四十五年ニ至リ一派ヲ立テ鏡心流ト名ヅクマシタ、同年ヨリ昭和三年ニ至ル迄約十七年間不束ナガラ奈良女子高等師範學校ノ薙刀教師トシテ職ヲ奉ジ鏡心流ヲ生徒諸姉ニ教授シ身心鍛鍊上ニ聊カノ貢獻ヲナシタルコトハ心竊ニ喜ビ居ルモノデアリマス、特ニ此ノ間、

畏クモ 皇后陛下並ビニ良子女王殿下ノ臺覽ヲ

辱フシタルコトハ誠ニ身ニ餘ル光榮デアリマス

昭和三年職ヲ辭シ函館市ニ居住、家事ニ没頭スル様ニナリマシテカラハ薙刀ヘノ親シミモ薄ラギ勝チトナリマシタガ偶々函館高等女學校校長原房俊先生ノ御薦メニヨリ昭和八年ヨリ同校ニ於テ薙刀ヲ教授シ現在ニ及ンデ居ルノデアリマスガ研鑽意ノ如クナラザルハ甚ダ遺憾ニ存ズル所デアリマス。

近時、女子體育トシテ武道熱ガ盛ンニナリマシタコトハ時勢ノ要求トシテ洵ニ喜バシキ事ト存ジマス、特ニ昭和十一年六月文部省ニ於テハ女學校體操要目中ニ薙刀ヲ加フル訓令ヲ出サレマシタガ斯道發達上更ニ一段ノ拍車ヲカクルモノト確信致シマス。

從來ノ薙刀ヲ現時ノ女學校體育ニ即セシムルニハ充分ナル調査研究ノ必要ガアルノデハナイカト疑懼スル所デアリマスガ現在ノ自分デハ其ノ責務ノ遂行ハ重キニ過グルモノアルヲ痛感シテ居ル次第デアリマス。

大正十四年私ハ『體育としての薙刀』ヲ著ハシマシタ、元來武術ハ其ノ精神作用ヤ氣合等ヲ重ンズルモノナルニ文筆ニ拙ナル私ガ敢テ之レヲ世ニ公ケニシタルハ一ハ斯道ニ志ス人々ヨリ教ヲ乞ハルルモノ多キト一ハ自己ノ創始ニ係ハル鏡心流ヲ世ニ擴メテ後人ノ批判ヲ仰ガンガタメデアリマシタ。

爾來薙刀ノ研究ガ益々盛ンニナリ再版ノ急ニ迫ラレタルモ事情之レヲ許サザルモノアリシハ痛恨ノ極ミデアリマス。然ルニ

今回奥村函館高等女學校長ノ深甚ナル御援助ヲ得テ該書ヲ印刷シ世ニ送り出ス事ニナリマシタコトハ私ノ欣幸コノ上モナイコトデアリマスガ増補訂正ヲ加フルコトヲセズ其ノマヽニシタルハ願ミテオ恥カシキ限リデアリマス。

既版ノ『體育としての薙刀』ハ私ノ過去廿餘年間ニ亘ル結論デアルト同時ニ私ニ取リテハ一ノ序論デモアツタノデアリマスカラ其ノ印刷タル本書ヲオ讀ミノ方ハドウゾ其ノ積リニ御願ヒ致シマス、幸ニシテ斯道研究者ニ取リテ多少ナリトモ御參考ニナルコトヲ得バ私ノ満足トスル所デアリマス。

昭和十四年六月

於 函 館

著 者

體育としての薙刀

目次

第一章 薙刀と體育……………	一
第二章 薙刀各部の名稱……………	五
第三章 薙刀の種類形状と薙刀の流派……………	八
第一節 薙刀の種類形状……………	八
第二節 薙刀の流派……………	一〇
第四章 基礎練習……………	一三
第一節 集合及び把持法……………	一三

第二節 休息及び禮……………一五
第三節 振返し……………一六

第五章 形の名稱と順序……………一八

第六章 形の説明……………二五

(一) — (一九) 薙刀の形……………二五—二六

(二〇) — (二四) 懐劍の形……………二六—二八

第七章 薙刀の精神奥義……………二八

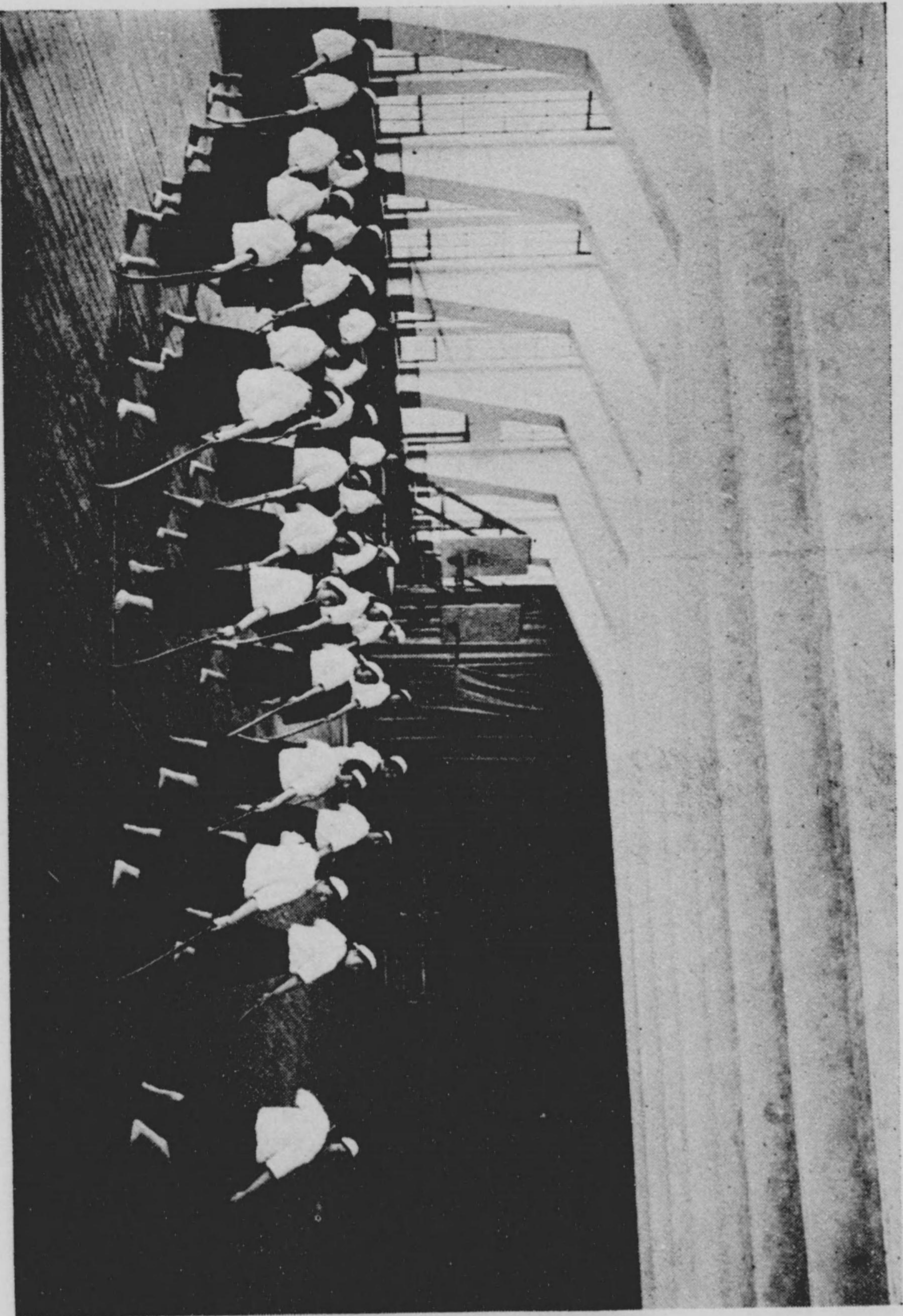
目次 終了の頁



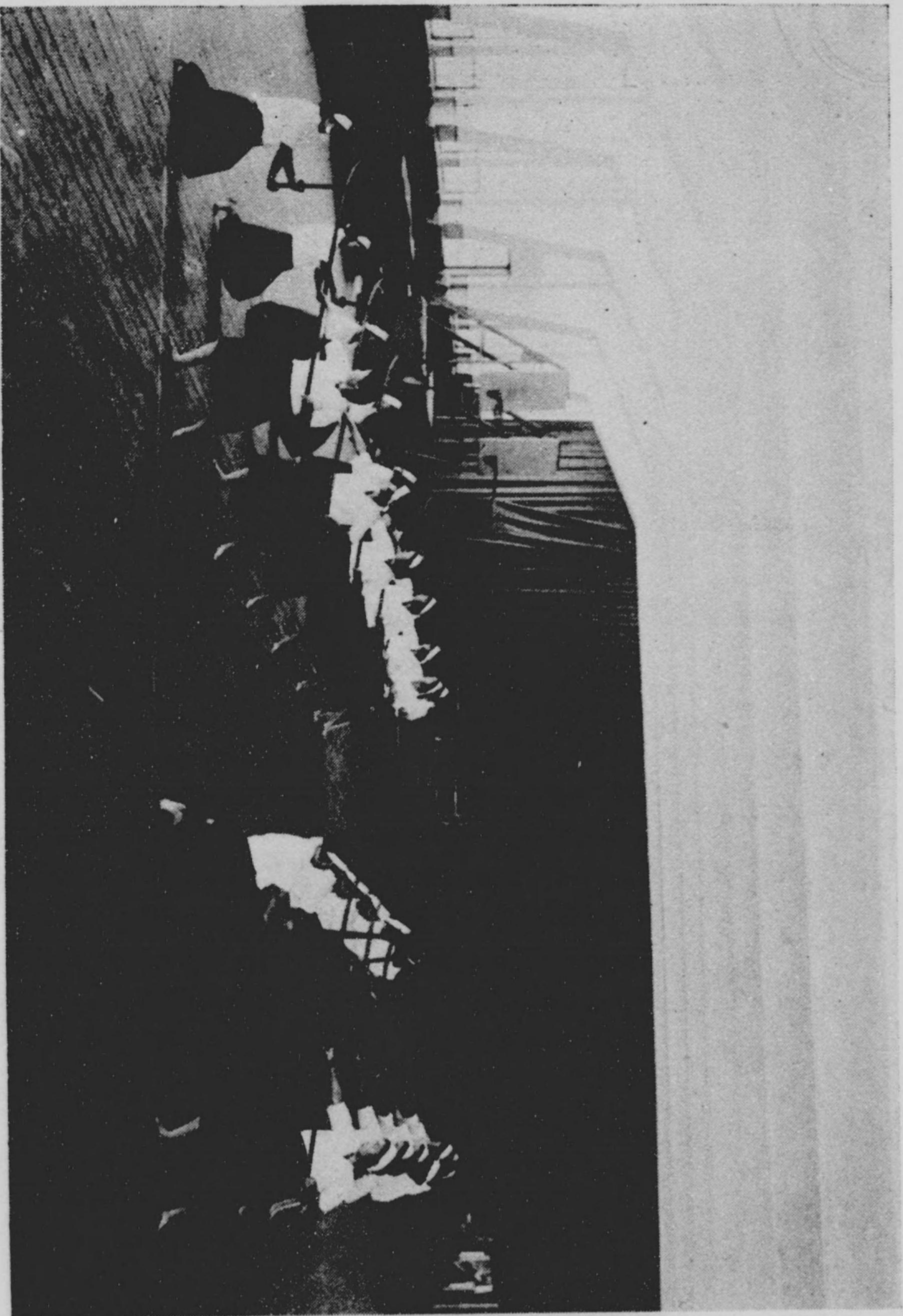
奥村校長先生



著者
最 近 の 小 照



(1) 雜 刀 一 練 習



(2) 雜 刀 一 齊 練 習

體育としての薙刀

新井つた著

第一章 薙刀と體育

體育といへば近代の思潮の一として實現され又獎勵されつつあるものであるが、廣い意味にいふ體育は身體の圓滿なる發育即精神的方面並に肉體の方面の二方面を發達させる處のものでなければならぬ。此の兩者相俟つて初めて健全なる人といひ得るのである。而して初めて眞の美といふ事が出来るのである。其の眞美、其れこそ吾々人生の憧れの一つである。

文化の發達は知育に重きをなされ德育體育の輕視される時代を來した。併

し人としては本來知育體育德育の平衡を希ふものである。この三つの進歩を希ひ之を修めてこそ人間としての價値を有するのである。従つて知育にのみ偏した時は勢そこに不満を生じて來るのである。文明の發達は自然運動を僅少にし、それに對するに種々の新しき運動競技等を以てしてゐる。近代の種々の運動に對する競技熱は青年男女の運動趣味を高めてゐるが勿論その何れもの體育は精神的であり肉體的でなければならぬ。而してこそ初めて能率増進、種族保存又四肢動作の機敏等の良結果をも表はし得べきものである。

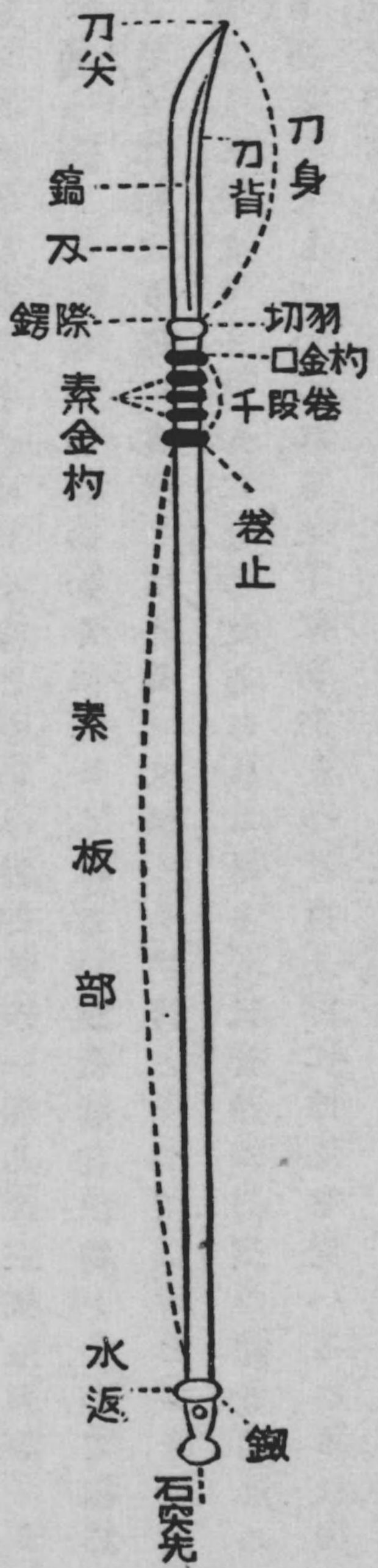
古より女子の體育として用ひられしこの薙刀は武道の一として武家の婦女子の間にのみ行はれ運動といふより寧ろ精神の修練に重きをおかれてゐた様である。近時勃興した婦人の運動もその方法は多用であるが、その精神となす所は眞の體育にある筈である。薙刀も近頃その効果を體育による精神鍊磨に基くものとして再興せられ我國在來の大和撫子の本領を發揮すべき體育手段と見做すべきものである。

身體の均齊なる成長は元より全身の平衡なる運動にある。併し私共の趣味は決して全體的のものにあるとはいへない。又かの學校體操の如きは平衡的とはいひ得ようが其の精神的働きの方面、それは果して充分といひ得るであらうか。

文化の發展は一面に虚弱なる方面を有するものである。而して剛毅なる精神は獨り男子のみ得るものではない。近時獨立的精神の勃興した女子に於ても美はその生命であるがその精神の快活剛毅がその肉體の完全と相俟つて初めて女子としての眞の優美を保つものであることを忘れてはならない。而してそれは主として體育に俟つべきものである。精神的方面より見て薙刀の近時の改革は良く私共の體育觀に基く希望を満足させて居る。否それ以上のものを持つてゐるといつて差支へはなからう。一度薙刀を持つて立つ時その心は肉體と一つになり無限の境に入り得るものである。而して全身の機敏なる働きは強いある力を生じ我が身體以上の何ものかでないかと思はれる程の力

を表はして来る。運動後の快感は何れの時にもある喜びであるが、併し薙刀の終つた後の心持は實際に行つた人のみ味はふ事の出来るもので一種特別な快感である。

第二章 薙刀各部の名稱



薙刀の部分は、大別して、中身、鞘、^{ナカゴ}中心、^{イシツキ}鑿の諸部分よりなつてゐる。

一 中身 刀の名稱と殆ど同じだが、薙刀には別落として棟の中途より刀尖に近き部分まで薄くなれる部分がある。身の形状により、靜型、巴型がある。又と反對の方を刀脊又は棟といふ。その刀脊も又形状により丸棟（丸打）三棟（眞の棟。相州棟）の別がある。刀尖は又切尖（^{バツシ}銚子）ともいふ。

刀脊と刀刃とに並行して身の兩側に鏝際より刀尖に達する稜形がある、之を鏝といふ。而して鏝のなきものを平打又は平造りと言つてゐる。血流又は樋といつて凹める條が一條乃至三條位ある。

二 鞘 中身の長さに應じて大なものにして往々定紋を描けるものがある。

三 中心 之は刀の中心の部分と殆ど同じで、只刀の中心に比すれば一般に長き物もある中心は又小身ともいひ目釘穴が一個乃至三個位ある。

四 鏝 は刀の鏝の如くに大きくはないが普通食出鏝といつて極めて小さくて柄より僅に食出してゐる。又稀に十字鏝といつて圓形をなさず鏝の食出しの部より十字形になつてゐる物もある。又普通の刀劍の鏝と同形の物もある。そしていづれも上下に切羽をつけ且上部には鏝ハッキを備へることは刀と同じである。

五 柄 千段巻（賣金物）と賣扱部スゴキツとから出来てゐる。千段巻部は通

例鏝下から下部中心の挿入しある部分を麻又は藤蔓で捲き、漆を塗るか又は絹絲を捲いたものである。中心を挿入するため柄の一部を切り取り他の木を埋めた部分の押へをなすのである。此の部分に口金物一の賣、二の賣、三の賣（口金物に近き方より數へる）とて數個の賣金物即胴輪がある。

千段巻止（巻止）には一個又は二三個の目釘穴がある。この千段巻及び賣金物は何れも薙刀の柄裂け及び中心の脱出を防ぐためである。そして賣扱部の石突に近き部分を鏝際ハッキといひ千段巻に近き部分を巻上際といふのである。

六 鏝インツキ 之に乳頸形、桔梗形、银杏形、鉾形等種々ある、何れも三個の目釘穴がある。又別に一個の穴を穿つてあるものである。此の穴は紐類を濡らして貫き通し拵に懸け昇降する場合等の用にするのである。鏝に接して水返しと稱する金物がある。此の金物は體裁のためでさしたる効用はない。

第三章 薙刀の種類形状と薙刀の流派

第一節 薙刀の種類形状

一 小 烏 コウラス 刀尖より凡そ五寸位の間、棟に刃の附着する物、之は小烏といふ名刀が刀尖に兩刃あるより名づけたものである。

二 袋 薙 刀 フクロナギナタ 中心の代りに圓筒を附着し之に柄を挿込みたる物である。

三 大 身 薙 刀 オホミナギナタ 中身の長さ三尺内外あつて柄も之に適したるものである。

四 鍵 付 薙 刀 カギツキナギナタ 鐵の如き方柱を鐙下の口金物に接して表裏に貫けるものである。
(鍵付薙刀)



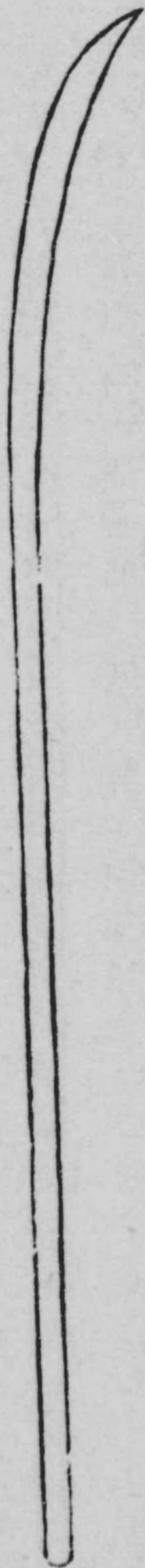
五 長 卷 ぎ ナガマキ 長巻刀に柄をつけたもので、辨慶の持つたのは此の長巻ぎであるといふことである、これにも鍵の附着せるものがある。

(長 卷 キ)



六 形 薙 刀 カタナギ (稽古薙刀) 薙刀の形状を備ふるだけで、鐙は勿論千段巻、賣金物、鍔などなく、又柄と身の境もなく只刃、棟、切尖の形状を備ふるのみのものである。

(形・薙 刀)

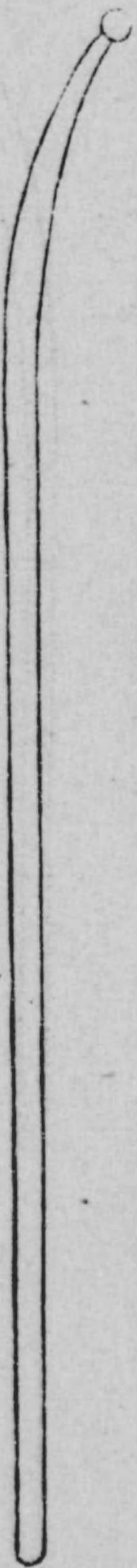


七 試合薙刀

形薙刀の刀尖に毬毛を附着せるものである。

— 第二章 薙刀の種類形状と各部の名稱 —

(試合薙刀)



薙刀の長さ 流義により異なるが、普通六尺より八尺五寸位までのものを使用するのである我が鏡心流のは七尺である。

第二節 薙刀の流派

流派を立てた事の起源は詳かではないが元龜天正の頃にあるものゝ様で其の著名なるものを擧げると次の様である。

穴澤流 扇體の構を以て名あるものである。武術流祖錄に「穴澤流薙刀は穴澤主殿助盛秀薙刀の達人にして其の術神の如し後秀頼に仕へて慶元四年浪速に於て戦功を勵み終に死す」とある。

先意流 信田一圓齋を祖とす。

正木流 正木俊光を祖とするもので武術流祖錄に「正木彈之進俊光濃洲大垣戸田家の臣なり始め太郎太夫と號す信田一圓齋重次に従ひ先意流薙刀に達し絶妙を得たり(中略)俊光又短槍鎖術に達し正木流の妙旨に至る。俊光其性剛にして力尋常の人に越ゆ七十斤の鉞を以て振り顔色變らず從遊の士多し云々」とある。

常山一刀流 水戸烈公を主として乳間チカマの構へを以つて名あるものである。

月山流 田沼藩士、工藤十兵衛行廣に依り祖述せられたもので弘化三年より明治初年に及び専ら江戸に行はれたものである。

其他 戸田流、留多流、根岸流、半田流、武田流、柳剛流、巴流、靜流、靜貫流、富樫流、三和流、眞影流等は皆夫々世に知られたものである。而かも之れ等の諸流中各流を通じて秘術と稱ふる水車、風車、花車の術及び上段、中段、下段、霞上段、霞中段、横構、脇構、立構、拂八方、薙四方

龍の一曲等の各姿勢あり、又其の他の術に至つては到底筆説の及ぶ所ではない。本書に載せたのは鏡心流として著者自ら創始して多年試みつゝあるものである。

第四章 基礎練習

第一節 集合及び把持法

仕太刀……………薙刀を持つ方の人を仕太刀といひ、

受太刀……………太刀を持つ方の人を打太刀とする。

一 集合 最も初歩で仕太刀のみで練習する時の集合は薙刀を横に振り廻しても人にふれないだけの間隔を置き、身長の順序に従ひ整列させ、稍進んで仕太刀と打太刀との練習をする様になつてからの集合は薙刀の列と交互にして薙刀と太刀との人が向ひあふ様にする。間隔は適宜見計らふ、即左圖の様にする。



最も進んで團體的でなく本式に仕太刀と打太刀と形をなす時には兩者の間を約十歩づつの間隔を置き此處にて軽く禮をなし、右足より大きく三步前進して折敷きの敬禮をする。又形を終つて退く時は左足より五歩後退して此處で軽く禮をする。

二 把持法

イ 仕太刀 左手は指を揃へ軽く胸の上に置く。右手で薙刀をとり敵より凡そ二尺位の部分を握る。此の時刃を上にして右手を下からかゝへ持つ様にする。

ロ 受太刀 左手で太刀の所を上から持つ、右手で袴の相引の所をつまみ胸を張る。

第二節 休息及び禮

一 休息 薙刀に於ける休息又は服裝の亂れを整へる様な雑事をなす時に、薙刀を地面又は床の上に置いてなすのは最も禮を缺いたもので此の場合には必ず折敷いてなすべきである。

折敷とは左膝を床につけ、右膝は立て左手は左膝の上に置き右手にて薙刀の上から持ち右膝の上に刃を外側にむけて置くのである。

二 禮

イ 集合開散の禮 練習を初める前又は開散の前に一同揃ひて軽く禮をなすのである。此の時は把持法の時の仕太刀の姿勢の儘即左手を胸に置き右手で薙刀を持ちて軽く立禮をなすのである。

ロ 折敷の禮 形をなす時相手と互に禮をなす時、又一同揃ひて練

習を初める前、又終つた時には正式に禮をなすのである。之は休息の所にて述べた折敷をなして禮をするので、相手との間は凡そ四尺位の間隔において折敷の禮をするのである。

第三節 振返 し

一 足の振返し 把持法（イ）の仕太刀の姿勢から双を下にして双尖を後へたふし左手を石突の方へかけ左足を引くと同時に刀尖を前に出して打太刀の左足を切る左足が浮く時に左手を左脇の處まで引く、右手を伸ばす。右足の場合、即右足を斬るには今の要領で之を反對になせばよい。

二 面の振返し 把持法の姿勢から鐵を上にして左手を右手によせ刀尖を右脇下に振り互に右手が上になるが持ちかへ左足と右足と交代して一步前に出し左手を上になし右側の方に體をむけ打太刀の面を切る、左手を伸ばす。こ

の時又は眞下に向ける。右面の時は今の要領で足を交代して一步前に出し今の反對になすのである。

三 横面の振返し 把持法の姿勢から左手を下から右手を上から双尖を左に鐵を右に頭の上へ上げ、頭の上で双尖を後の方から廻し右の方に双尖をやり左手を上、右手を下に持ちかへて足を交代して前に出し打太刀の左横面を切る又は左側を向く右横面を切る時は今の要領で反對になせばよいのである。

第五章 形の名稱と順序

(一)

一本目薙刀 (切止め)

イ 足一本

ロ 面一本

ハ 面受け

ニ 足を抜き袈裟切り

ホ 残心

(1)

一本目受太刀

い 足受け

ろ 面受け

は 面切り

に 足切り

ほ 残心

(二)

二本目薙刀 (小手落し)

イ 足二本

ロ 面二本

(2)

二本目受太刀

い 足二本受け

ろ 面二本受け

(三)

三本目薙刀 (膝折り)

ハ 甲手二本

ニ 面二本

ホ 一步下る

ヘ 突一本

ト 残心

(3)

三本目受太刀

ハ 甲手二本受け

ニ 面二本受け

ホ 面一本切る

ヘ 上段

ト 残心

イ 足二本

ロ 面二本

ハ 折敷足二本

ニ 面三本

ホ 残心

ほ 残心

に 面二本受け一本切る

は 足二本受け

ろ 面二本受け

い 足二本受け

(四) 四本目薙刀 (胸切り)

- イ 胸一本
- ロ 面一本
- ハ 石突で足一本
- ニ 面一本
- ホ 残心

(五) 五本目薙刀 (胸構へ)

- イ 胸構へ
- ロ 面一本
- ハ 石突一本
- ニ 胸一本

(4) 四本目受太刀

- イ 胸受け
- ロ 面受け
- ハ 足受け
- ニ 面受け
- ホ 残心

(5) 五本目受太刀

- イ 構へ
- ロ 面一本
- ハ 石突で押される
- ニ 上段

ホ 残心

(六) 六本目薙刀 (左右小
手止め)

- イ 足二本
- ロ 面二本
- ハ 一步引く (繰込のこと)
- ニ 甲手一本
- ホ 残心

ほ 残心

(6) 六本目受太刀

- イ 脚二本受け
- ロ 面二本受け
- ハ 面一本
- ニ 上段
- ホ 残心

(七) 七本目薙刀 (飛退り)

- イ 二歩引き
- ロ 足二本
- ハ 面一本

(7) 七本目受太刀

- い 二歩進む
- ろ 足二本
- は 面一本

— 體育としての薙刀 —

- ニ 石突
- ホ 面一本
- ヘ 残心

(八) 八本目薙刀 (捲落し)

- イ 足一本
- ロ 太刀を捲く
- ハ 面一本
- ニ 面受ける
- ホ 足一本
- ヘ 石突一本
- ト 足を抜き袈裟切り

二三

- ニ 石突で押される
- ホ 面一本
- ヘ 残心

(8) 八本目受太刀

- イ 足受け
- ロ 太刀を捲かれる
- ハ 面受け
- ニ 面切り
- ホ 足受け
- ヘ 面切り
- ト 足切り

チ 残心

(九) 九本目薙刀 (立薙刀)

- イ 薙刀立てる
- ロ 折敷
- ハ 石突で突く
- ニ 面二本
- ホ 石突で横面
- ヘ 折敷足一本
- ト 残心

(三) 十本目薙刀 (稻妻)

- イ 突一本

— 第五章 形の名稱と順序 —

ち 残心

(9) 九本目受太刀

- イ 上段
- ロ 甲手一本
- ハ 石突で突かれる
- ニ 面二本受け
- ホ 横面受け
- ヘ 足受け
- ト 残心

(10) 十本目受太刀

- イ 上段

二三

— 體育としての薙刀 —

- ロ 面二本
- ハ 横面一本
- ニ 面受け
- ホ 石突一本
- ヘ 折敷足二本
- ト 面二本
- チ 一步下る
- リ 突一本
- ヌ 残心

(十一) 十一本目薙刀 (八艘)

イ 發艘の構へ

二四

(11) 十一本目受太刀

- ろ 面二本受け
- は 横面受け
- に 面切り
- ほ 石突で押される
- へ 足二本受け
- と 面二本受け
- ち 面一本切る
- り 上段
- ぬ 残心

い 中段構へ

(十二) 十二本目薙刀 (突手)

- ロ 面二本
- ハ 横面一本
- ニ 石突で突く
- ホ 残心

(12) 十二本目受太刀

- ろ 面二本受け
- は 横面受け
- に 石突で突かれる
- ほ 残心

- イ 足一本
- ロ 面一本
- ハ 太刀を捲く
- ニ 突一本
- ホ 面一本
- ヘ 残心

- い 足受け
- ろ 面受け
- は 太刀を捲かれる
- に 突かれる
- ほ 面一本
- へ 残心

— 第五章 形の名稱と順序 —

二五

(三) 十三本目薙刀 (上段)

- イ 上段の構へ
 - ロ 一步引く
 - ハ 石突で突一本
 - ニ 面二本
 - ホ 横面一本
 - ヘ 石突一本
 - ト 面一本
 - チ 残心
- イ 甲手一本

(13) 十三本目受太刀

- い 上段構へ
 - ろ 甲手切り
 - は 石突で突かれる
 - に 面二本受け
 - ほ 横面受け
 - へ 太刀を石突で押される
 - と 面受け
 - ち 残心
- い 上段

(四) 十四本目薙刀 (中段)

- ロ 面二本
- ハ 横面一本
- ニ 太刀を捲く
- ホ 突き一本
- ヘ 薙刀を落される
- ト 太刀を取る上段
- チ 太刀を返す
- リ 薙刀を捨て残心

(14) 十四本目受太刀

- ろ 面二本受け
- は 横面受け
- に 太刀を捲くを抜く
- ほ 突きにくるを押す
- へ 上段より面一本
- と 太刀を取られる
- ち 太刀を取る
- り 中段にて残心

(十五) 十五本目薙刀 (下段)

- イ 下段に構へる
- ロ 面一本

(15) 十五本目受太刀

- い 上段
- ろ 面受け

— 體育としての薙刀 —

- ハ 足一本
- ニ 面二本
- ホ 横面一本
- ヘ 太刀を捲落す
- ト 突一本
- チ 面一本
- リ 上段
- ヌ 面一本
- ル 残心

(共)
十六本目薙刀 (突止め)

イ 脚一本

二八

(16)
十六本目受太刀

- ハ 足受け
- ニ 面二本受け
- ホ 横面受け
- ヘ 太刀を捲かれる
- ト 一步引く
- チ 面受け
- リ 上段
- ヌ 面切る
- ル 残心

イ 脚受け

- ロ 面一本
- ハ 太刀を押へる
- ニ 突一本
- ホ 残心

(十七)
十七本目薙刀 (柄止め)

- イ 薙刀を流す(構へ)
- ロ 三步進む
- ハ 甲手を押へる
- ニ 鞘を抜く
- ホ 脚二本
- ヘ 突一本

— 第五章 形の名稱と順序 —

- ロ 面受け
- ハ 太刀を押へられる
- ニ 突かれる
- ホ 残心

(17)
十七本目受太刀

- イ 太刀を納める
- ロ 三步進む
- ハ 甲手を押へられる
- ニ 鞘を抜く
- ホ 足二本受け
- ヘ 一步引く

二九

— 體育としての薙刀 —

ト 残心

(六) 十八本目薙刀 (水車)

イ 横構へ

ロ 面一本

ハ 水車に廻して面一本

ニ 石突で横面一本

ホ 薙刀で横面一本

ヘ 面一本

ト 残心

(五) 十九本目薙刀 (拔止め)

イ 中段の構へ

三〇

と 残心

(18) 十八本目受太刀

い 横構へ

ろ 面受け

は 面受け

に 横面受け

ほ 横面受け

へ 面切り

と 残心

(19) 十九本目受太刀

い 上段の構へ

ロ 足を抜く

ハ 甲手切り

ニ 残心

(三) 懐劍の形一本目

イ 五歩引く

ロ 三步進む

ハ 懐劍抜く

ニ 右乳下突く

ホ 残心

(三) 懐劍の形二本目

イ 懐劍抜く

— 第五章 形の名稱と順序 —

ろ 面切り
は 一步引いて上段
に 残心

(20) 懐劍の受太刀

い 五歩引く

ろ 三步進む

は 上段の構へ

に 面一本切る

ほ 残心

(21) 懐劍の受太刀

い 中段

三一

— 體育としての薙刀 —

- ロ 五歩引く
- ハ 三歩進む
- ニ 右脇下突く
- ホ 残心

(三) 懐劍の形三本目

- イ 懐劍抜く
- ロ 五歩引く
- ハ 三歩進む
- ニ 右足引く
- ホ 胴を受ける
- ヘ 右乳下突く

三二

(22) 懐劍の受太刀

- ろ 五歩引く
- は 三歩進む
- に 面一本切る
- ほ 残心
- い 中段
- ろ 五歩引く
- は 三歩進む
- に 面一本切る
- ほ 胴一本切る
- へ 上段

ト 残心

(三) 懐劍の形四本目

- イ 懐劍抜く
- ロ 五歩引く
- ハ 三歩進む
- ニ 太刀を押へる
- ホ 右乳下突く
- ヘ 残心

(四) 懐劍の形五本目

- イ 五歩引く
- ロ 三歩進む

— 第五章 形の名稱と順序 —

と 中段で残心

(23) 懐劍の受太刀

- い 中段
- ろ 五歩引く
- は 三歩進む
- に 面切て太刀を押へられる
- ほ 一歩引く
- へ 残心

(24) 懐劍の受太刀

- い 五歩引く
- ろ 三歩進む

三三

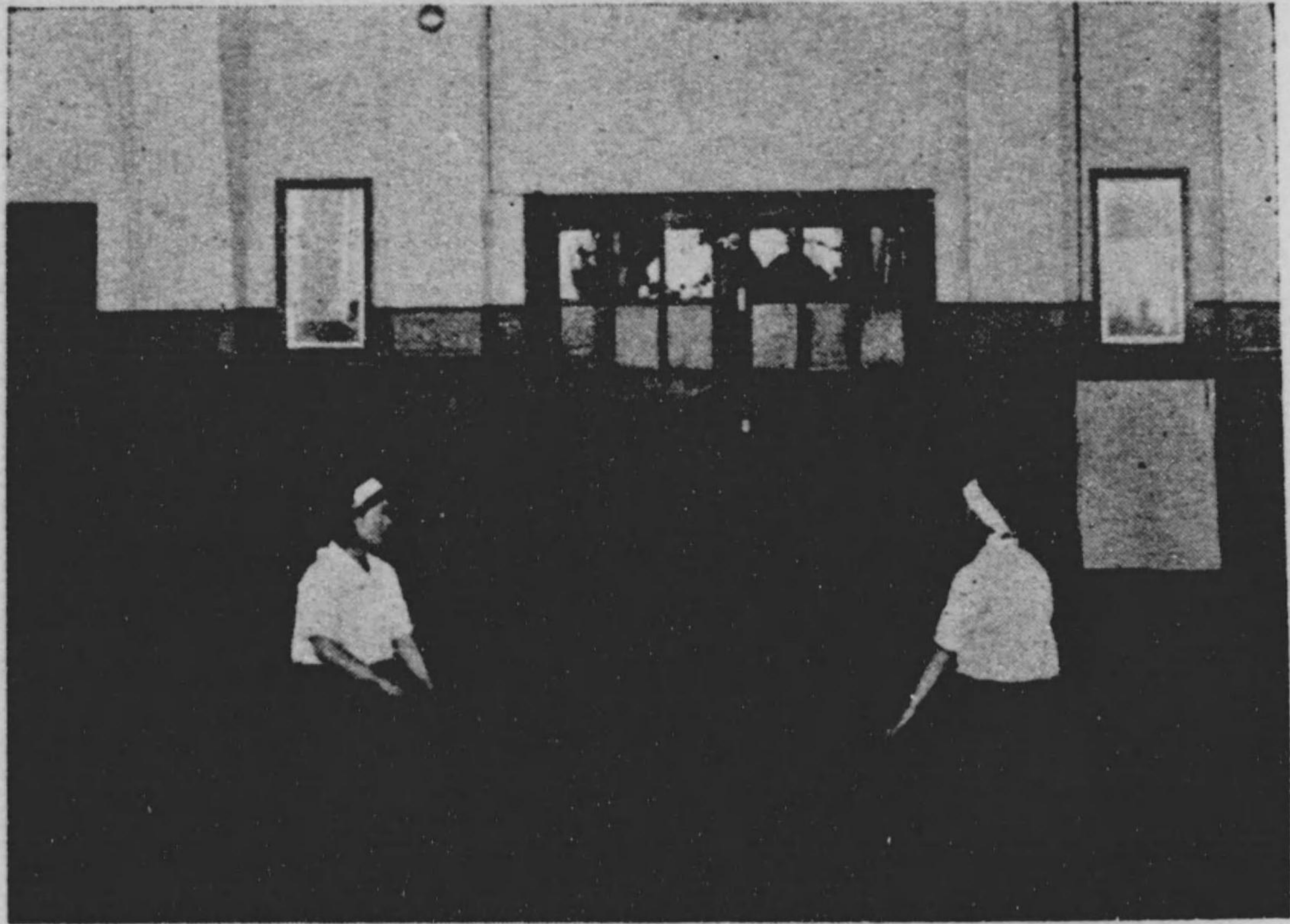
第六章形の説明

——體育としての薙刀——

- ハ 左足一步引く
- ニ 懐劍抜き胴受け
- ホ 左乳下突く
- ヘ 残心

三四

-
- ハ 面一本切る
 - ニ 胴一本切る
 - ホ 横面一本切る
 - ヘ 残心

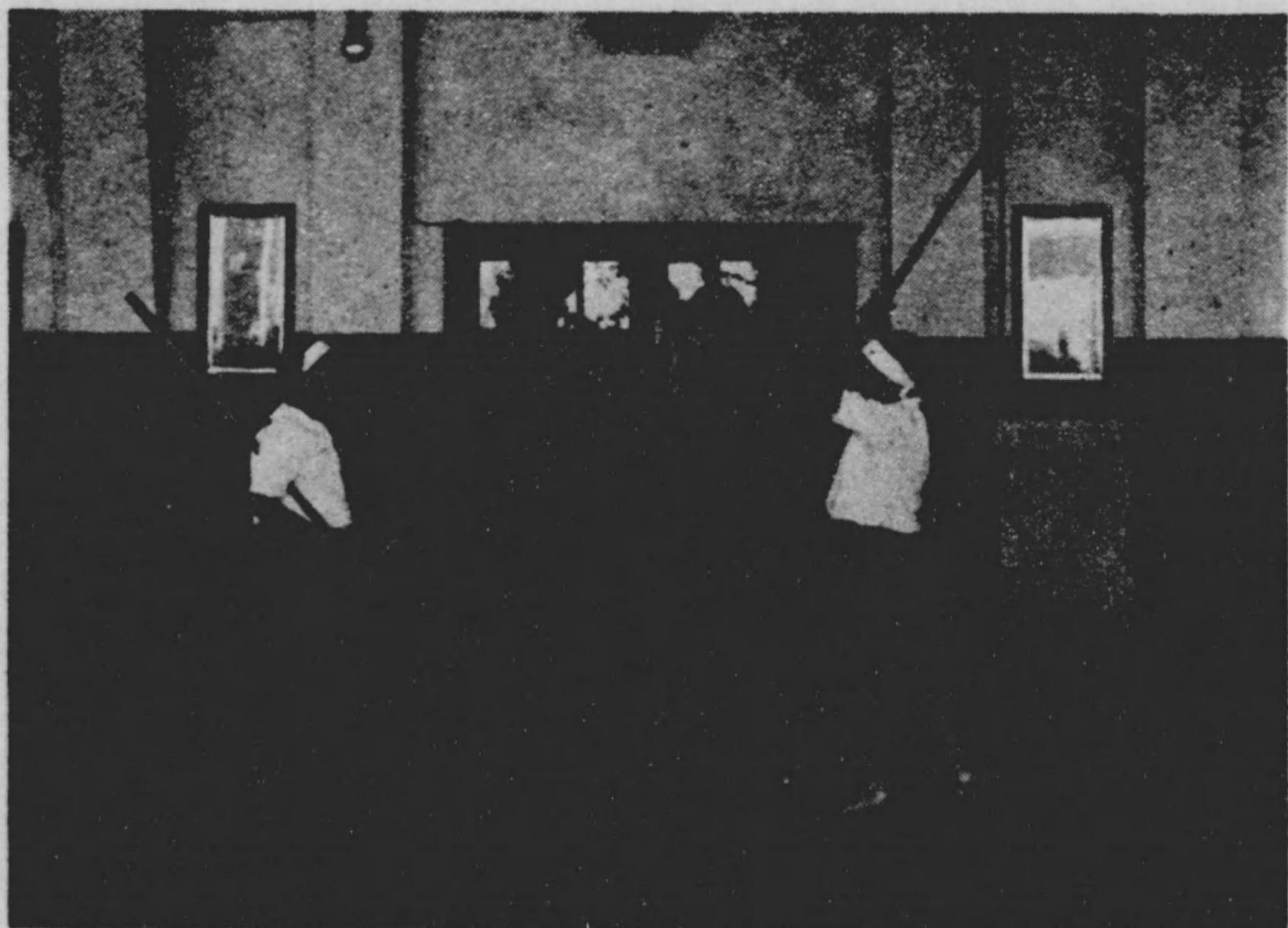


(一 眞 寫)

(一) 一本目 (切止め)

附一 折敷の禮

- (1) 兩者の距離を九步となす、九步の處にて互に目禮をなし、兩者共に右足より大きく三步進んで間合を取る
- (2) 受太刀 三步進んだ處で太刀を抜いて折敷右膝の上に太刀を置き左手を左膝の上におく。
- (2) 薙刀 三步進んだ處で折敷薙刀を右膝の上に置き左手を左膝の上におく。互に眼を見合はせ氣を落附けて禮をなす。(寫眞一)



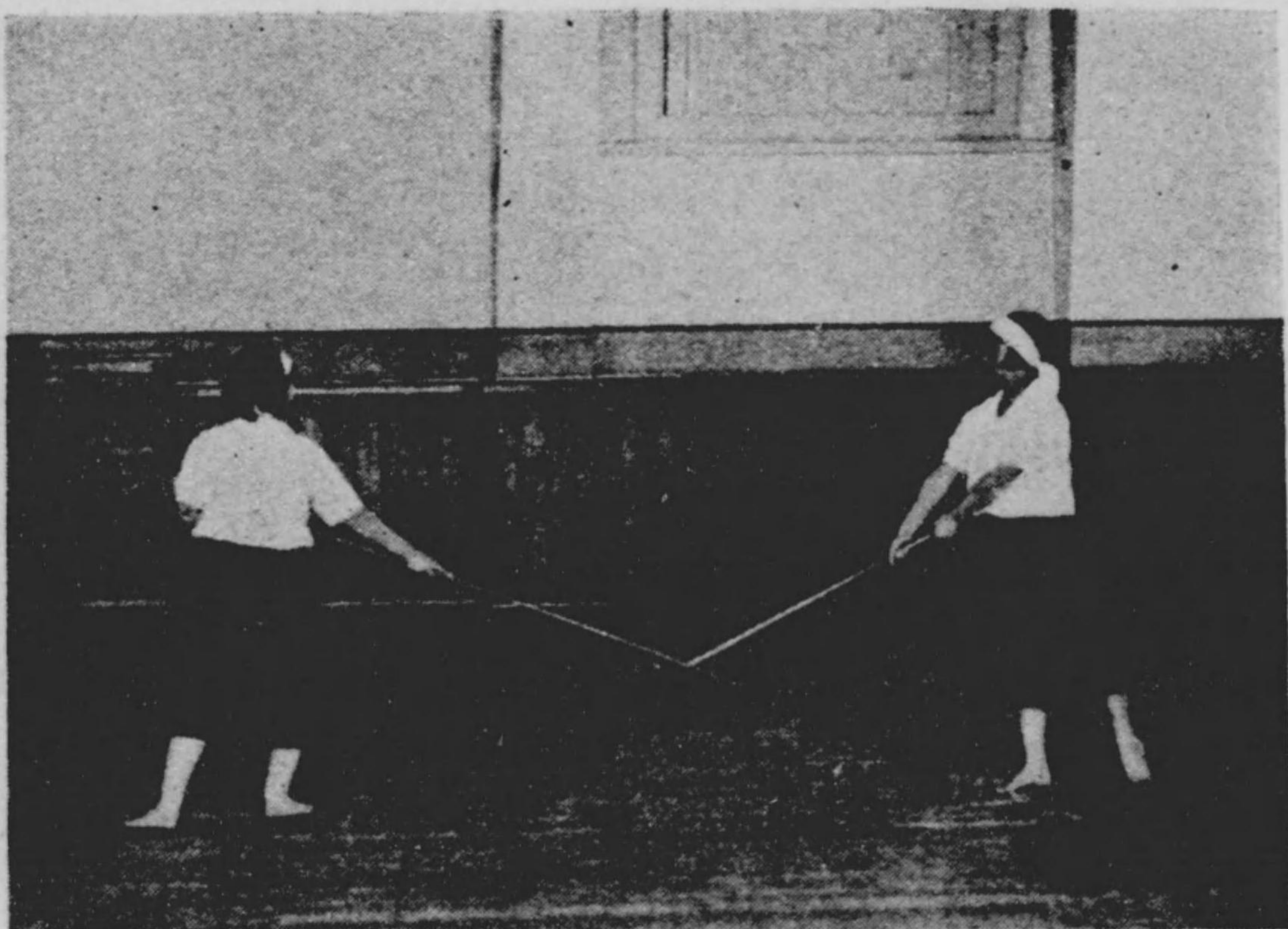
(二 眞 寫)

注意 此の時の姿勢は右膝を立て
左膝を床に付ける。

附二 互に立ちたる處

(3) 薙刀 禮をなしたれば薙刀を右脇
にカヒ。込み左手は指を揃へて左胸に
をく、足は一足 (揃へること)

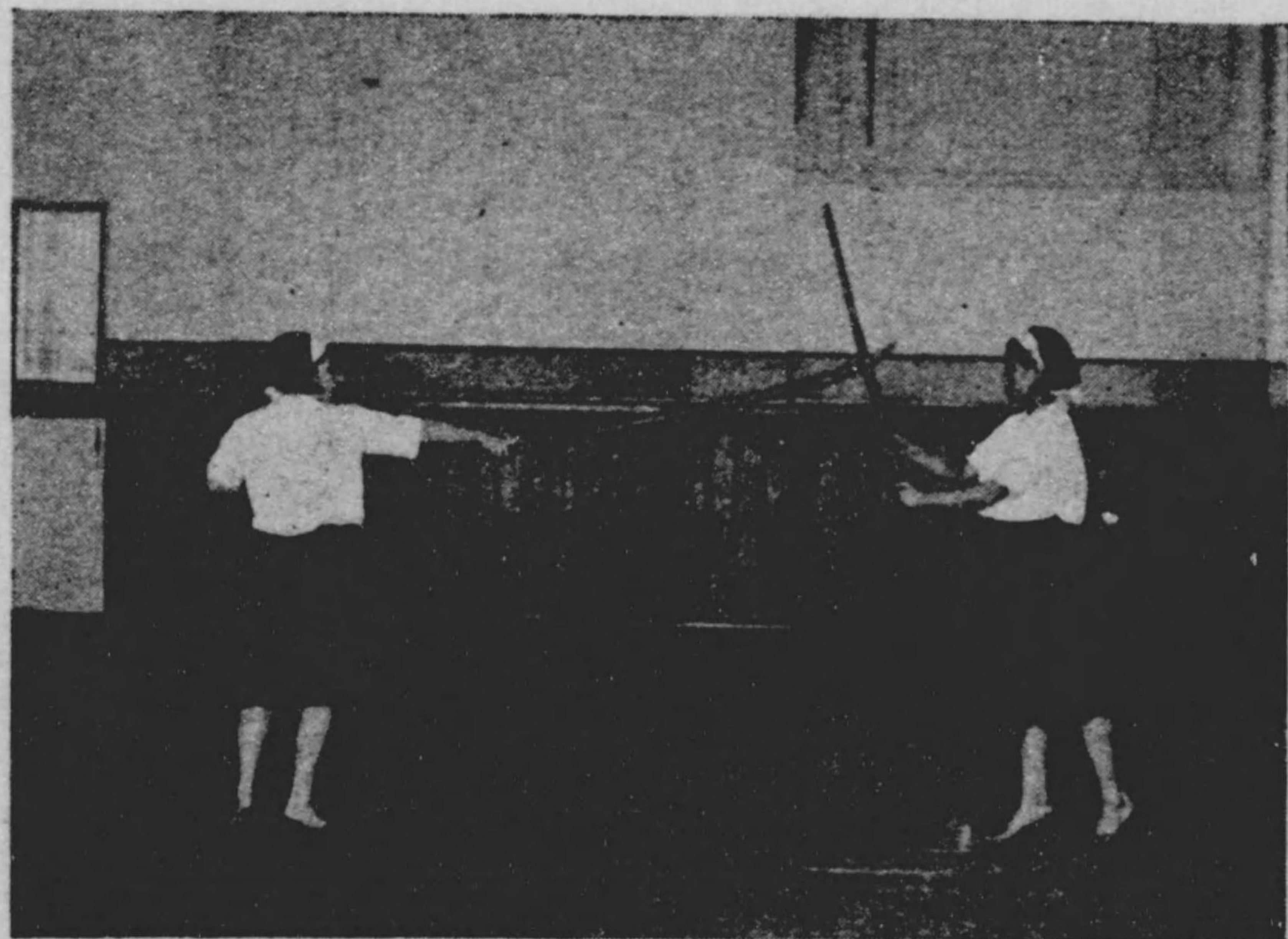
(3) 受太刀 禮をなしたれば立ちて左
足を少々引いて太刀を上段に上げる
(兩者共寫眞二一以下すべて寫眞參
照のこと)



(三 眞 寫)

(1) 脚 一本

(4) 薙刀 振返して左足を大きく一步
引いて受太刀の左脚を切る。
(4) 受太刀 中段より右足を少々引い
て上段に構へ「ヤツ」と云つて薙刀
が左脚にくる時に右足を左足に寄せ
て左足を引いて脚を受ける、互に「エ
イツ」と云ふ。(寫眞三)



(四 眞 寫)

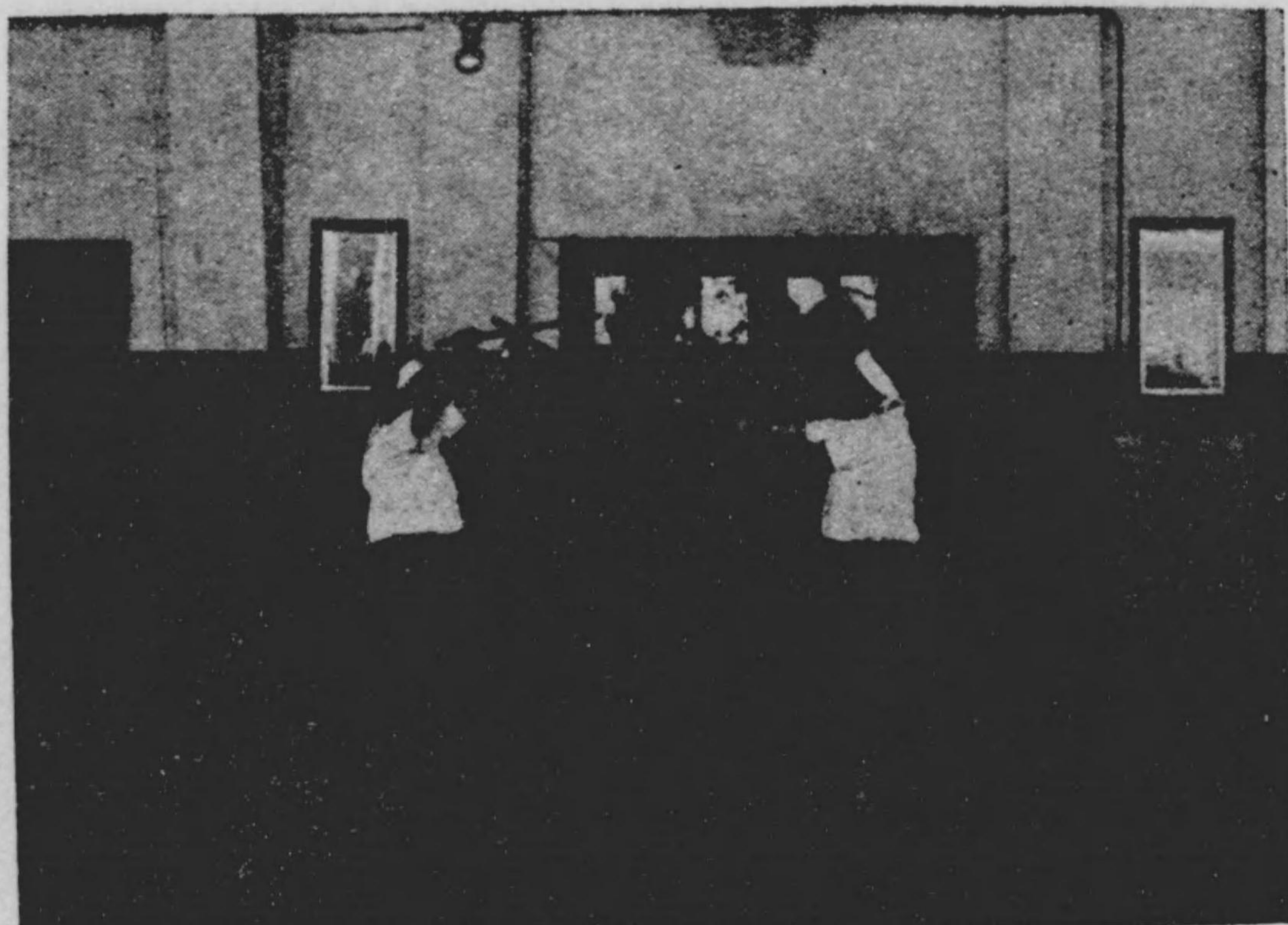
(口) 面一本

(5) 薙刀 左足を右足に寄せて交代して薙刀を振返して正面を切る。

(5) 受太刀 脚を受けたる太刀を下から自分の面を保護するまでに上にあげると同時に、足を交代なして面を受ける、互に「トー」と云ふ。

(寫眞四)

注意 面を受ける時は太刀を下から軽くはねる心持にて面を受ける。



(五 眞 寫)

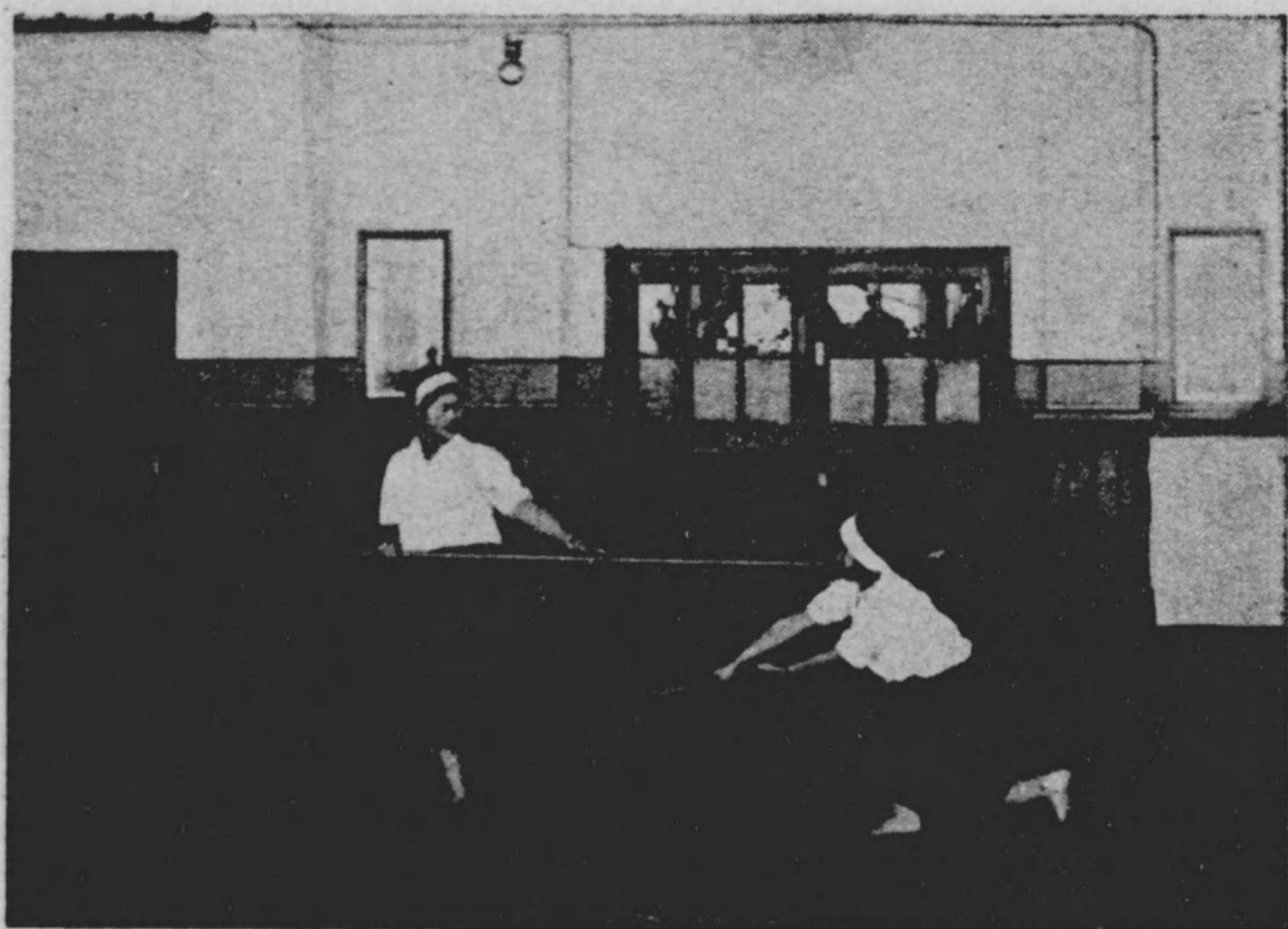
(ハ) 面受け

(6) 薙刀 受太刀が面を切りにくると同時に左足を右足に寄せ一足となして面を受ける。

注意 面を受ける時は足が一足となると同時に薙刀を横にして、右手を左手の方へ少し寄せる。

(6) 受太刀 面を受ける太刀を上段に構へると同時に、右足を大きく一歩進めて薙刀の正面を切る。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞五)

注意 右足を進める時は左足共に右足の後まで進む。



(六 眞 寫)

(二) 袈裟切り

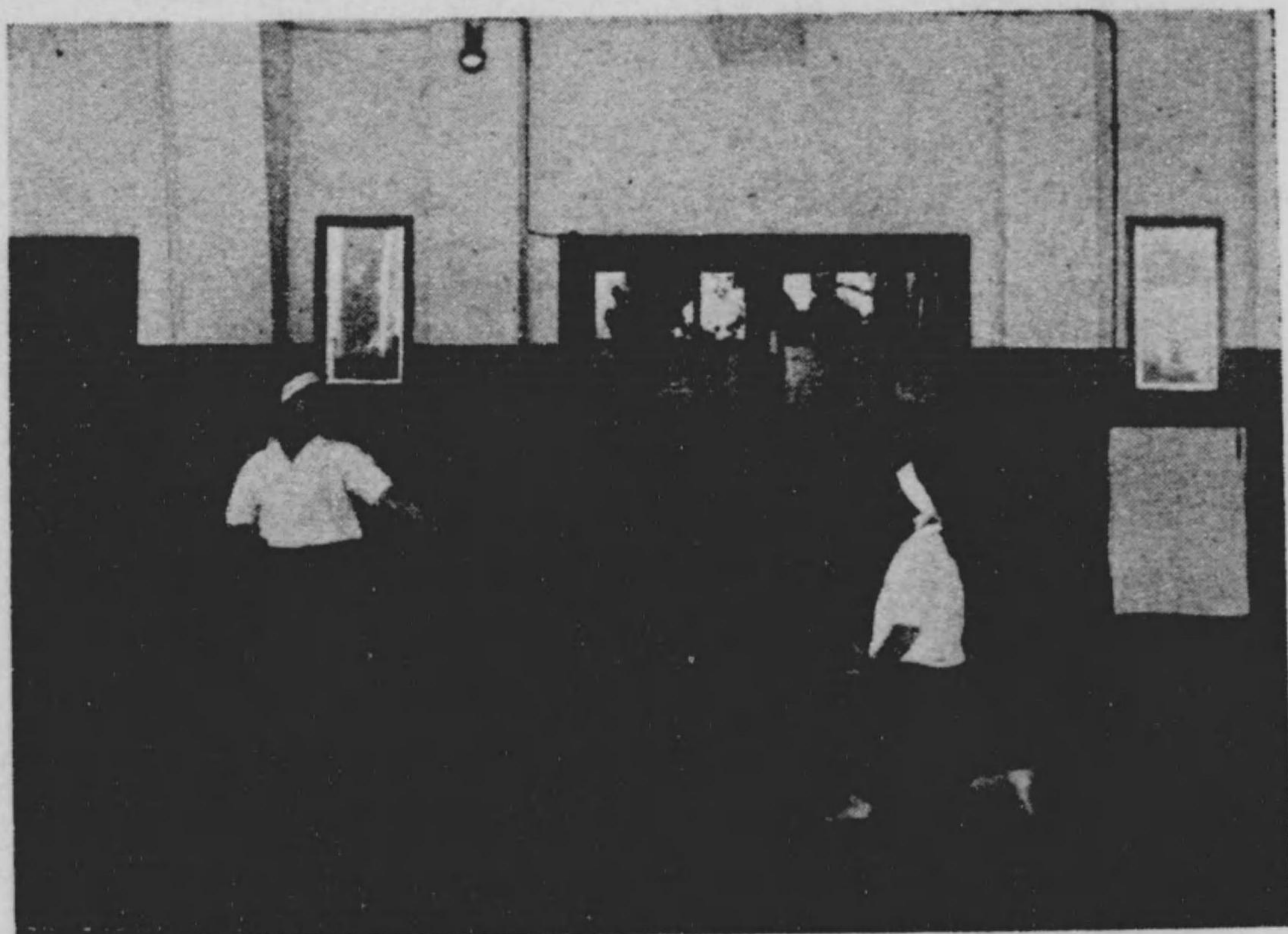
四〇

(7) 薙刀 受太刀が面を切りたる太刀を上段に上げると同時に右足を一步引き、受太刀が脚を切りにくると同時に右手を石突の方へ寄せて左足を上げて肩より斜横に切る。

(7) 受太刀 面を切りたる太刀を上段になすと共に左足を大きく一步進め同時に折敷いて薙刀の左脚を切る。

(寫眞六)

注意 足を切る時の姿勢は左足を立て右足を床につけ、體は自分の左前の方へ倒すと同時に首も少々左の方へ傾ける。



(七 眞 寫)

(ホ) 残心を示す

(8) 薙刀 受太刀の太刀をのけると同時に左足を右足の後へオ。ロ。シ。テ右足を左足の後へ引いて劍先を受太刀の目の高さ迄上げ残心を示す。

(8) 受太刀 劍先を左の方より右の方へ倒すと同時に體を元に復す。

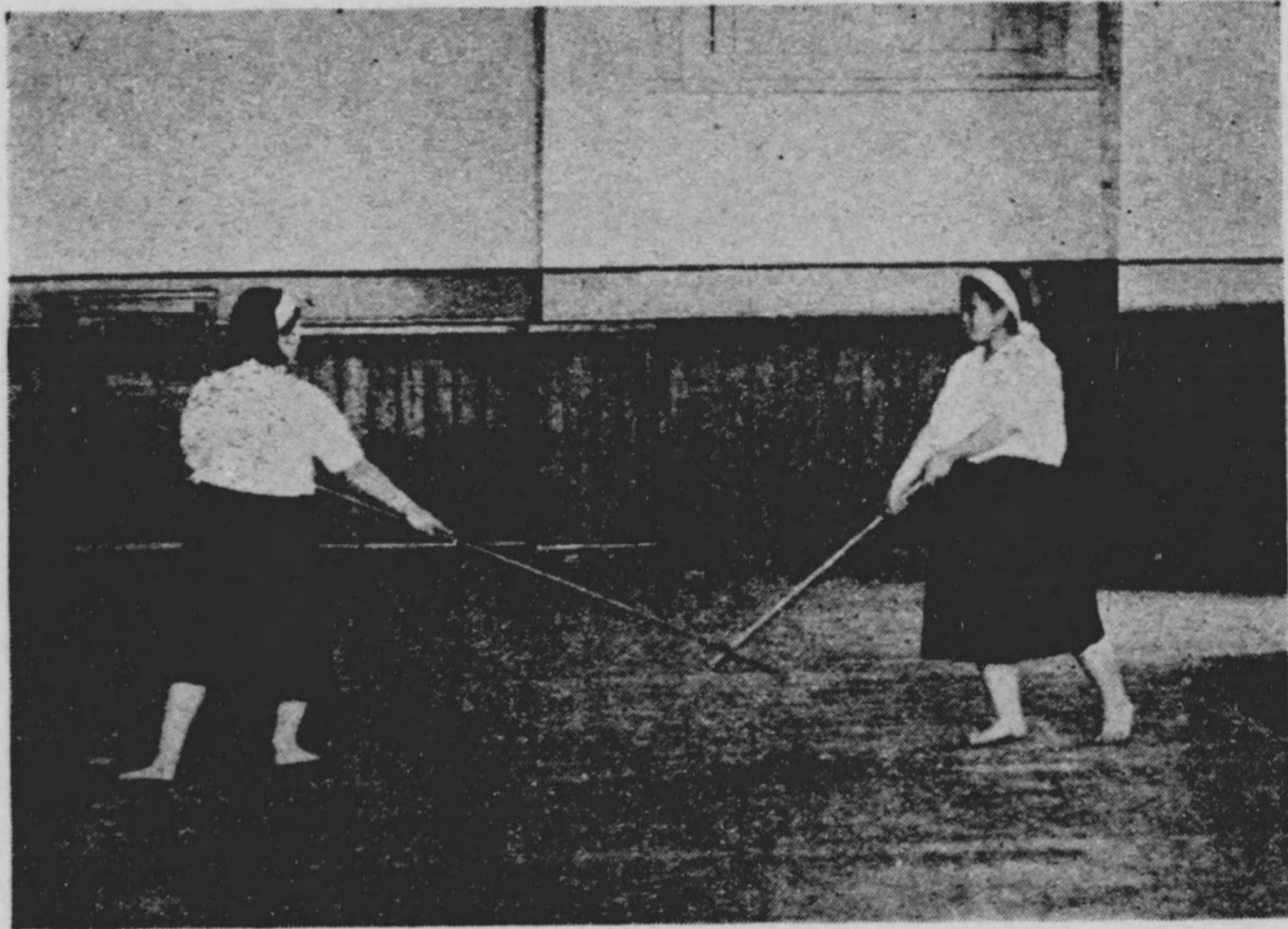
(寫眞七)

(9) 薙刀 残心を示したれば右手で左手の處を持ちてカ。ヒ。込み左足を右足に寄せて一足となして元に復す。

(9) 受太刀 劍先を右の方より上段に

なすと同時に中段になし左足を引いて太刀を下段にして、右足を左足に寄せ一足となして元に復す

注意 下段に構へる時は薙刀の左膝頭に劍先をつける。



(八 眞 寫)

(二) 二本目甲手落し

(1) 脚二本

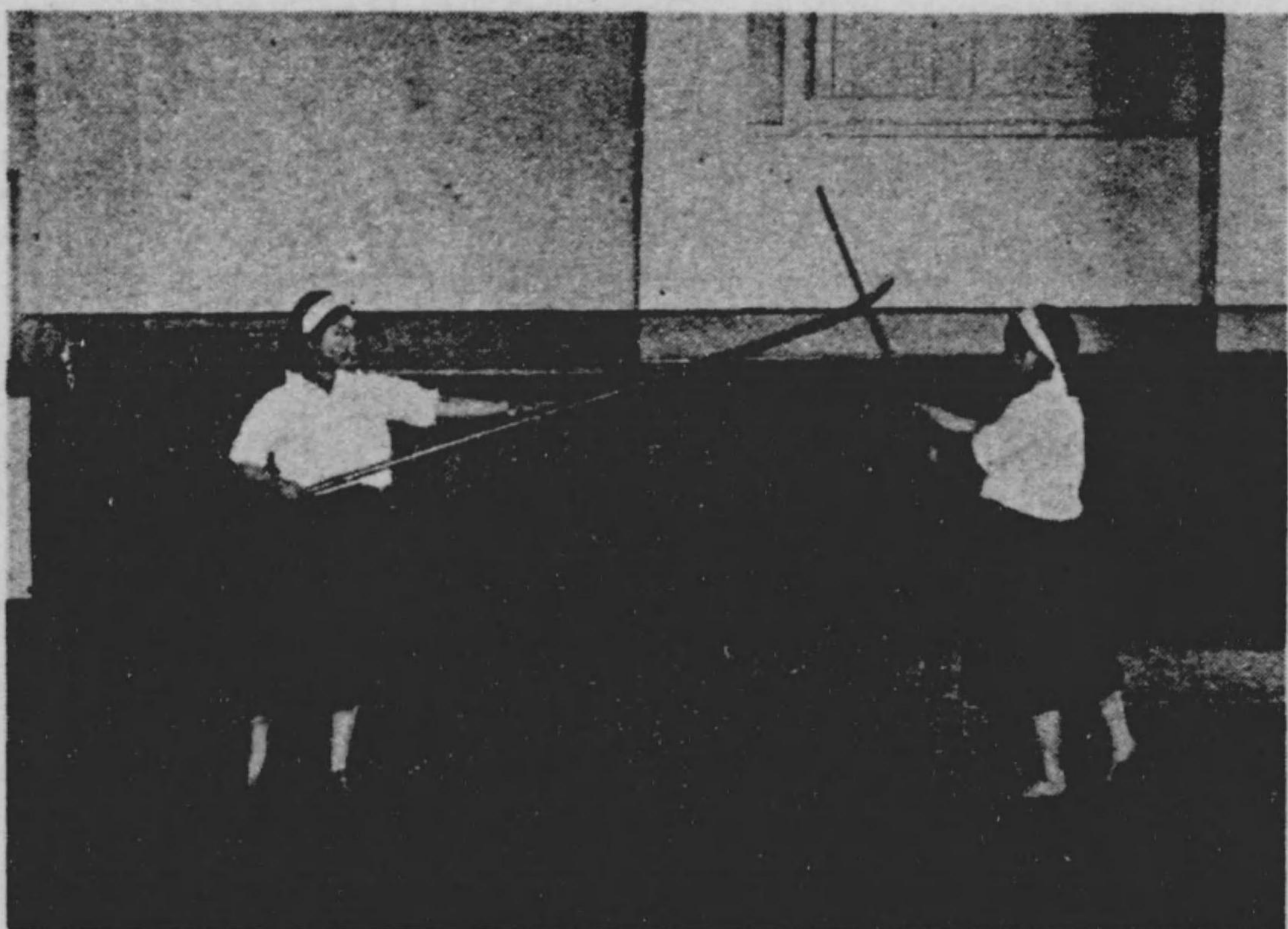
(1) 薙刀を振返して左足を引き受太刀の左足を切る。

(1) 受太刀は中段より右足を引きて上段となし「ヤツ」と云ふ。足を受ける時互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞なし)

(2) 薙刀を振返し足を交代して右足を切る。

(2) 受太刀足を交代して受ける。



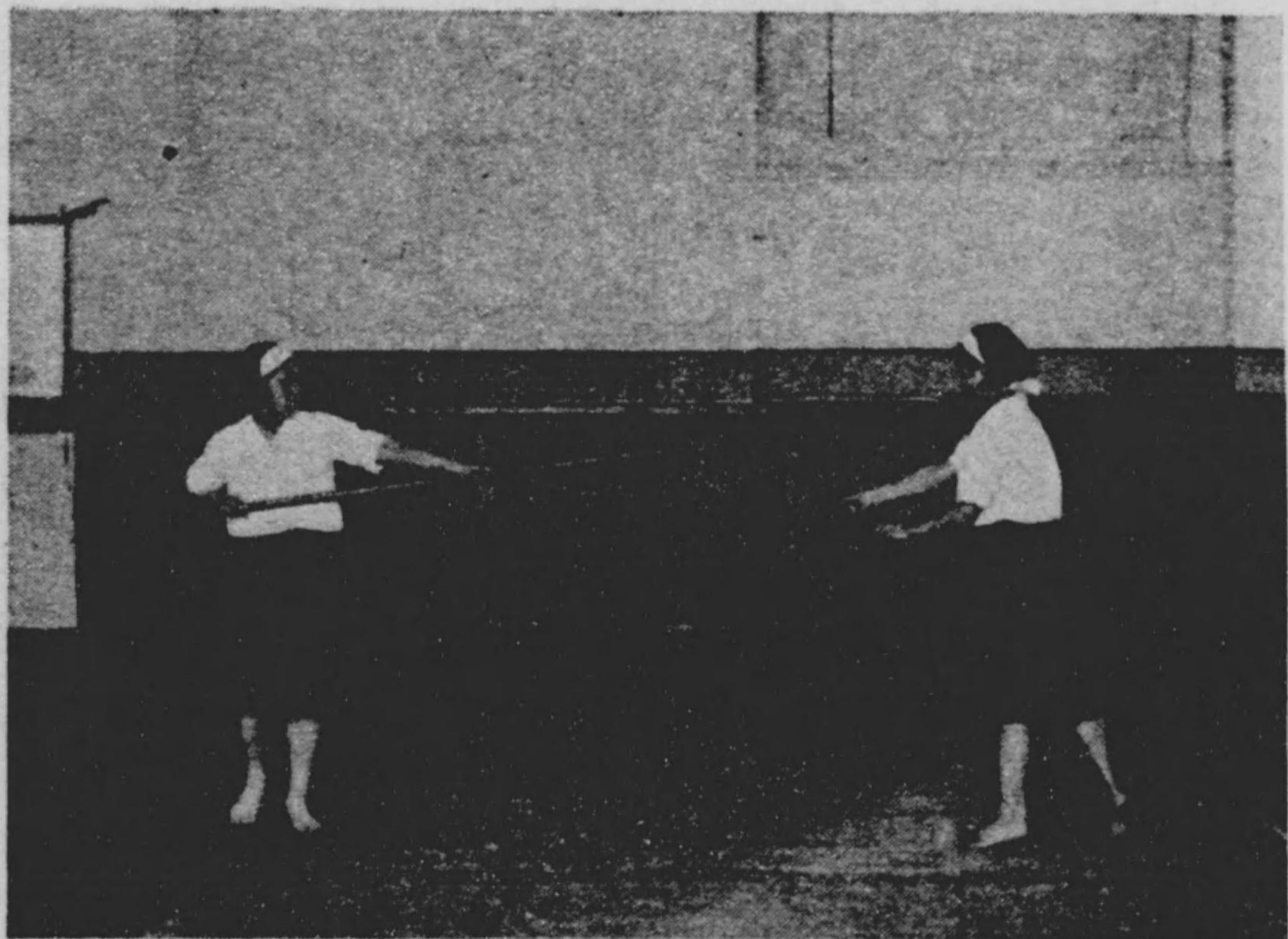
(九 眞 寫)

互に「トー」と云ふ。(寫眞八)

四四

(ロ) 面二本

- (3) 薙刀を振返して右足を左足に寄せて交代して正面を切る。
- (3) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「エイツ」と云ふ。(寫眞なし)
- (4) 薙刀を振返し、足を交代して面を切る。
- (4) 受太刀 足を交代して又面を受ける。互に「トー」と云ふ。(寫眞九)

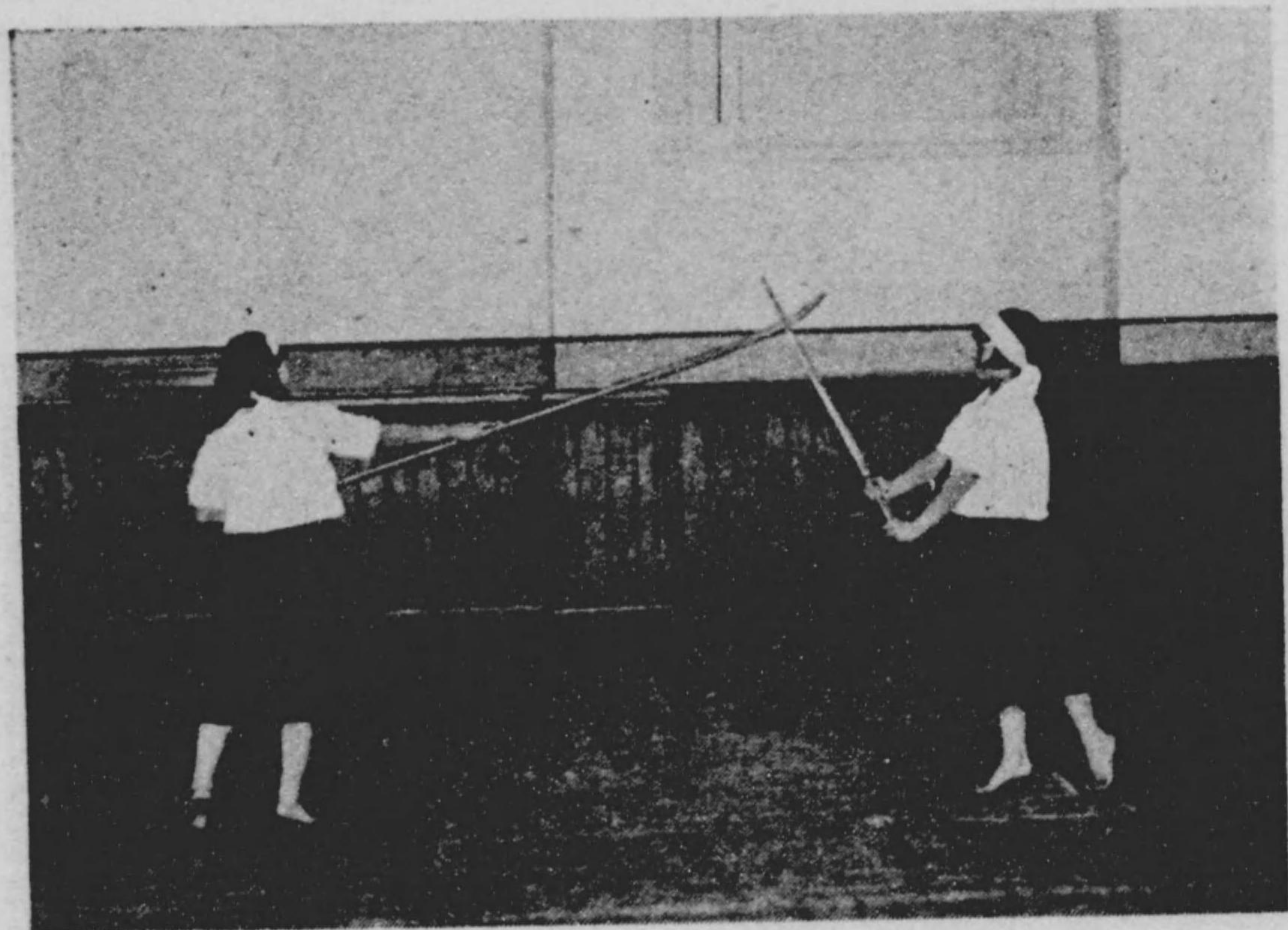


(十 眞 寫)

(ハ) 甲手二本

- (5) 薙刀を振返し足を交代して受が面を受けたる甲手を薙刀の刃を上にして下より切り上げる。
- (5) 受太刀 右足を右の方へ少し開き左足を右足の後へ引きて薙刀をかくオサヘル。互に「エイツ」と云ふ(寫眞なし)
- (6) 薙刀を振返して受が薙刀をオサヘシ甲手を下より足を交代し刃を上にして又切る。
- (6) 受太刀 左足を元の處へ進めて右

四五



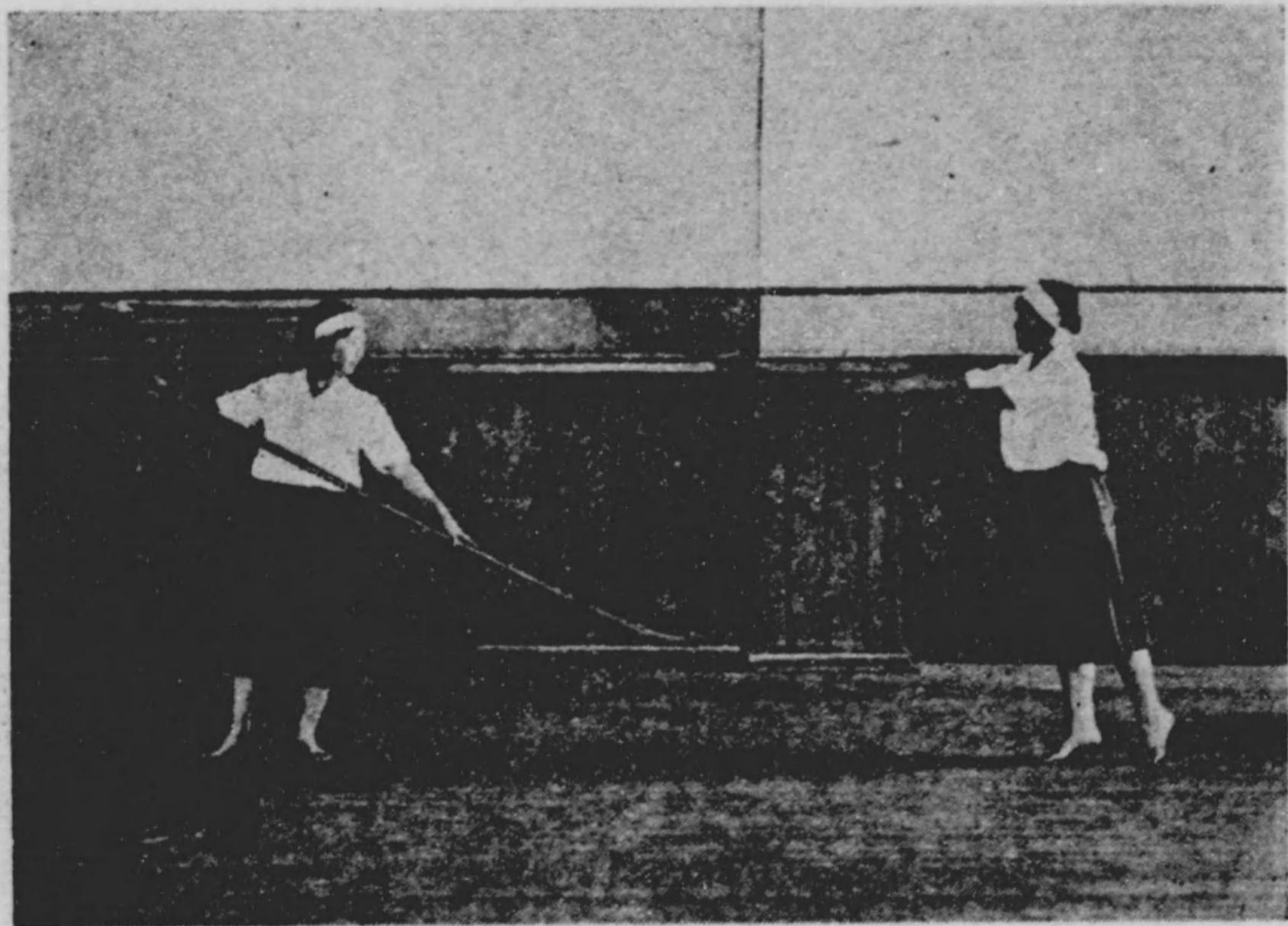
(一十真寫)

足を左足の後へ引き又甲手をオサへル。互に「トー」と云ふ。(寫真十)

四六

(二) 面二本

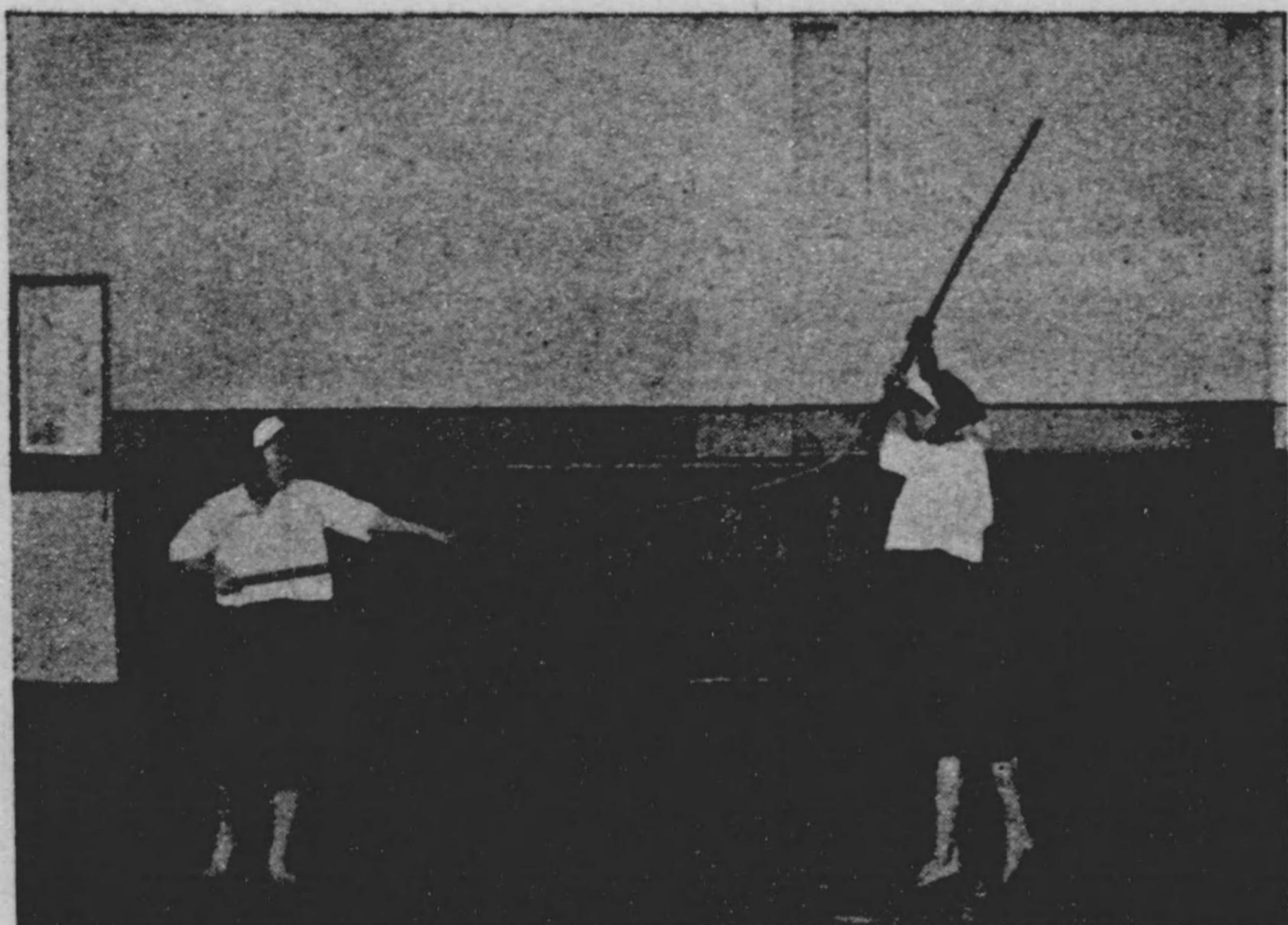
- (7) 薙刀 を振返し足を交代して正面を切る。
- (7) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「エイツ」と云ふ。(寫真十一)
- (8) 薙刀 を振返して足を交代して又面を切る。
- (8) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「トー」と云ふ。(寫真なし)



(二十真寫)

(ホ) 下る事

- (9) 受太刀 面を受けたる太刀を足はそのままにて上段に構へると同時に右足を大きく一步進め左足も共に右足の後まで進めて面を切る。
- 注意 面を切る時は太刀、薙刀共に「ヤツ」と云ふ。
- (9) 薙刀 を繰込むと同時に右足を一步大きく引き左足も共に右足の前まで引く。互に「エイツ」と云ふ。(寫真十二)



(三十真寫)

(へ) 突く事

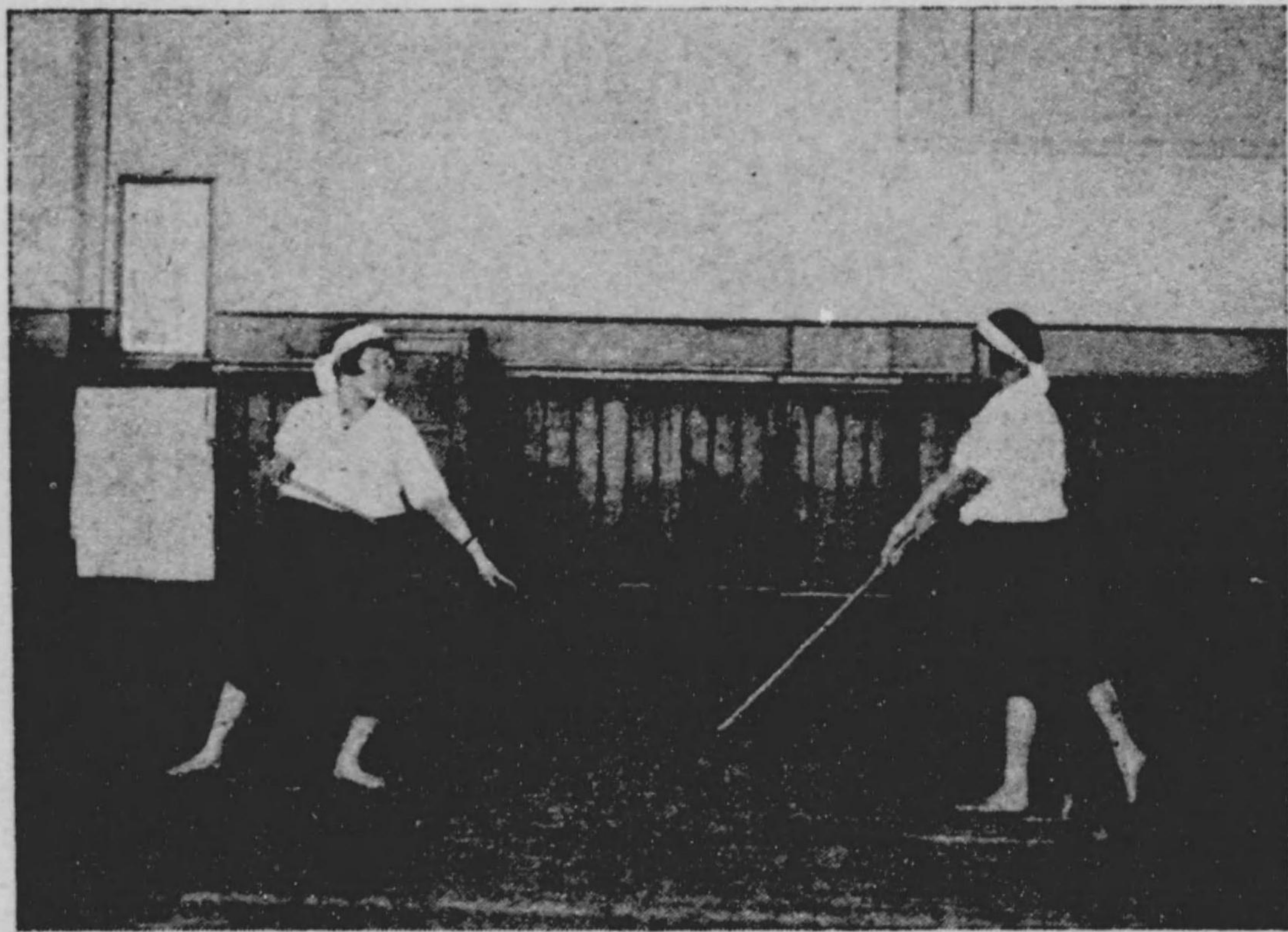
(10) 受太刀 右足を大きく一步引き、左足も共に右足の前まで引くと同時に太刀を下げる。

(10) 薙刀を繰出すと同時に左足を大きく一步進め右足も共に左足の後まで進めて受の咽喉部を突く。
互に「ト」と云ふ。(寫真十三)

(ト) 残心の事

(11) 薙刀 右足より大きく一步引き左足も共に右足の前まで引きて残心を

示して元に復す。
(11) 受太刀 上段にあげたる太刀を左足を一步引き中段として残心を示し、下段となして一足にして元に復す。

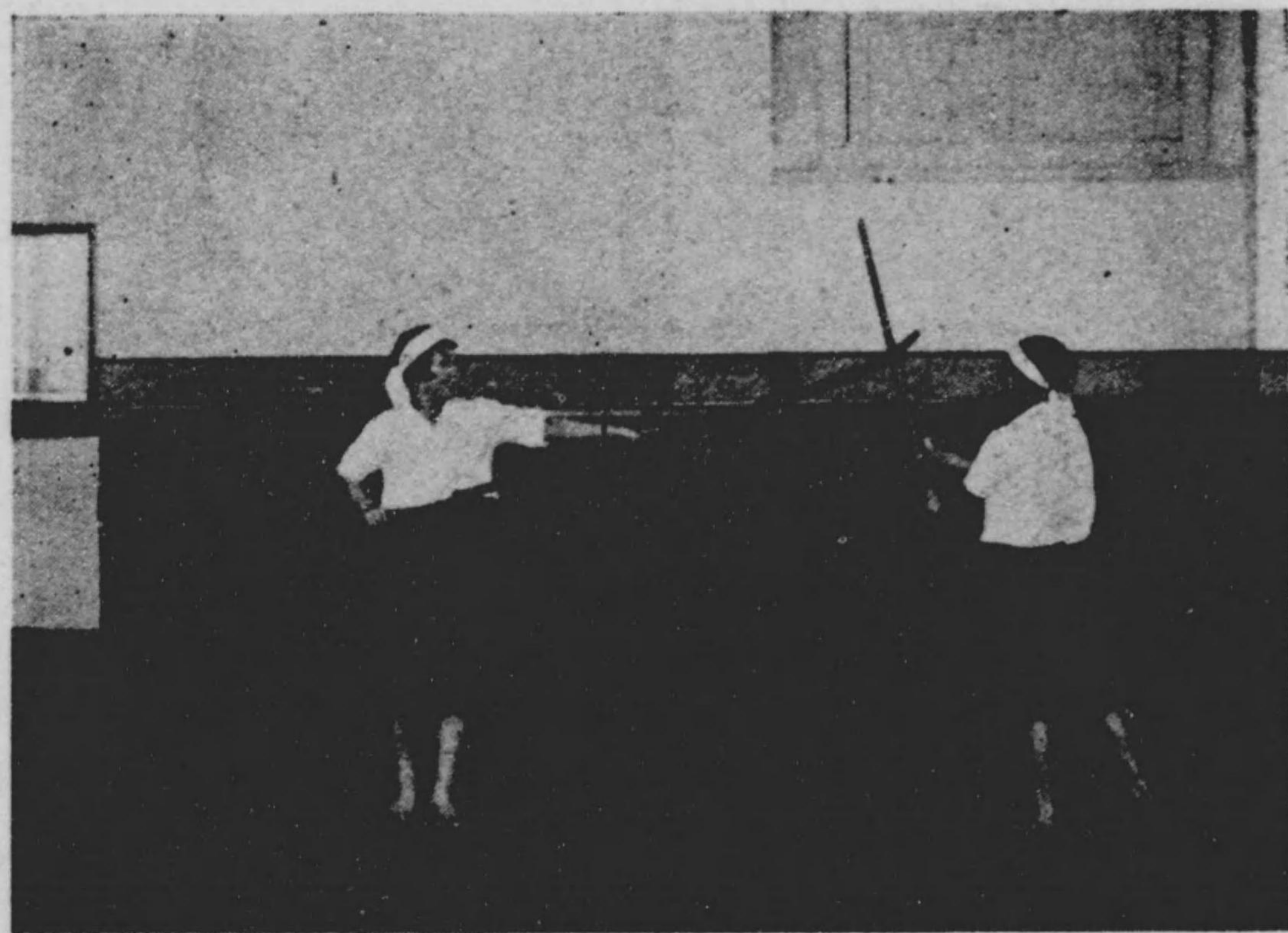


(四十真寫)

(三) 三本目膝折

(イ) 脚二本

- (1) 薙刀 を振返して左足大きく引いて受太刀の足を切る。
- (1) 受太刀 は太刀を中段より右足を引き上段に構へて「ヤツ」と言ふと同時に足を交代して足を受ける。
- (2) 互に「エイツ」と言ふ。(寫真なし)
- (2) 薙刀 を振返し足を交代して受の右足を切る。
- (2) 受太刀 足を交代して足を受ける

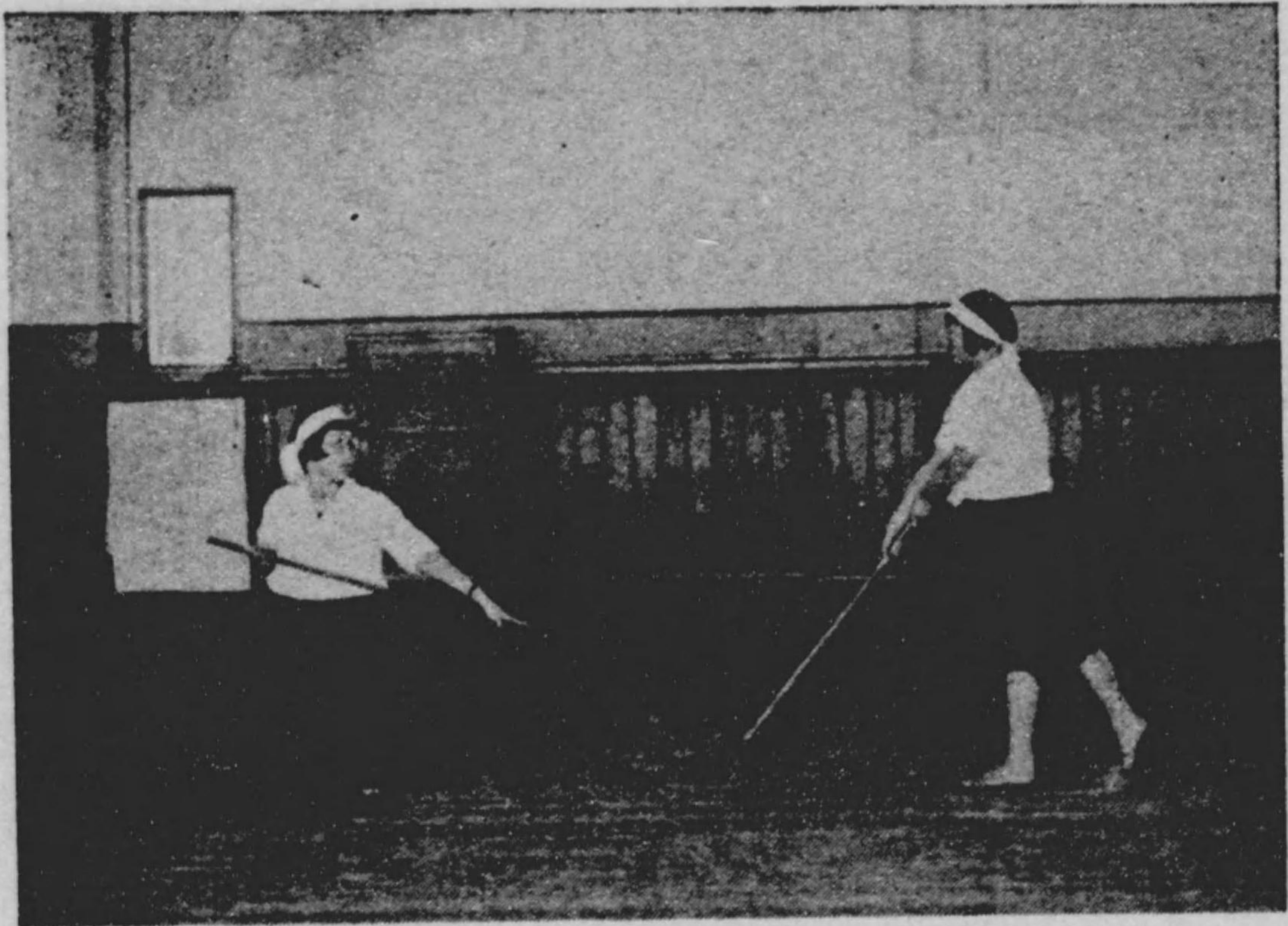


(五十真寫)

互に「トー」と言ふ。(寫真十四)

(ロ) 面二本

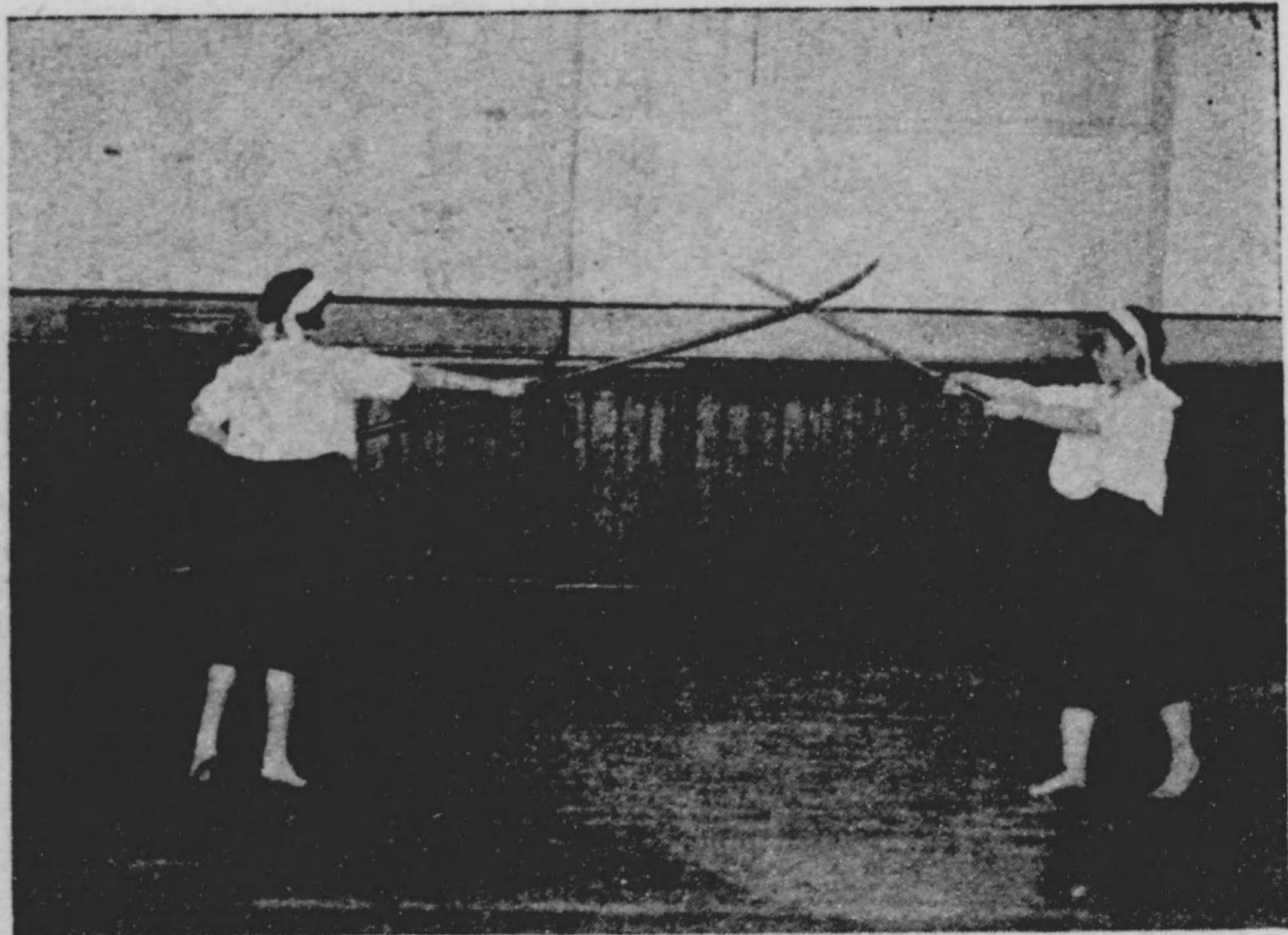
- (3) 薙刀 を振返して足を交代して正面を切る。
- (3) 受太刀 足を交代し太刀を上げて面を受ける。互に「エイツ」と言ふ(寫真なし)
- (4) 薙刀 を振返し足を交代して面を切る。
- (4) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「トー」と言ふ。(寫真十五)



(六十頁寫)

(ハ) 折敷て脚二本

- (5) 薙刀 を振返し足を交代になすと同時に折敷にて受の左足を切る。
 - (5) 受太刀 足を交代して左足を受け。互に「エイツ」と言ふ。
 - (6) (寫真なし)
 - (6) 薙刀 を振返し足を交代して又折敷にて受の右足を切る。
 - (6) 受太刀 足を交代して右足を受け。互に「トー」と言ふ。
- (寫真十六)



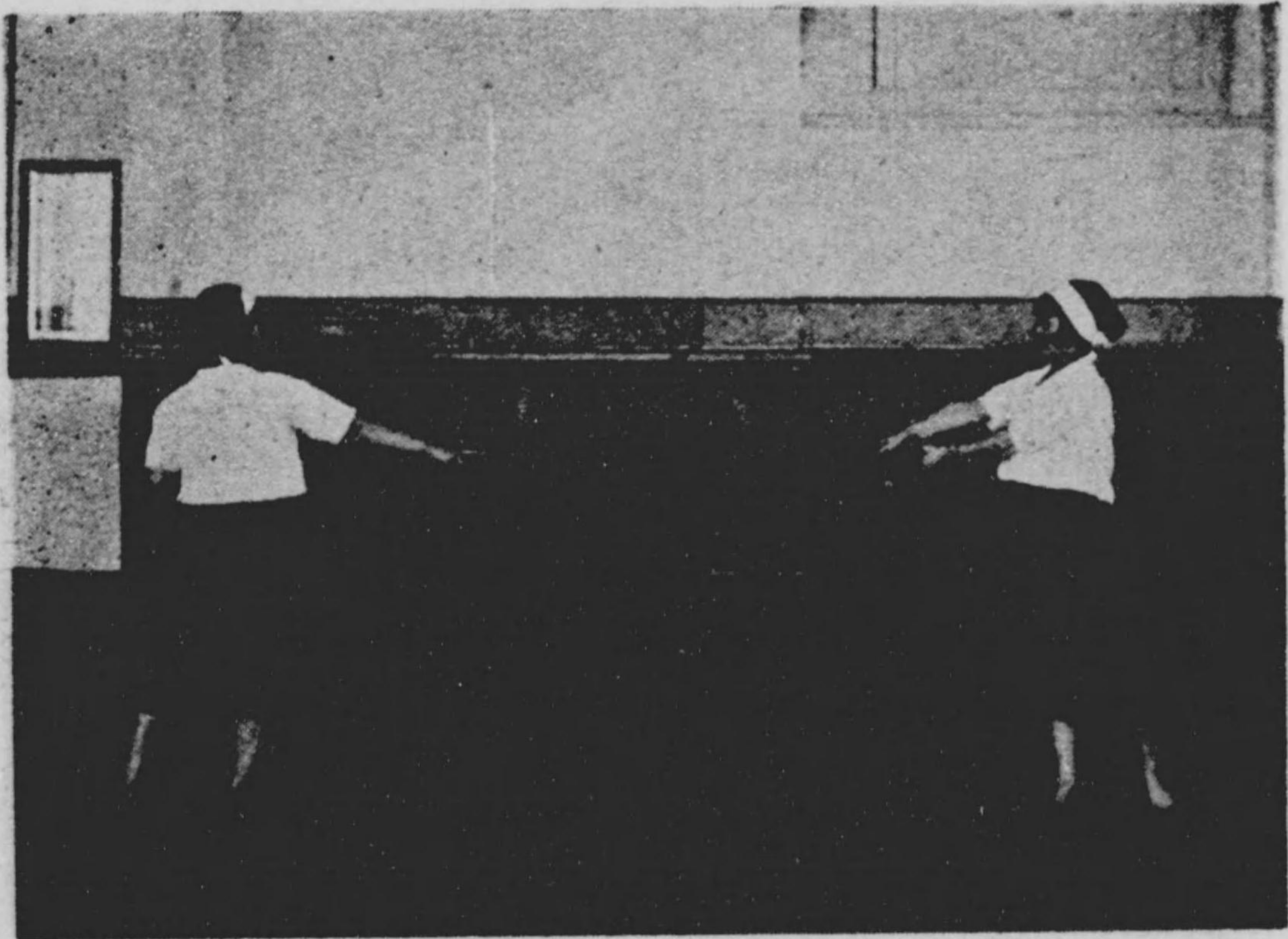
(七十頁寫)

(ニ) 面 三本

- (7) 薙刀 を振返し足を交代して面を三本切る。
 - (7) 受太刀 足を交代し面を二本受けて三本目の面の時は受けずに薙刀の面を切る、之を相打となす。
- 互に「エイツ」「トー」「エイツ」と言ふ。
- 此の寫真(十七)は三本目の互に相打ちとなりたる處なり。

(木) 残心の事

- (8) 薙刀 は左足より一步引きて残心を示し左足を右足に寄せて薙刀をカ。ヒ。込み元に復す。
- (8) 受太刀 左足より一步大きく引くと同時に両手も共に引きて中段の構へとなし残心を示して右足を左足に寄せて一足となし太刀を下段になして元に復す。

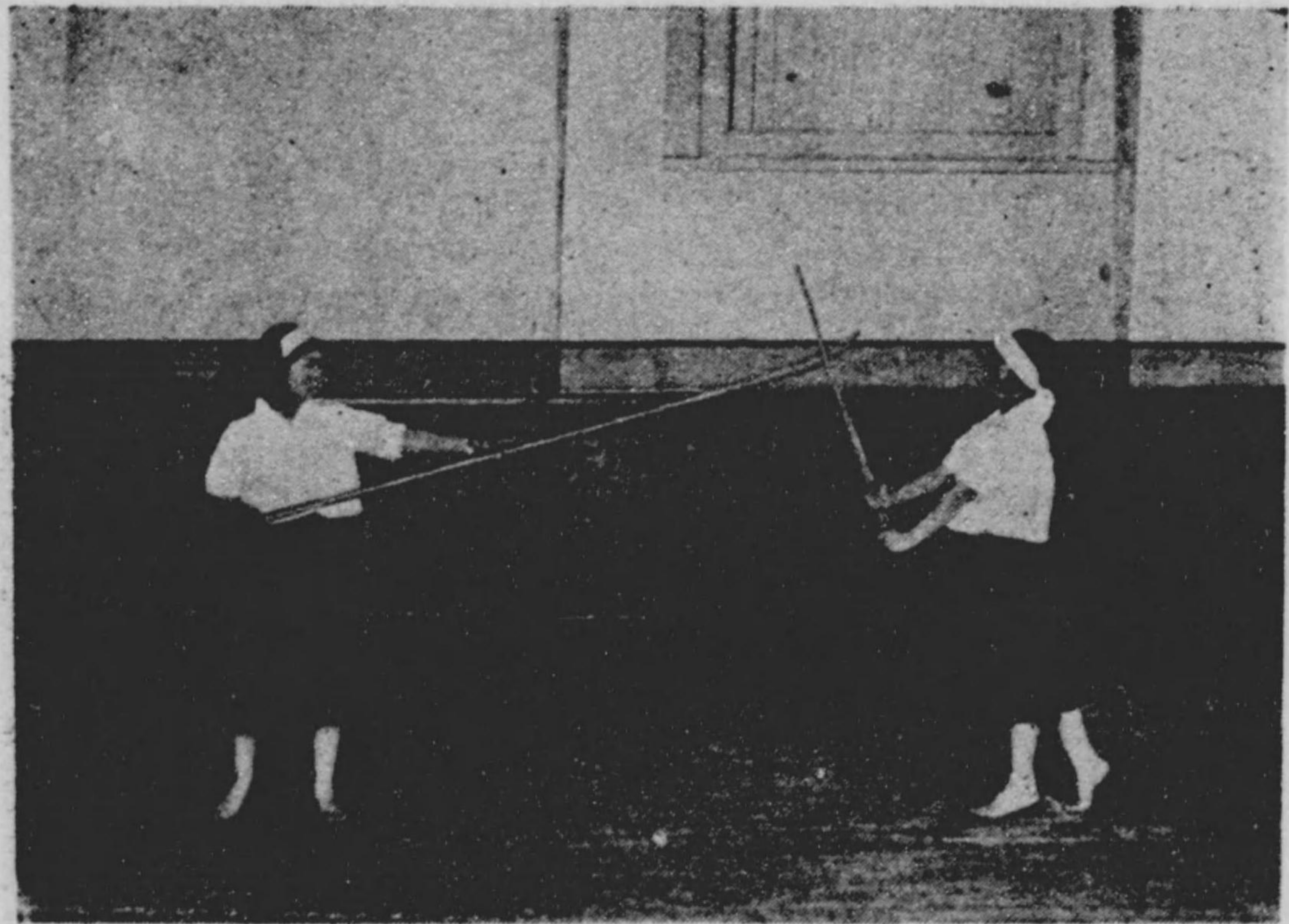


(八十真寫)

(四) 四本目胴切

(イ) 胴一本

- (1) 薙刀 を振返して左足を引き双を横にして胴を切る。
- (1) 受太刀 太刀を中段より右を少し引き上段になして「ヤツ」と云ふ。薙刀が胴にくる時に右足を少し右に開きて左足を右足の後へ引き鑢ぎにて受ける。互に「エイツ」と云ふ。
- (寫真十八)



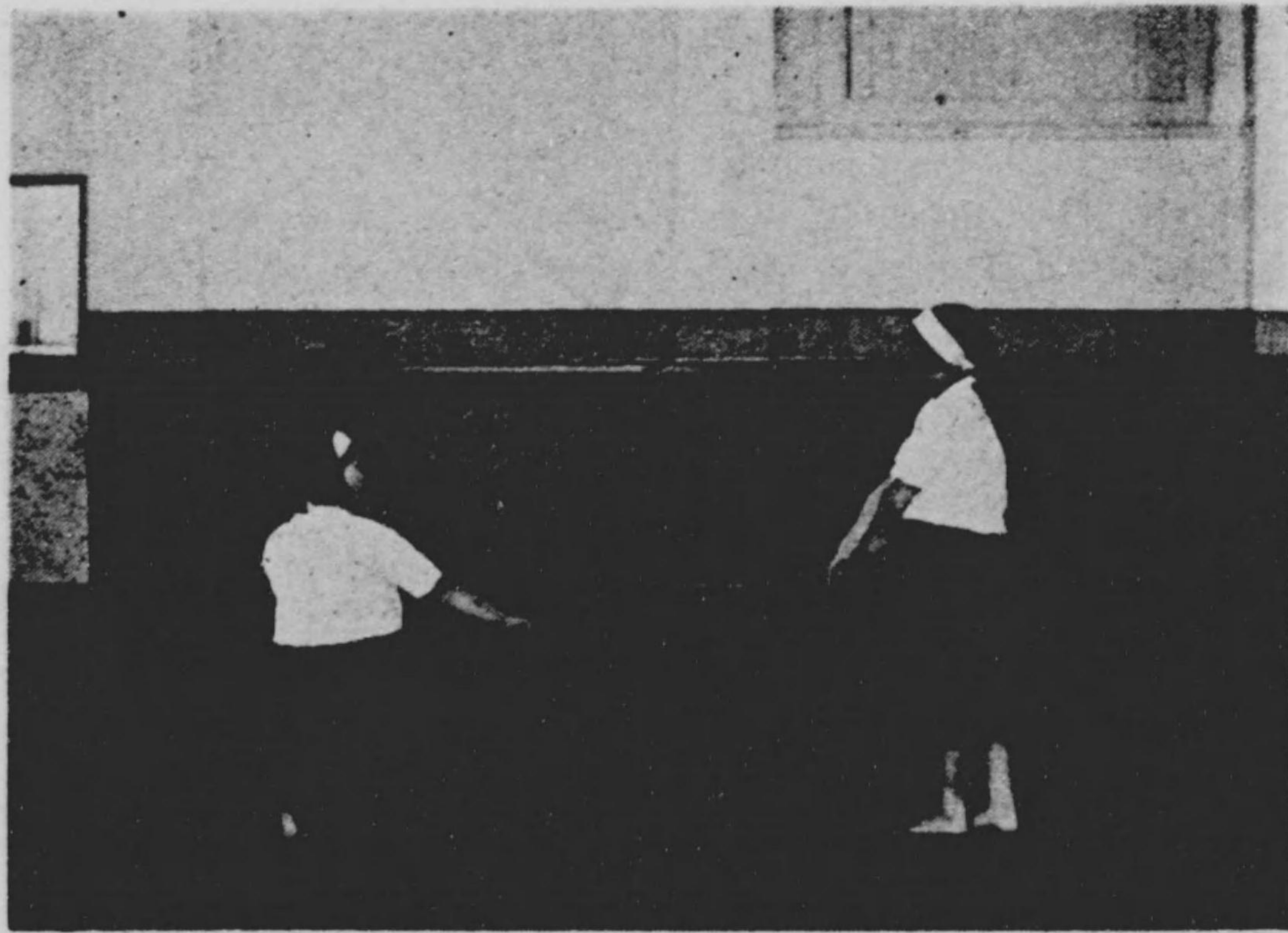
(九十眞寫)

(口) 面一本

五六

(2) 薙刀を振返して左足を右足に寄せて交代して面を切る。

(2) 受太刀 左足を元の處へ進めて右足を引きて面を受ける。互に「ト」と云ふ。(寫眞十九)



(十二眞寫)

(ハ) 石突一本

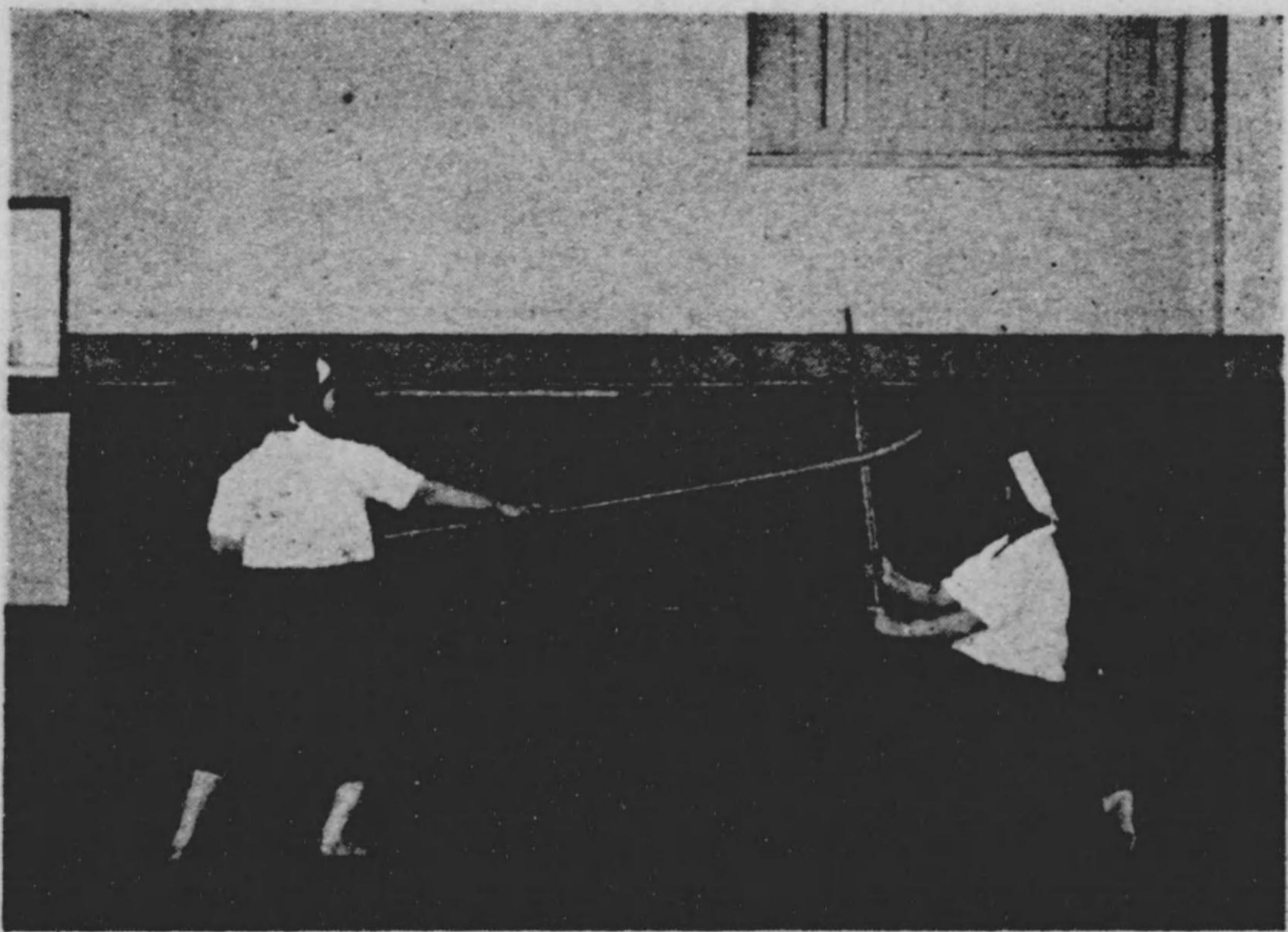
(3) 薙刀を繰込みて石突を繰出し右足を少々進める心持にて足を交代し

オリシキにて受の左足を打つ。

注意 石突を繰出す時は左手を薙刀の双先の方に寄せ右手を左手の處まで寄せる。

(3) 受太刀 左足を少し引きて石突を受の右の方へ拂ふ。

互に聲は「エイツ」と云ふ。(寫眞二十)



(一十二真寫)

(二) 面一本

五八

(4) 薙刀を振返し、體は其まゝ左足を引き面を切る。薙刀を繰出す。

注意 左足を引く時は右足共に左足の前まで引く。

(4) 受太刀 右足一步進み折敷いて面を受ける。

互に「トー」と云ふ。

(寫真二十一)

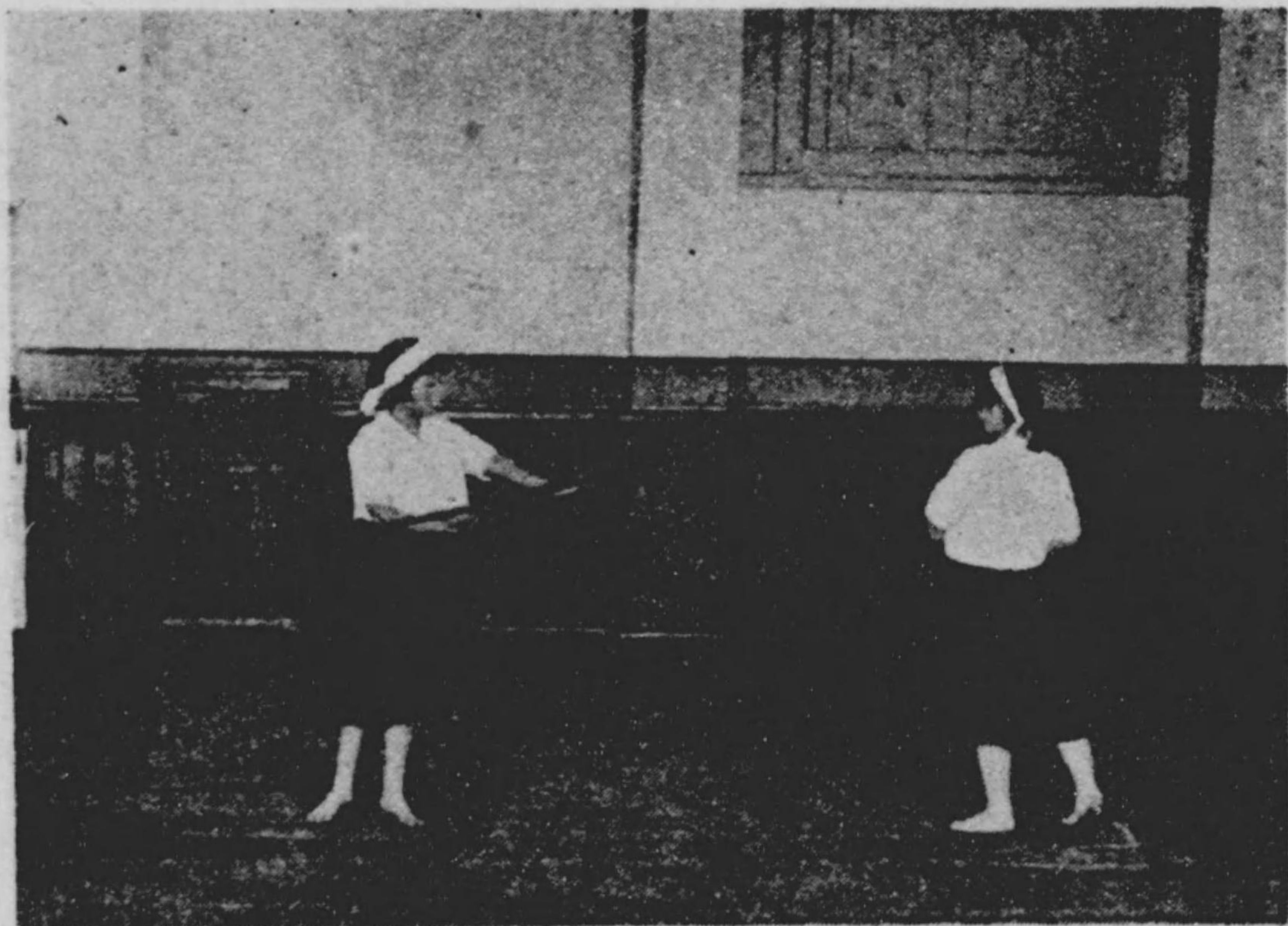
(木) 残心の事

(5) 薙刀 左足一步引き残心を示して

受太刀が立つと同時に薙刀をか。込み元に復す。

(5) 受太刀 面を受けたる手を下げ劍先を右の方へ倒し體は其のまゝにて残心を示して、立つと同時に太刀を下段にして元に復す。

注意 此時は太刀を中段になすと手と足とが揃はぬ故立つと同時に太刀を下段になす。



(二十二真寫)

(五) 五本目胸構へ

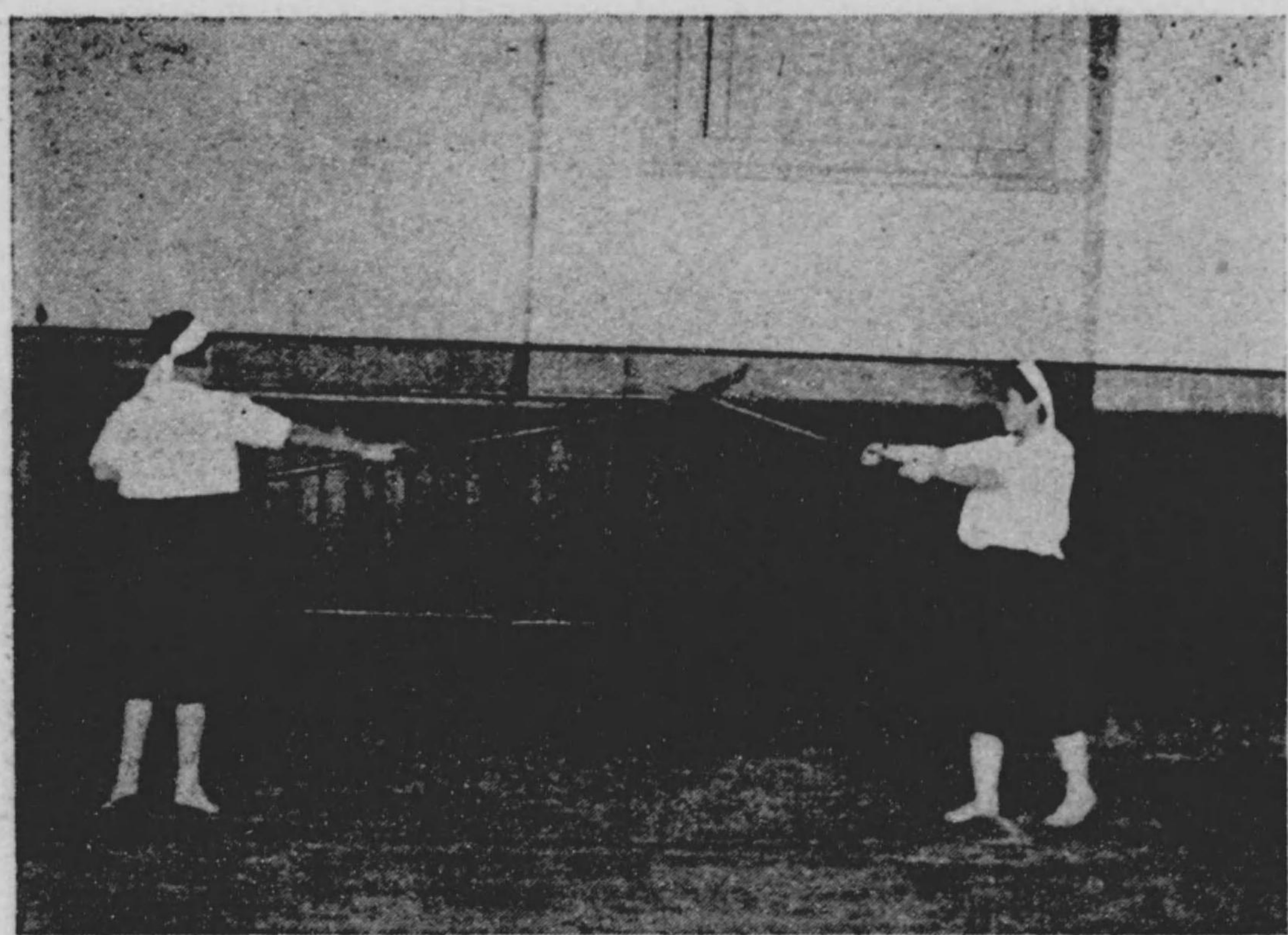
(イ) 構への事

(1) 薙刀 を前よりオコシテ後へ倒し
刃を横に向けて胸構へとなす。

注意 石突は受の左眼の處へつけ
る。

(1) 受太刀 は太刀を中段になすと同
時に左足を少し引き「ヤツ」と云ふ
と同時に右足を引き太刀先を後へ倒
して構へる。

互に「エイツ」と云ふ。(寫眞二十二)



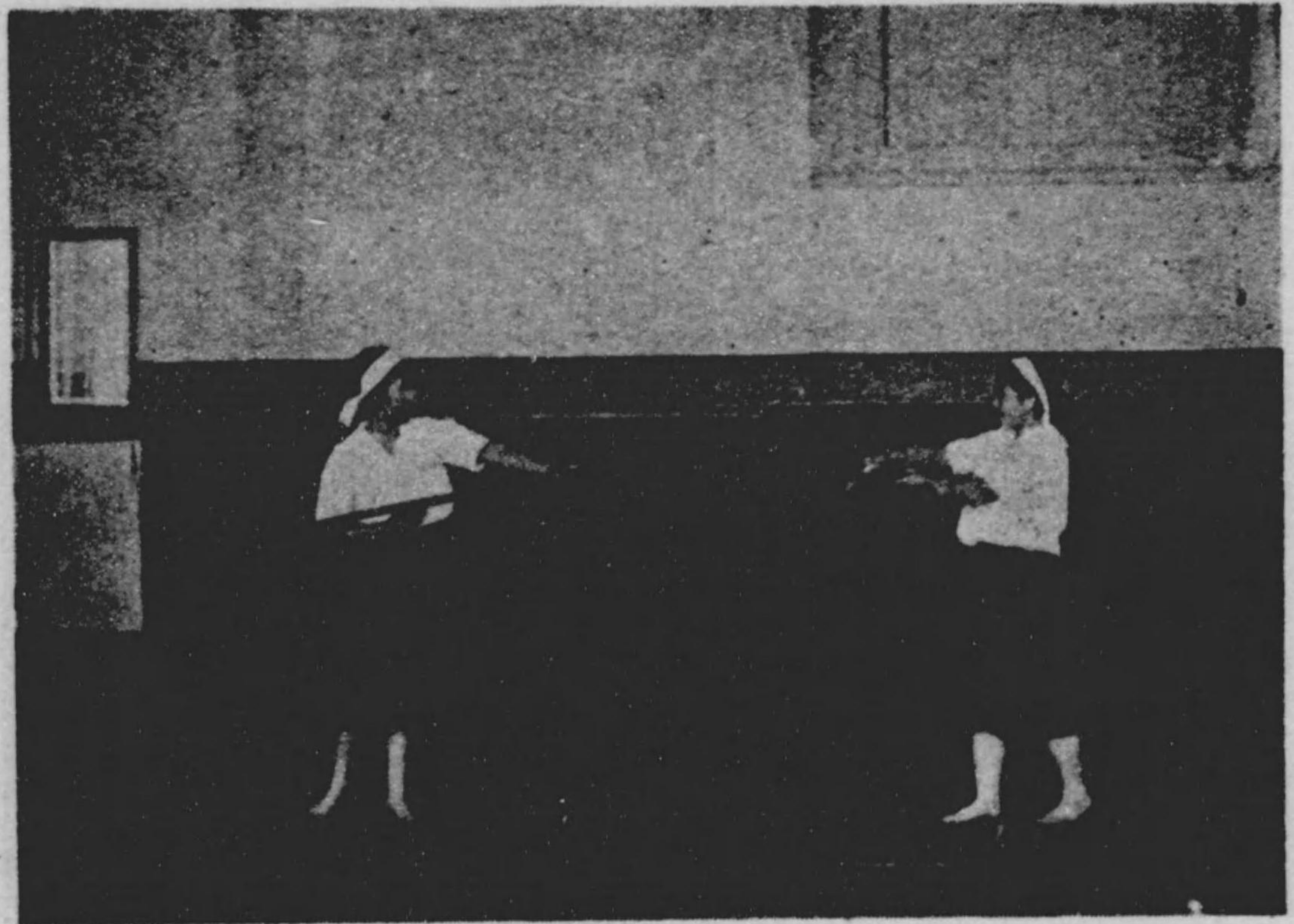
(三十二真寫)

(ロ) 互に相打ちの事

(2) 薙刀 を上段になすと同時に右足
を左足に寄せて交代して受の正面を
切る。

(2) 受太刀 は右の方より上段になす
と同時に左足を引きて面を切る。互
に相打ちとなる。

聲は互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞二十三)



(四十二頁寫)

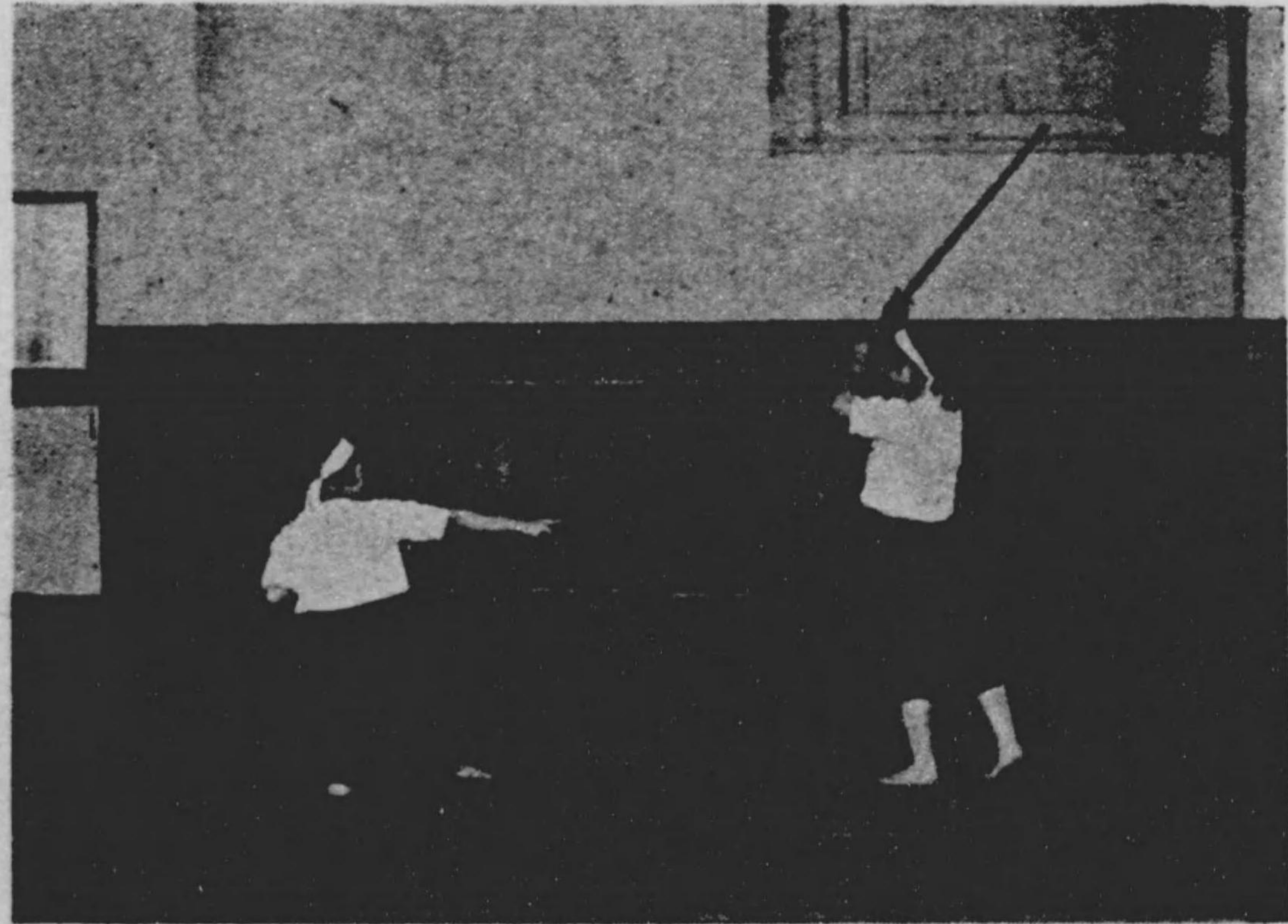
(ハ) 石突にて落す事

六二

(3) 薙刀を繰込むと同時に左足一歩進みて石突で太刀を落す。

注意 薙刀を繰込み石突を繰出すには右手を薙刀の刃先の方へ寄せ左手を右手の方へ寄せろ。

(3) 受太刀 面を切りたる體は其まゝ手も其まゝにて石突で落される。互に「トー」と云ふ。(寫眞二十四)



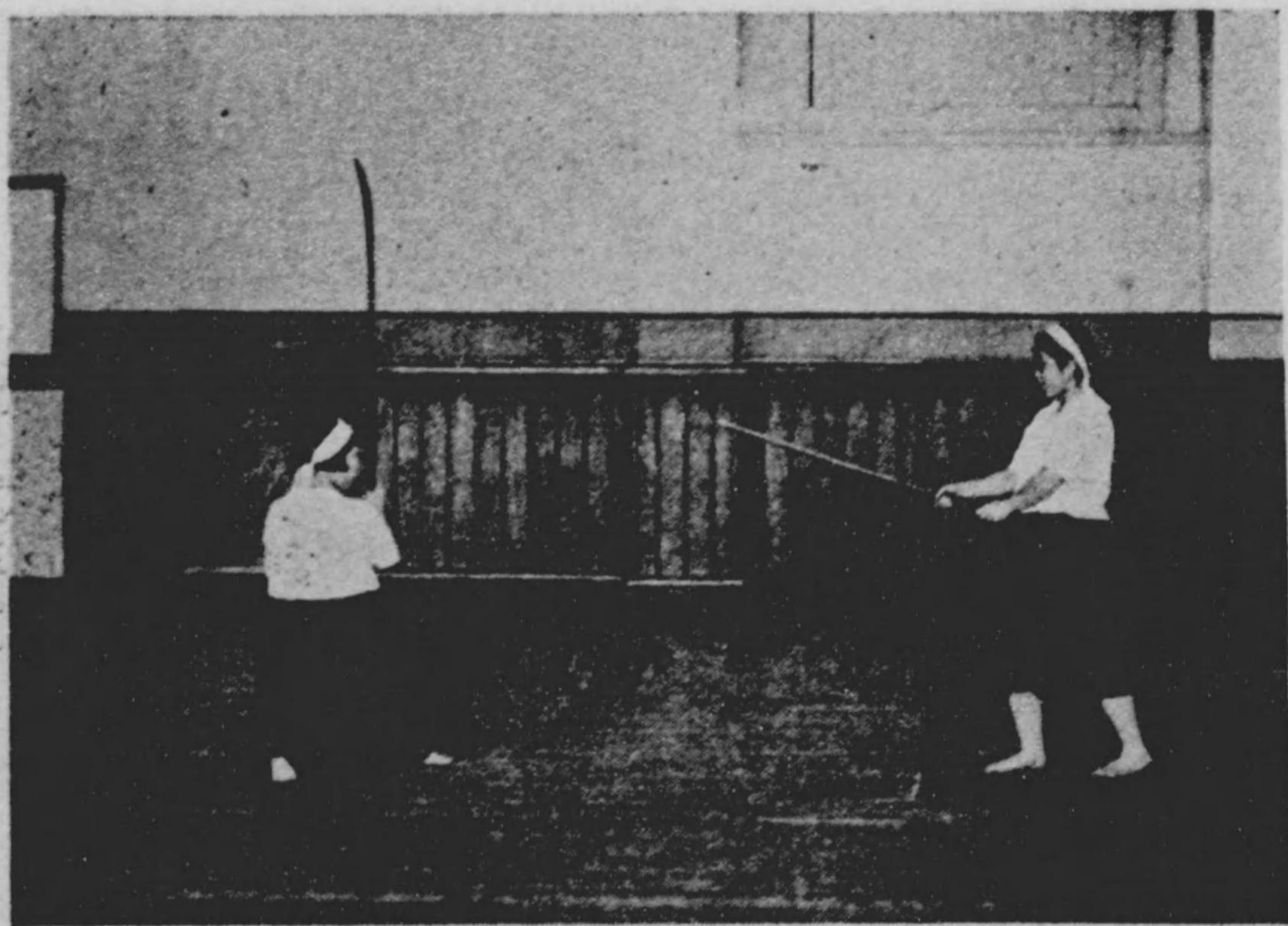
(五十二頁寫)

(ニ) 胴切る事

(4) 薙刀を繰出して刃先を下より右足一歩進む心持にて足を交代してオリシキテ胴を切る。刃は横になす。

(4) 受太刀 落されし太刀を左の方より上段になすと同時に右足を一歩引く、互に「エイツ」と言ふ。

(寫眞二十五)



(六十二真寫)

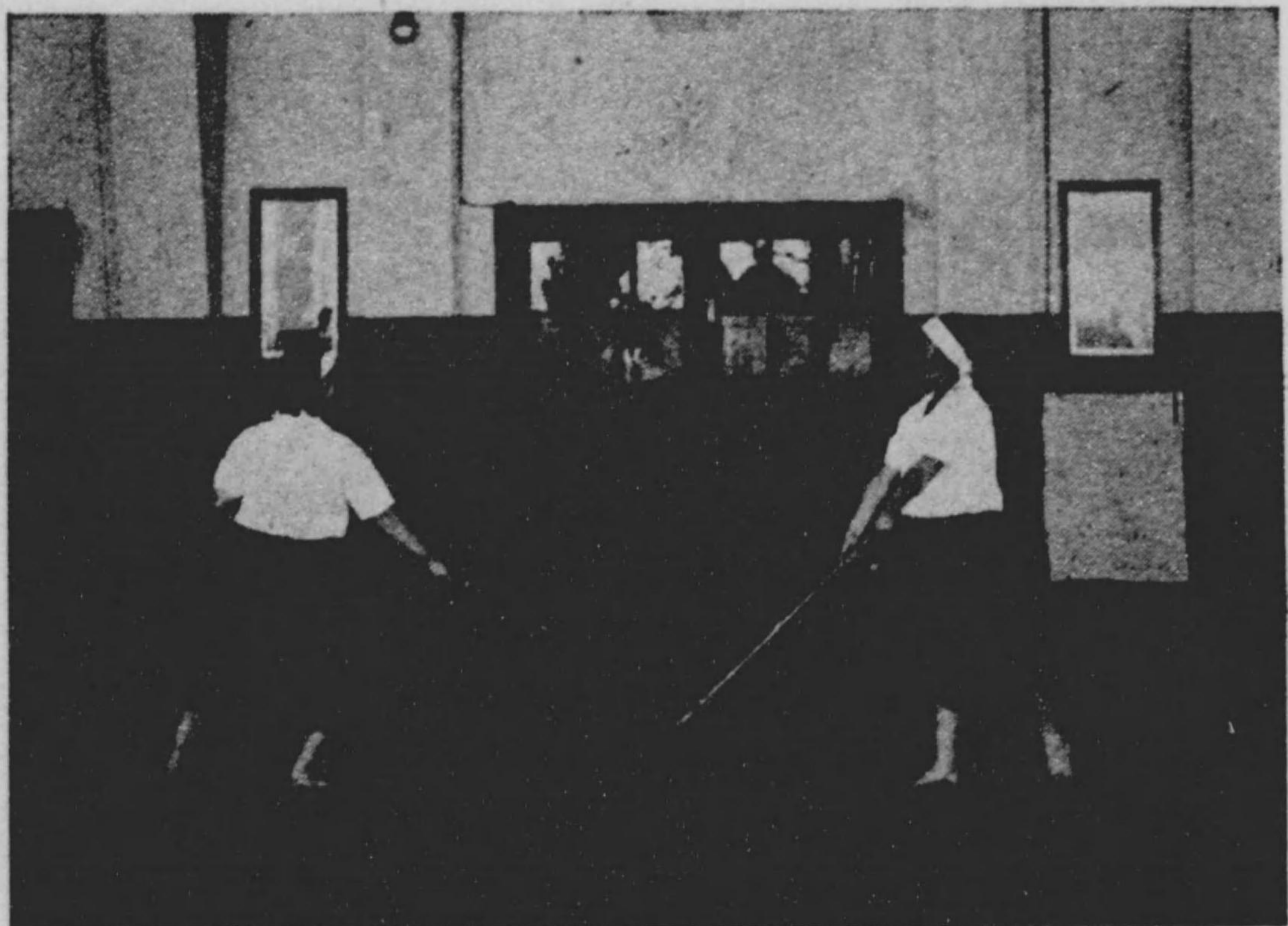
(木) 残心

六四

(5) 薙刀 體は其のまゝにて薙刀を右足と左足との中程に立て残心を示し受が太刀を下段になすと同時に石突を右脇にか。込み、同時に立ちて一足となり元に復す。

注意 薙刀を立てる時に左手を右手の下まで寄せる。

(5) 受太刀 左足を引き、太刀を中段にして残心を示し下段になして足を一足として元に復す。(寫眞二十六)



(七十二真寫)

(六) 六本目左右甲手止め

(イ) 一足一本

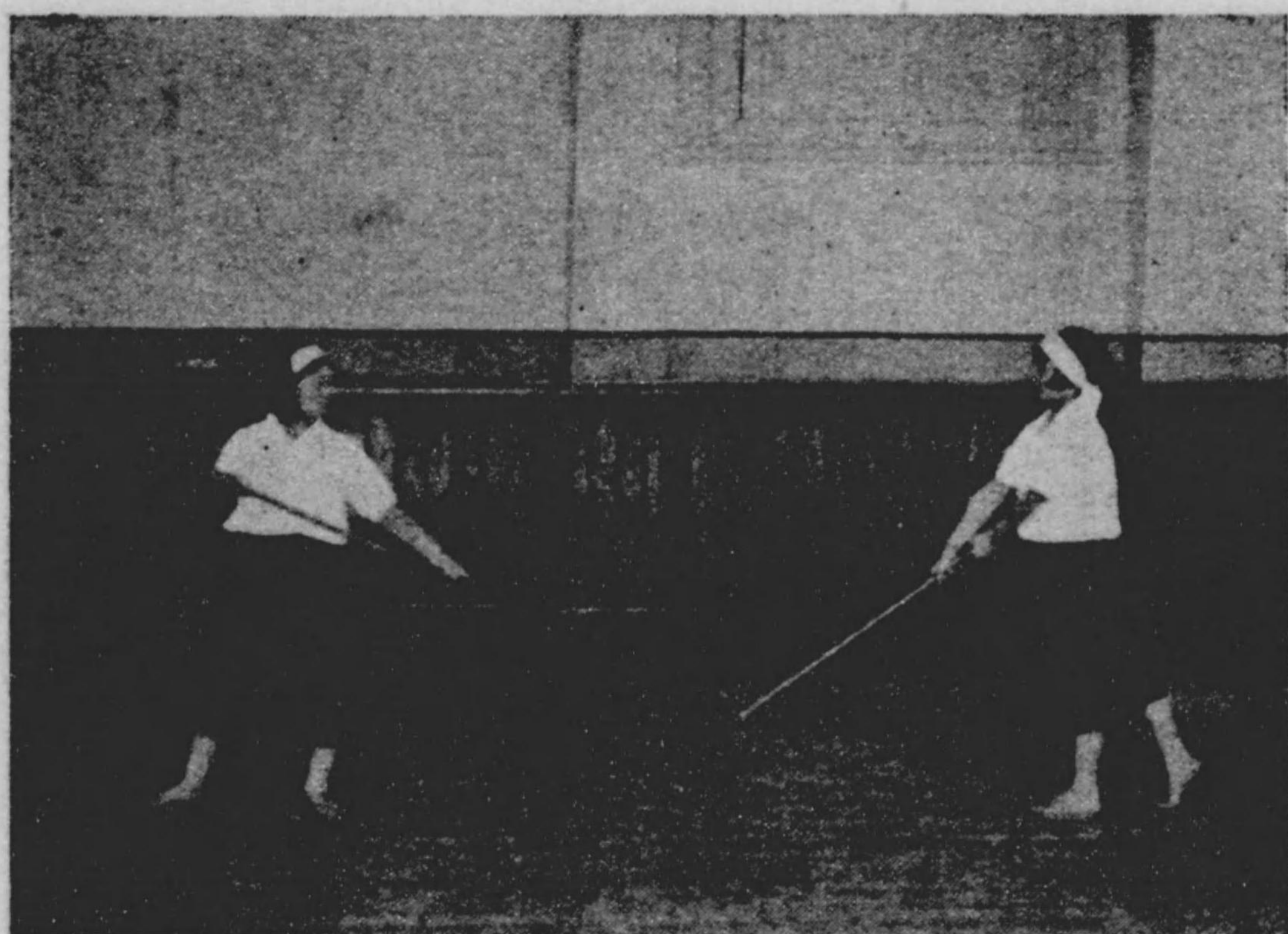
(1) 薙刀 か。込みし薙刀を振返して左足を引き受太刀の左脚を切る。

(1) 受太刀 中段より右足少し引きて「ヤツ」と云ふ。

左足にくると同時に右足を左足に寄せ交代して脚を受ける。
互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞二十七)

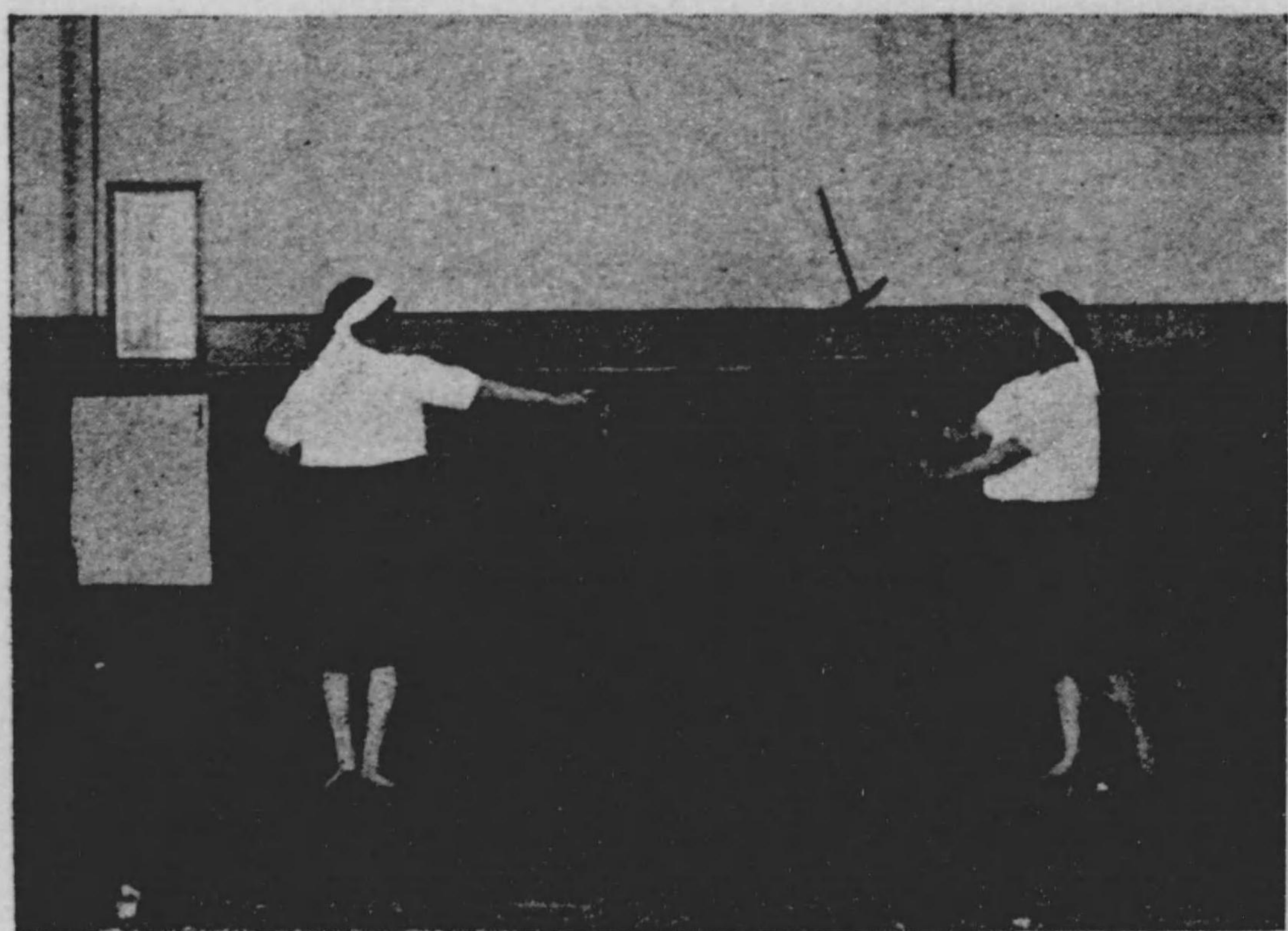
六五



(八十二真寫)

(イ)ニ足一本

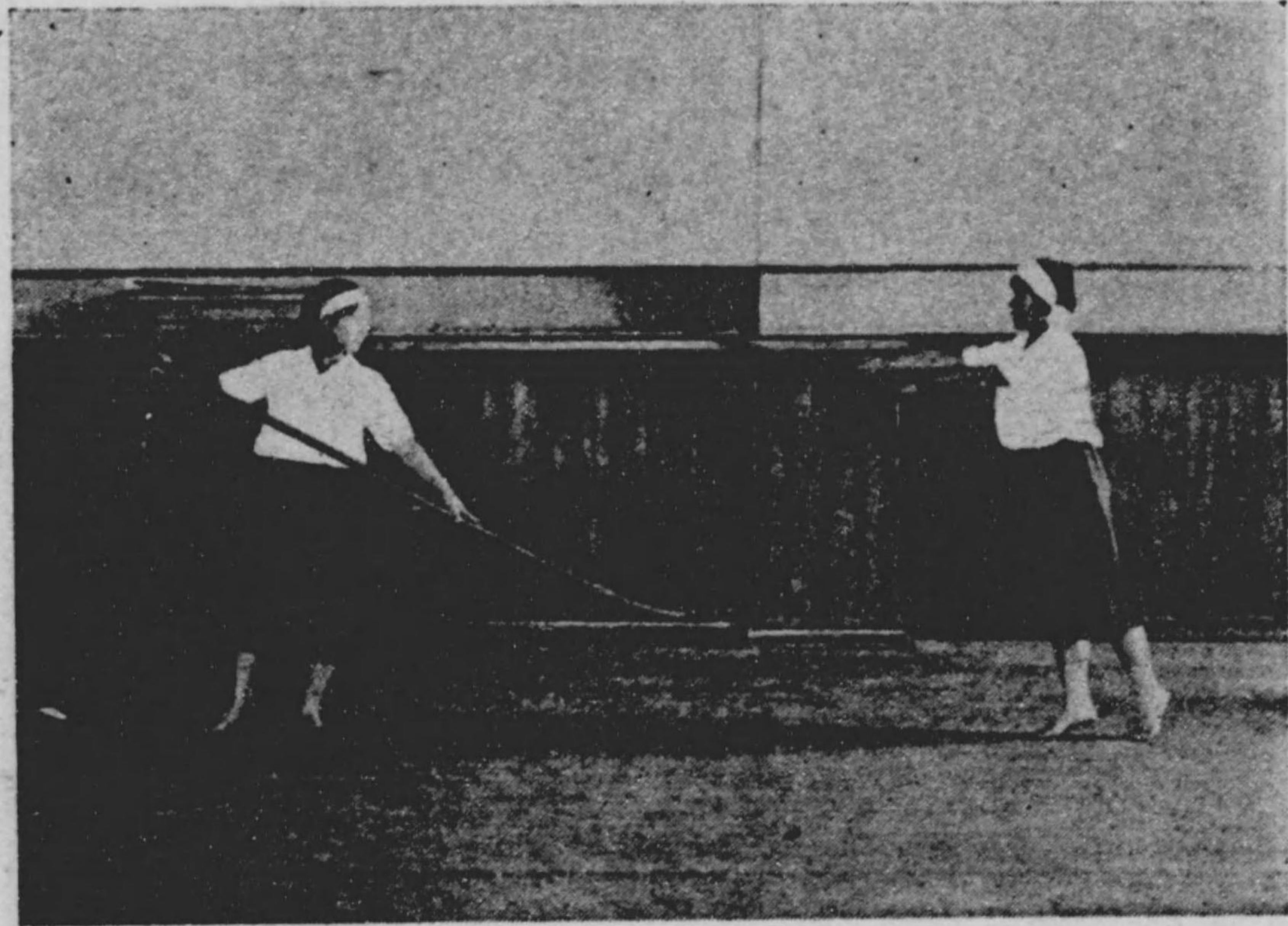
- (2) 薙刀 振返して左足を右足に寄せ交代して受太刀の右足を切る。
 - (2) 受太刀 は太刀を上段に上げると同時に左足を右足に寄せ交代して右足を受ける。
- 互に「トー」と云ふ。
(寫眞二十八)



(九十二真寫)

(ロ)一面一本

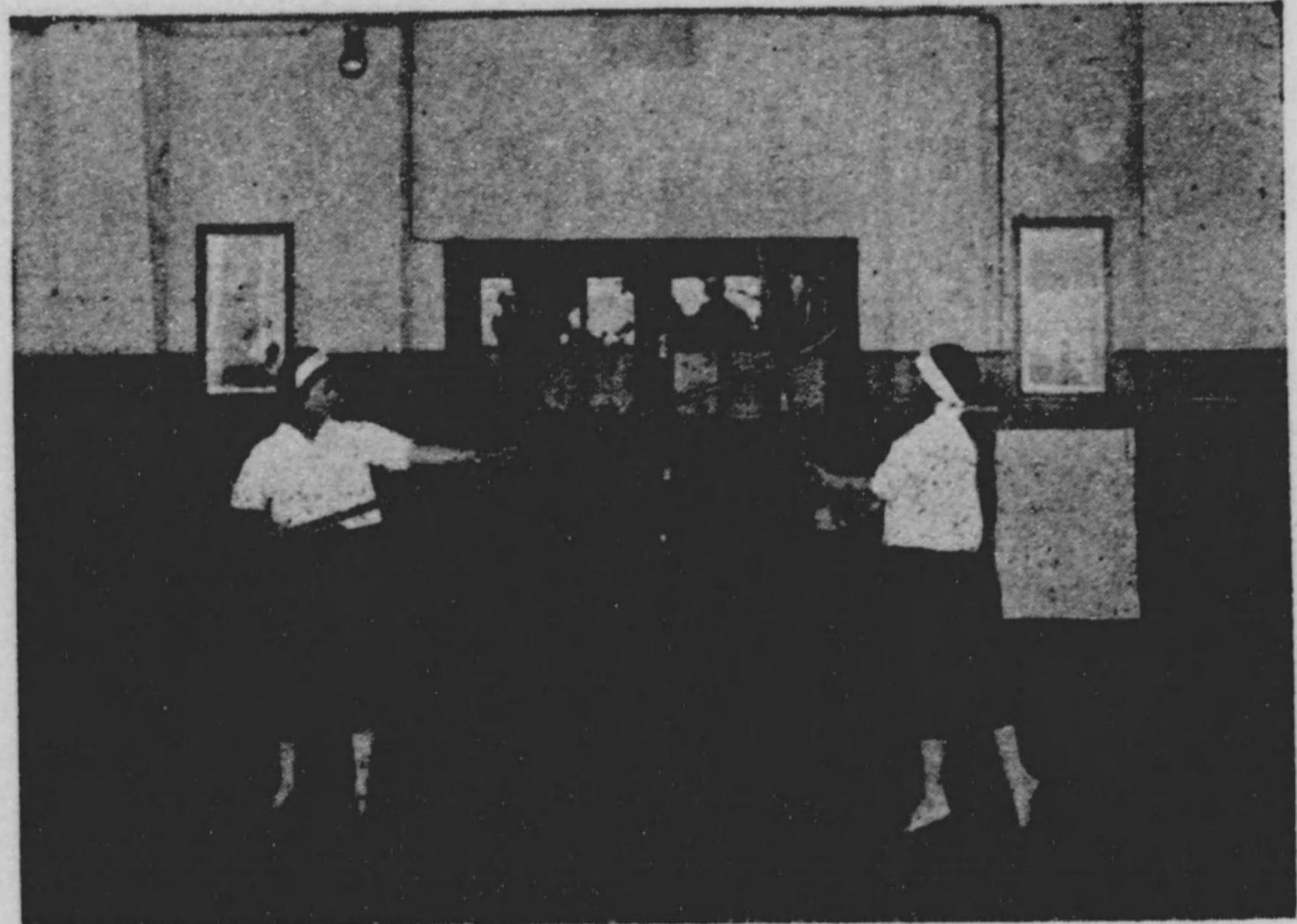
- (3) 薙刀 を振返し足を交代して受太刀の正面を切る。
 - (3) 受太刀 足を交代して太刀を下よりかるく薙刀をハ。ネル。様にして面を受ける。
- 互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞二十九)



(一十三真寫)

- (5) 薙刀 面を切りたる薙刀を繰込み
て右足大きく一步引き左足共に右足
の前まで引き受太刀が面を切りくる
をスカス。
- 注意 此の時に薙刀を繰込むには
左手を伸ばしたるまゝで右
手にて繰込み双先を受太刀
の腹部下に付ける。左手共
に下げて伸ばす。
- (5) 受太刀 は受けたる太刀を上段に
上げると同時に右足を大きく一步進

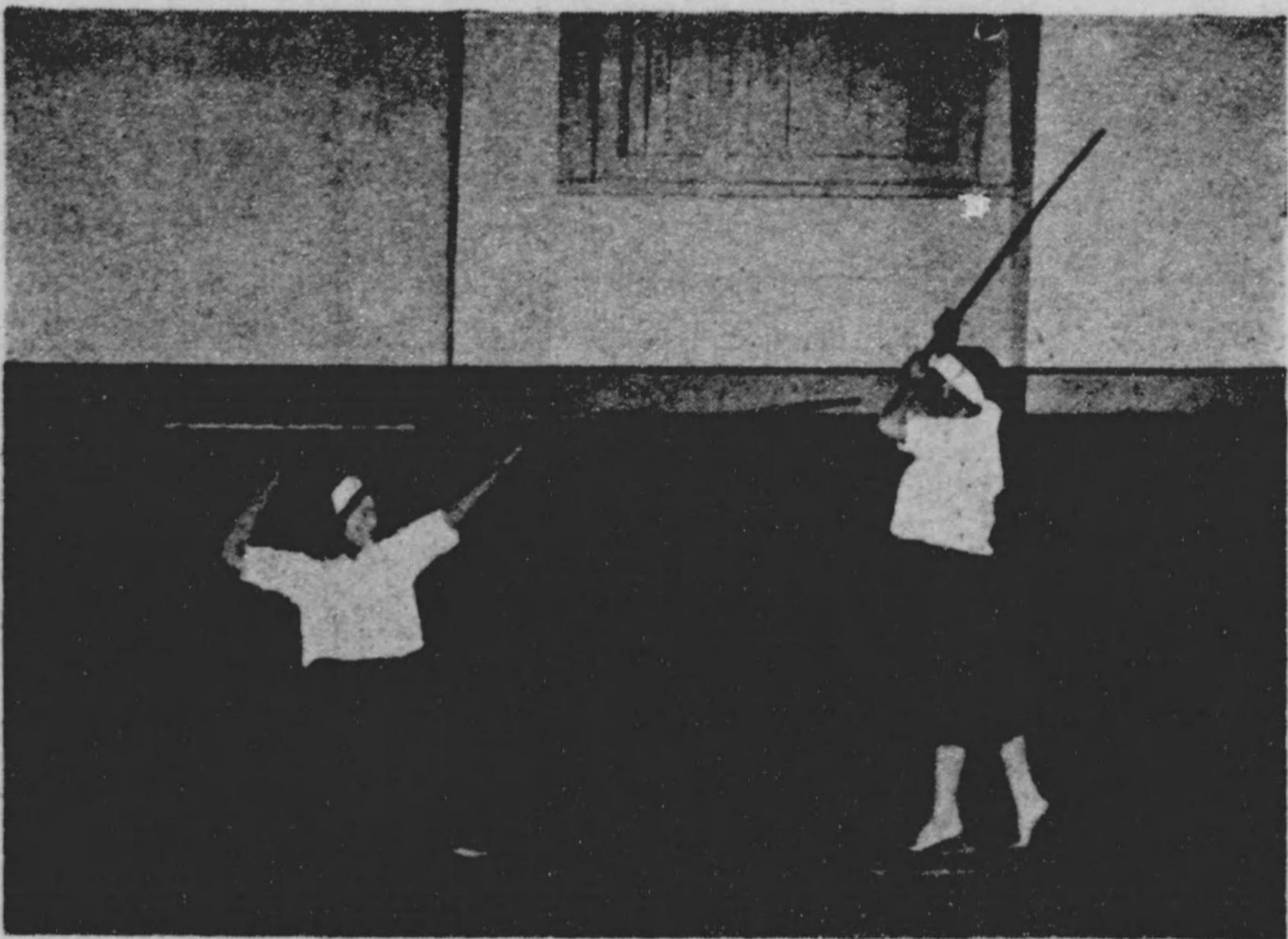
(ハ) 薙刀繰込の事



(十三真寫)

- (4) 薙刀 を振返し足を交代して又面
を切る。
- (4) 受太刀 足を交代して又面を受け
る。
- 互に「トー」と云ふ。
- (寫真三十)

(ロ) 二面一本



(二十三頁寫)

めて面を切る。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞三十一)

七〇

(二) 甲手を切る事

(6) 薙刀 繰込みし薙刀を受太刀が太刀を引くと同時に繰出して左足を大きく一歩進めて薙刀を下より刃を横にしてオ。リ。シ。キ。テ。甲手を切る。

(6) 受太刀 面を切りし太刀を右足より一歩大きく引き、左足も共に右足の前まで引きて上段になす。

互に「トー」と云ふ。

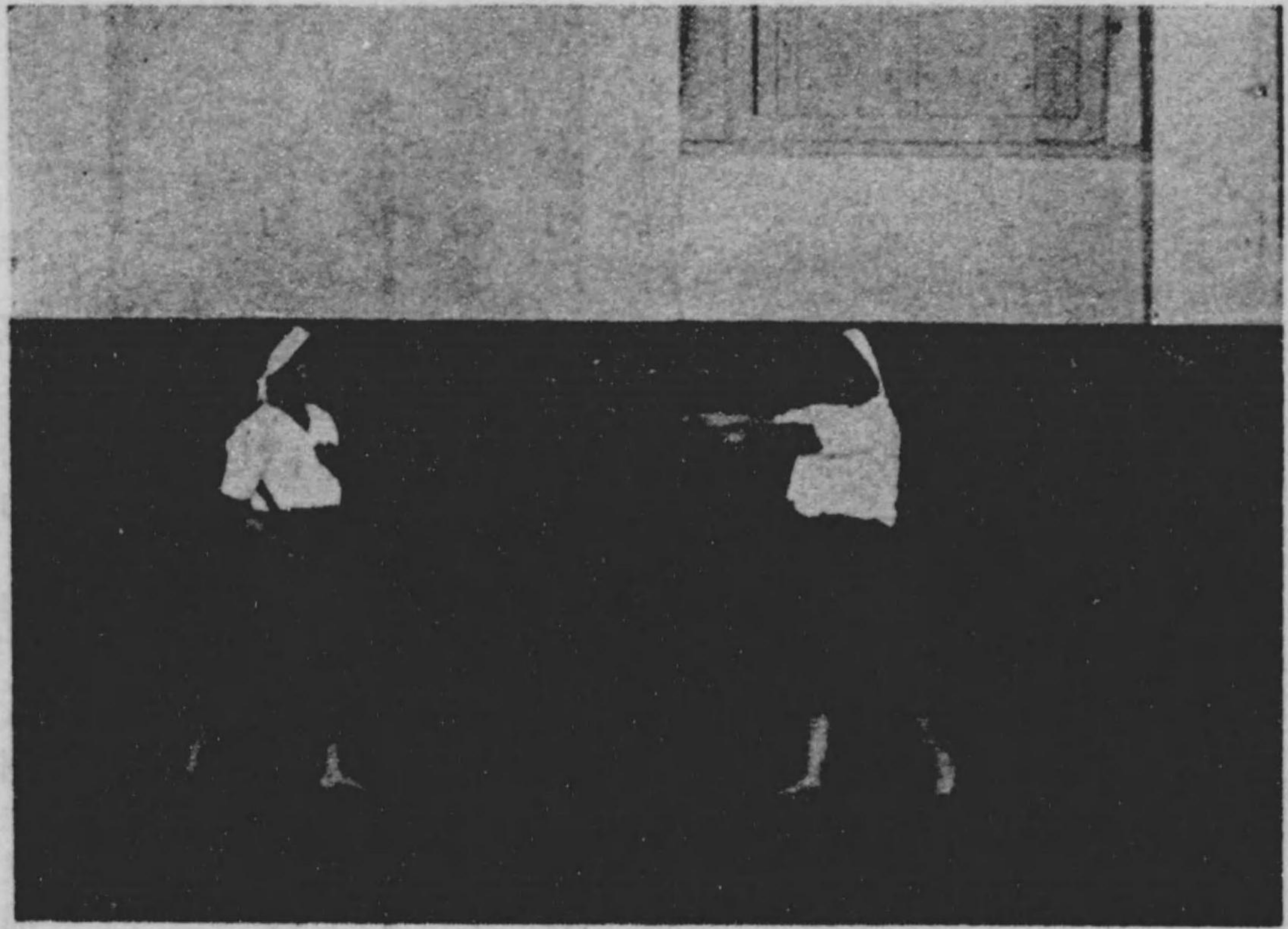
(寫眞三十二)

注意 太刀を引くは剣先腹部に付られしゆ五構へをなほす心なり。

(木) 残心の事

(7) 薙刀 を中段になすと同時に立ちて右足より大きく一歩引き、左足も共に右足の前まで引きて残心を示し、受が太刀を下段になすと同時に右手を左手の方へ寄せて右脇にカ。ヒ。込みて元に復す。

(7) 太刀 を中段になすと同時に左足を引き残心を示して太刀を下段になすと同時に右足を左足に寄せて一足となして元に復す。



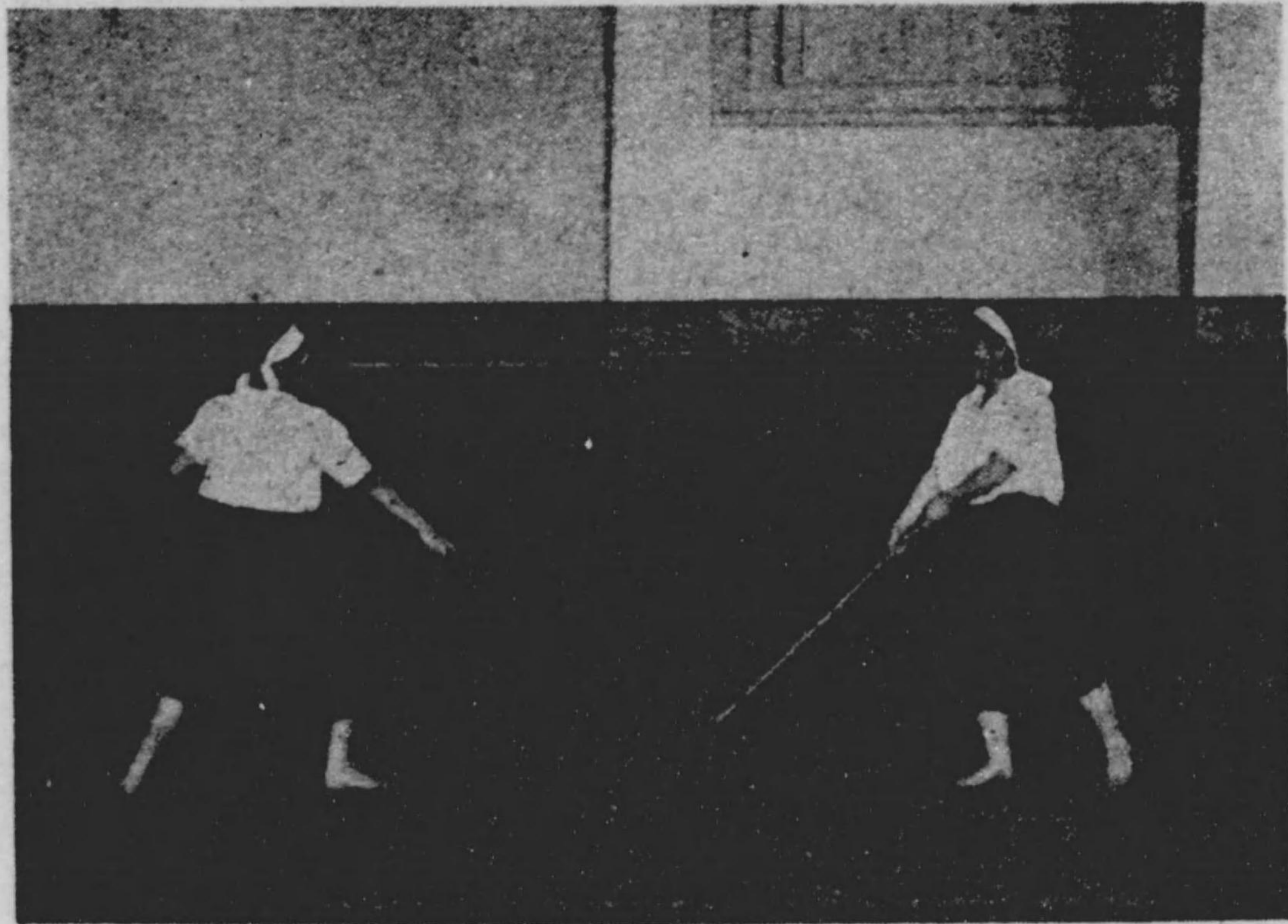
(三十三頁寫)

(七) 七本目 (飛退り)

(イ) 下る處

(1) 薙刀の刃を下にむけて右手を下から持ちて足を一足となし、受が左右と進みくると同時に左右と引く右足を大きく引くと同時に右手を伸ばして薙刀を少々右足の方へ開く。

(1) 受太刀は太刀を中段より右足を少々引きて上段になして「ヤツ」と懸聲をなすと同時に左右と進み右足進む時に両手を伸ばして面を切る。



(四十三頁寫)

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞三十三)

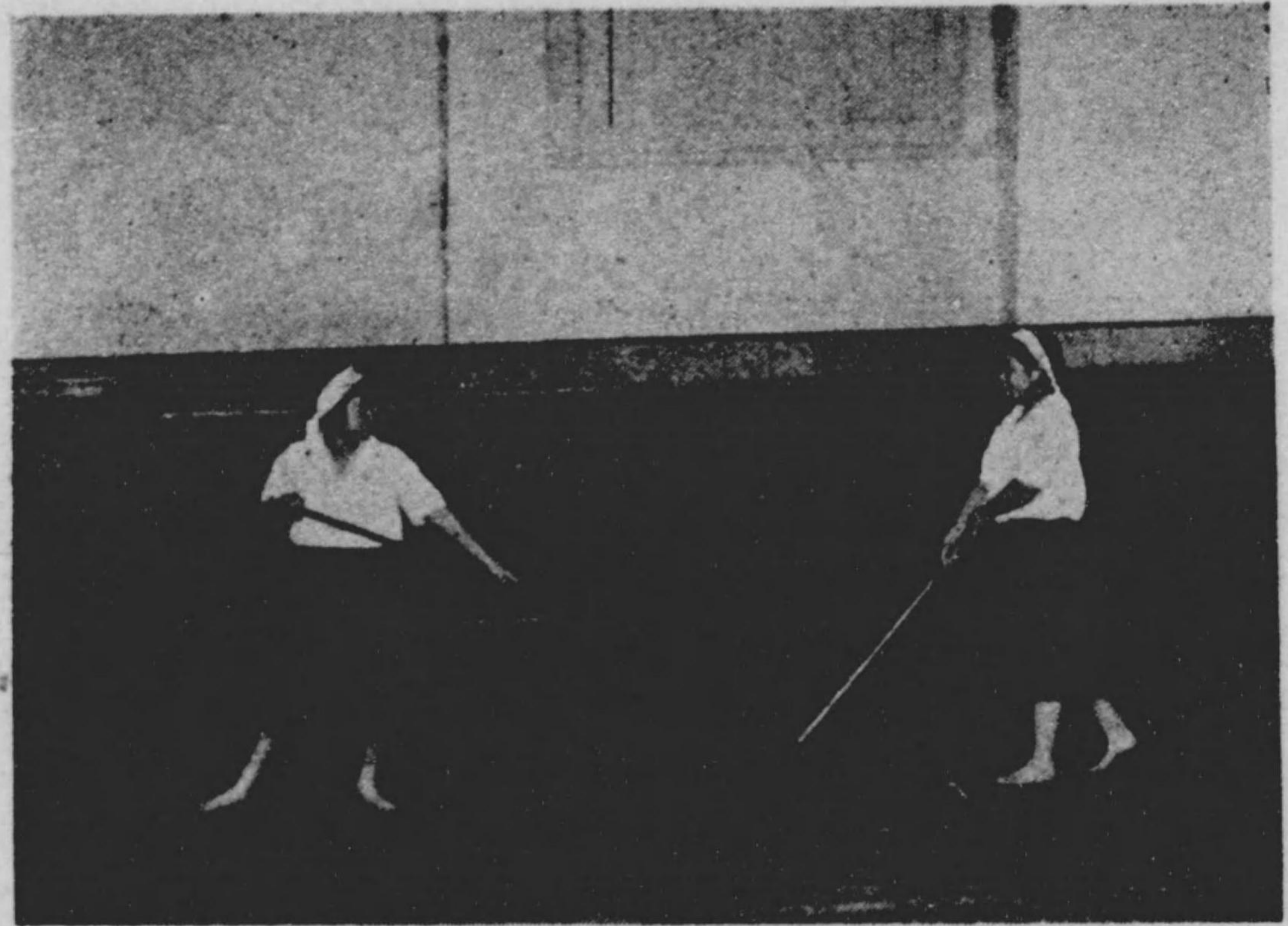
(ロ) 一脚一本

(2) 薙刀を振返して右足を左足に寄せ左足を引きて受の左足を切る右手を伸ばす。

(2) 受太刀 太刀を上段になすと同時に右足を左足に寄せて左足を引くと同時に太刀を下げ脚を受ける。

互に「トー」と云ふ。

(寫眞三十四)



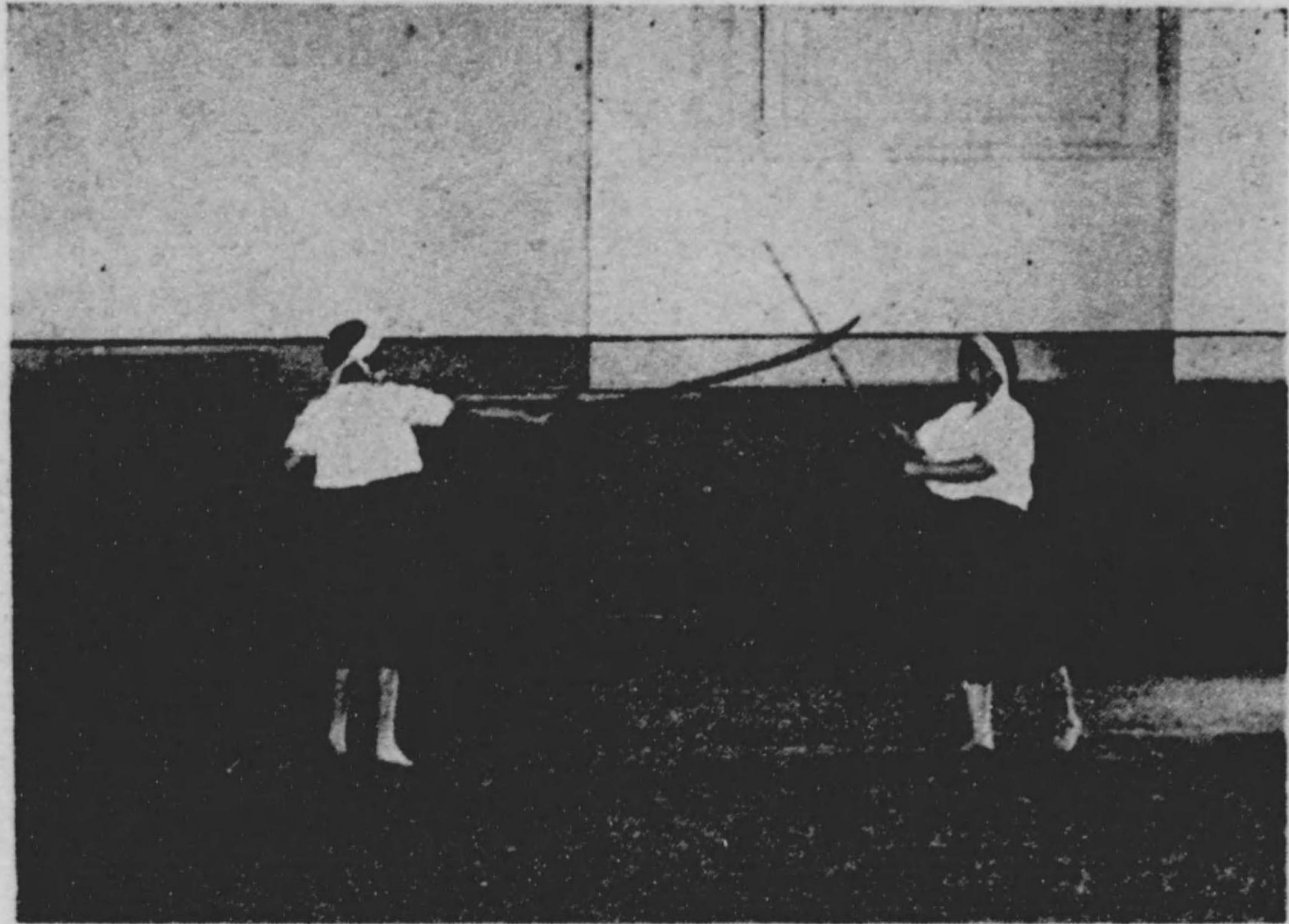
(五十三頁寫)

(ロ) 二脚一本

七四

(3) 薙刀を振返し左足を右足に寄せ右足を引きて受の右脚を切る。

(3) 受太刀 太刀を上段になして左足を右足に寄せ交代なすと同時に太刀を下げて脚を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞三十五)

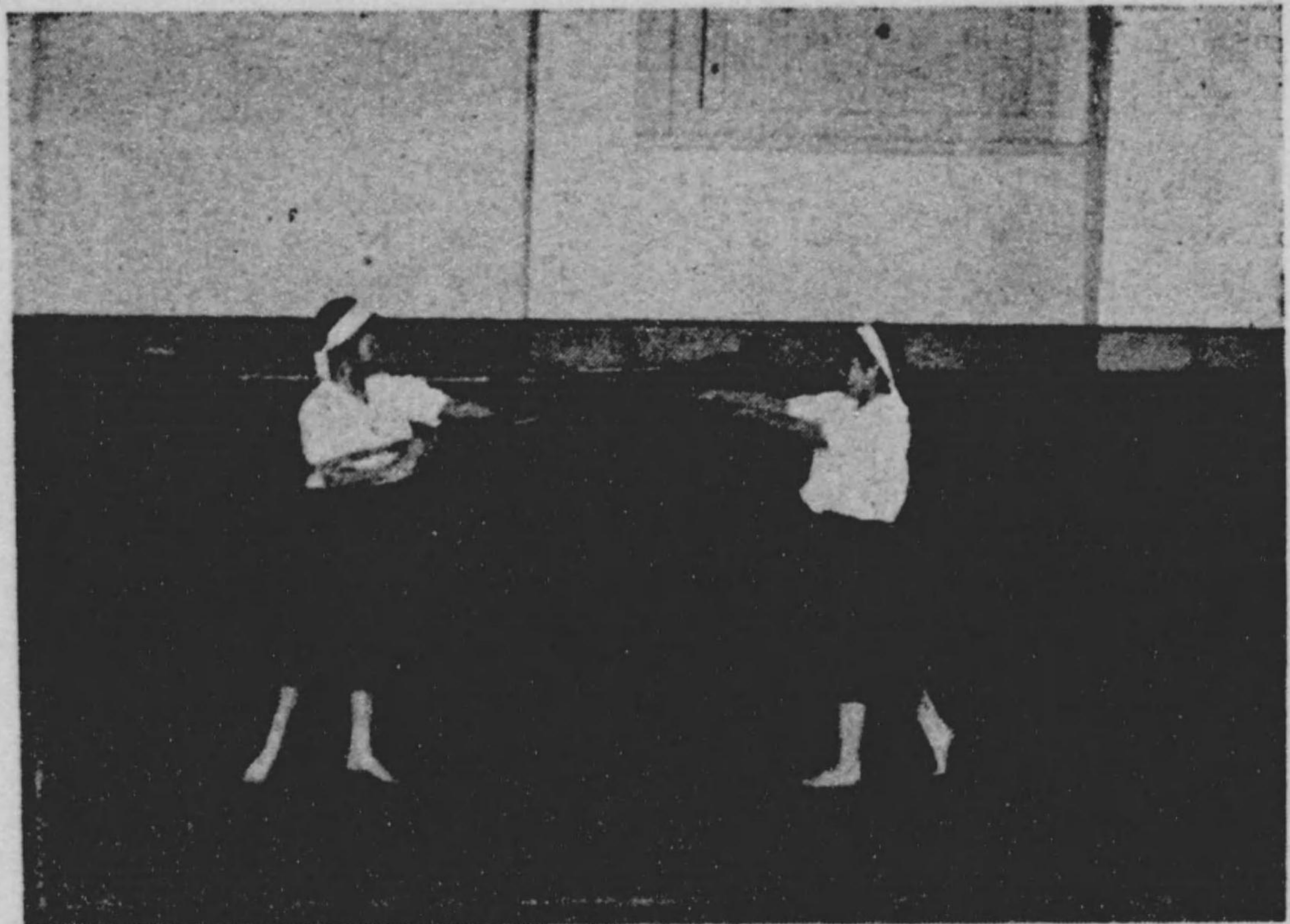


(六十三頁寫)

(ハ) 一面一本

(4) 薙刀を振返し右足を左足に寄せて、交代して面を切る右手を伸ばす。

(4) 受太刀 右足を左足に寄せて交代して太刀を下からかるく薙刀をはねる様にして面を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞三十六)



(七十三頁寫)

(5)

薙刀を石突の方へ繰出すと同時に劍先を下にサゲテ左手を上げると同時に右足を引いて太刀を落す。

注意 薙刀を繰込む時は左手を右

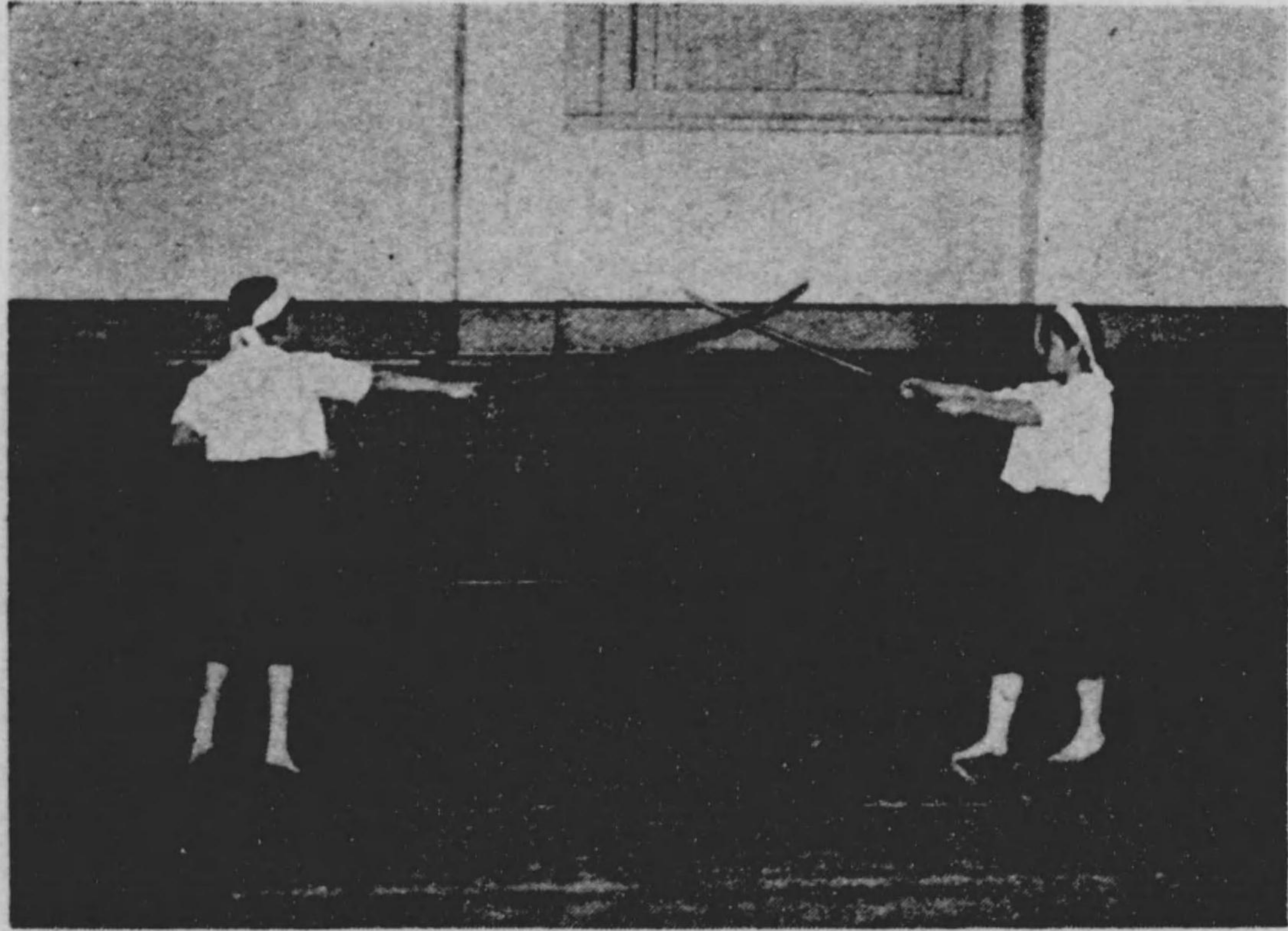
手の方へ寄せて右手を劍先の方へ寄せ兩手を左の方へ引き左手を伸ばす。

(5)

受太刀 面を受けたる太刀を足はそのまゝにて上段になすと同時に左足を大きく一步進みて横面を切る。互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞三十七)

(二) 石突の事



(八十三頁寫)

(6)

薙刀を上段になすと同時に右足を左足に寄せて交代して面を切る。

(6)

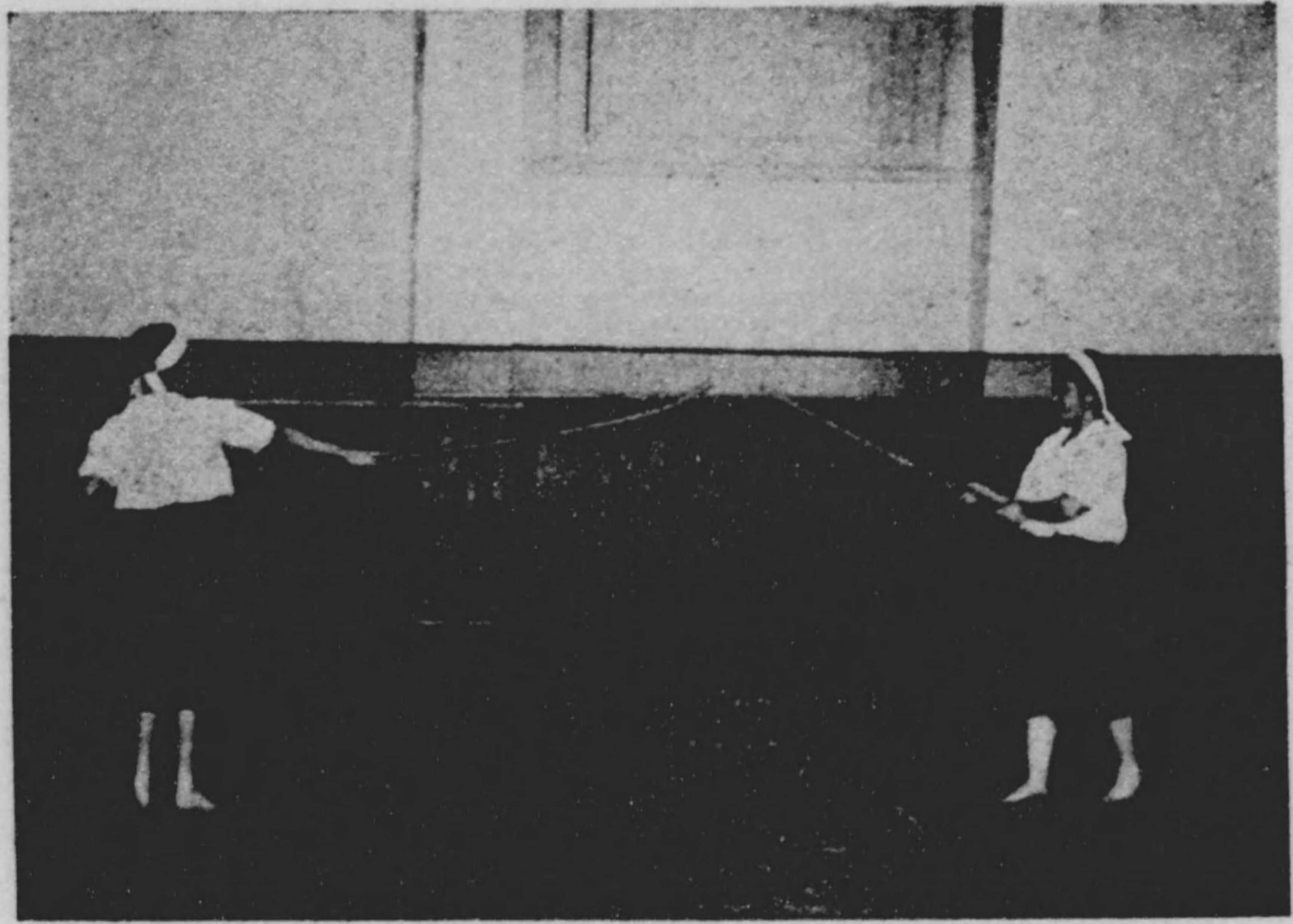
受太刀 落されし太刀を左の方より上段になすと同時に左足を引きて面を切る。互に相打ちとなる。聲は互に「トー」と云ふ。(寫眞三十八)

注意 左足を引く時は右足を左足の前まで共に引く。

注意 説明と寫眞とはちがふなり 寫眞はましがひなり、横面切る時は太刀の刃は少し横に向ける。

(ホ) 面一本

(8) 受太刀 太刀を下段になすと同時に右足を左足に寄せ一足となして元に復す。



(九十三頁寫)

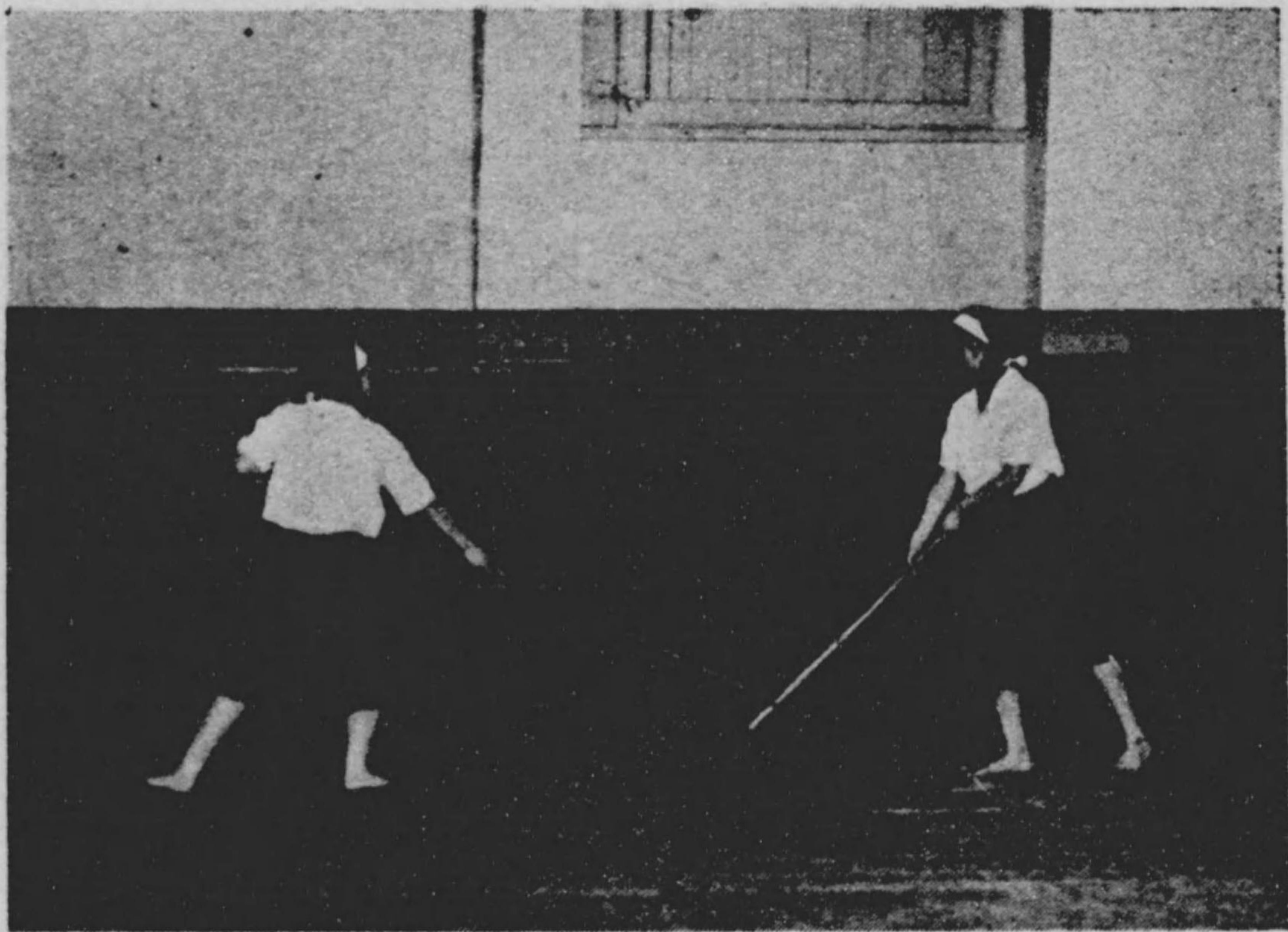
(へ) 残心の事

(7) 薙刀 は面を打ちたるまゝにて左足より大きく一步引きて残心を示す
(7) 受太刀 伸ばしたる兩手を中段の構へまで引くと同時に左足より一歩大きく引きてこれも残心を示す。

(寫眞三十九)

注意 互に左足より引く時は右足も共に左足の前まで引く。

(8) 薙刀 左手を右手に寄せて薙刀をか。ヒ。込みて足を一足となして元に復す。



(十四頁寫)

(八) 八本目捲落し

(1) 足一本

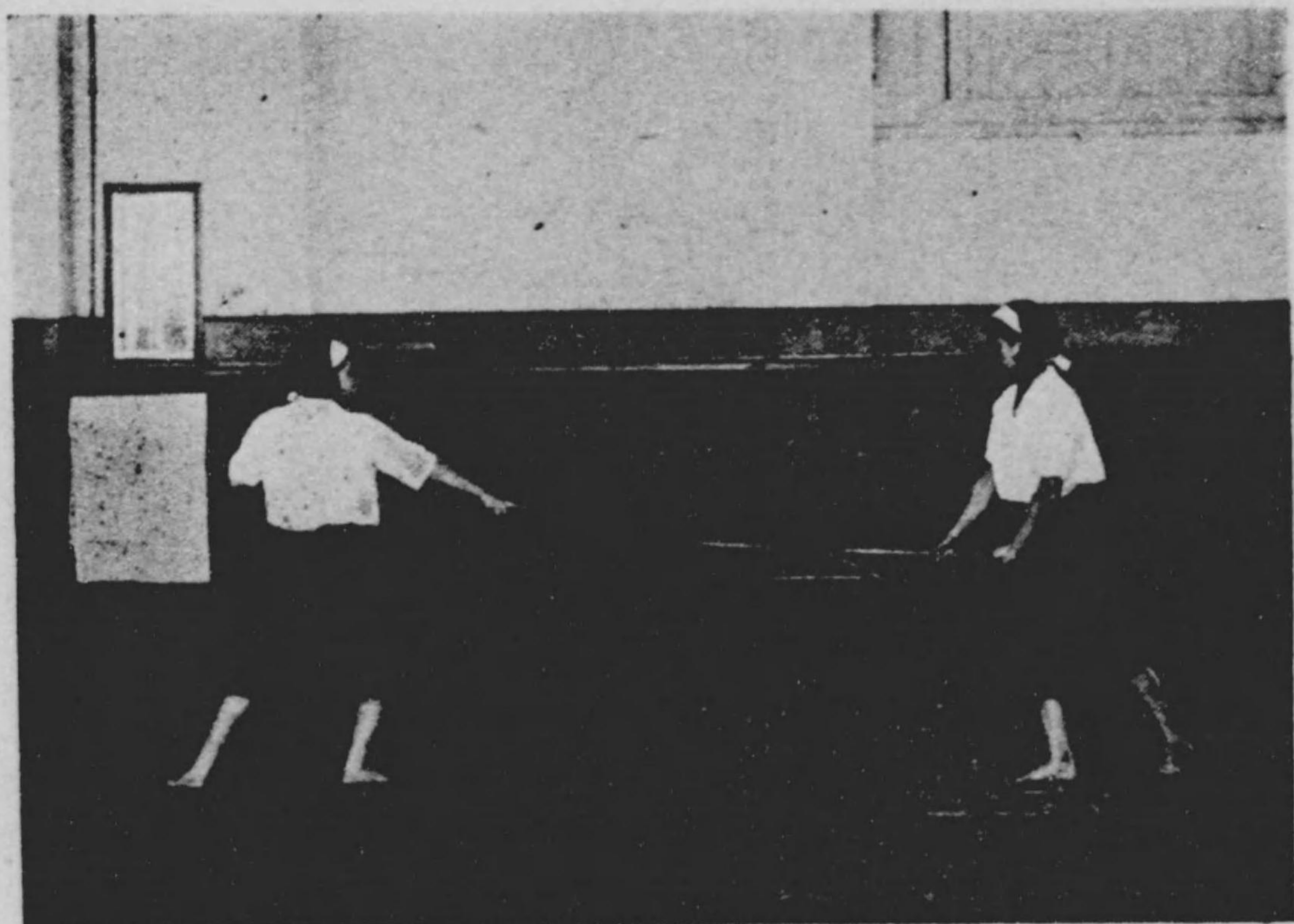
(1) 薙刀 振返して左脚を引き受太刀の左足を切る。

(1) 受太刀 は中段より右足を少し引き上段に構へて「ヤツ」と云ふ。

薙刀が左足にくる時は右足を左足に寄せて交代して足を受ける。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞四十)



(一十四頁寫)

(口) 太刀を捲落す

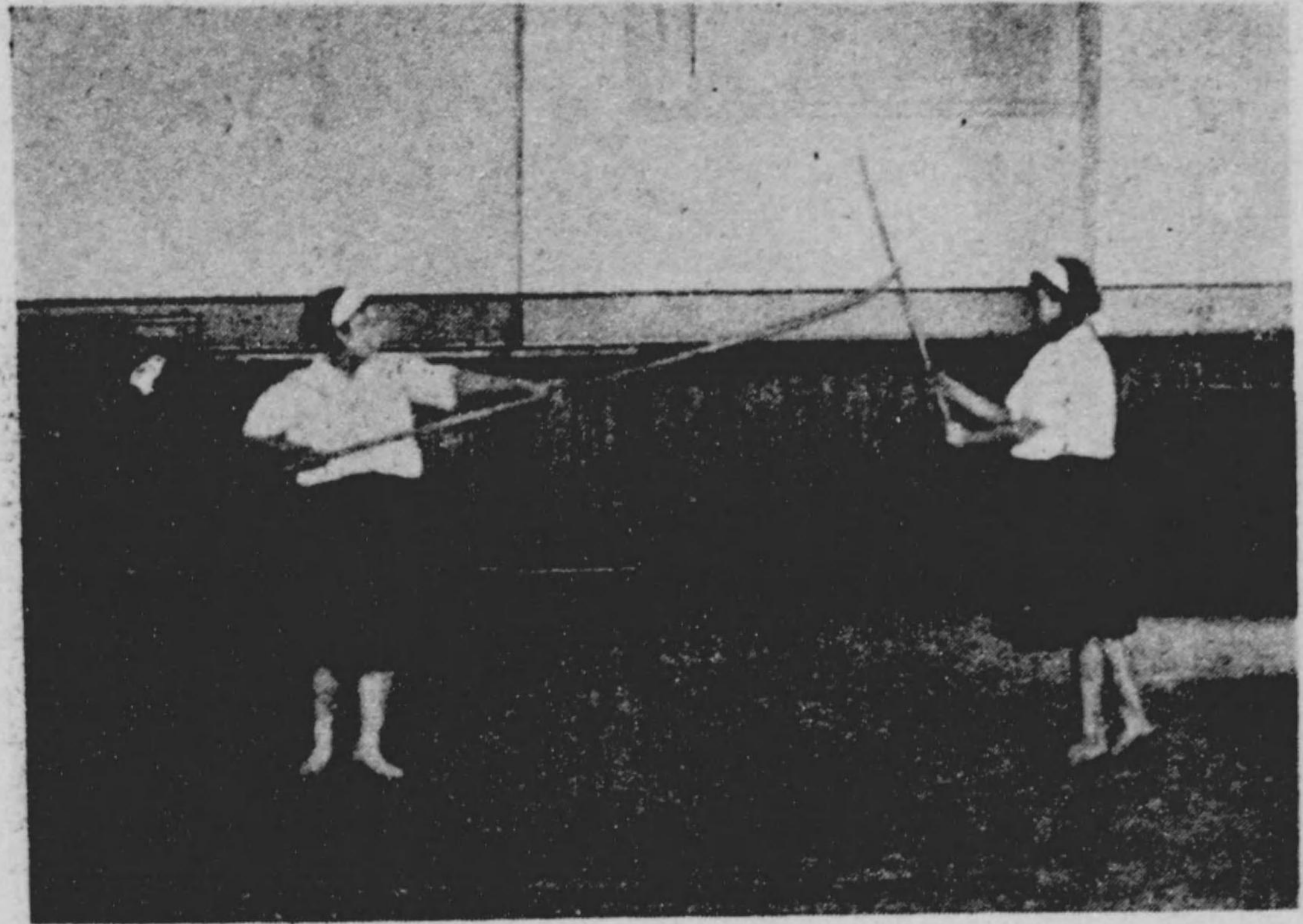
(2) 受太刀 足を受けたる太刀の劍先を薙刀より三寸程上にあげる。

(2) 薙刀 は劍先が上にあがれば太刀の下より受の右の方から二、三寸位上の處で刃を上にして太刀を眞下に捲落す。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞四十一)

注意 太刀を捲落す時右手を注意する。



(二十四真寫)

(ハ) 面一本

(3) 薙刀を振返し左足を右足に寄せ

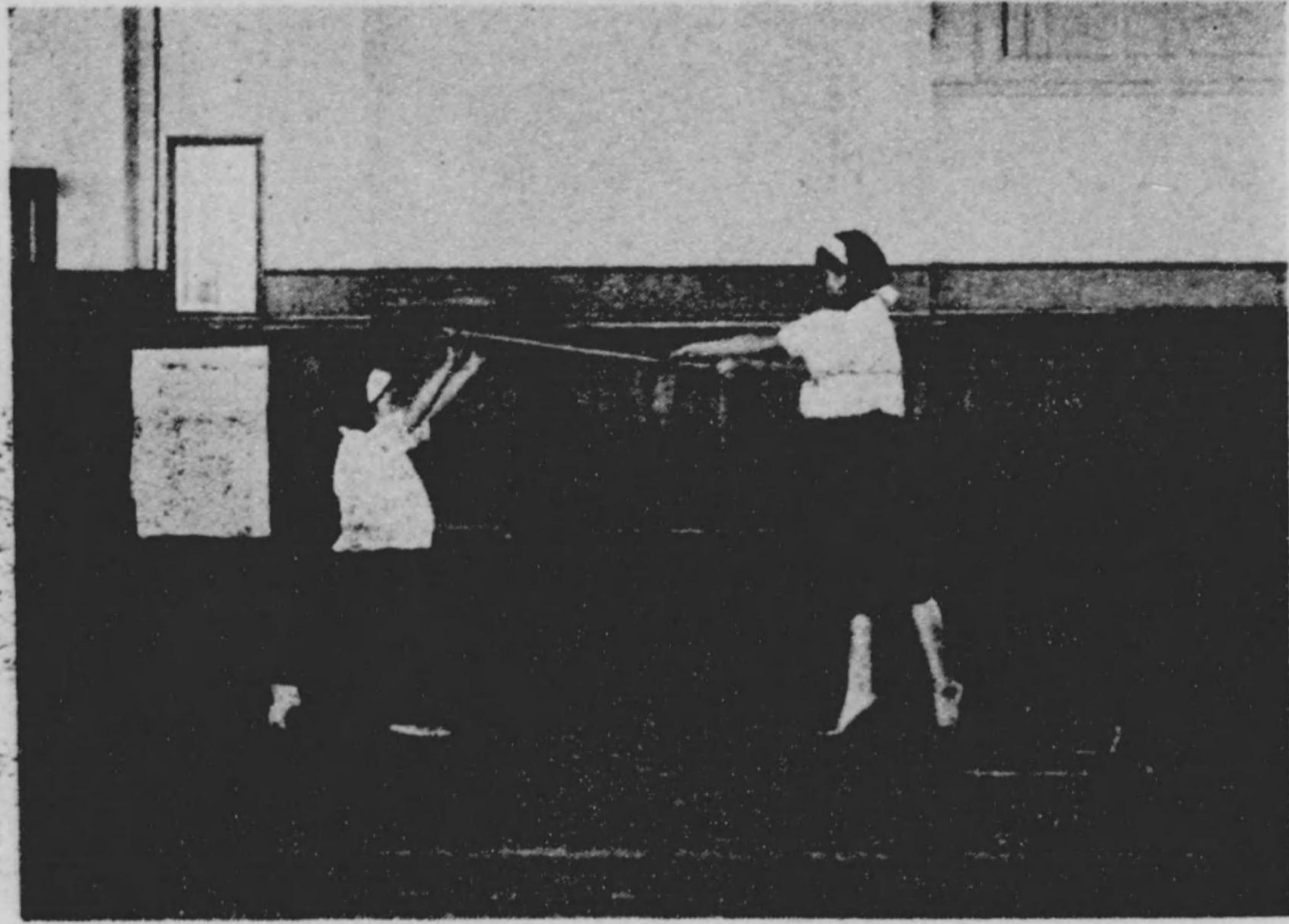
て、交代して受の正面を切る。

(3) 受太刀 左足を右足に寄せて交代

して面を受ける。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫真四十二)



(三十四真寫)

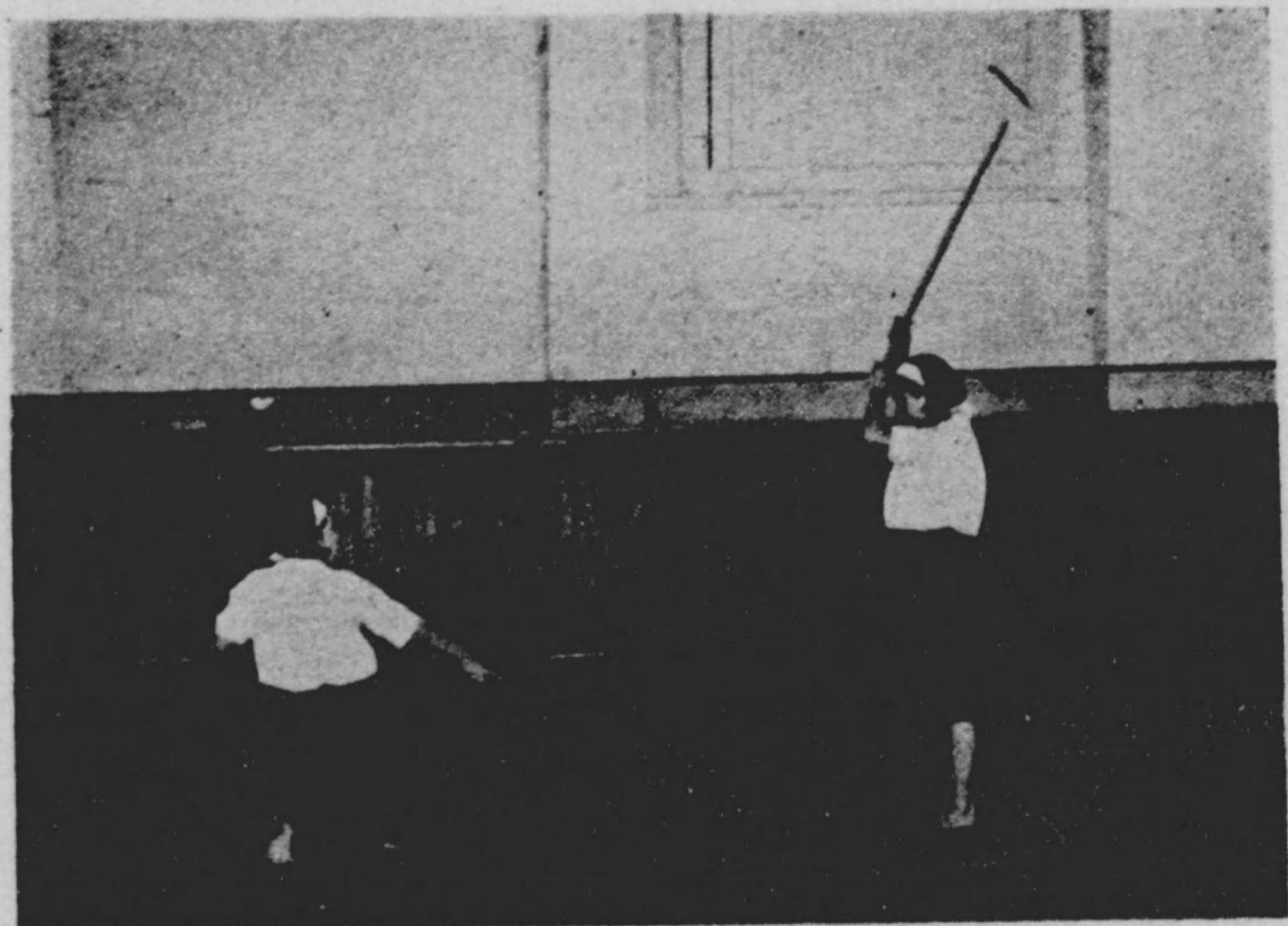
(ニ) 面受け

(4) 薙刀 右手を少し左手の方へ寄せ
左足を一步引くと同時にオリシキテ
薙刀を横にし双を受の方へ向けて面
を受ける。

(4) 受太刀 は上段になすと同時に右
足を一步大きく進み、左足も共に右
足の後まで寄せて面を切る。

互に「トー」と云ふ。

(寫真四十三)



(四十四頁寫)

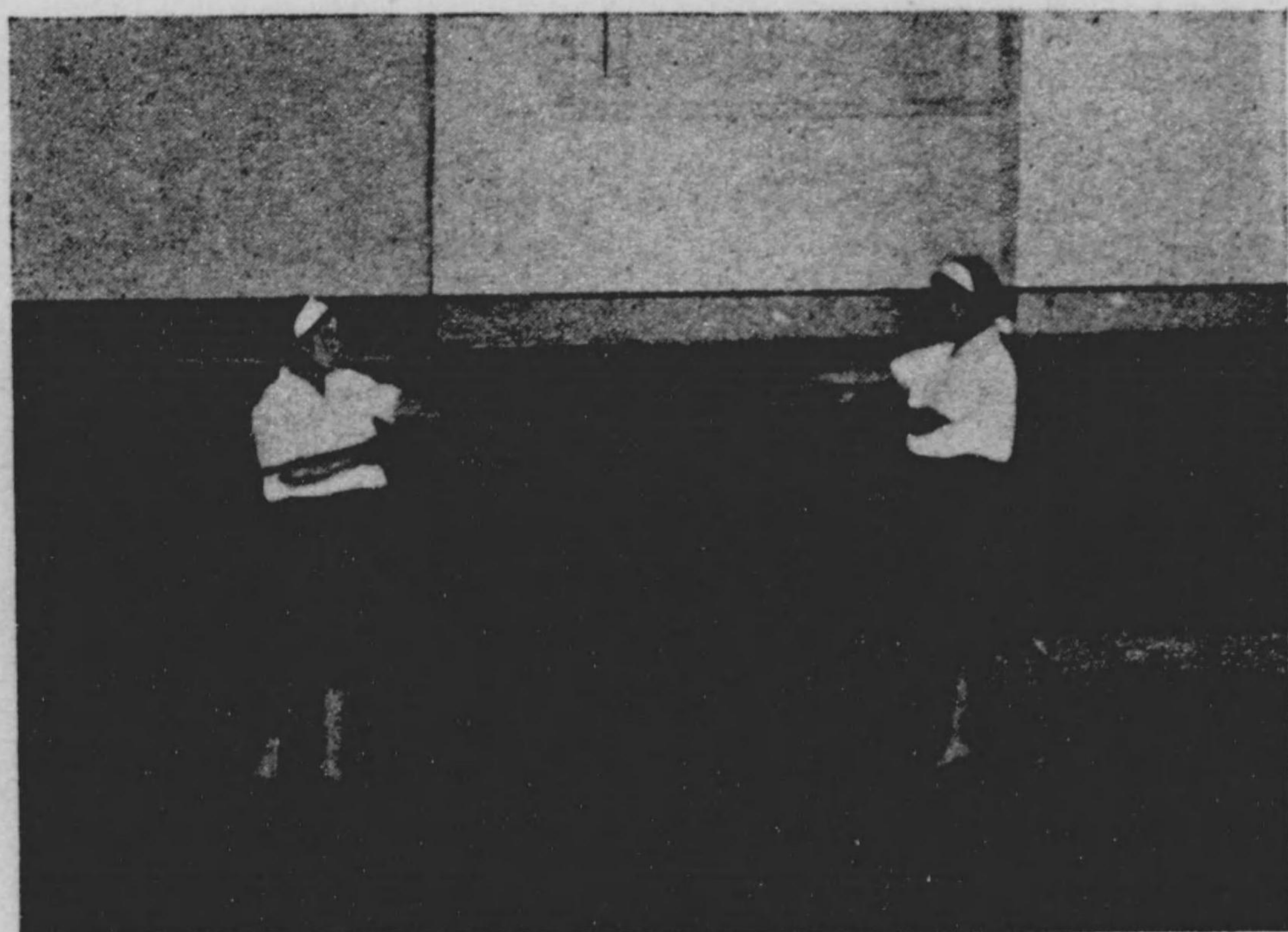
(ホ) 脚一本

(5) 薙刀 オリシキのまゝにて振返し
左膝にて左の方へ向きて受の右足を
切る。

(5) 受太刀 左足を一步引くと同時に
右足を上げ、太刀を上段になす。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞四十四)



(五十四頁寫)

(へ) 石突の事

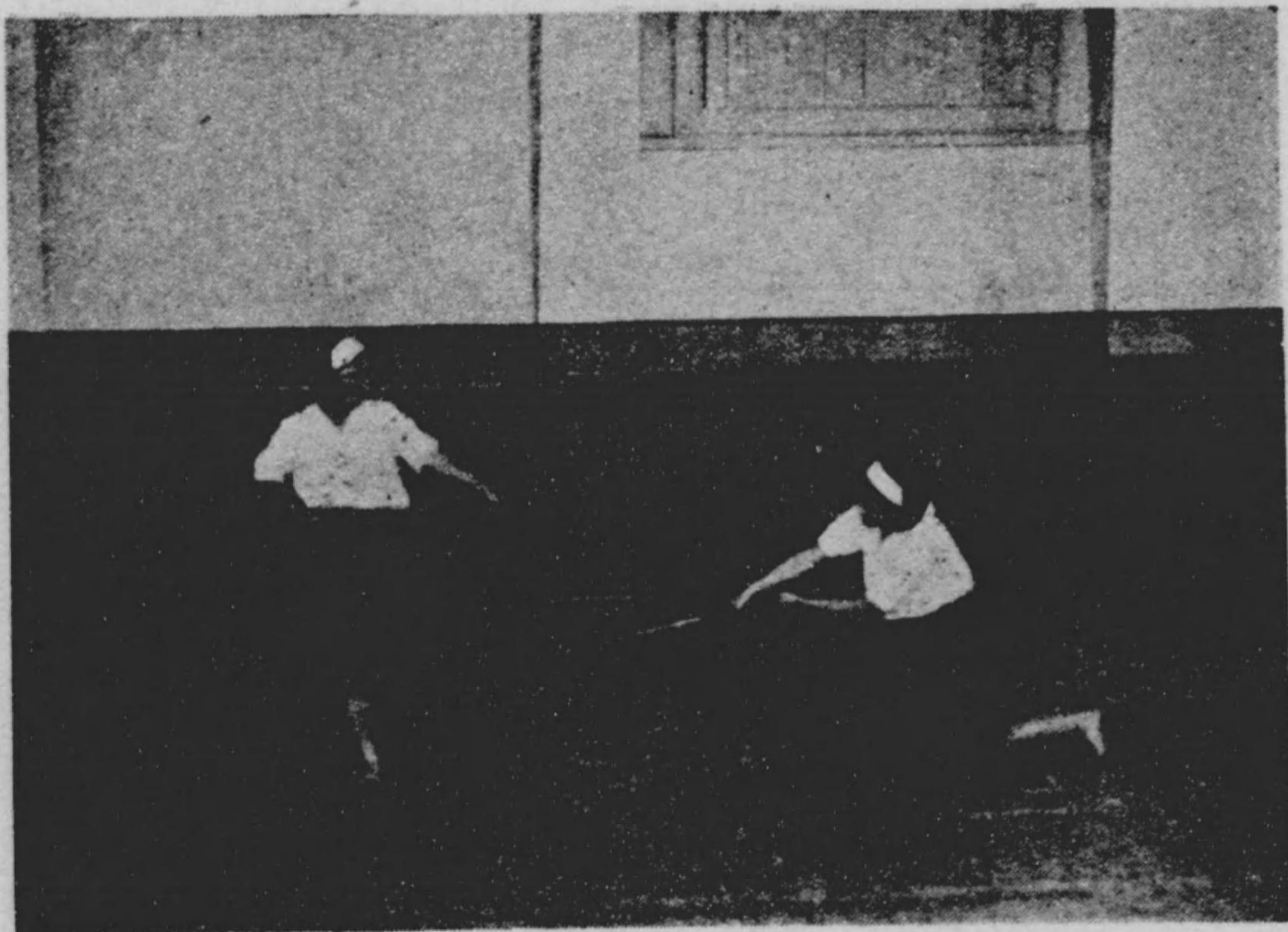
(6) 薙刀 を繰込みて立つと同時に足
を交代して石突にて太刀を落す。

注意 此の時は場合によりて右足
を引く事もあり、薙刀を繰
込む時は右手を双先の方へ
寄せ左手を右手の方へ寄せ
る。

(6) 受太刀 上げたる右足を大きく一
歩前に進め薙刀のオリシキてをる面
を切る。

互に「トー」と云ふ。

(寫眞四十五)



(六十四真寫)

(ト) 袈裟切り

(7) 薙刀を振返し體は其のままにて右足を一步引き左足を上げると同時に袈裟に切る。

注意 袈裟切りとは受の肩より斜横に切る事を云ふ。

(7) 受太刀 落されし太刀を左の方より左足を一步進めると同時にオリシキテ薙刀の左足を切る。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫真四十六)

注意 足を切る時體も少し前へ倒す。

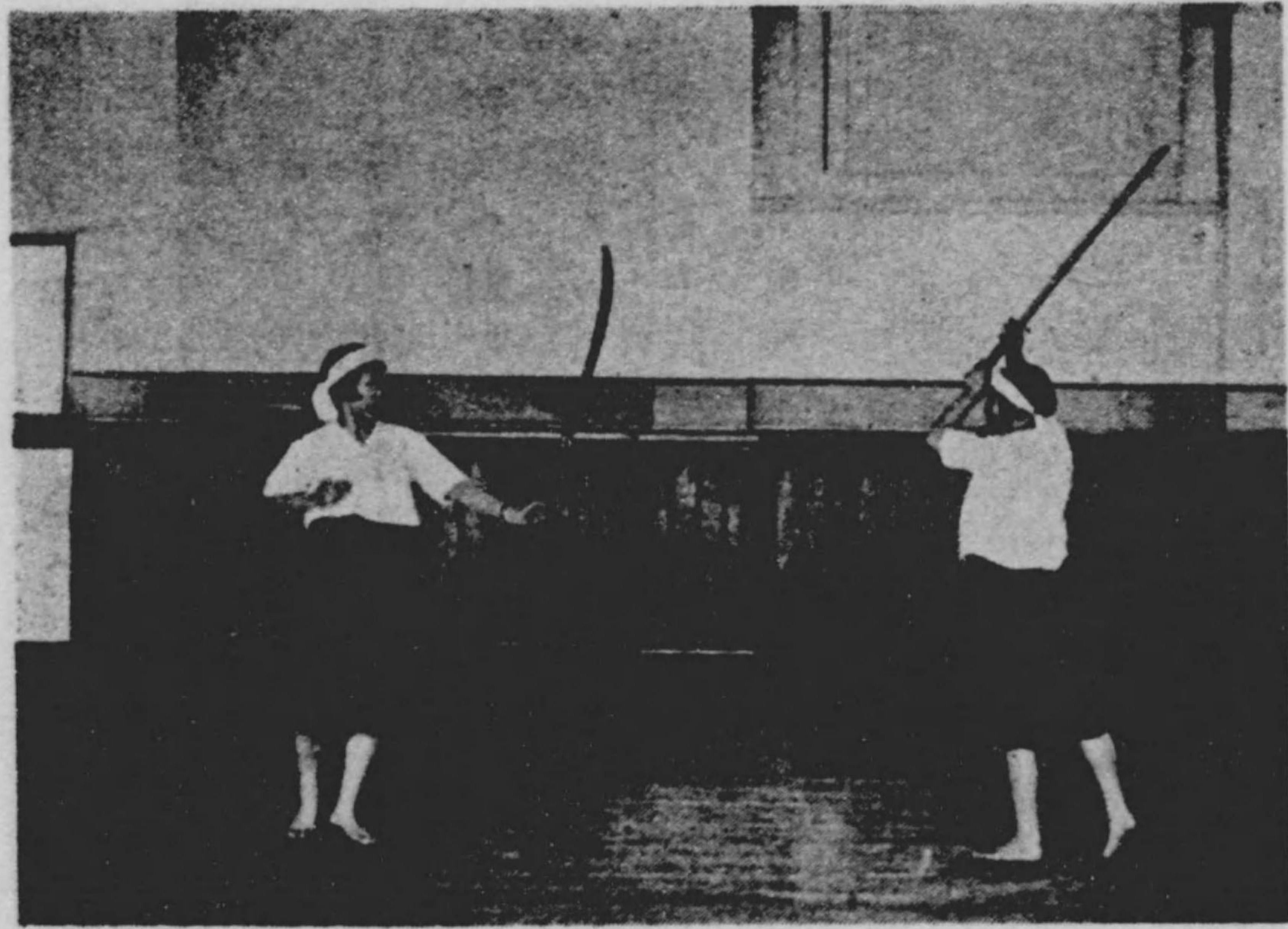
(チ) 残心の事

(8) 受太刀 は左の方より太刀を右の方へ倒し體を元に復して薙刀に残心を示さす。

(8) 薙刀 は太刀をのけると同時に左足を右足の後へおろして右足を又左足の後へ引き残心を示す。

(9) 受太刀 は太刀を右の肩まで上げると同時に立ち左足を一步引き、太刀を中段にし右足を左足に寄せて一足となし、太刀を中段より下段になして元に復す。

(9) 薙刀 は太刀が立つと同時に足は一足となし薙刀をカヒ込み元に復す。



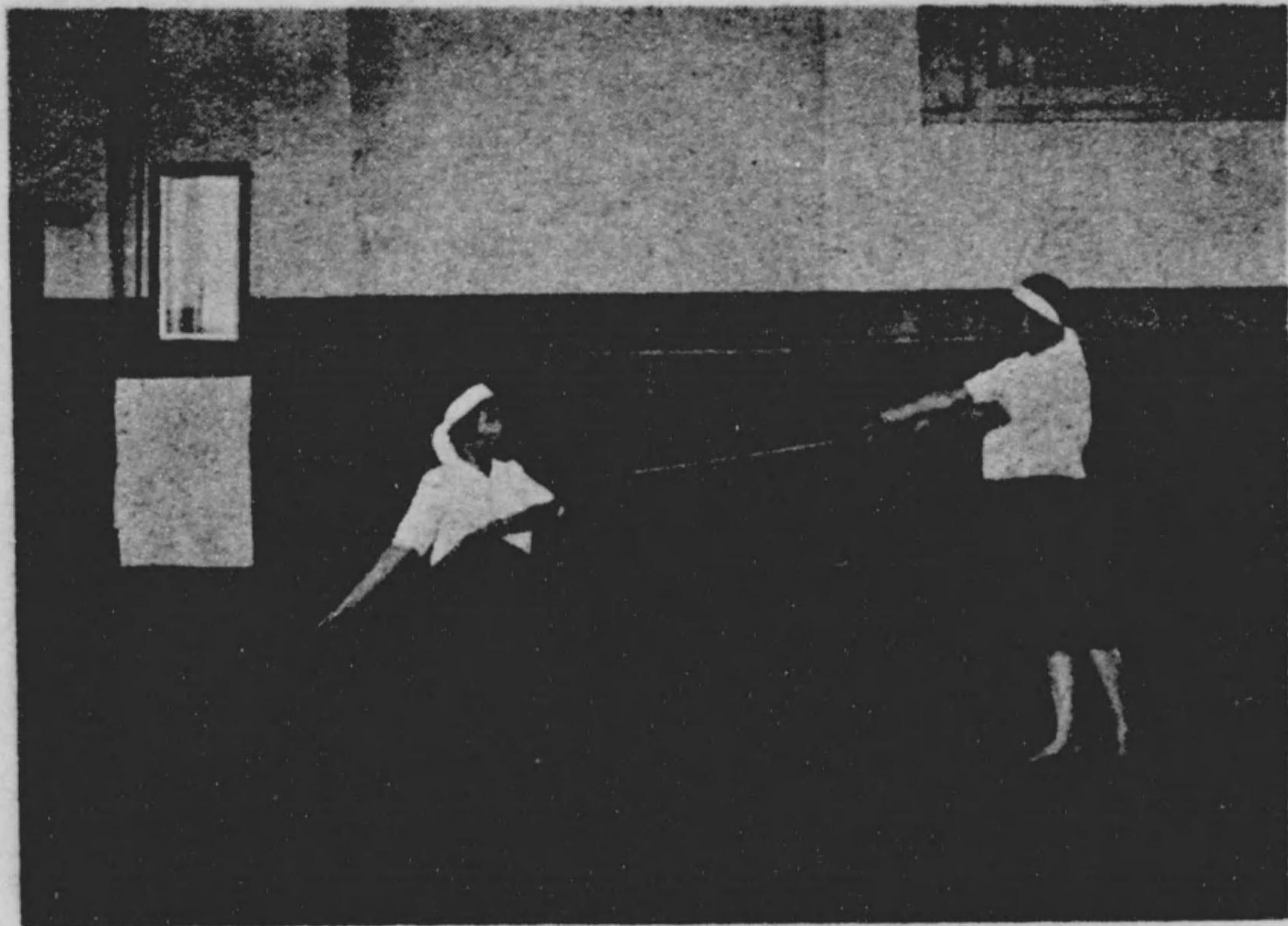
(七十四頁寫)

(九) 九本目立て薙刀

(1) 立て薙刀の構へ

(1) 受太刀 は左足を少し引き中段にし「ヤツ」と云ふと同時に上段にして右足引いて構へる。

(1) 薙刀 は受の「ヤツ」と聲が出たならば其の聲と同時に薙刀を前から起し右手の上を左手にて持換へ左足の前に刃を受の方へ向けて立てると共に右足を少し引き右手を胸に付けて左手をのばす。互に「エイツ」と



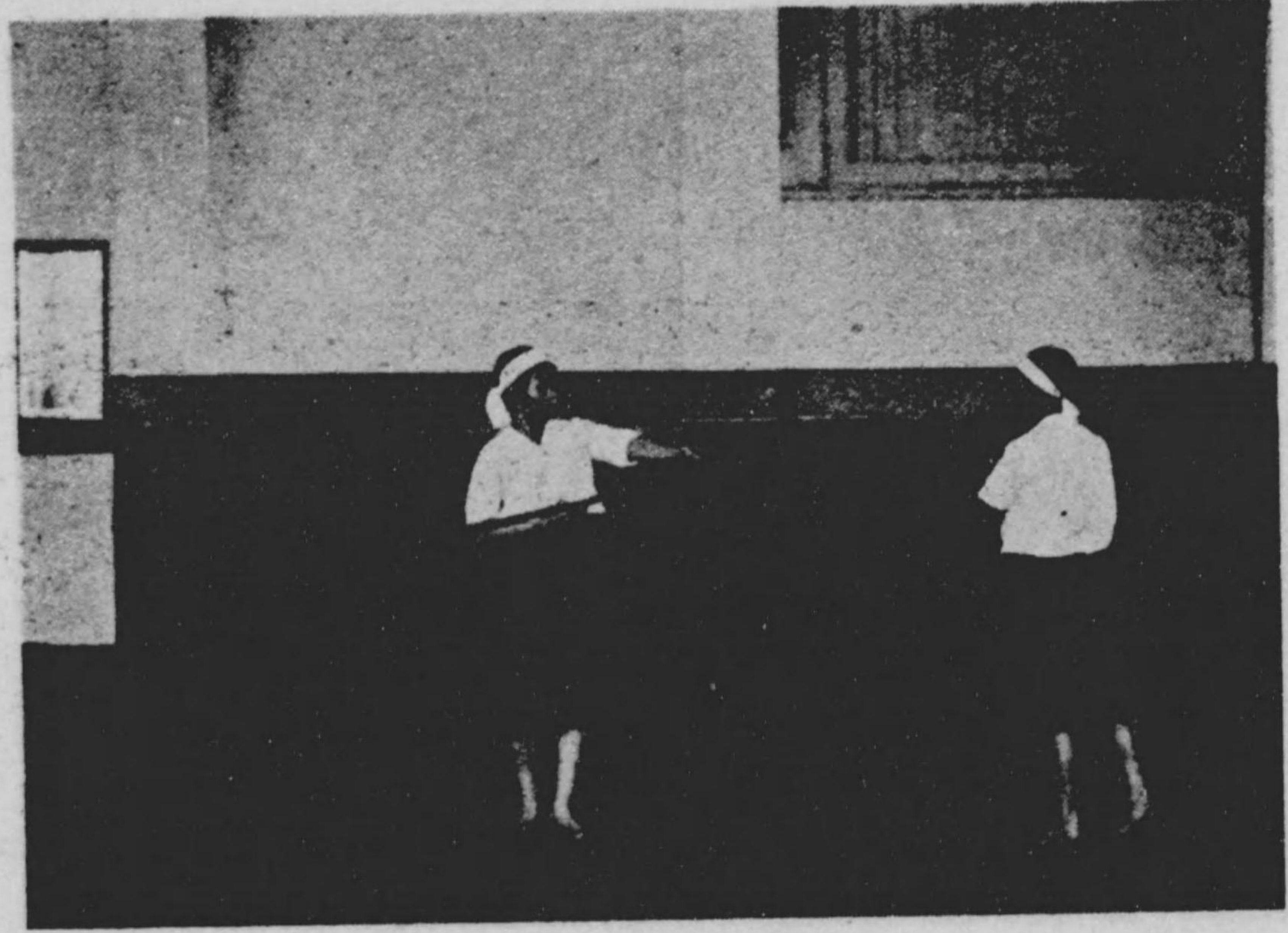
(八十四頁寫)

云ふ。(寫眞五十三)

(口) 體を引く事(折敷)

(2) 受太刀 は上段より右足を一步進めて薙刀の甲手を切る。

(2) 薙刀 は受が甲手にくると同時に右足を大きく引いて右膝を折敷き、左足を右足の前まで引いて右手と左手を交代して左手は少し石突の方を持ちて劍先を右の方へ倒し石突を受の胸に付ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞四十八)



(九十四頁寫)

(ハ) 石突の事

九〇

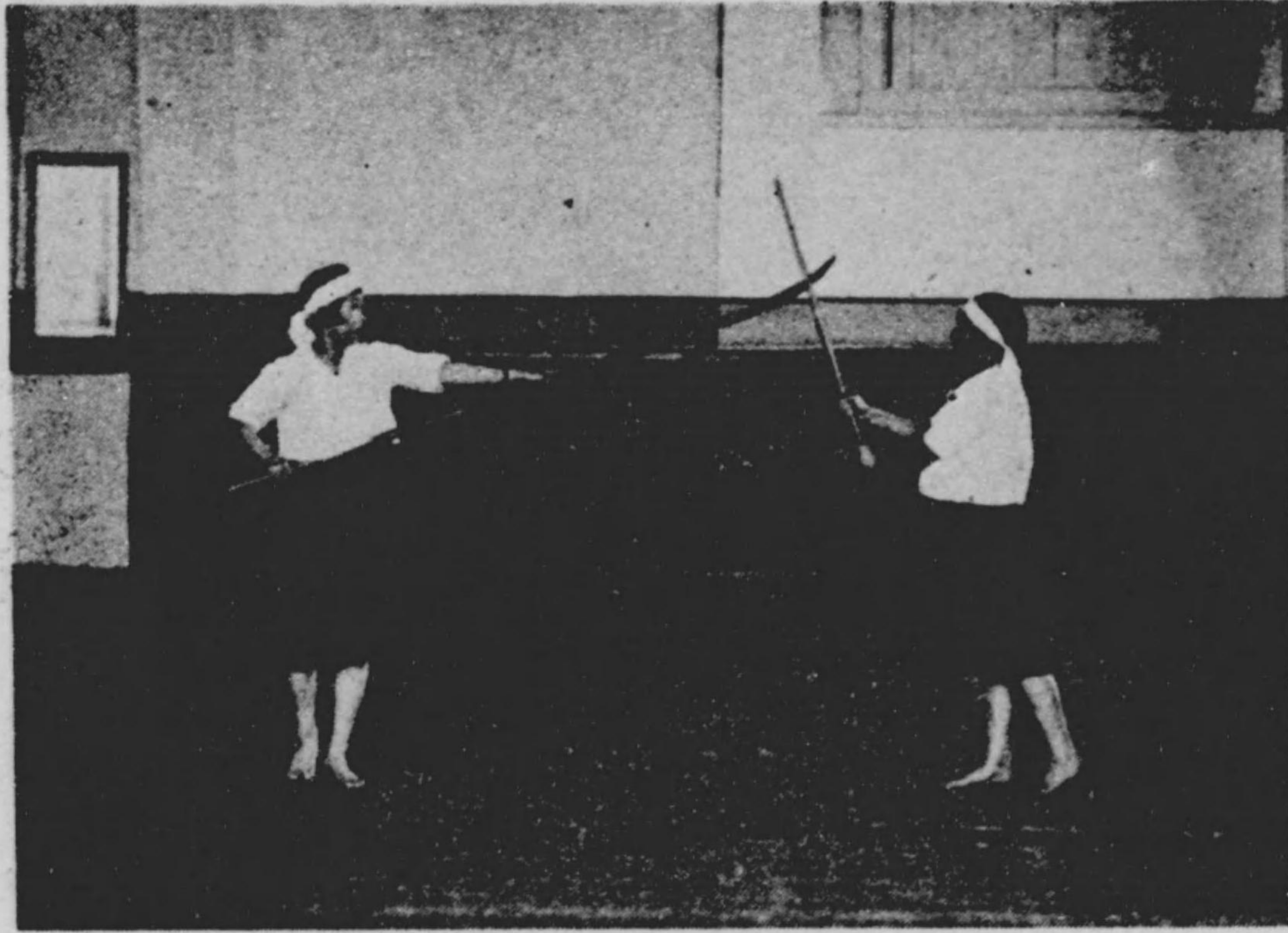
(3) 薙刀 折敷きたる右足を中程まで立て、左足を大きく一步進むと同時に、全部立ちて石突にて兩手を伸ばし咽喉部を突く。

注意 左足を進める時は右足も共に左足の後まで進める。

(3) 受太刀 は太刀を右の方へ倒して右足を一步大きく引き左足も共に右足の前まで引く。

互に「トー」と言ふ。

(寫眞四十九)



(十五頁寫)

(ニ) 面二本

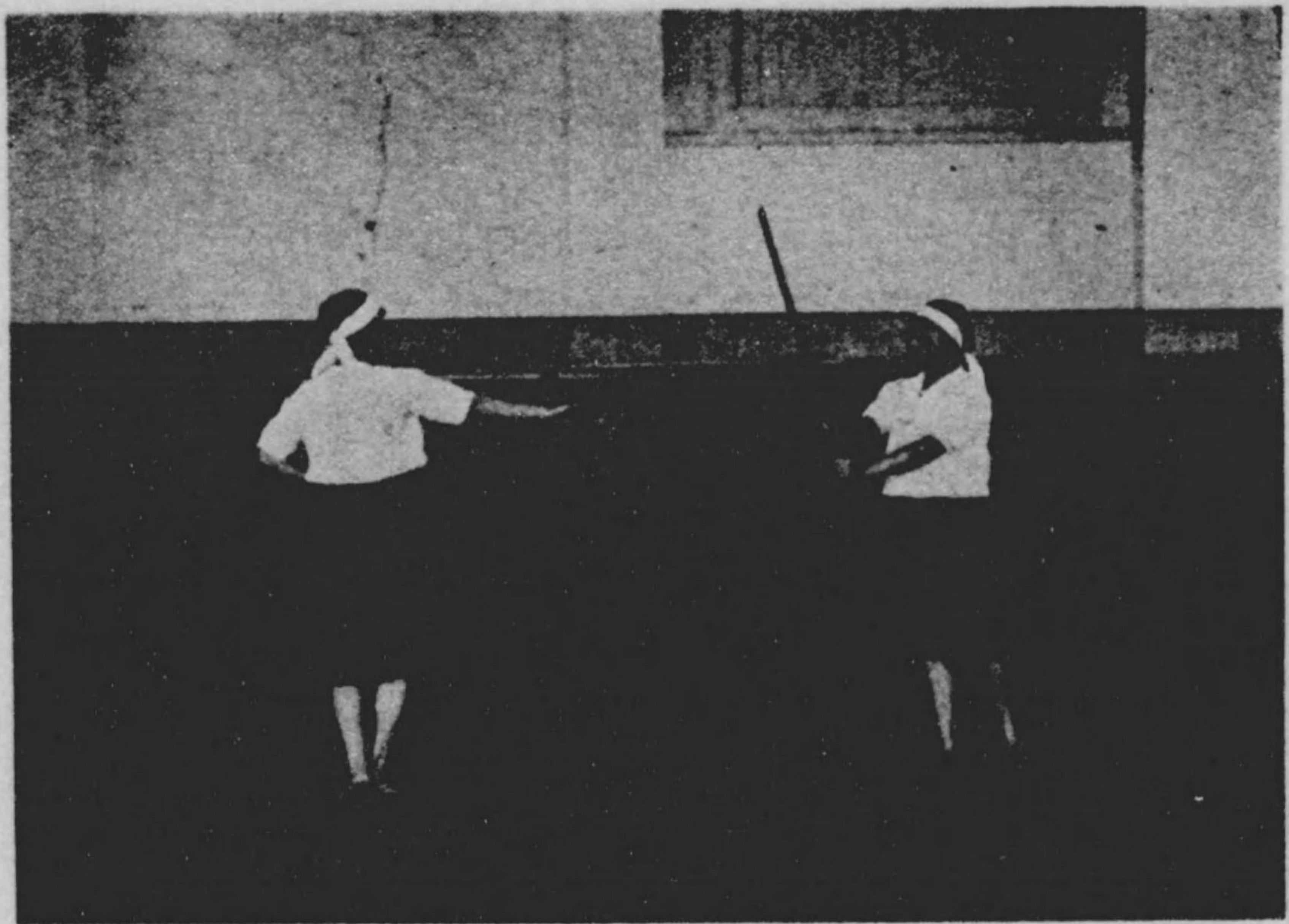
(4) 石突にて突きたる薙刀を兩手少し右の方へ引き上段に上げると同時に右足を左足に寄せ交代して受の正面を切る。

(4) 受太刀 右足を左足に寄せ交代して太刀を下より薙刀を少しはねる心持にて面を受ける。

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞なし)

(5) 薙刀 を振返し足を交代して又面を切る。



(一十五眞寫)

(5) 受太刀 は足を交代して又面を受ける。互に「トー」と云ふ。

(寫眞五十)

(木) 石突にて横面を打つ事

(6) 薙刀 を石突の方へ繰出して右足を一步進めて横面を打つ。

注意

薙刀を繰込む時は右手を左手の方へ寄せ左手を劍先の方へ寄せる。

(6) 受太刀 左足を少し引き體を横向きとなして太刀にてかるく石突をおさへる。互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞五十一)



(二十五眞寫)

(へ) 脚一本

(7) 薙刀 を繰出して左足を少し進める心持ちにて交代しオリシキて受の右足を切る。

注意

薙刀の劍先は下より出す、薙刀を繰出すには左手を右手の方へ寄せて右手を石突の方へ寄せる。

(7) 受太刀 石突を受けたる太刀は右足を引くと同時に下げて足を受ける互に「トー」と云ふ。

(寫眞五十二)

(ト) 残心の事

(8)

薙刀を兩足の中程に立て體は其のままにて残心を示す。

注意 薙刀を立てる時は右手を左手の下まで寄せる。

(8)

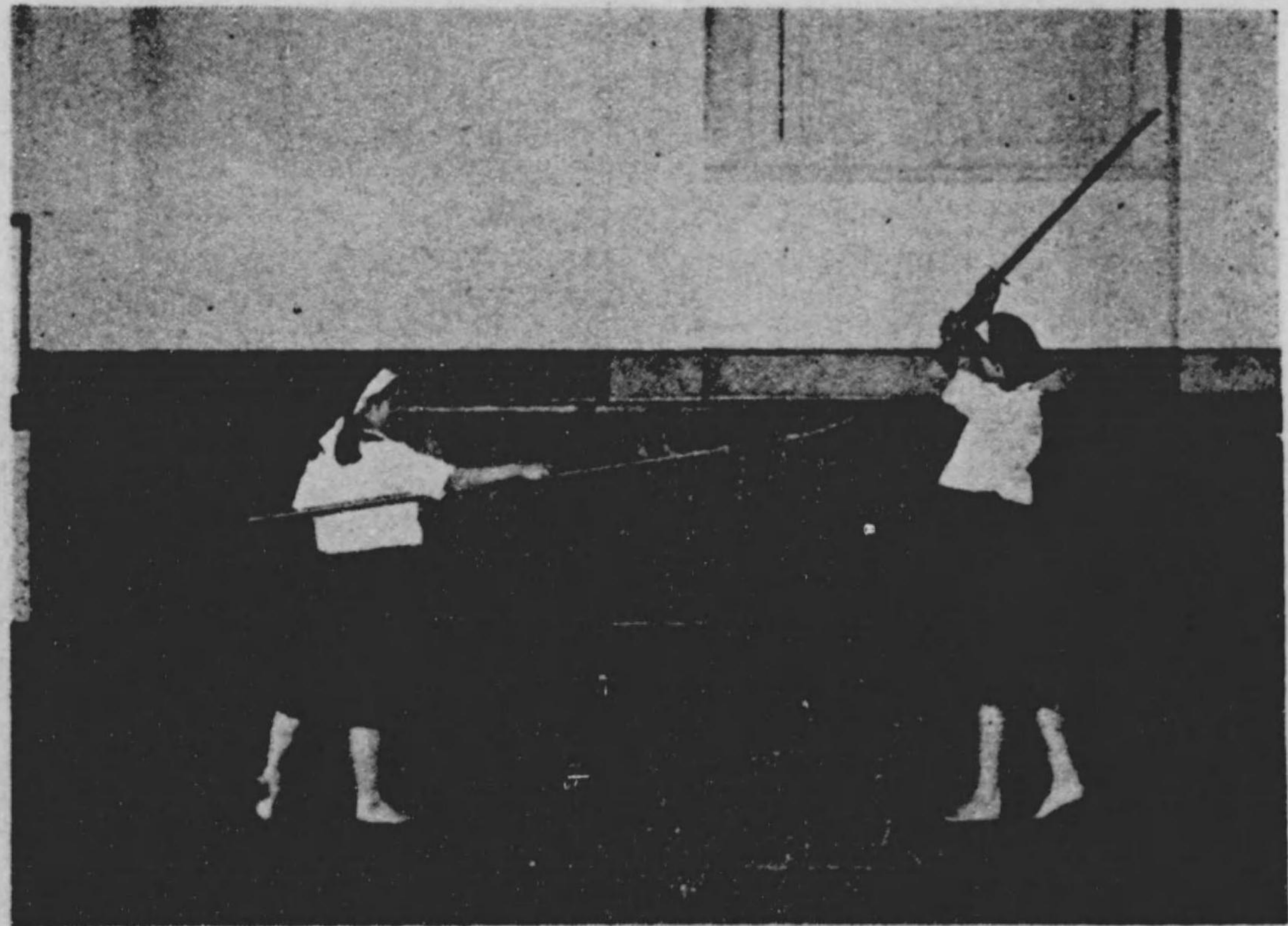
受太刀 左足を一步引き太刀を中段となして残心を示す。

(9)

薙刀をカヒ。込むと同時に足を一足になして元に復す。

(9)

受太刀 は中段より右足を引きて下段となし、足を一足にして元に復す。



(三十五頁寫)

(十) 十本目稻妻

(イ) 突き一本

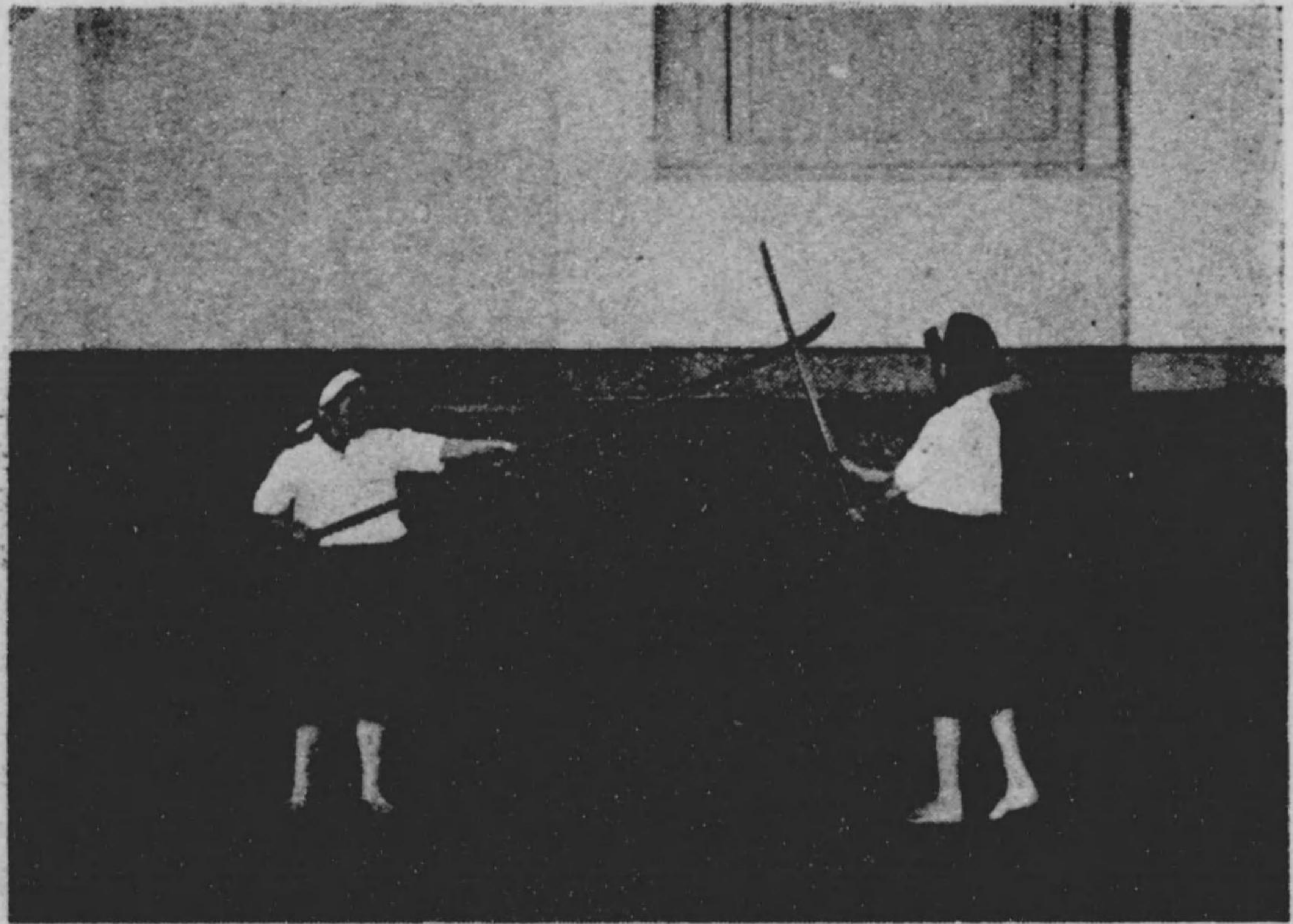
(1)

薙刀 刃を下にしてカヒ。込み受太刀が「ヤツ」と云ひたれば右足を大きく一步進め左足も共に右足の後まで進めて眼の所に突出す。

注意 突く時に薙刀をわきのしたよりはなさぬ様にきをつけるべし。

(1)

受太刀 中段にして「ヤツ」と云ふと同時に右足を大きく一步引きて上段に構へる。互に「エイツ」と云



(四十五真寫)

ふ。(寫眞五十三)

九六

(口) 面二本

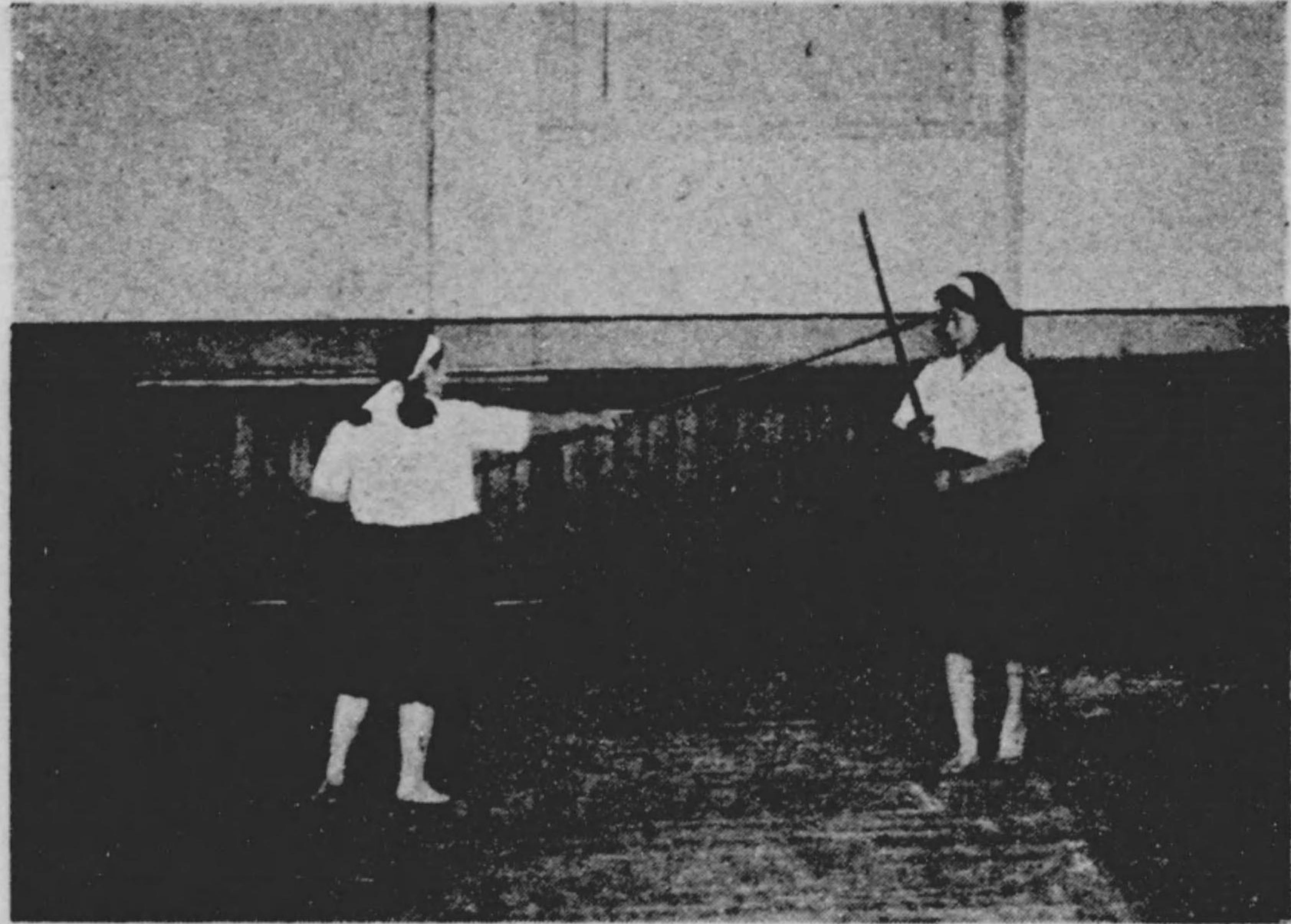
- (2) 薙刀 右足を左足に寄せて一足となし石突をワキからはなして上段にあげると同時に左手を石突の方を持ち左足を引きて面を一本切る。
- (2) 受太刀 足を交代して面を受ける
互に「トー」と云ふ。
- (3) 薙刀 を振返し足を交代して面を切る。
- (3) 受太刀 足を交代して面を受ける

互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞五十四)

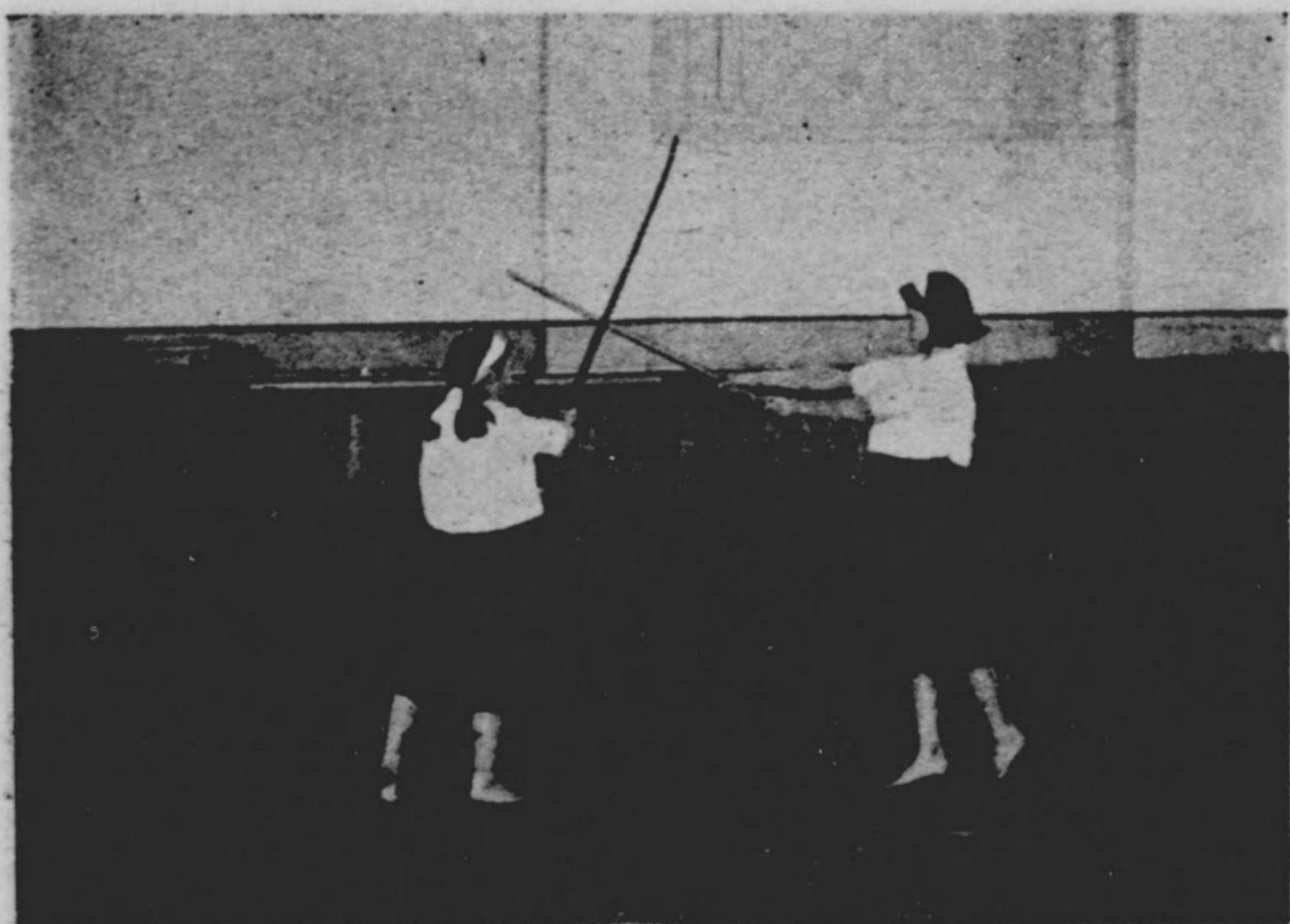
(ハ) 横面一本

- (4) 薙刀 を振返して右足を少し進める心持にて刃を横にして横面を切る
 - (4) 受太刀 左足を少し引き體を左の方へ向け太刀にて薙刀をオサヘル。
- 互に「トー」と云ふ。
- (寫眞五十五)



(五十五真寫)

九七



(六十五頁寫)

(二) 面を受ける

九八

(5) 薙刀を繰込み面を受ける。

注意 面を受ける時は右手を其まゝにて左手を右手の方へ寄せ右手を左の方へ引きて左手を前にのばす。

(5) 受太刀 上段に上げると同時に左

足を右足に寄せ一足となし右足を進めて面を切る。

互に「エイツ」と云ふ。(寫眞五十六)

注意 太刀を上段になす事と、左足を右足に寄せる事と、面を切る事、此の三つを早くなすべし。



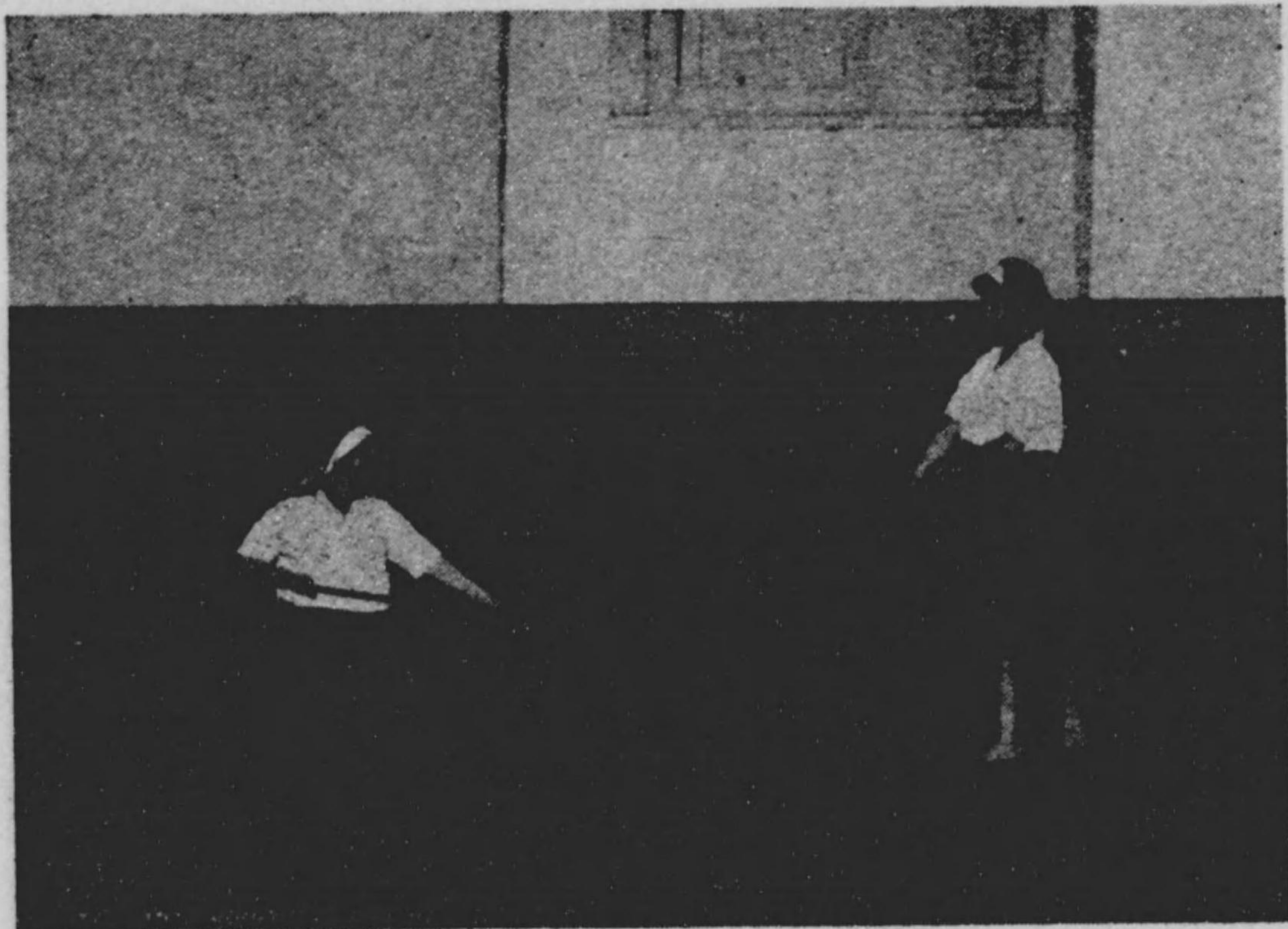
(七十五頁寫)

(木) 石突の事

(6) 薙刀の劍先を下げて右足を引いて石突にて、太刀をオトス。左手をのばす。

(6) 受太刀 切りたる太刀及び足も其の儘にて、石突にて太刀をオトサル。互に「トー」と云ふ。

(寫眞五十七)



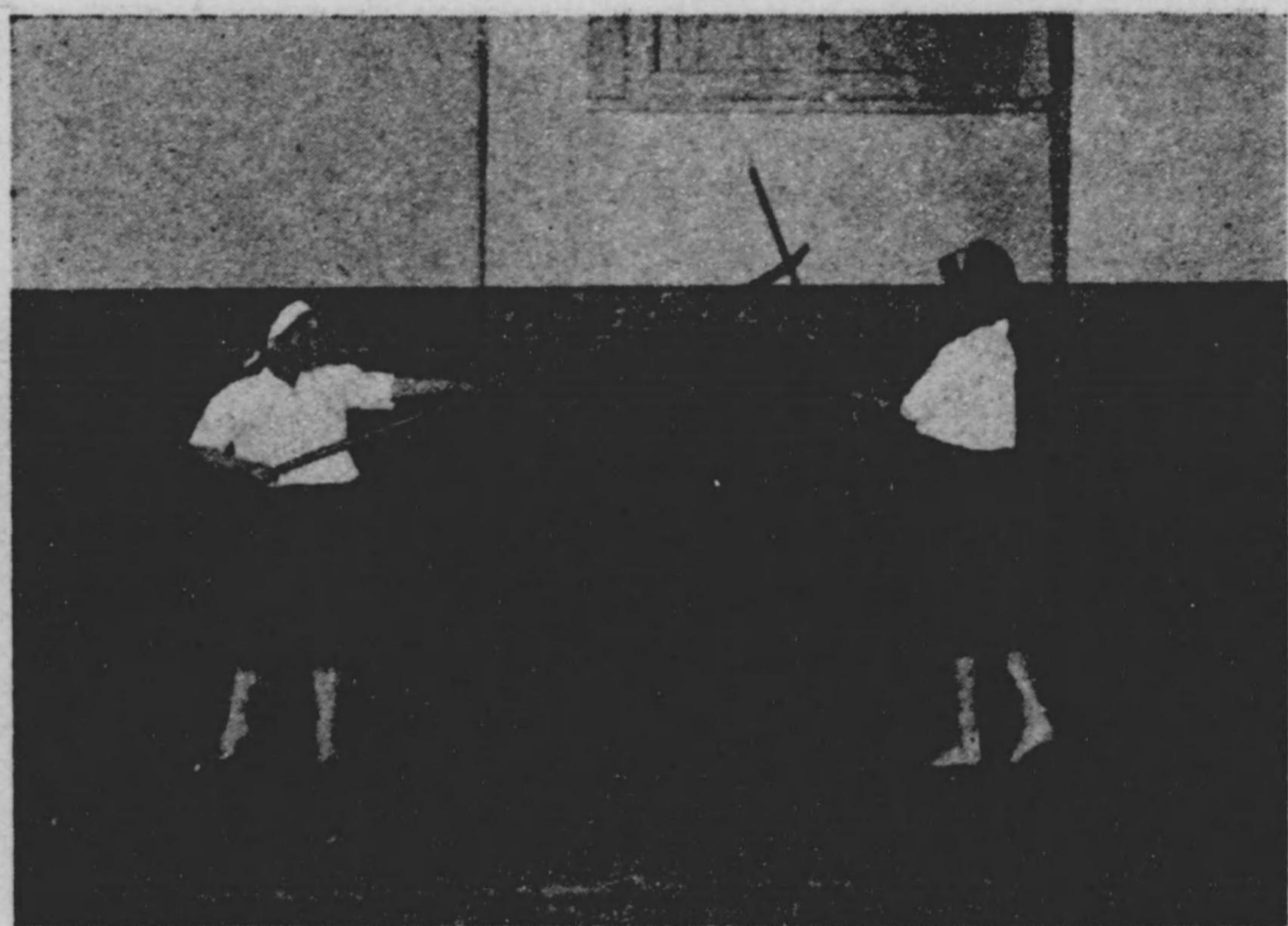
(八十五頁寫)

(7) 薙刀 足を交代して折敷いて受太刀の左足を切る。

注意 折敷く時は右足を立て左足を折敷く。

(7) 受太刀 は太刀をオトサレシ時にすぐ右足を左足に寄せ、左足を引くと同時に太刀を下げて足を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫真なし)

(8) 薙刀 足を中程まで立つと同時に薙刀を振返し足を交代して折敷いて受太刀の右足を切る。



(九十五頁寫)

注意 二本目の足を切る時は左足を立て右足を折敷く。

(8) 受太刀 足を交代して足を受ける互に「トー」と云ふ。(寫真五十八)

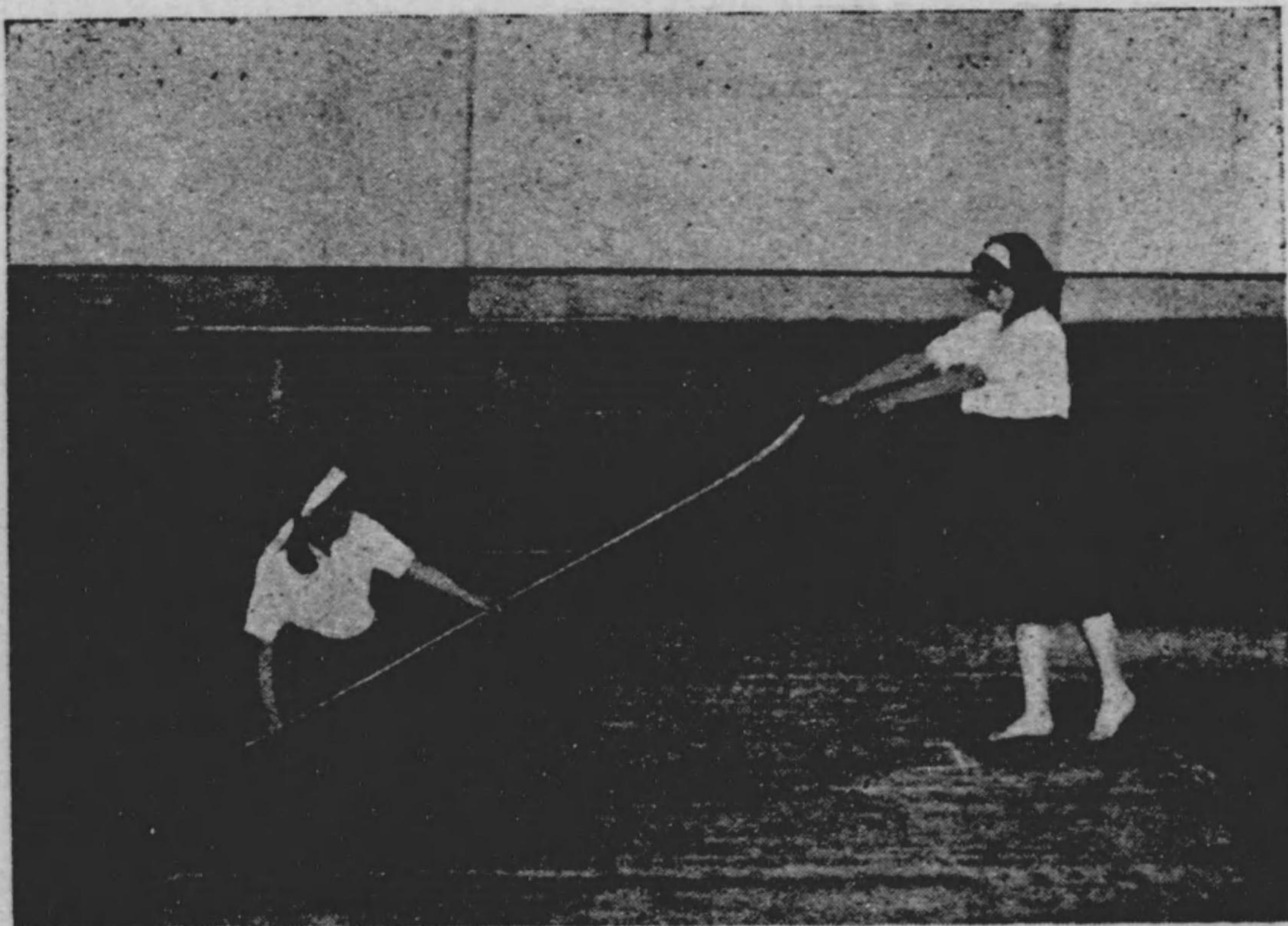
注意 寫眞の受太刀の足はまぢがひで左が前になる。

(ト) 面二本

(9) 薙刀 立つと同時に薙刀を振返し足を交代して正面を切る。

(9) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「エイツ」と云ふ。(寫真なし)

(10) 薙刀 を振返し足を交代して面を切る。



(十六真寫)

(10)

受太刀 足を交代して面を受ける
互に「トー」と云ふ。

(寫眞五十九)

(チ) 下る事

(11)

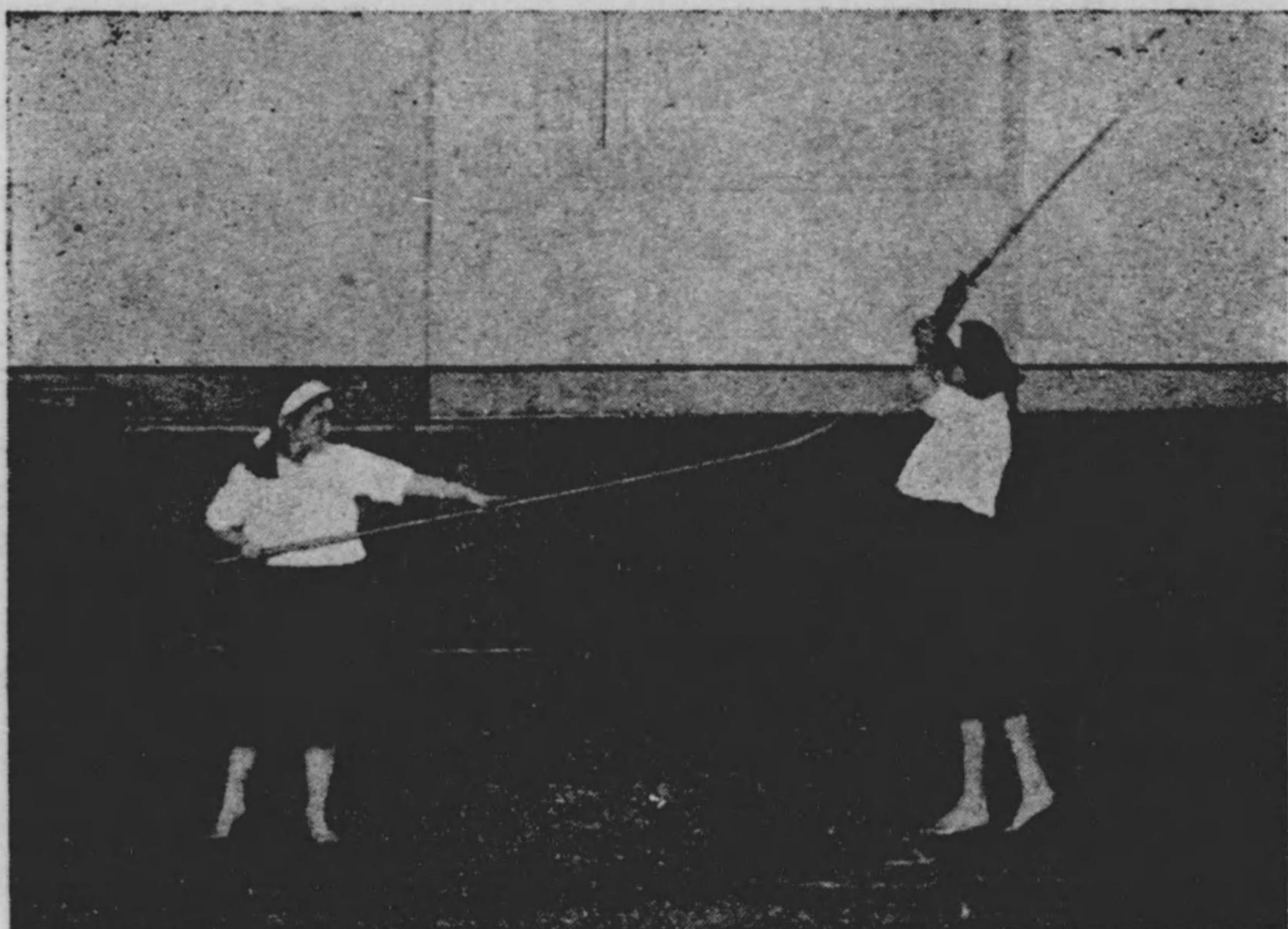
薙刀 面を切りたる薙刀の両手は
其の儘にて右足を少し引くと同時に
一足にて後へ飛びサガリ。折敷いて劍
先を受の水落に付ける。

注意 おりしく時は右足を立て左

足を床に付ける右手と左手
の間に右膝を入れる。

(11)

受太刀 は上段にあげると同時に
右足を一步大きく進めて薙刀の面を



(一十六真寫)

切る。互に「ヤツ」と云ふ。

(寫眞六十)

(リ) 突く事

(12)

受太刀 面を切りたる太刀を右足
大きく引いて上段に構へる。

注意

右足を引き太刀を上段に上
げる時に場合によりては左
右と引いてもよし、薙刀が
進みくるゆゑなり。

(12)

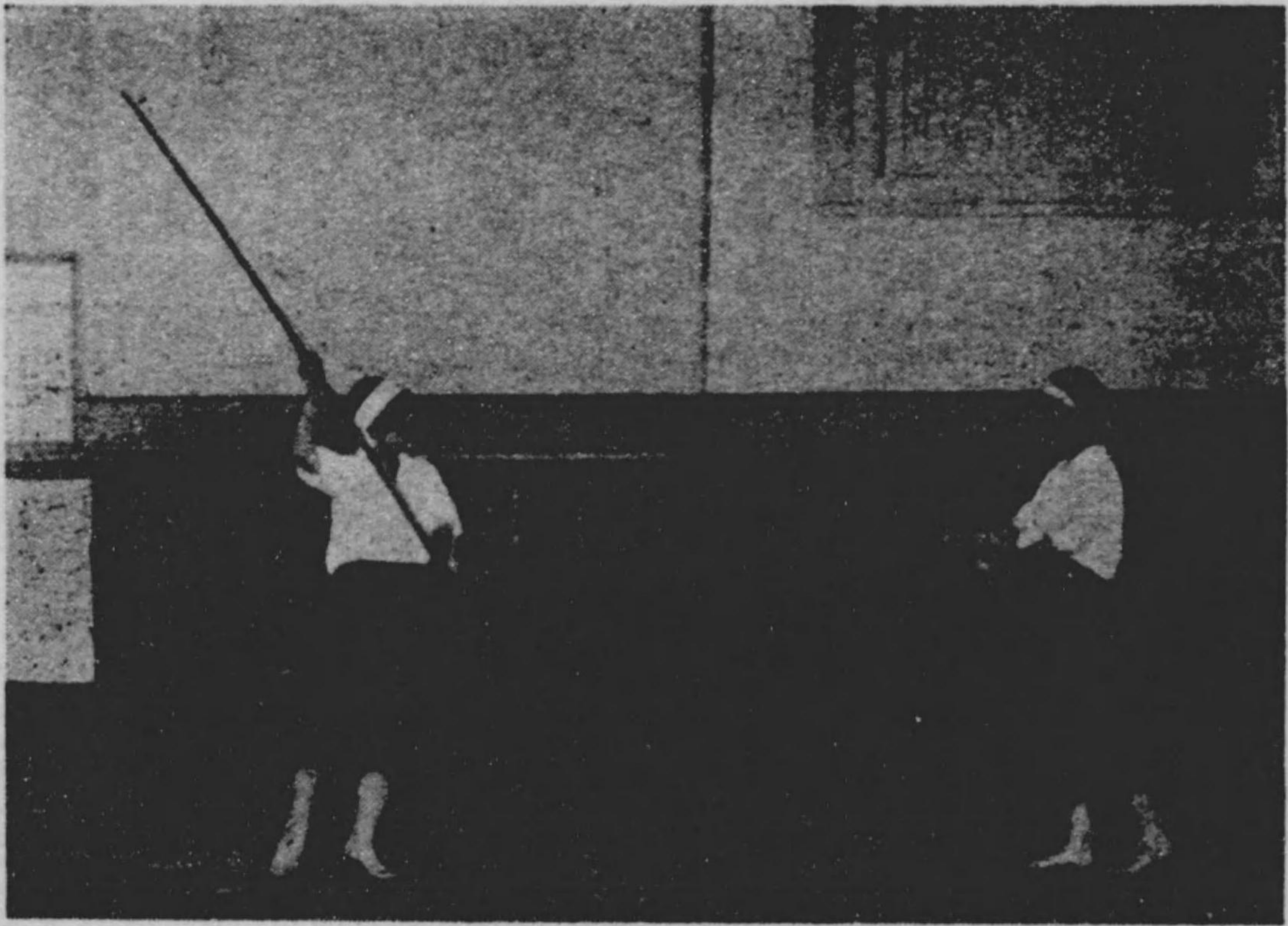
薙刀 受が右足を引くと同時に左
足を一步大きく進みて咽喉部を突く
互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞六十一)

(又) 残心の事

(13) 薙刀 は右足より大きく引きて受の眼の處まで劍先を上げて残心を示し
右手と左手とを持換へて搔込み元に復す。

(13) 受太刀 は上段より中段になすと同時に左足を引きて残心を示し右足を
左足に寄せて一足となし太刀を下段になして元に復す。



(二十六頁寫)

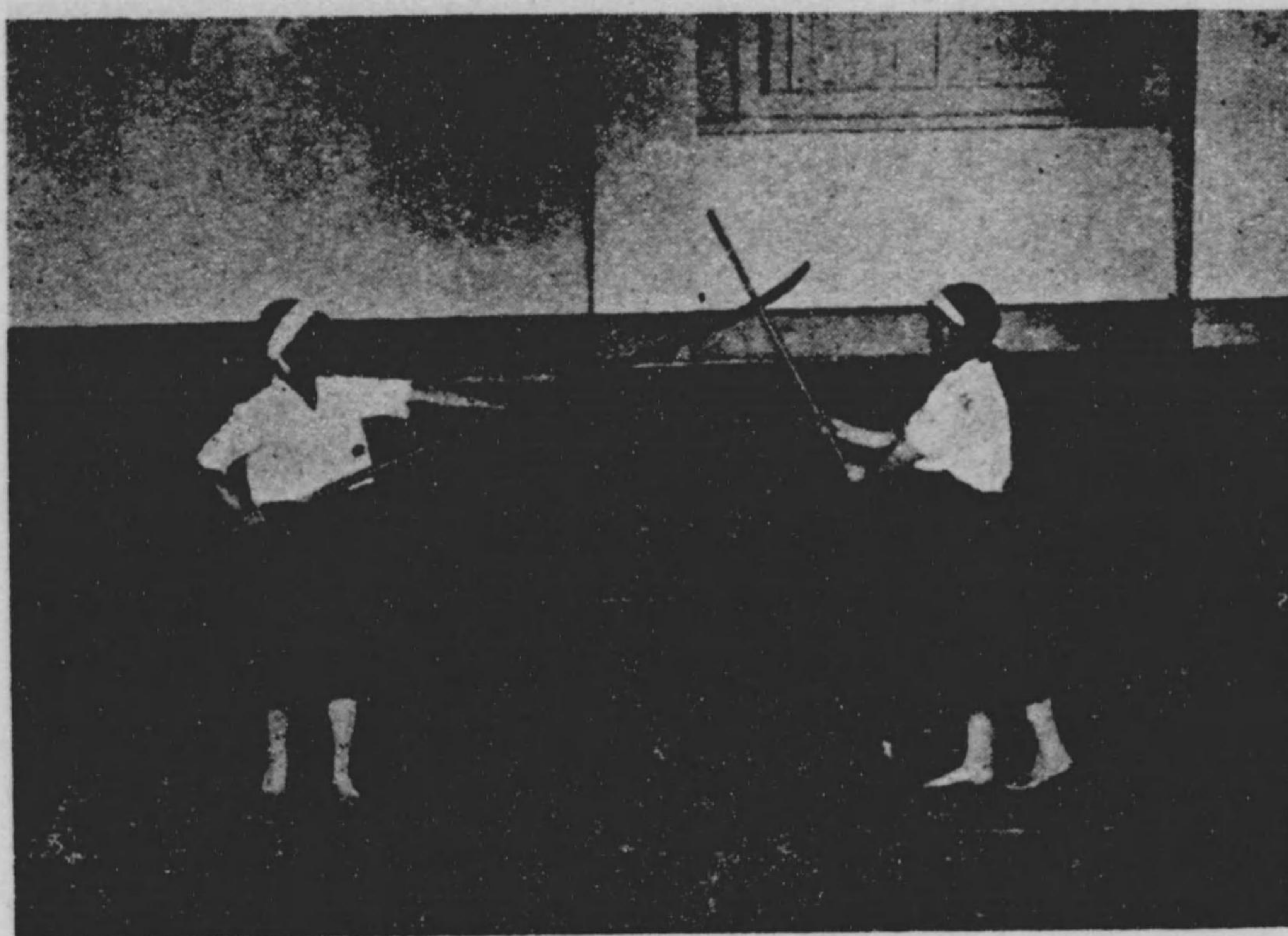
(十一) 一本目發艘

(イ) 發艘の構へ

注意 薙刀 太刀共にオリシキの
體をなしたる處より互に左
足より五歩さがる。

(1) 薙刀 は五步サガリたる處にて右
足を少し引きて發艘に構へ左右左と
三步進む。

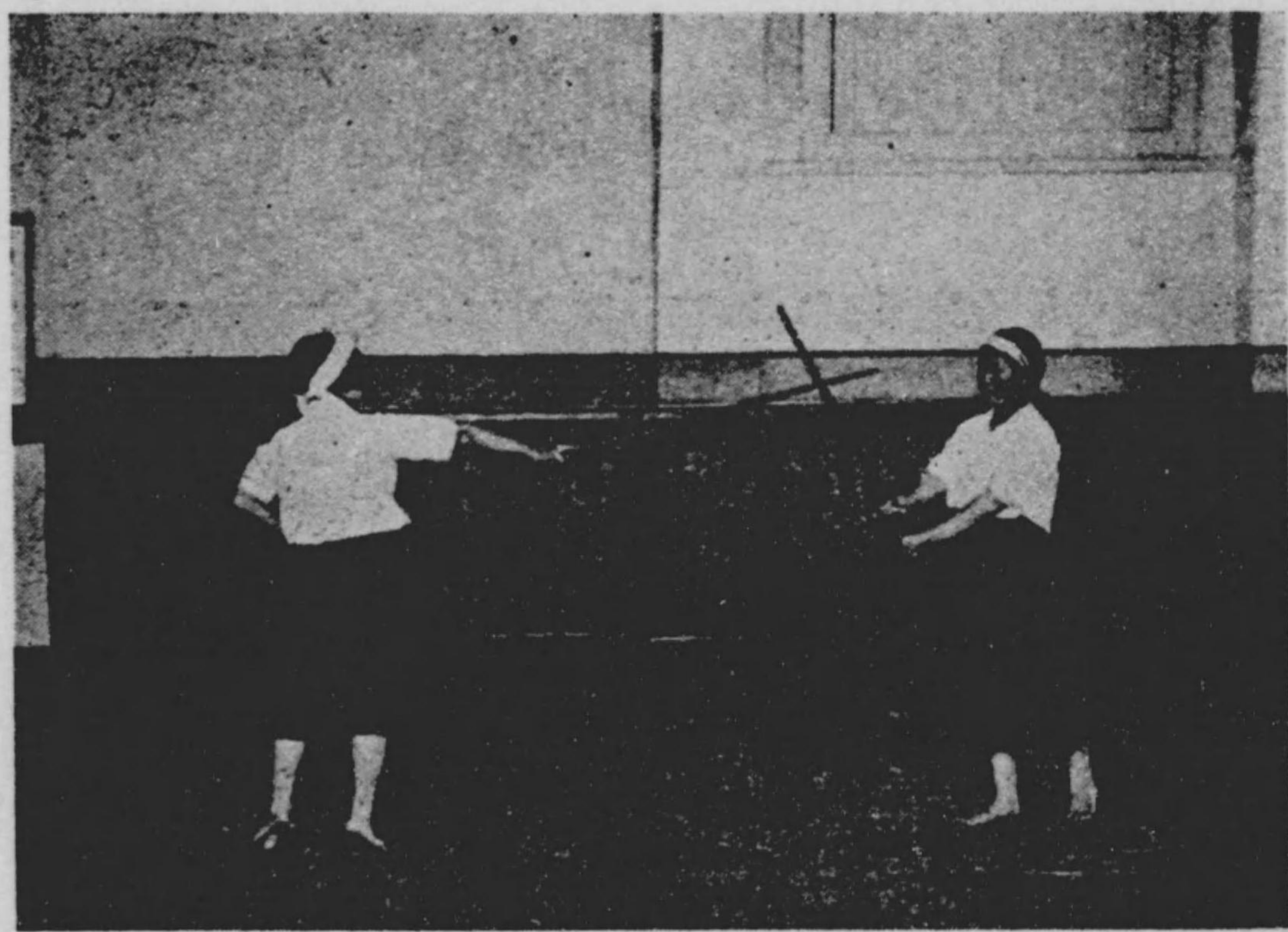
(1) 受太刀 も下段にして五步サガリ
たる處にて左足を少し引きて中段と
なし右左右と三步進む。互に「エイ
ツ」と云ふ。(寫眞六十二)



(三十六頁寫)

(ロ) 面二本

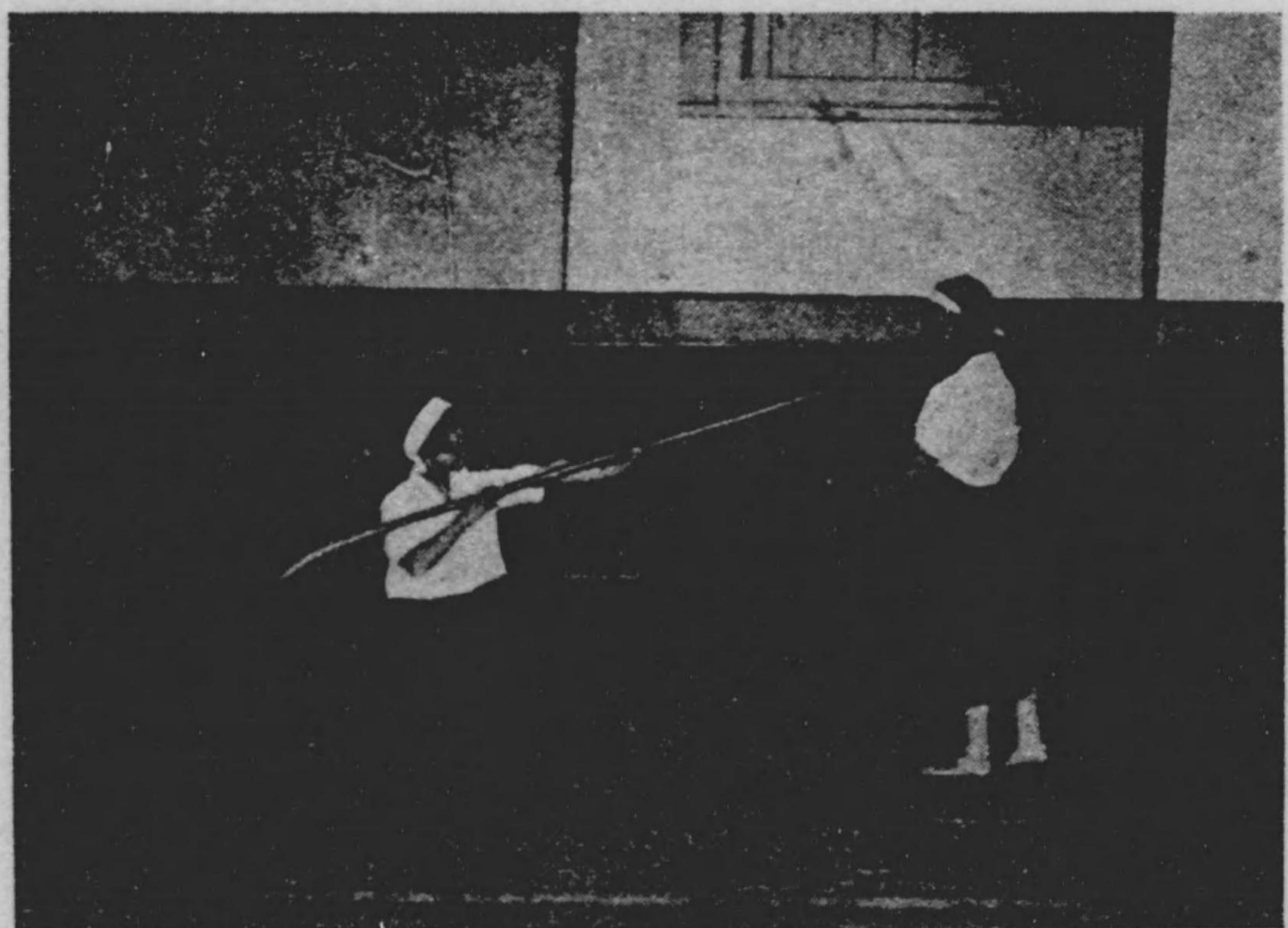
- (2) 薙刀 發艘より體は其のまゝにて上段に上げると同時に足を交代して面を切る。
- (2) 受太刀 中段より足は其のまゝにて面を受ける。互に「トー」と云ふ。
(寫眞なし)
- (3) 薙刀 を振返し足を交代して面を切る。
- (3) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞六十三)



(四十六頁寫)

(ハ) 横面一本

- (4) 薙刀 の刃を横にして足を交代して横面を切る。
- (4) 受太刀 左足を少し引き體を左の方へ向けて太刀にて軽く薙刀を受ける。互に「トー」と云ふ。
(寫眞六十四)



(五十六頁寫)

(ニ) 石突て突く

一〇八

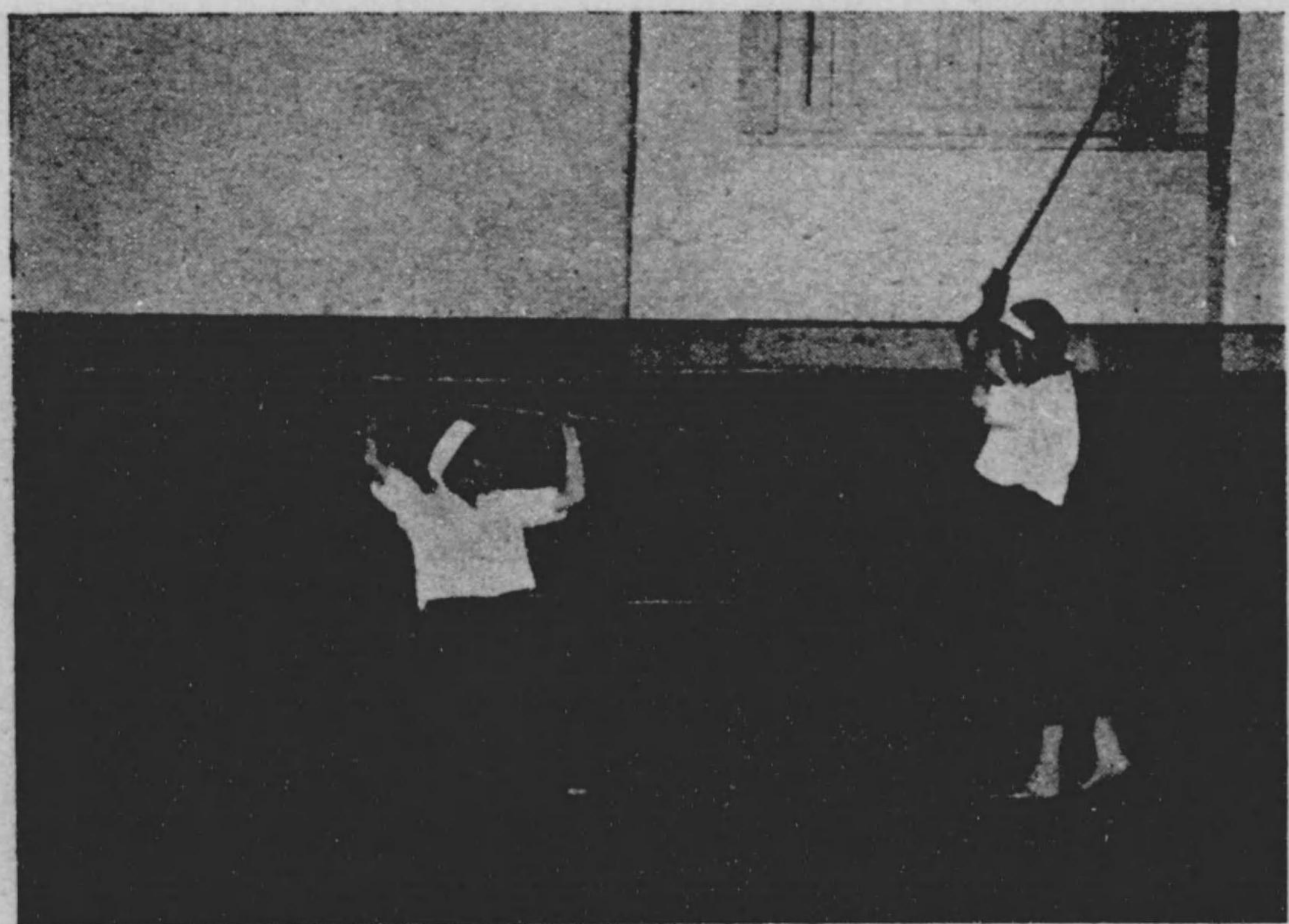
(5) 薙刀 左足大きく一歩進みオリシキ。石突繰出して咽喉部を突く。

注意 石突を繰出すには右手をユルメテ左手にて薙刀を繰込み左手を右手の方へ寄せる。

(5) 受太刀 は太刀を少し下げたる處を突かれる。互に「ヤツ」と云ふ。

(寫眞六十七)

注意 受太刀は薙刀より一手少き故氣合のぬけぬやうに氣を付けるべし。



(六十六頁寫)

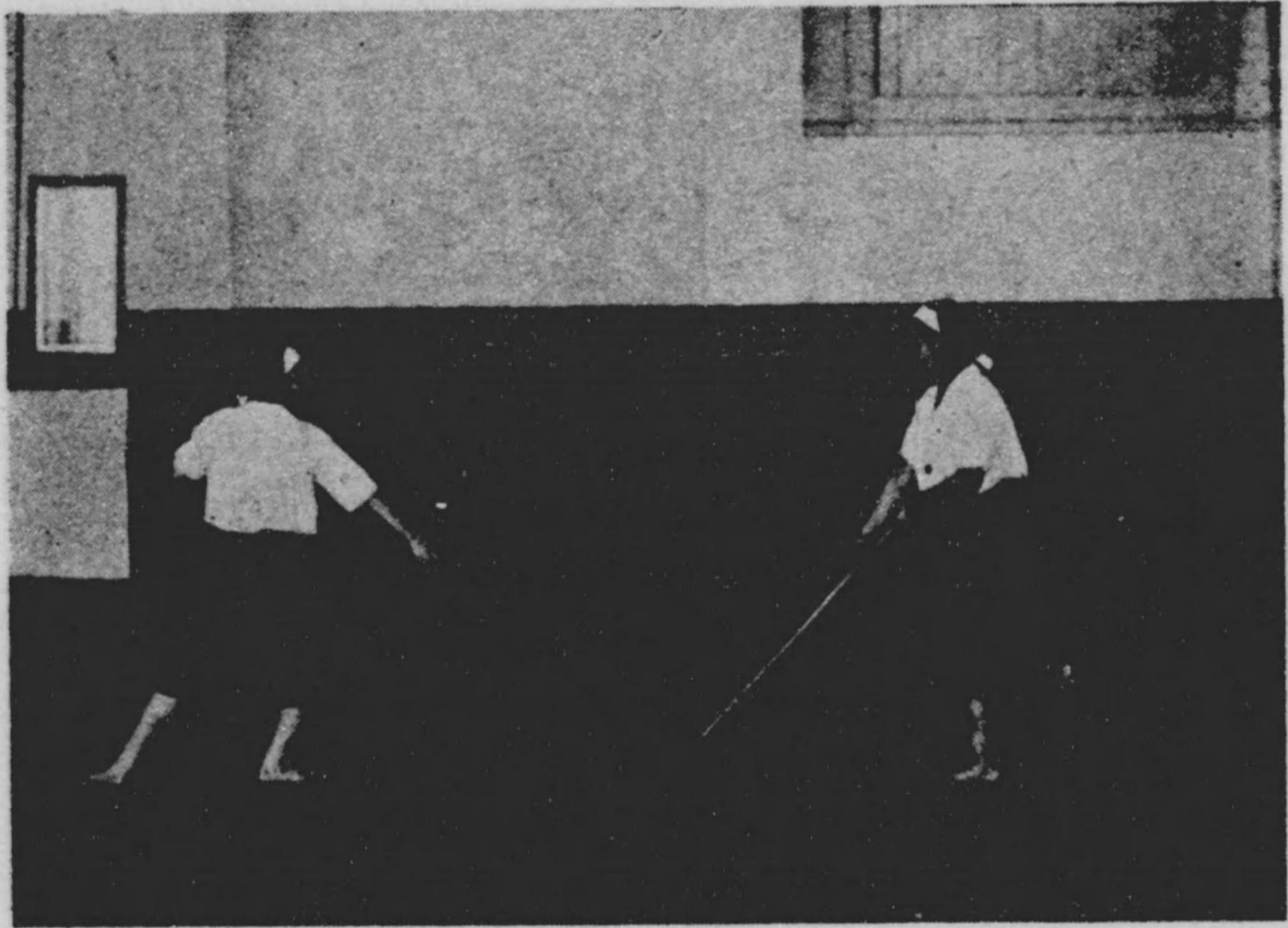
(ホ) 残心の事

(6) 薙刀 石突にて突きたれば左手を少し石突の方へ開きて兩手を右の方へ引き上段にあげて残心を示して左足を一歩引き、立つと同時に薙刀を中段になしてカヒ。込みて元に復す。

(6) 受太刀 突かれたれば右足をヒケルダケ。引きて太刀を上段にして之も残心を示して左足を引き中段になし右足を左足に寄せて一足となし下段になして元に復す。(寫眞六十六)

注意 薙刀を上段にあげる時は互に「エイツ」と云ふ。

一〇九



(七十六頁寫)

(三) 十二本目突手

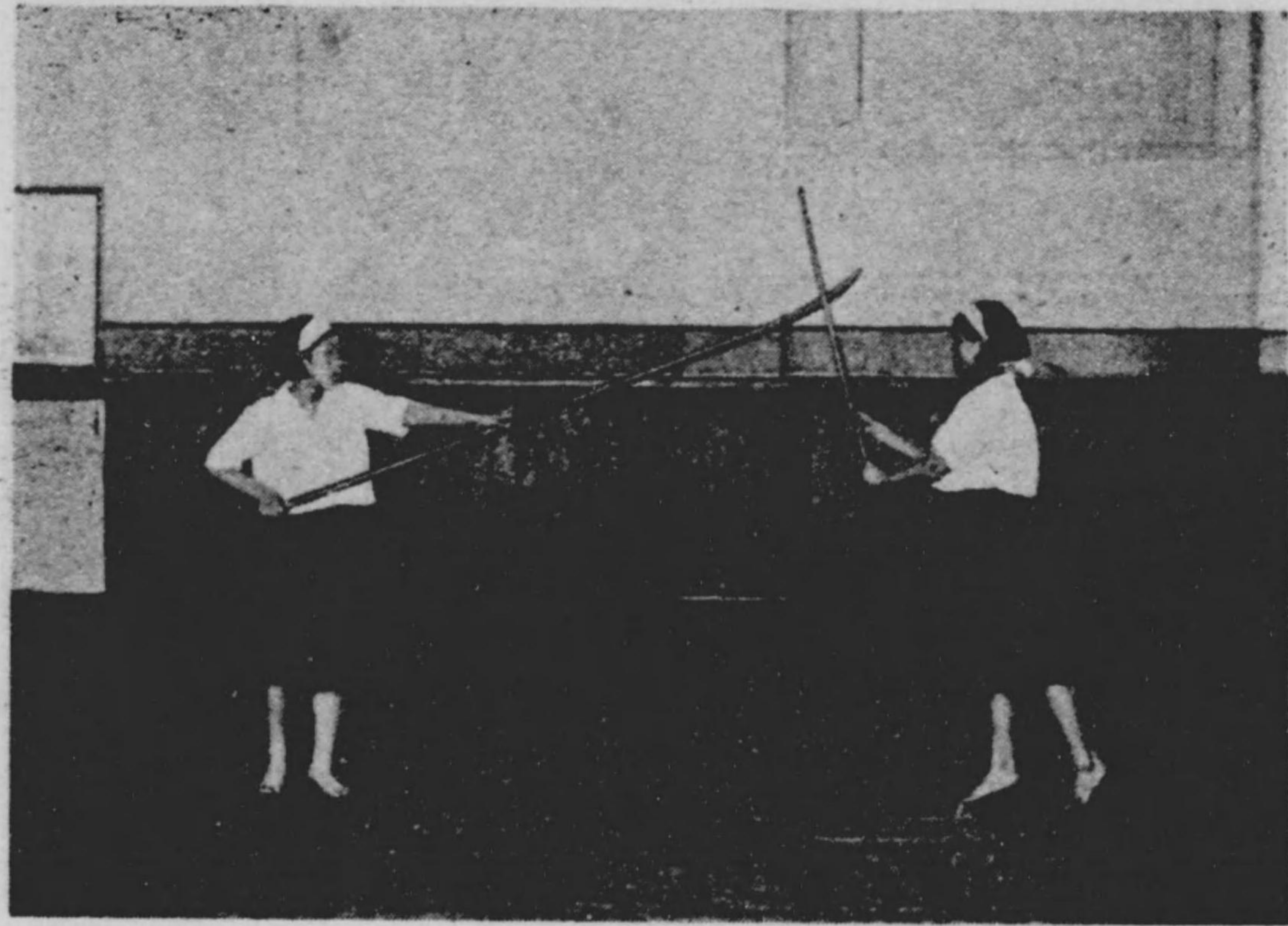
一一〇

(イ) 脚一本

(1) 薙刀 カヒ 込み足は一足になり居る。薙刀を振返して左足一步大きく引きて受太刀の左足を切る。

(1) 受太刀 は中段より右足を引きて上段になして薙刀が左足を切りにくる時右足を左足に寄せ足を交代して太刀を下げて足を受ける。互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞六十七)



(八十六頁寫)

(ロ) 面一本

(2) 薙刀 を振返し左足を右足に寄せて交代して受太刀の正面を切る。

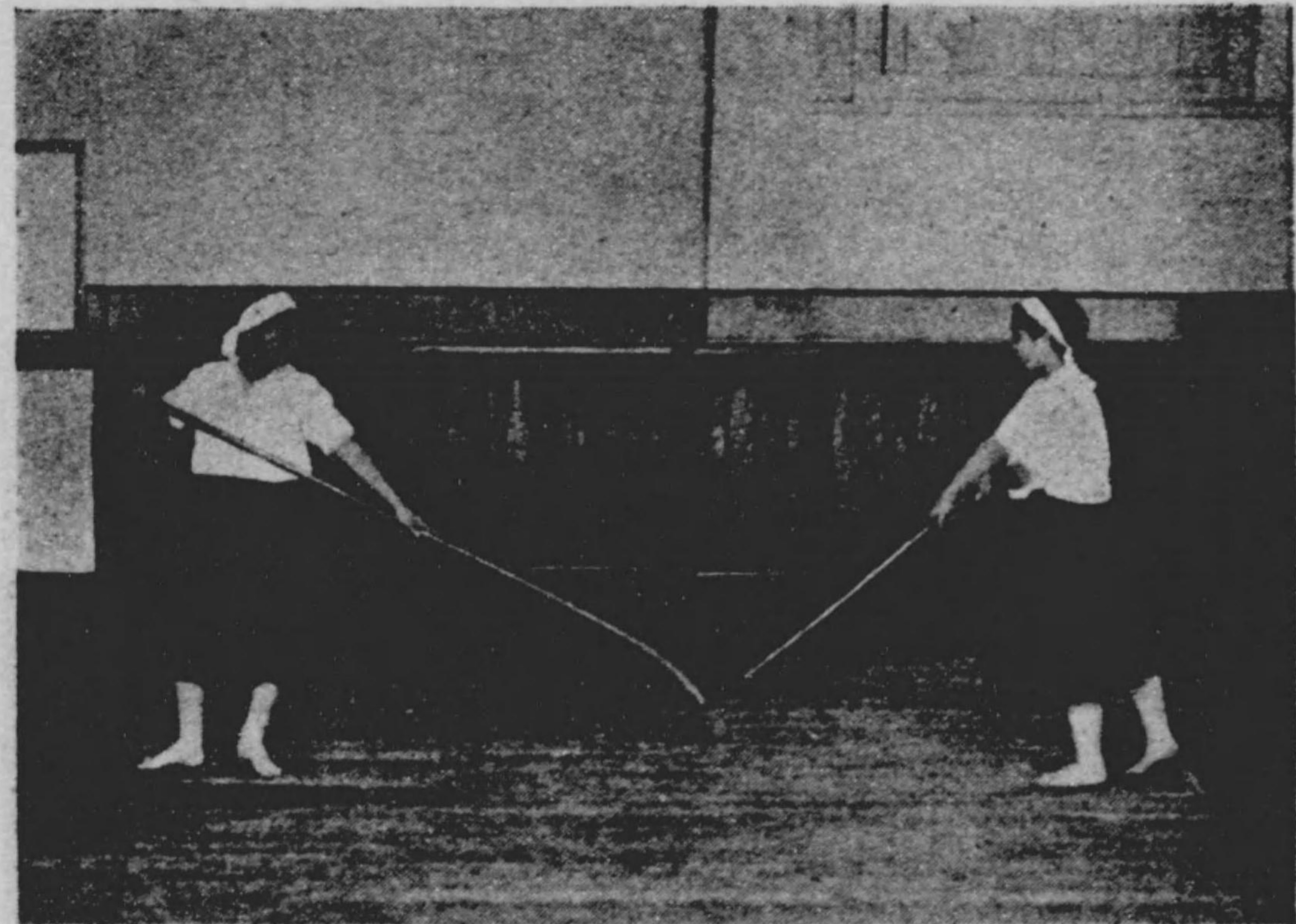
(2) 太刀 を下より上げて左足を右足に寄せて交代して面を受ける。互に「トー」と云ふ。

(寫眞六十八)



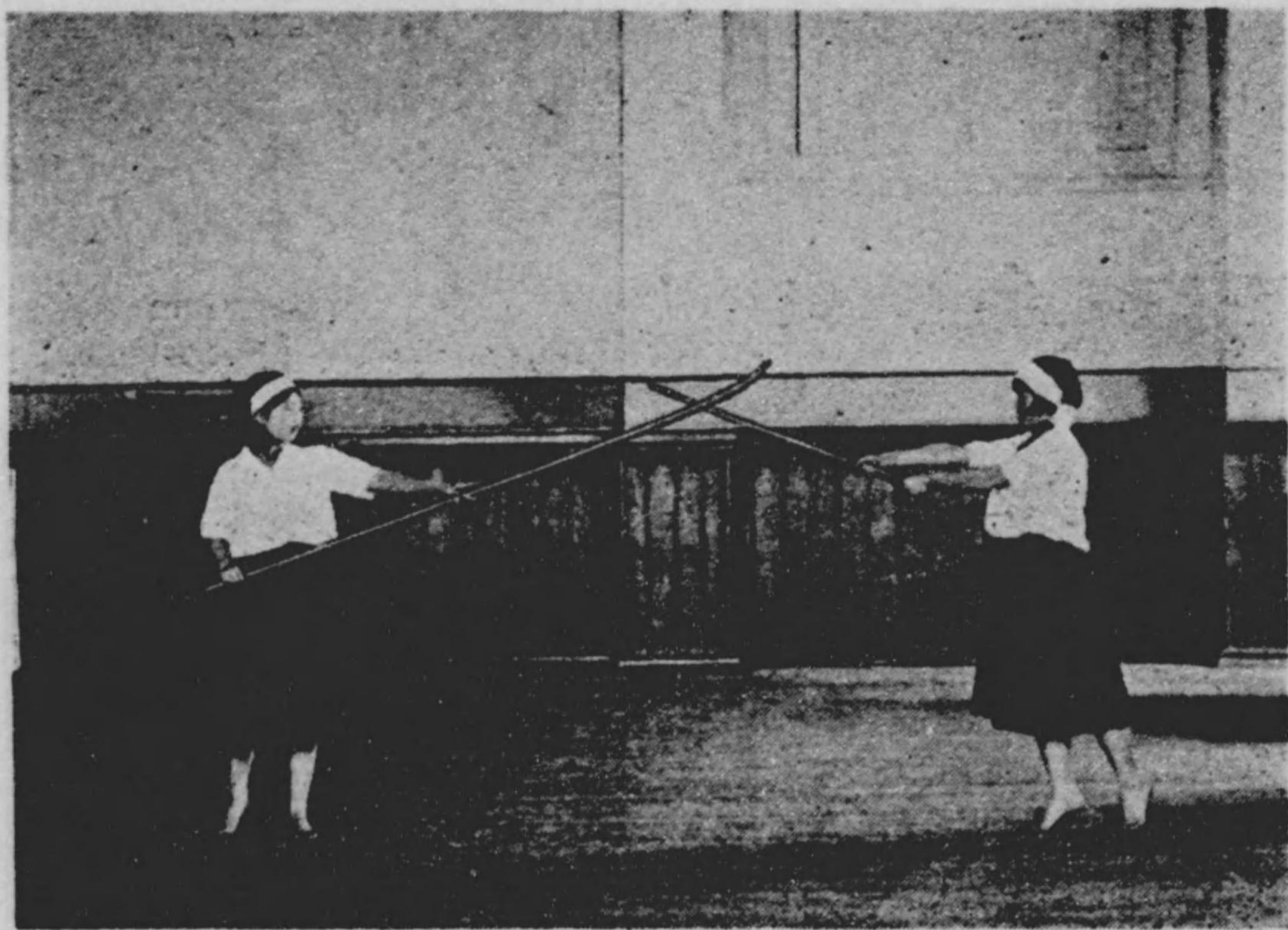
(十七頁寫)

- (4) 薙刀を繰込みたるだけ繰出すと同時に左足を大きく一步進み、右足も共に左足の後まで進みて受の水落を突く。
- (4) 受太刀 捲落されし太刀を右の方へたほして右足より一步引き左も共に右足の前まで引きて上體を元に復す。互に「エイツ」と云ふ。
- (寫眞七十)



(九十六頁寫)

- (ハ) 太刀を捲落す事
- (3) 薙刀のムネを太刀にそへて鍔元まで下げると同時に右手で太刀を捲く心持ちにて左手に力を入れて右足を大きく一步引き、左足も共に右足の前まで引きて薙刀を少し繰込みて太刀を左足元へ捲落す。
- (3) 受太刀は捲落される時に右手を伸ばして上體を少し前に倒し足は面を受けたるまゝ。互に「ヤツ」と云ふ。(寫眞六十九)



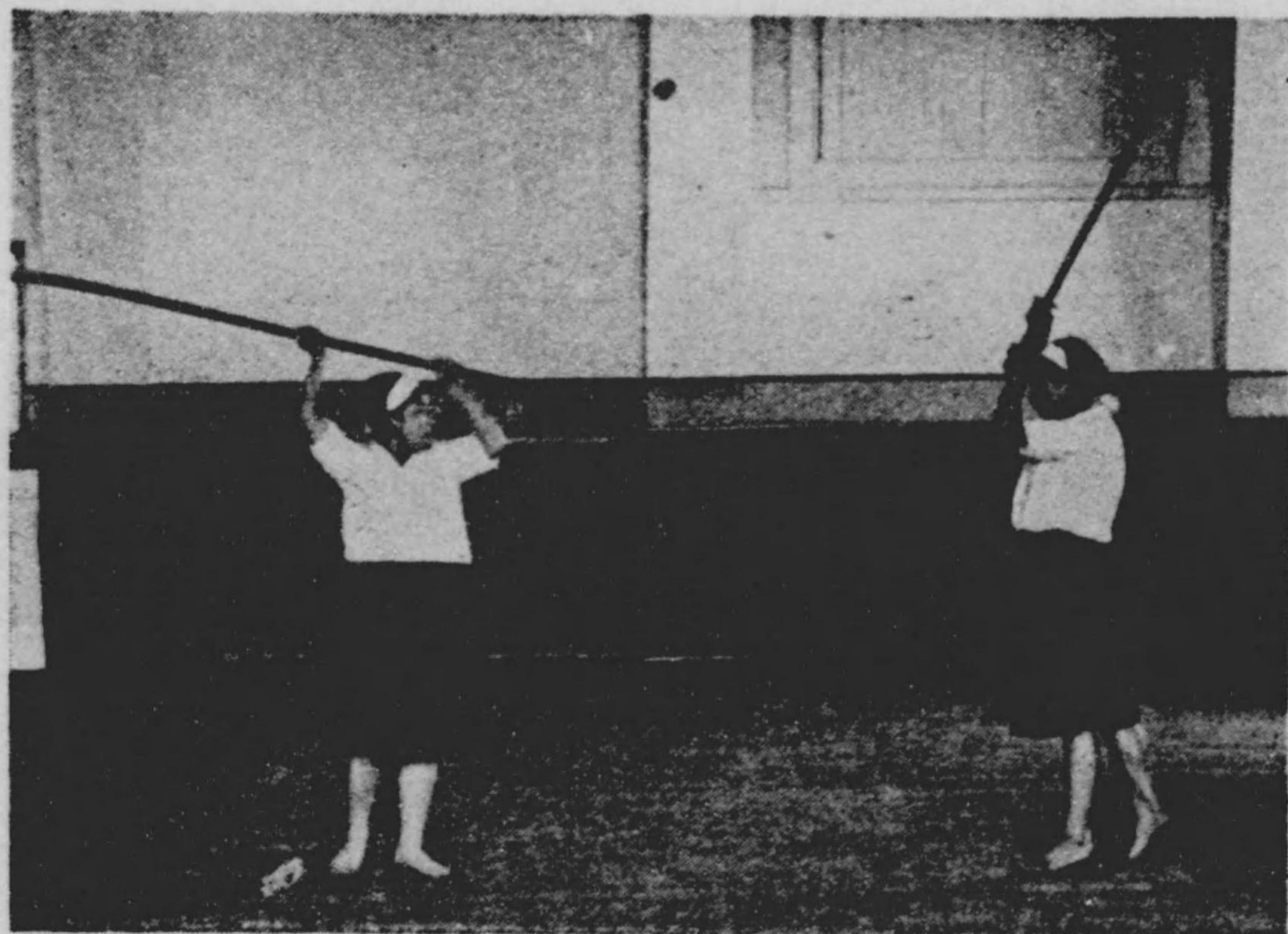
(一十七頁寫)

(木) 面一本

- (5) 薙刀 突きたる薙刀を振返して右足を左足に寄せ交代して面を切る。
 (5) 受太刀 は太刀を右の方より上段になすと同時に左を引きて面を切る互に相打ちとなる。聲は互に「トー」と云ふ。(寫眞七十一)

(へ) 残心の事

- (6) 互に左足より一步引きて残心を示して薙刀をカヒ込む。太刀を下段にして足は一足。(寫眞七十一)

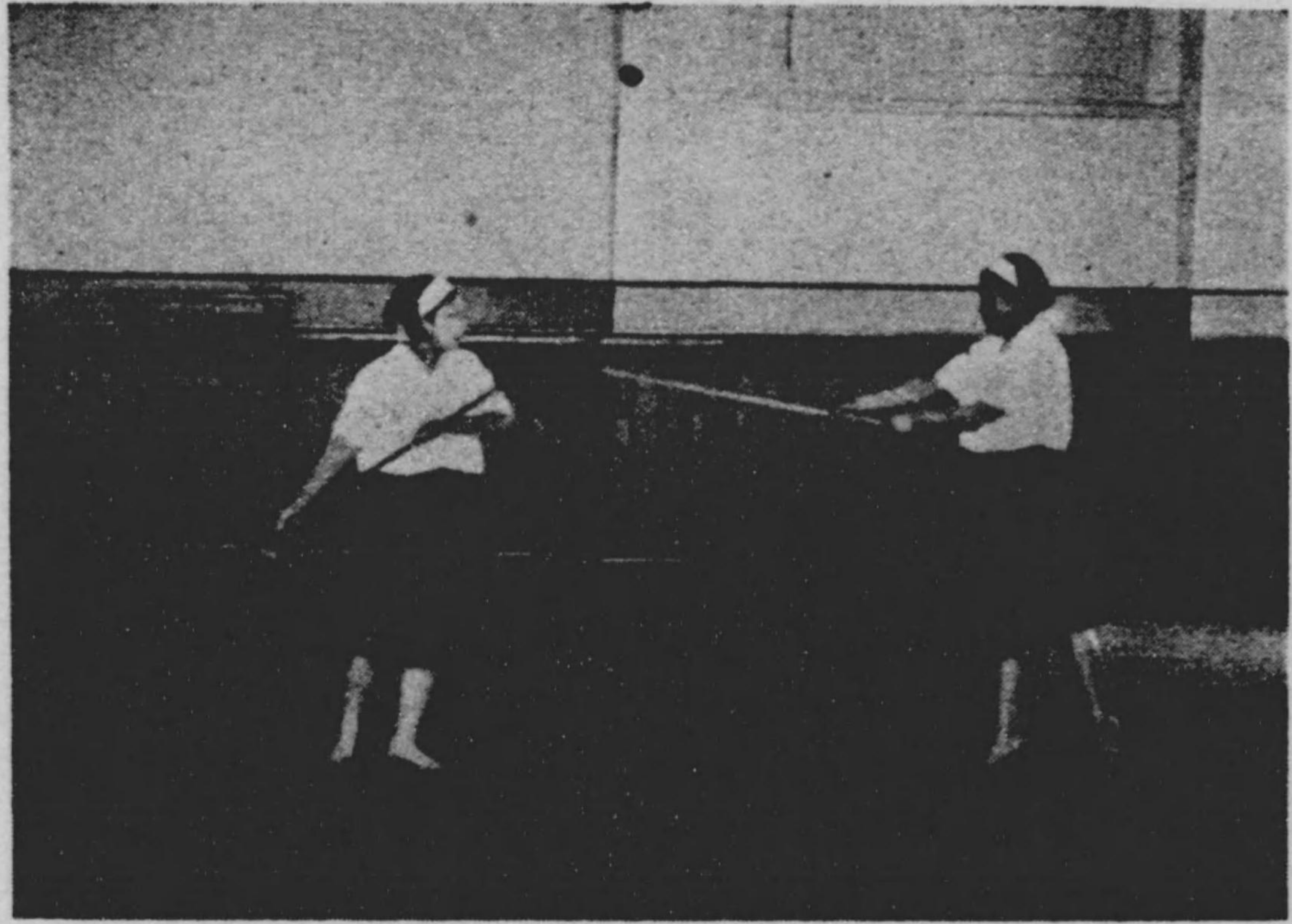


(八十八頁寫)

(三) 十三本目 上段

(イ) 上段の構へ

- (1) 薙刀 をカヒ込み受けが「ヤツ」と云ふと同時に前から起し刃を上に向けて右足を引きて上段に構へる。
 (1) 受太刀 中段より「ヤツ」と云ふと同時に右足を引きて之も上段に構へる。互に「エイツ」と云ふ。
 (寫眞八十八)



(九十八真寫)

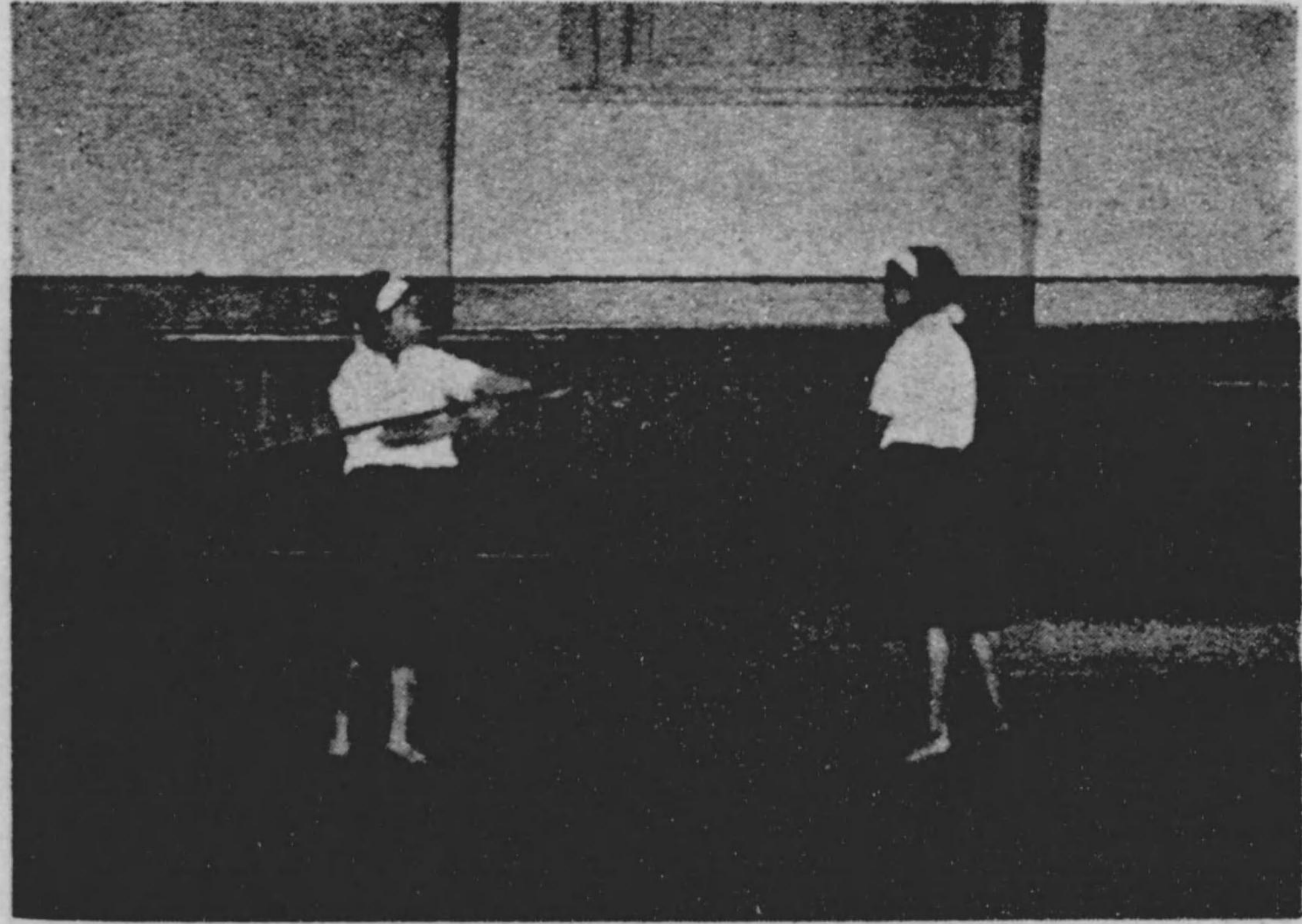
(口) 甲手一本(一步引く)

一一六

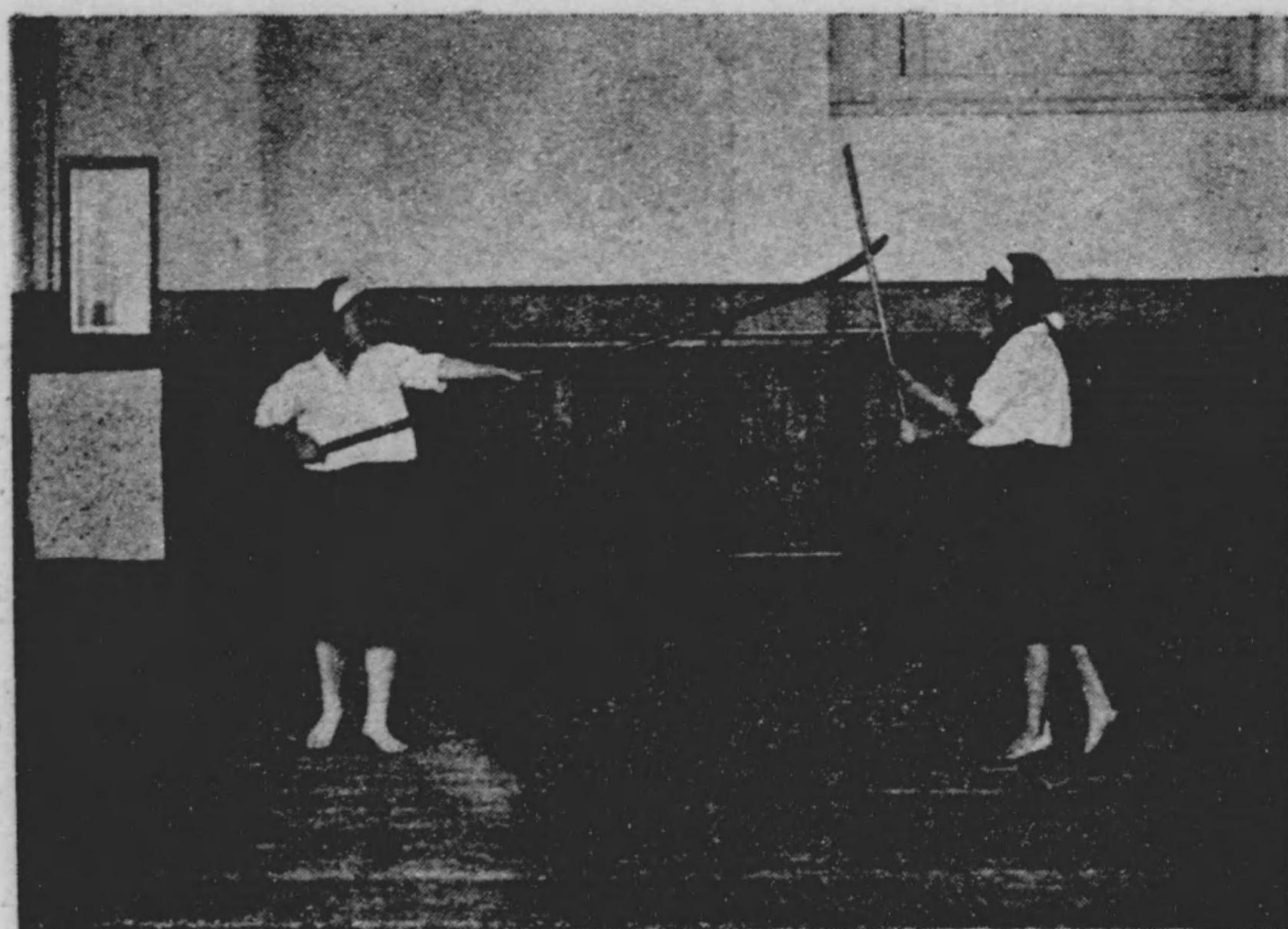
- (2) 薙刀 上段に構へたる甲手を受が打ちにくる時に右足を一步引き左足を右足の前まで引きて兩手を右の方へ伸ばす。
- (2) 受太刀 上段より右足を一步進めて薙刀の左甲手を切る。
- 互に「トー」と云ふ。
- (寫真八十九)

(ハ) 石突にて突く

- (3) 薙刀 引きたる兩手は左足を一步進めると同時に伸ばして受の咽喉部を突く。
- (3) 受太刀 甲手を切りたる太刀を少々下げ劍先を右の方へ倒して右足を引く。互に「エイツ」と云ふ。
- (寫真九十)



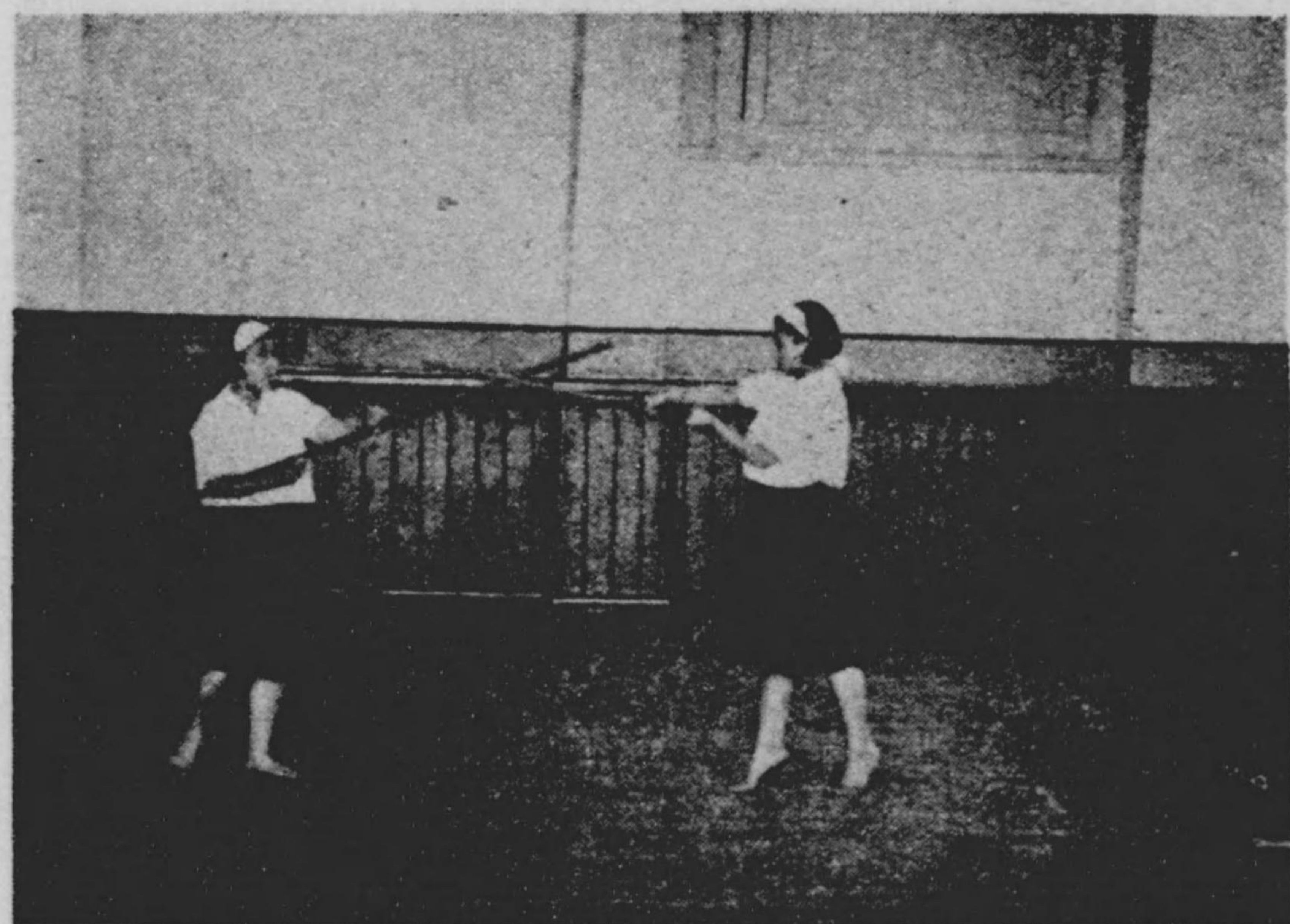
(十九真寫)



(一十九真寫)

(二) 面二本

- (4) 薙刀 石突で突きたる両手を體は其のまゝにて右の方へ引き上段に上げると同時に右足を左足に寄せ交代して正面を切る。
- (4) 受太刀 右足を左足に寄せ交代して面を受ける。
- 互に「トー」と云ふ。(寫真なし)
- (5) 薙刀 足を交代し薙刀を振返して正面を切る。
- (5) 受太刀 足を交代して面を受ける互に「エイツ」と云ふ。(寫真九十一)

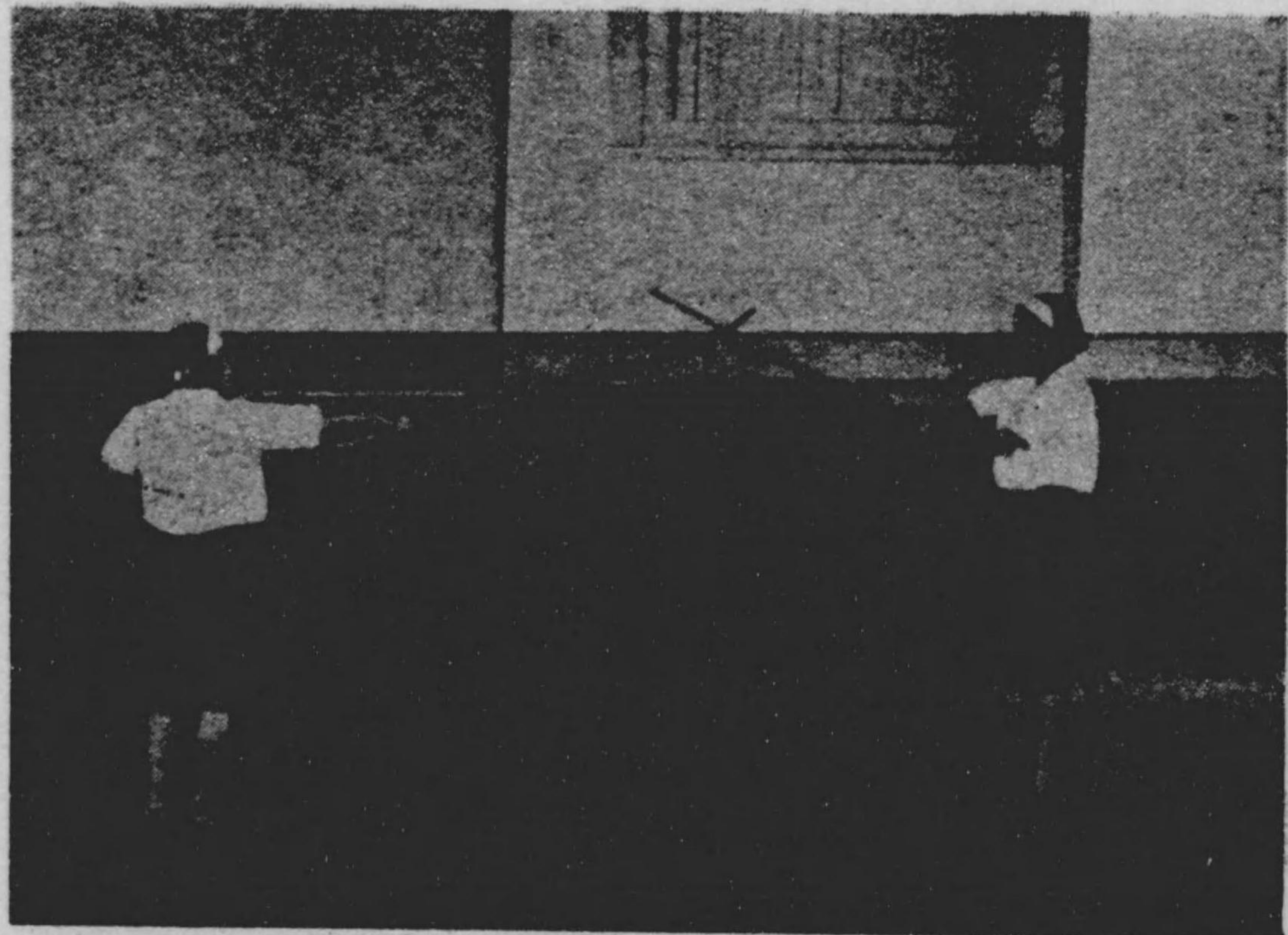


(二十七真寫)

(ホ) 横面一本

- (6) 薙刀 足を交代し薙刀を振返して横面を切る。
- (6) 受太刀 右足を左足に寄せ交代して横面を受ける。互に「トー」と云ふ。(寫真七十二参照)
- (7) 薙刀 石突を繰出し左足を少し進めて太刀を石突にて押す。
- (7) 受太刀 横面を受けたる太刀は其のまゝにて石突で押される。

(ヘ) 石突の事



(三十九頁寫)

互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞九十二)

一二〇

(ト) 相打の事(面一本)

(8) 薙刀 石突を繰出して體は其のまゝにて上段に上げると同時に右足を左足に寄せ交代して面を切る。

(8) 受太刀 右足を左足に寄せて左足を引くと同時に太刀を左の方より上段に上げ兩手を伸ばして薙刀の面を切る。相打ちとなる。

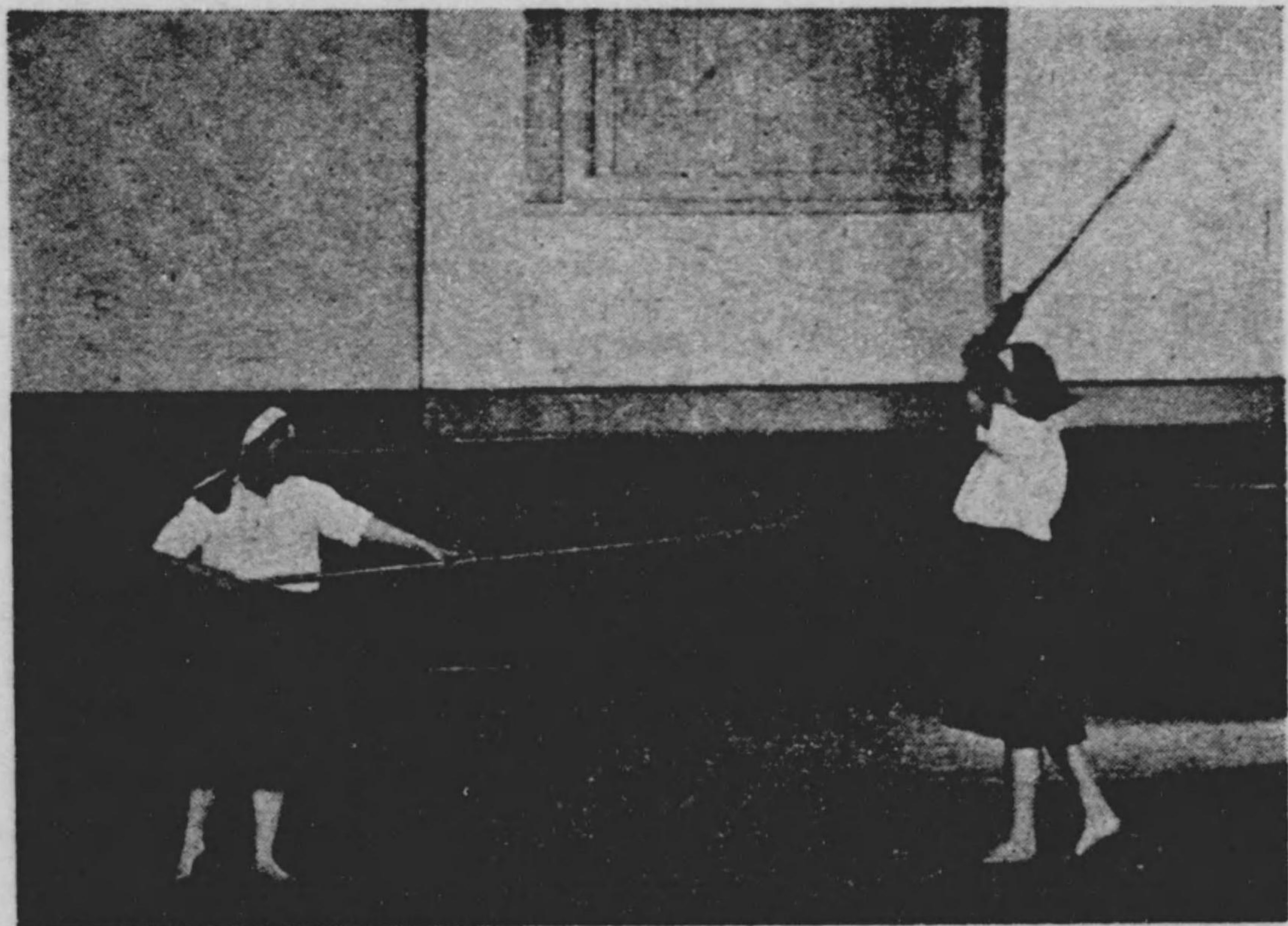
互に「トー」と云ふ。

(寫眞九十三)

(チ) 残心の事

(9) 薙刀 左足より一步大きく引き劍先を受の眼の處までさげて残心を示し薙刀を右脇にか。ひ込みて元に復す。

(9) 受太刀 左足より一步大きく引き右足も共に左足の前まで引き太刀を中段にする、兩手を引き劍先を薙刀の眼の處につけて残心を示し右足を左足に寄せて一足となし太刀を下段にして元に復す。



(四十九頁寫)

(十四) 十四本目 中段

一三二

(イ) 甲手一本

(1) 薙刀 かひ込みし薙刀の劍先を左の方へ寄せると同時に左足を左の方へ少々開く、同時に石突の方へ左手をかけて脇より石突を取り右足を左足の前へ一歩進めて受が中段に構へてゐる右甲手を刃を下にして切る。

注意 劍先を左の方へ寄せる事。
左足を左の方へ開く此の二つは同時になす。

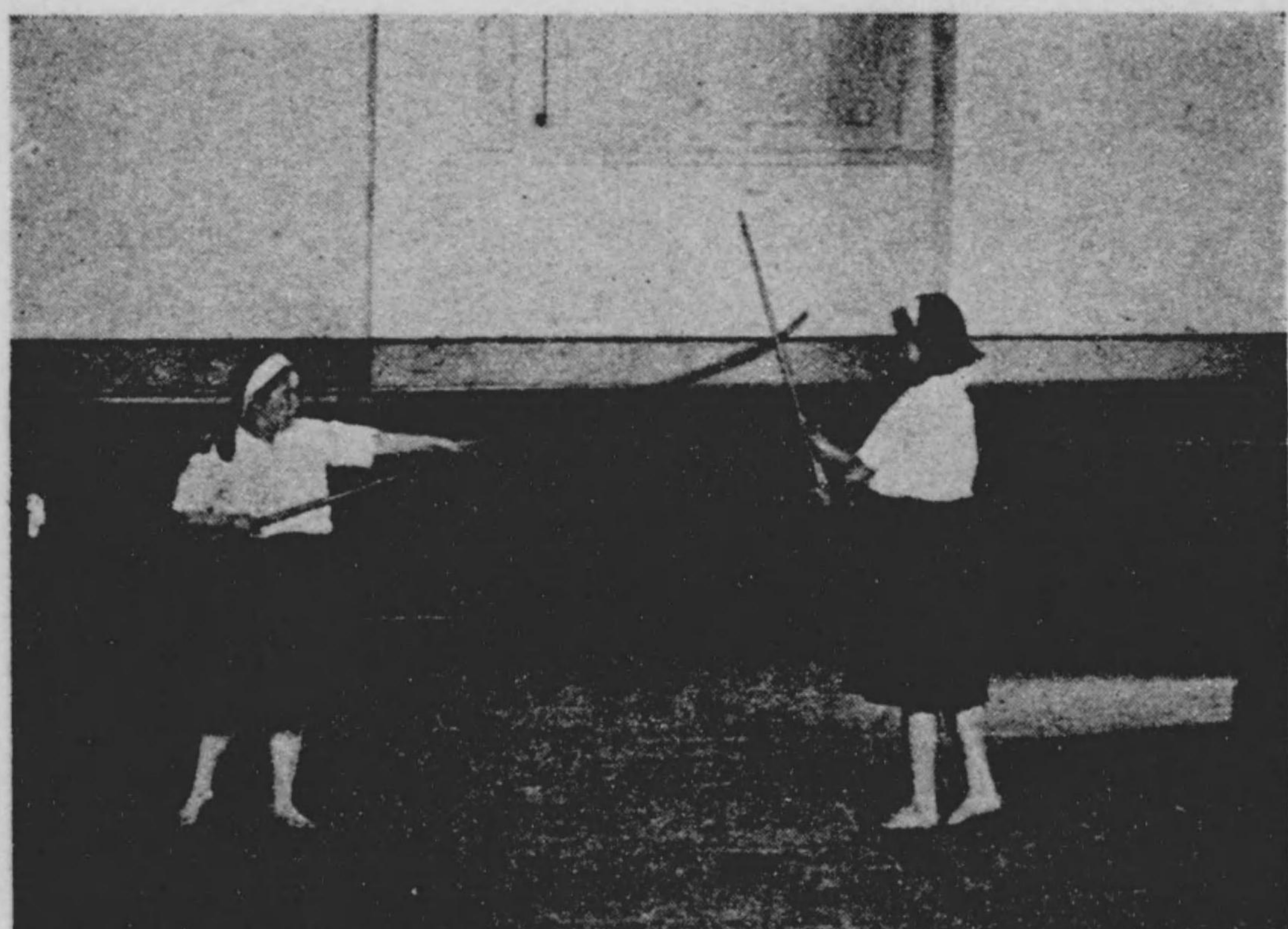
左手を石突にかけ脇より取りて切る事。

(1) 受太刀 左足を少々引きて太刀を中段にし「ヤツ」と云ふと同時に右足を大きく一歩引き左足も共に右足の前まで引きて上段に構へる。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞九十四)

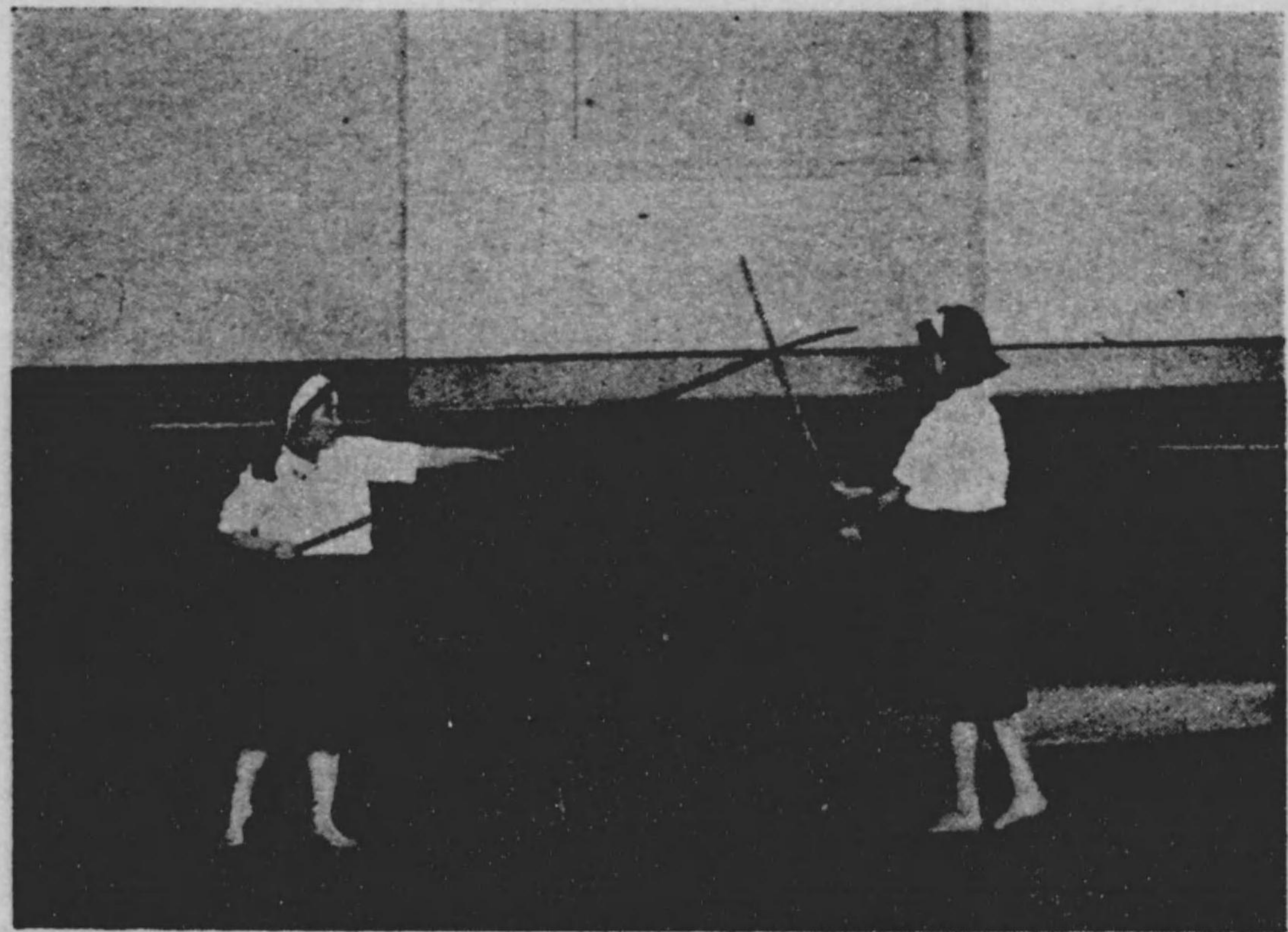
(ロ) 面二本

(2) 薙刀 受太刀が両手を下げたれば左足を右足に寄せ交代して薙刀を振返して正面を切る。
(2) 受太刀 上段に構へたる太刀を少

一三三



(五十九頁寫)



(六十九頁寫)

々下げ劍先を左の方へ倒し足は其のまゝにて面をすかして面を受ける。五に「トー」と云ふ。(寫眞九十五)

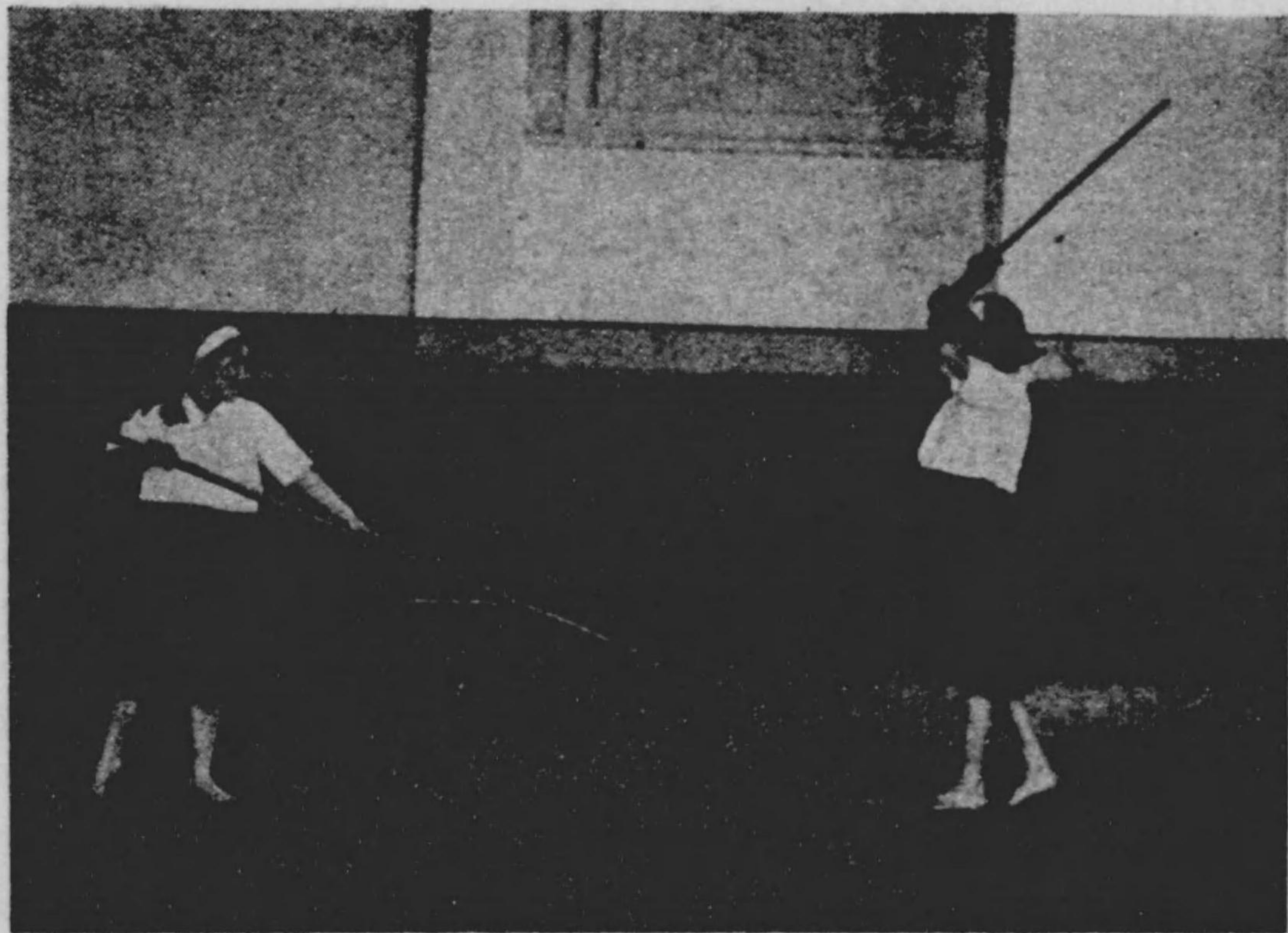
(3) 薙刀を振返し足を交代して面を切る。

(3) 受太刀 足を交代して面を受ける五に「エイツ」と云ふ。(寫眞なし)

(ハ) 横面一本

(4) 薙刀を振返して足を交代し刃を横にして横面を切る。

(4) 受太刀 足を交代して横面を受け



(七十九頁寫)

五に「トー」と云ふ。(寫眞九十六)

(ニ) 巻落す

(5) 薙刀 横面を切りたる劍先を返してむねにて太刀を捲落す。

注意 太刀を捲落す時は右足より一步引き左足も共に右足の前まで引き薙刀を少し繰込む左手は伸ばしたるまゝ。

(5) 受太刀 は薙刀が太刀を巻く時に右足を右の方へ開きて左足を右足の後へ引き太刀を上段に上げる。互に「ヤツ」と云ふ。

(寫眞九十七)



(八十九真寫)

注意 (寫眞九十七)の受太刀の足はましがひなり。

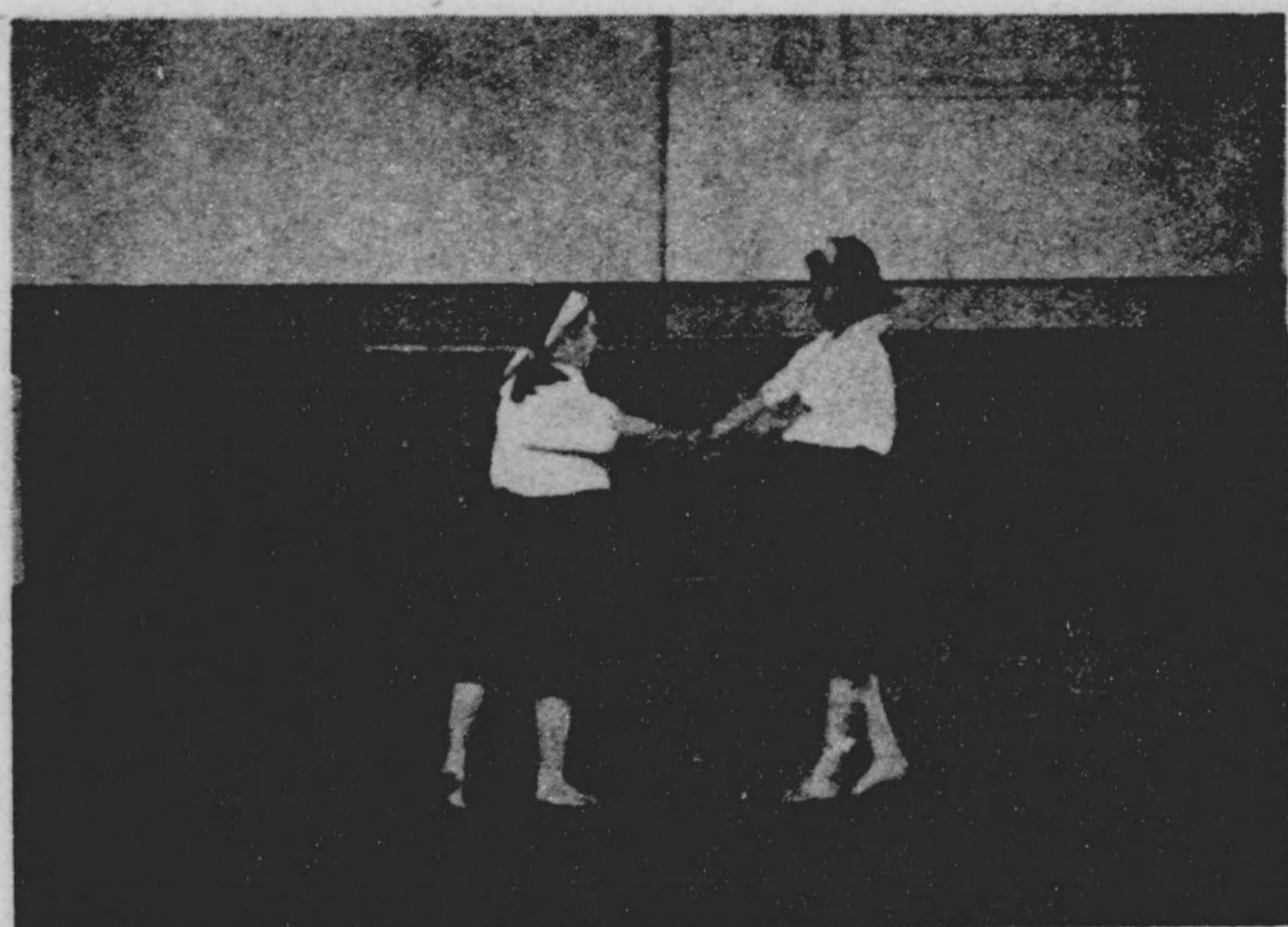
(ホ) 突き一本

(ヘ) 薙刀を落される

- (6) 薙刀 引きたる薙刀を左足より一步大きく進めて受の咽喉部を突く。
 - (6) 受太刀 足は其のまゝにて突き來る薙刀を上段より少々腰を下げて拂ひ落す。互に「エイツ」と云ふ。
- (寫眞九十八)

(ト) 太刀を取る事

- (7) 薙刀 を落されたれば體は其のまゝにて兩手は袴の相引きの處をもちて氣合をぬかぬ様になすべし。
- (7) 受太刀 薙刀を拂落したれば左足を元の處へ進め右足を左足の後へ引きて太刀を上段に構へる。此時は互に懸聲をかけぬ。(寫眞なし)
- (8) 薙刀 受が上段より面を切りにくると同時に右足を一步進め右手を受太刀の右手首動脈を握り、左手にて



(九十九真寫)



(百 眞 寫)

中柄を握ると同時に左足を右足の前へ進め太刀を薙刀及受太刀の間を通し柄頭を自分の前に向け左手を下げると同時に少々腰を下げ、右手を上にあげて太刀を取る、太刀を取りたれば右手にて錨元を握る。

注意

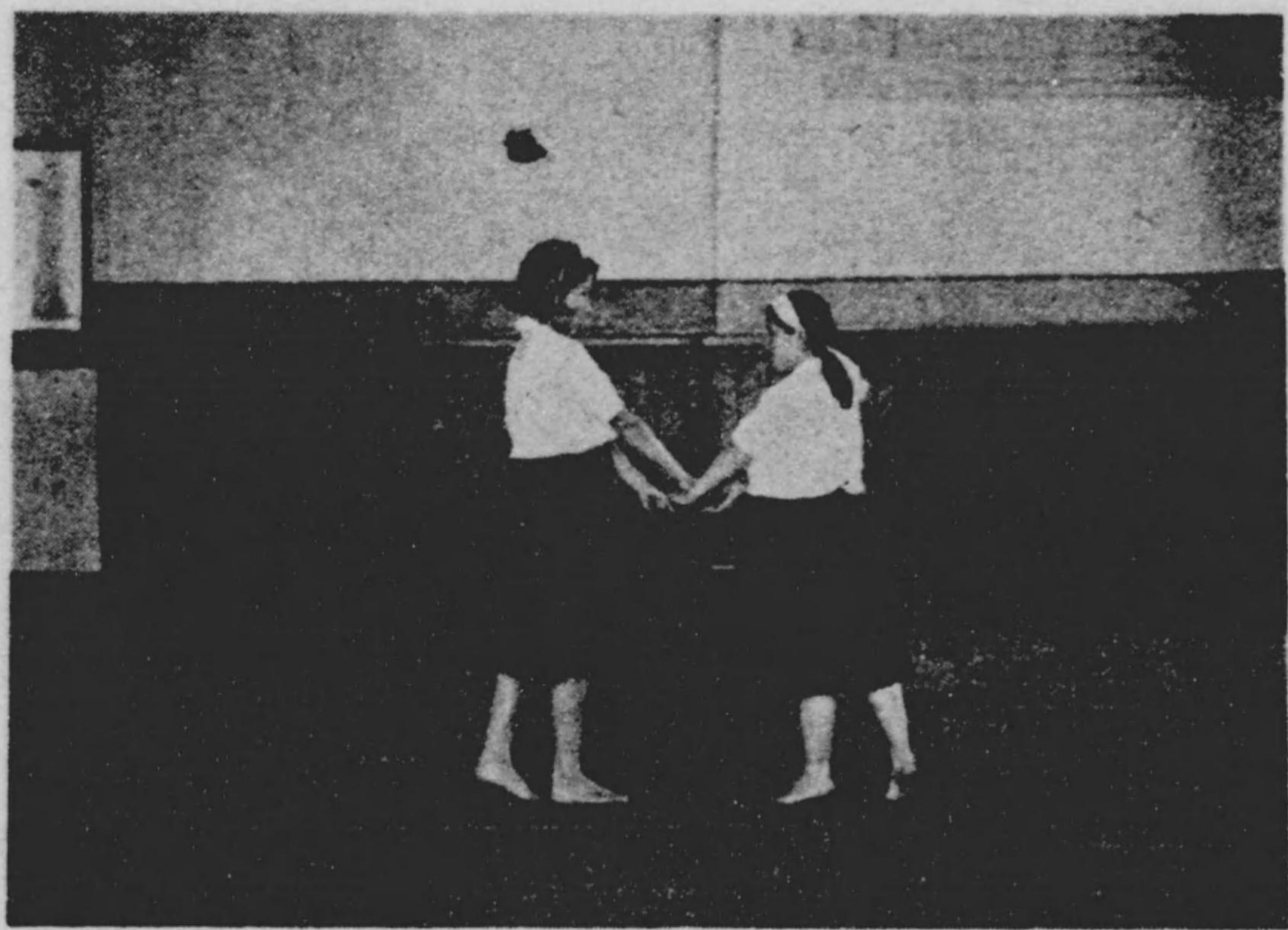
中柄を握る時に左手を下か

ら握る受太刀が太刀をはな

すまでは右手をはなさぬ事。

(8) 受太刀 は上段より右足を一步進め面を切りて太刀を取られる。互に「トー」と云ふ。

(寫眞九十九)

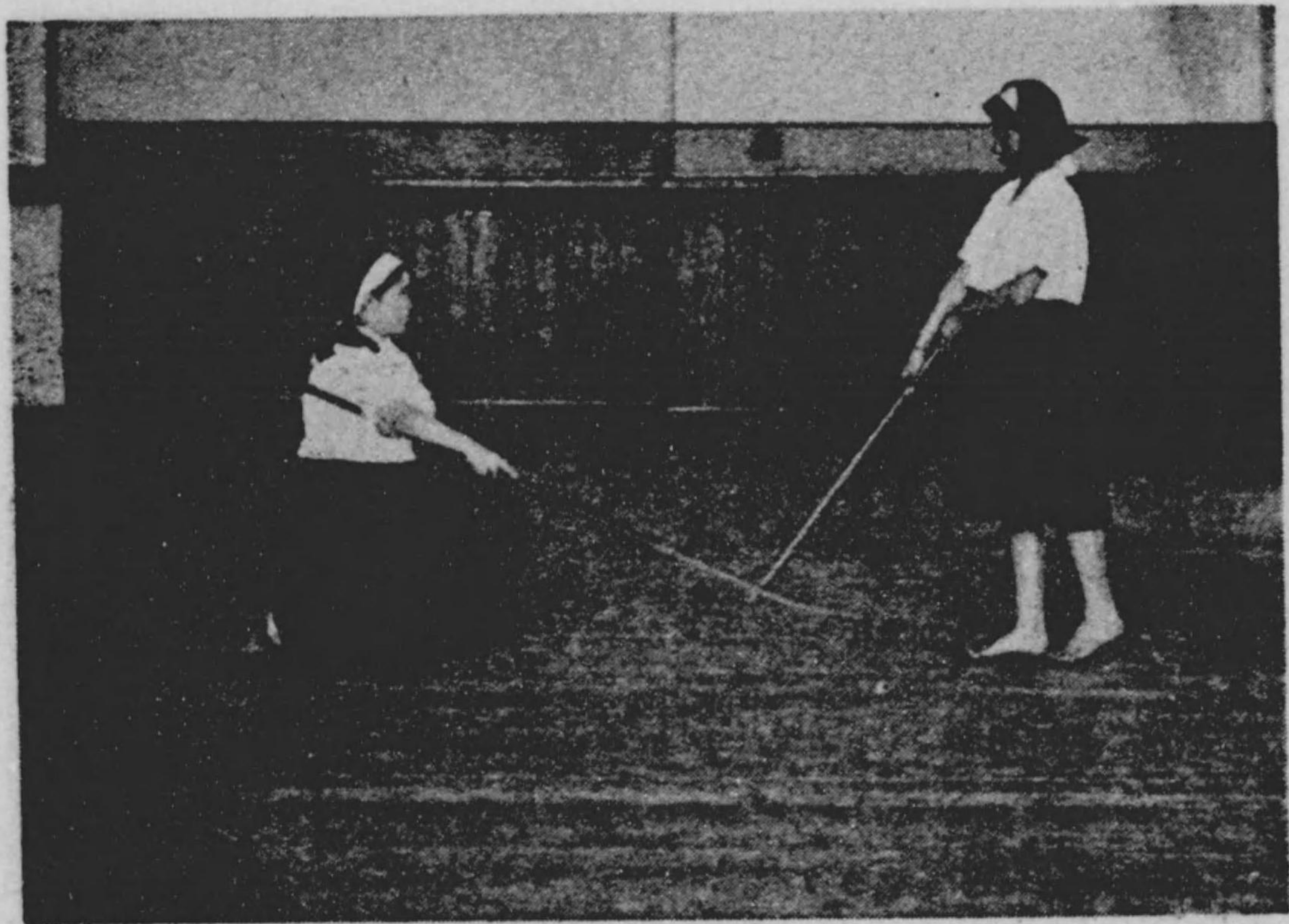


(一 百 眞 寫)

(9) 薙刀 太刀を取りたれば左手を持ち直し踵にて右廻りし左足を一步進めて太刀を上段に構へる。

(9) 受太刀 太刀を取られたれば両手で袴の相引を握ると同時に左足を大きく一步進め踵にて右廻りして右足を大きく引き左足を右足の前まで引く。互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞百)



(二百真寫)

(チ) 太刀を返す

(10) 薙刀 上段より左足を引き中段にして右足を引き一足となると同時に劍先を右の方へ倒して左右左と三步進んで左手を少々右手の方へ寄せ柄頭を受の方へ向けてわたす。

注意 三步めの左足を進めると同時に柄頭を受の前へ出す。

(10) 受太刀 左足を引き右足を左足に寄せて一足となし同時に右左右と三步進めて右手を中柄にかけ左手を柄頭にかけて太刀を取る。(寫真百〇一)

同時に右左と二歩引きて中段にし右足引きて一足となして下段になす。

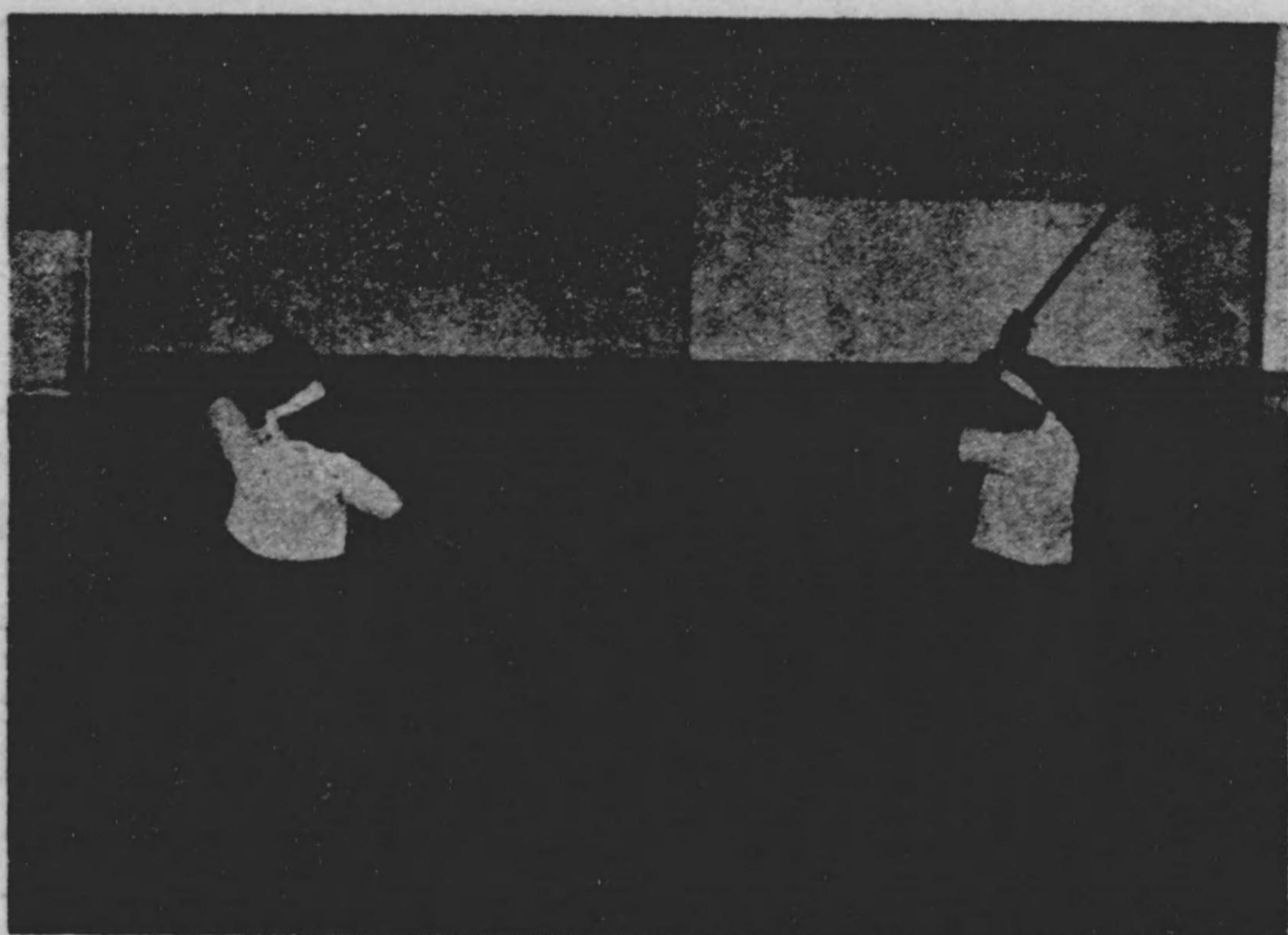
(リ) 残心の事

(11) 薙刀 は太刀を渡したれば兩手で袴の相引を握り力を入れ残心を示しながら右廻りして受太刀と位置を交代して薙刀の中程に折敷くと同時に右手にて薙刀を取り左手の後へかけてカ。ヒ。込み左右と立ちて元に復す。

(寫真百〇二)

注意 拂はれたる薙刀は種々の方面に落ちる故に薙刀に添ひし方の足を折敷く。

(11) 受太刀 下段になしたるまゝにて残心を示しながら薙刀をマ。タ。ガ。ラ。ヌ。様にして右廻りになり薙刀のいづれの側に行きてもよけれ共薙刀を拾ひ易き場所に導きて元の處へ返へる。



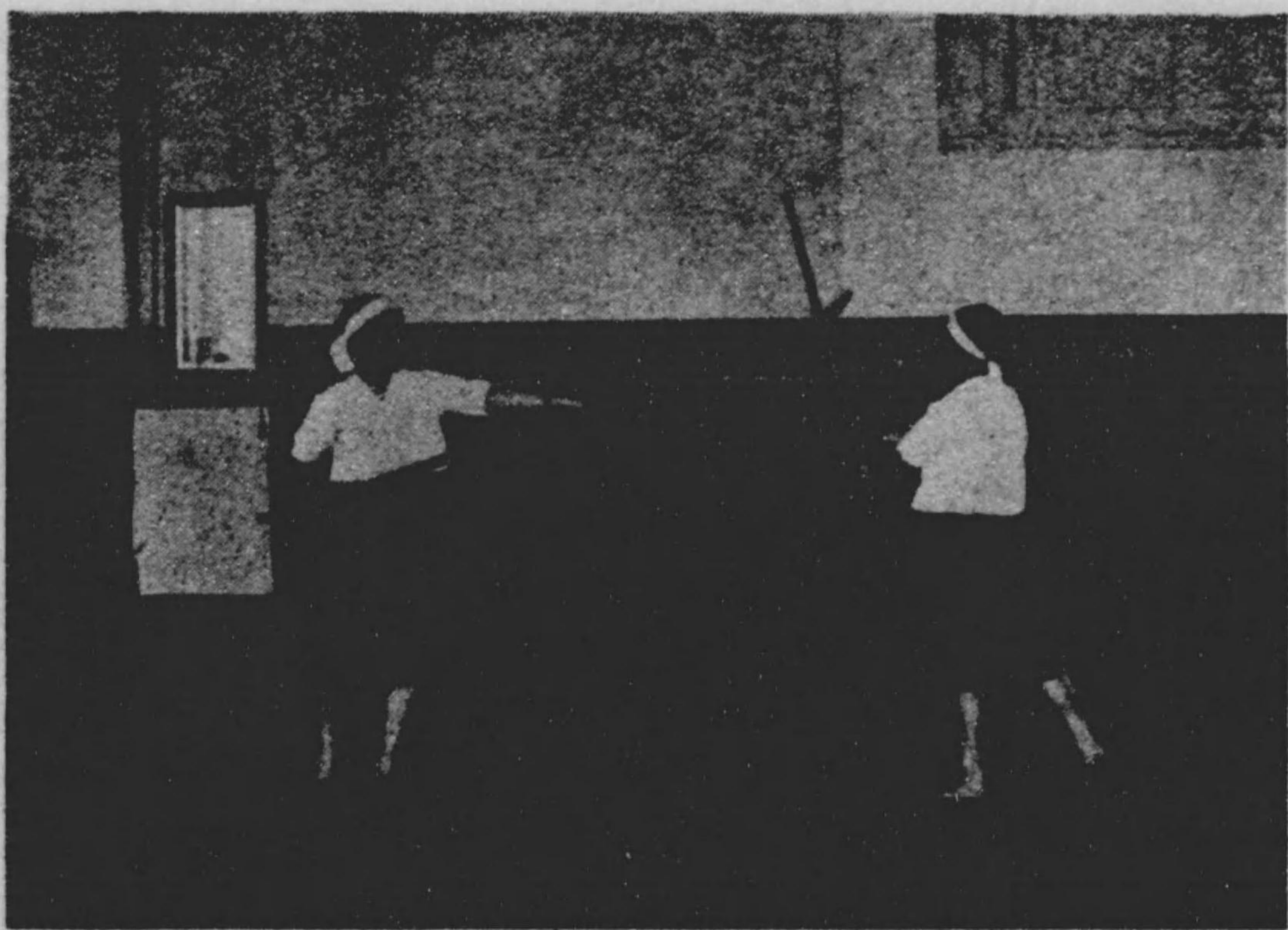
(三百眞寫)

(十五) 十五本目 下段

一三三

(1) 下段の構へ

- (1) 薙刀 受太刀が「ヤツ」と云ふと同時に、薙刀の劍先を左の方へ倒して左手を右手の後へかけて石突をわきより取りて左足を一步引き双を上に向け、右手を伸ばして下段に構へる。
- (1) 受太刀 中段より「ヤツ」と云ふと同時に右足を引きで太刀を上段に構へる。互に「ヤツ」と云ふ。



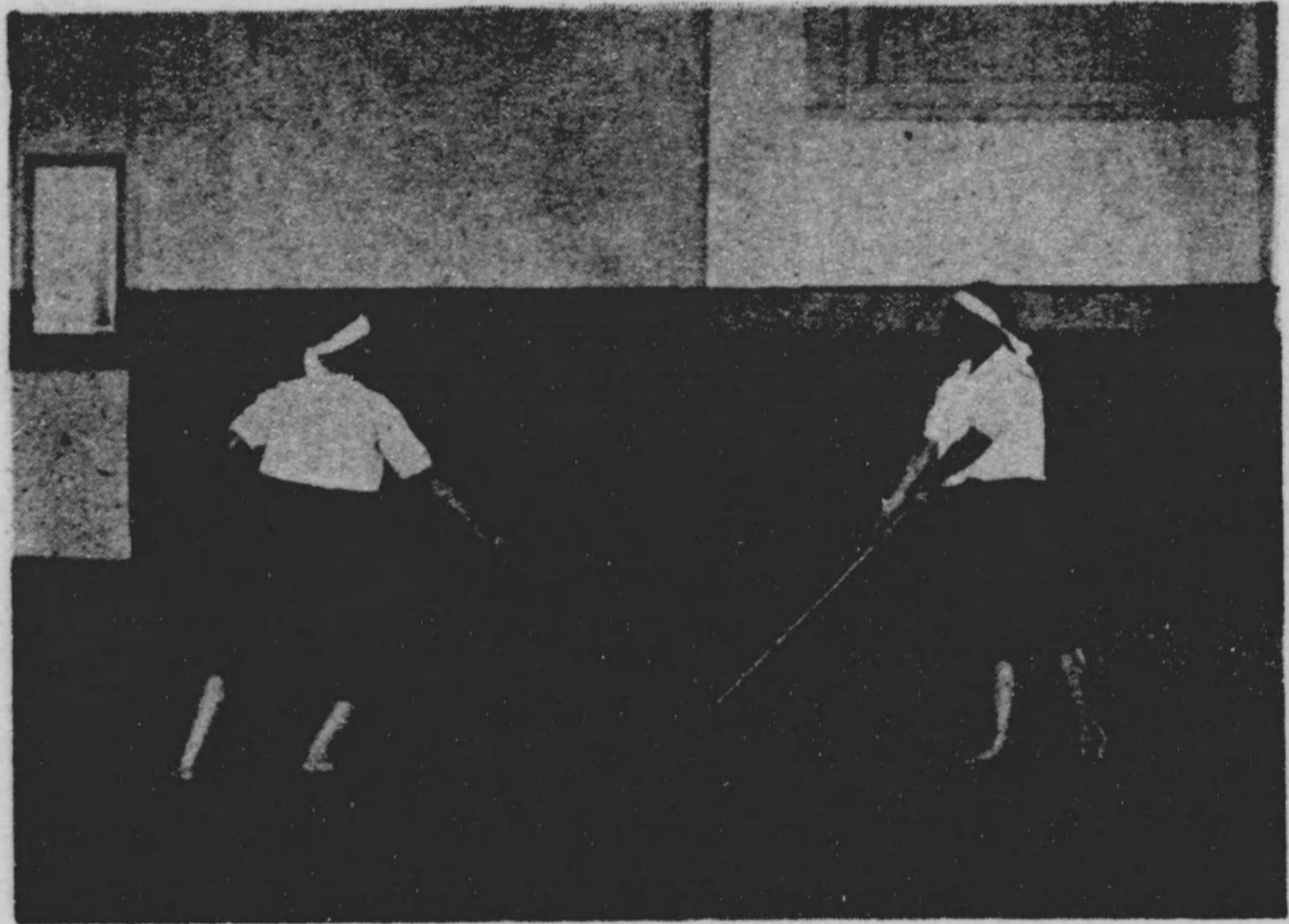
(四百眞寫)

(寫眞一〇三)

(口) 面一本

- (2) 薙刀 受太刀が太刀を下けたれば左足を右足に寄せ交代して薙刀を振返して正面を切る。
- (2) 受太刀 體は其のまゝにて兩手を少し下げ劍先を左の方へ向けて腰を少し下げ「ヤツ」と云ふと同時に兩手を上げ太刀を立て、面を受ける。互に「ト」と云ふ。
- (寫眞一〇四)

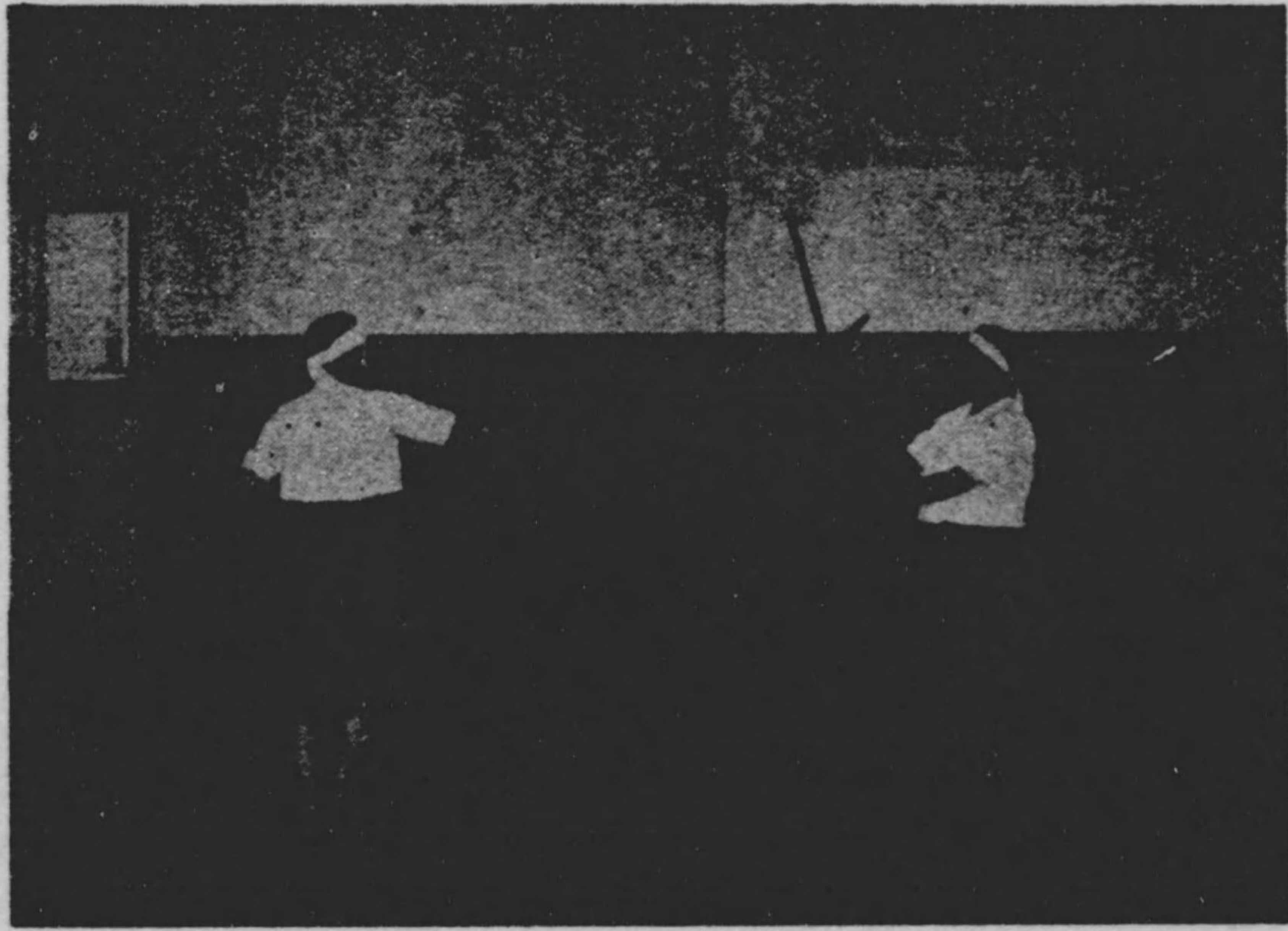
一三三



(五百眞寫)

(八) 脚一本

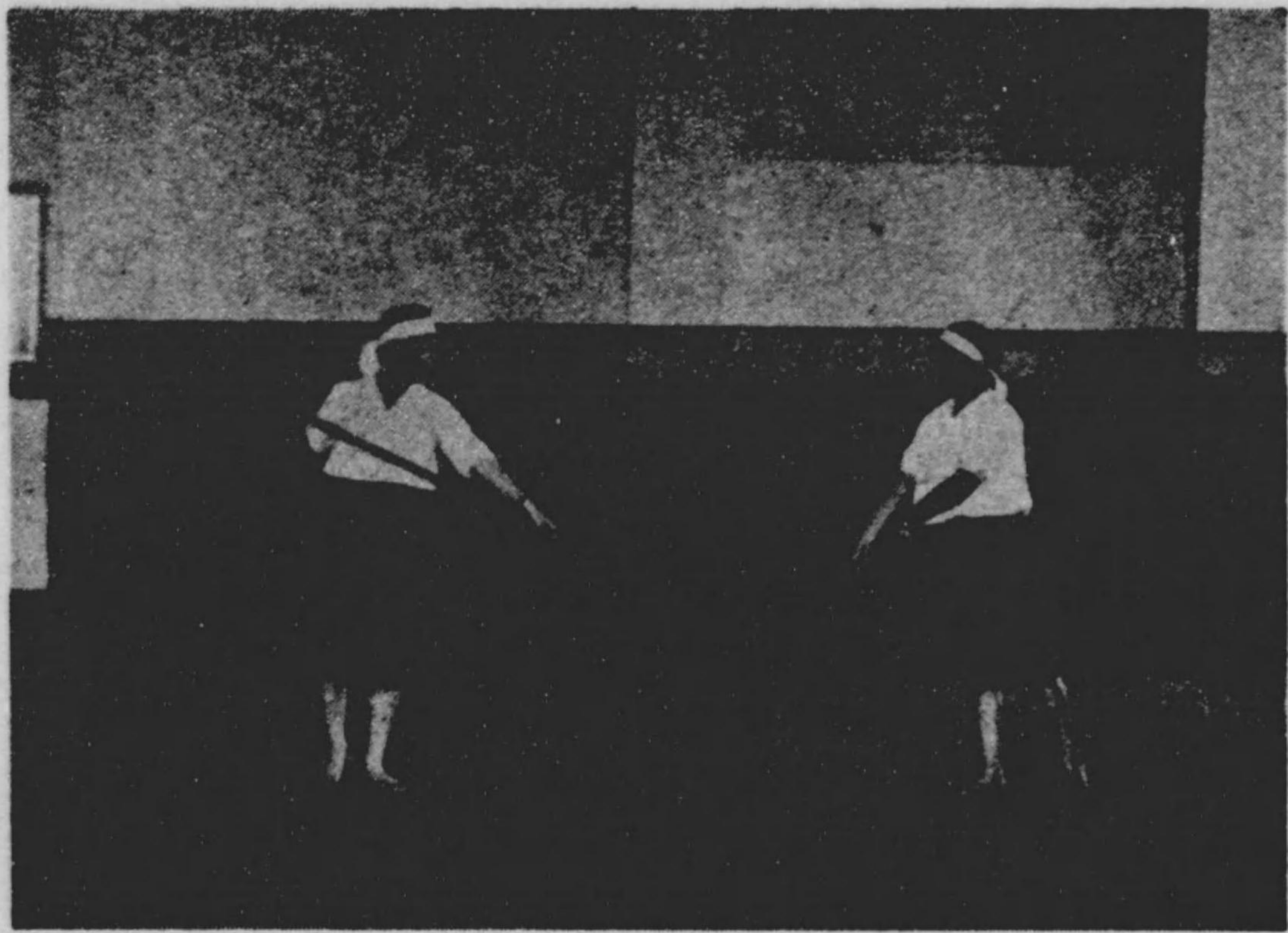
- (3) 薙刀を振返して右足を左足に寄せ交代して受の左足を切る。
 (3) 受太刀 右足を左足に寄せ交代して足を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞一〇五)



(六百眞寫)

(二) 面二本

- (4) 薙刀を振返し足を交代して正面を切る。
 (4) 受太刀 足を交代して正面を受け。互に「トー」と云ふ。(寫眞なし)
 (5) 薙刀を振返して足を交代して面を切る。
 (5) 受太刀 足を交代して面を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞一〇六)



(七百眞寫)

(ホ) 横面一本

(5) 薙刀を振返し足を交代して横面を切る。

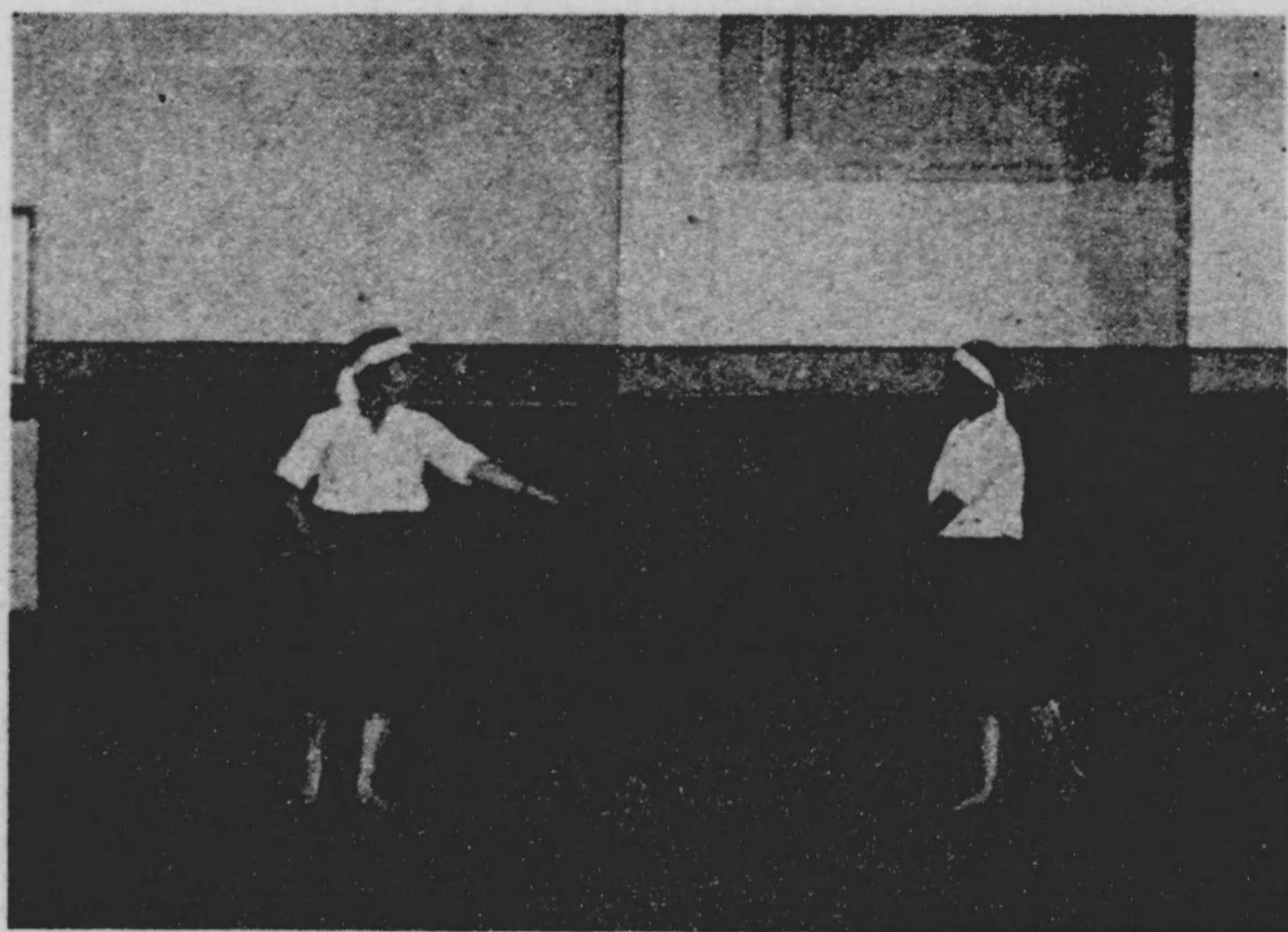
(5) 受太刀 足を交代して横面を受けろ。互に「トー」と云ふ。

(寫眞なし)

(へ) 太刀を捲落す

(6) 薙刀 横面を切りたる薙刀のむねを太刀に付けて捲落す。

注意 太刀を捲落す時は右足より引いて薙刀を少し繰込む。



(八百眞寫)

(6) 受太刀 卷落されたれば體は少し前へ倒して兩手をのばす。互に「ヤツ」と云ふ。

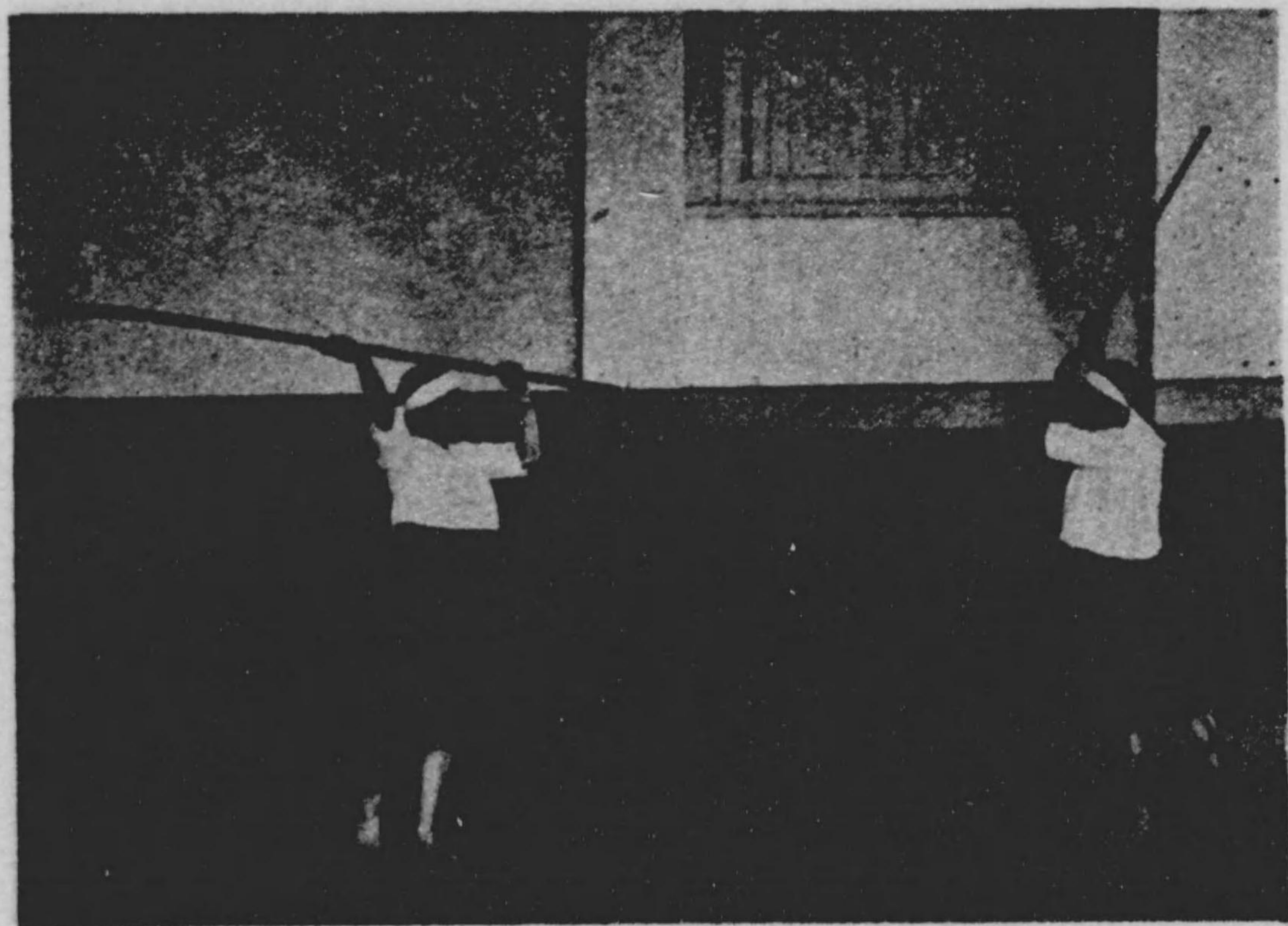
(寫眞一〇七)

(ト) 突く事

(6) 薙刀 太刀を卷落したれば左足を大きく一步進めて薙刀を繰出せるだけ繰出して受の咽喉部を突く。

(6) 受太刀 薙刀が突きくると同時に右足より引き體を元に復して劍先を右の方へ倒し互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一〇八)



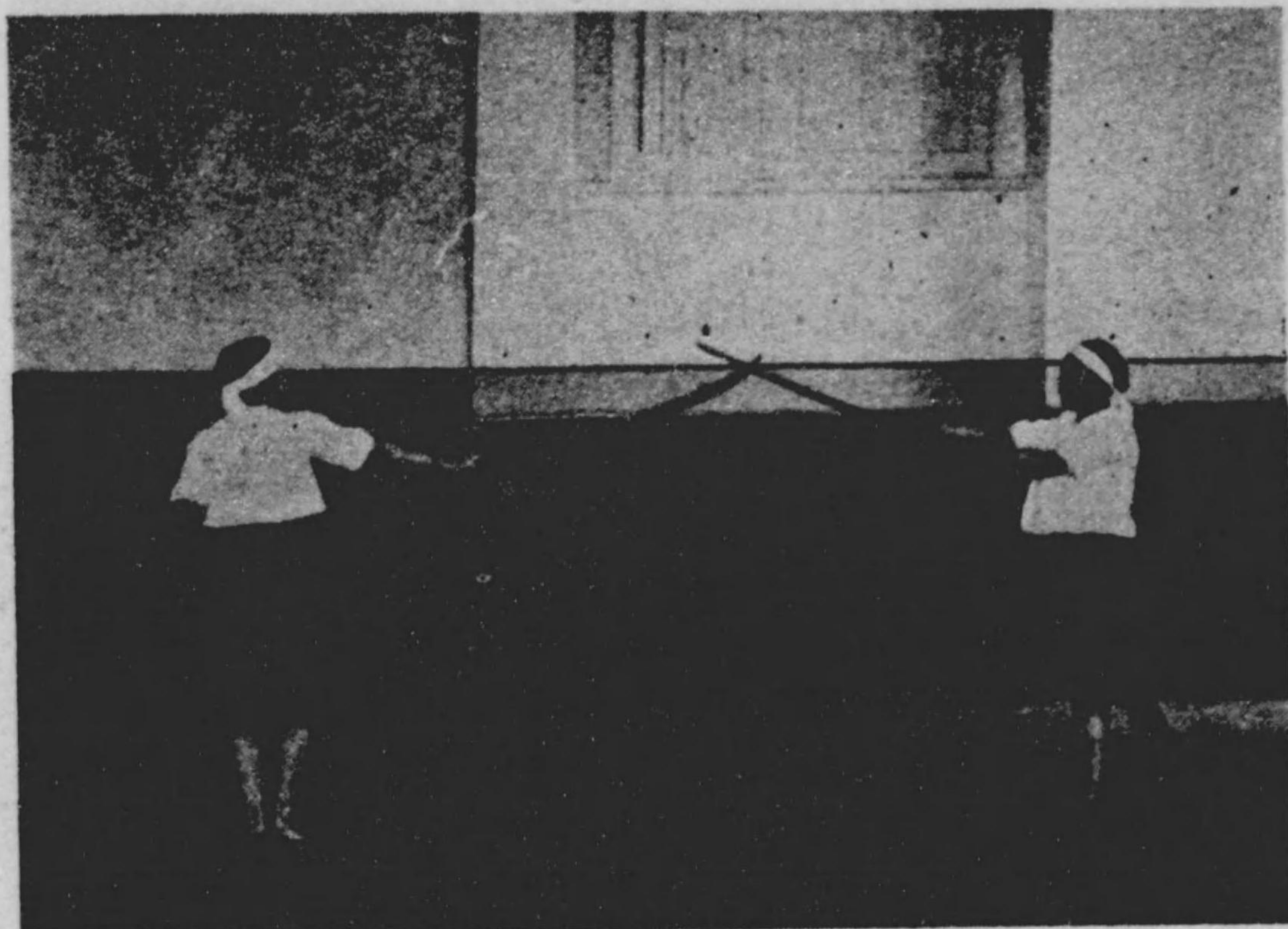
(九百眞寫)

(手) 面一本

- (7) 薙刀 突きたれば右足を左足に寄せ交代して薙刀を振返して面を切る
 (7) 受太刀 足を交代して面を受ける
 互に「トー」と云ふ。(寫眞なし)

(リ) 相上の構へ

- (8) 薙刀 面を切りたる薙刀は右足を引きて左手を右手の方へ少し寄せ劍先を右の方へ倒して刃を上に向けて上段に構へる。
 (8) 受太刀 右足を引きて上段に構へ

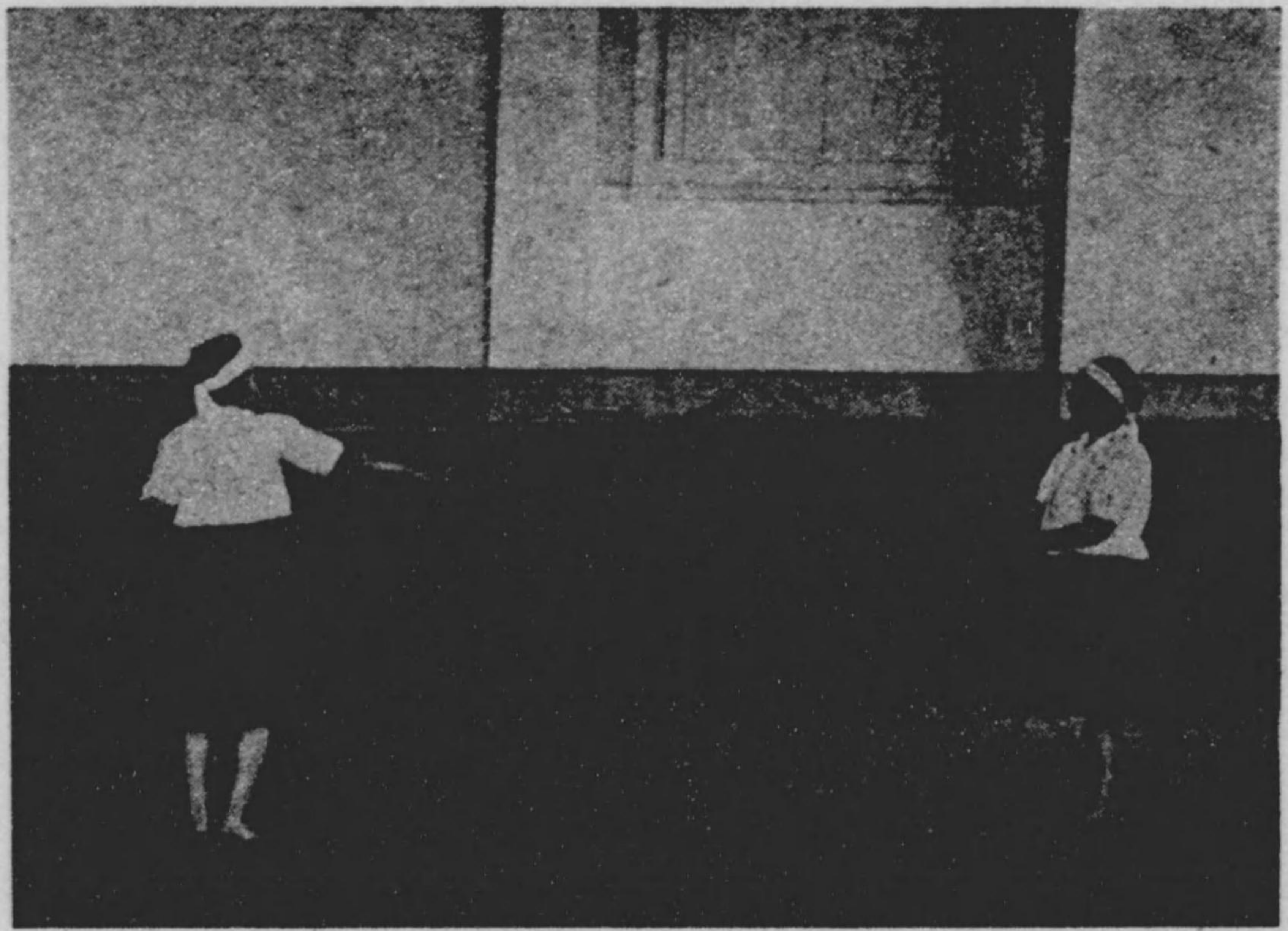


(十百眞寫)

る、之を相上段と云ふ。互に「ヤツ」と云ふ。(寫眞一〇九)

(又) 相打ちの事(面一本)

- (9) 薙刀 上段より右足を左足に寄せ交代して正面を切る。
 (9) 受太刀 左足を引き兩手をのばして薙刀の正面を切る。互に相打ちとなる。互に「エイツ」と云ふ。
 (寫眞一一〇)



(一十百眞寫)

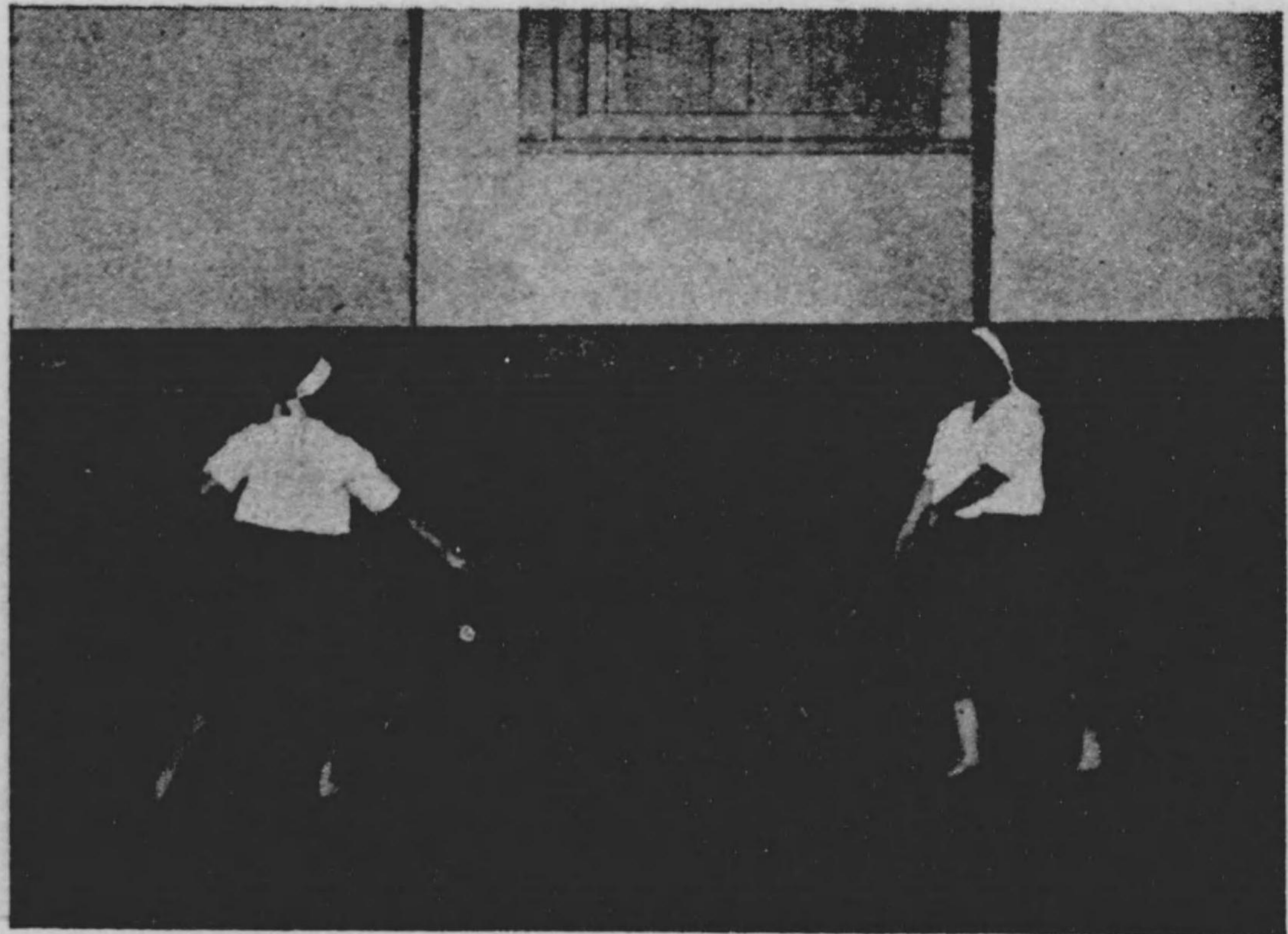
(ル) 残心の事

一四〇

(10) 薙刀 相打ちより左足大きく一步
引き右足共に左足の前まで引きて間
合を切り残心を示して左足を右足に
寄せ一足となして薙刀をカヒ。込みて
元に復す。

(10) 受太刀 相打ちより左足大きく一
歩引き右足を左足の前まで引き兩手
も共に引きて中段の構へとなりて太
刀を下段になすと同時に右足を左足
に寄せ一足となして元に復す。

(寫眞一一一)



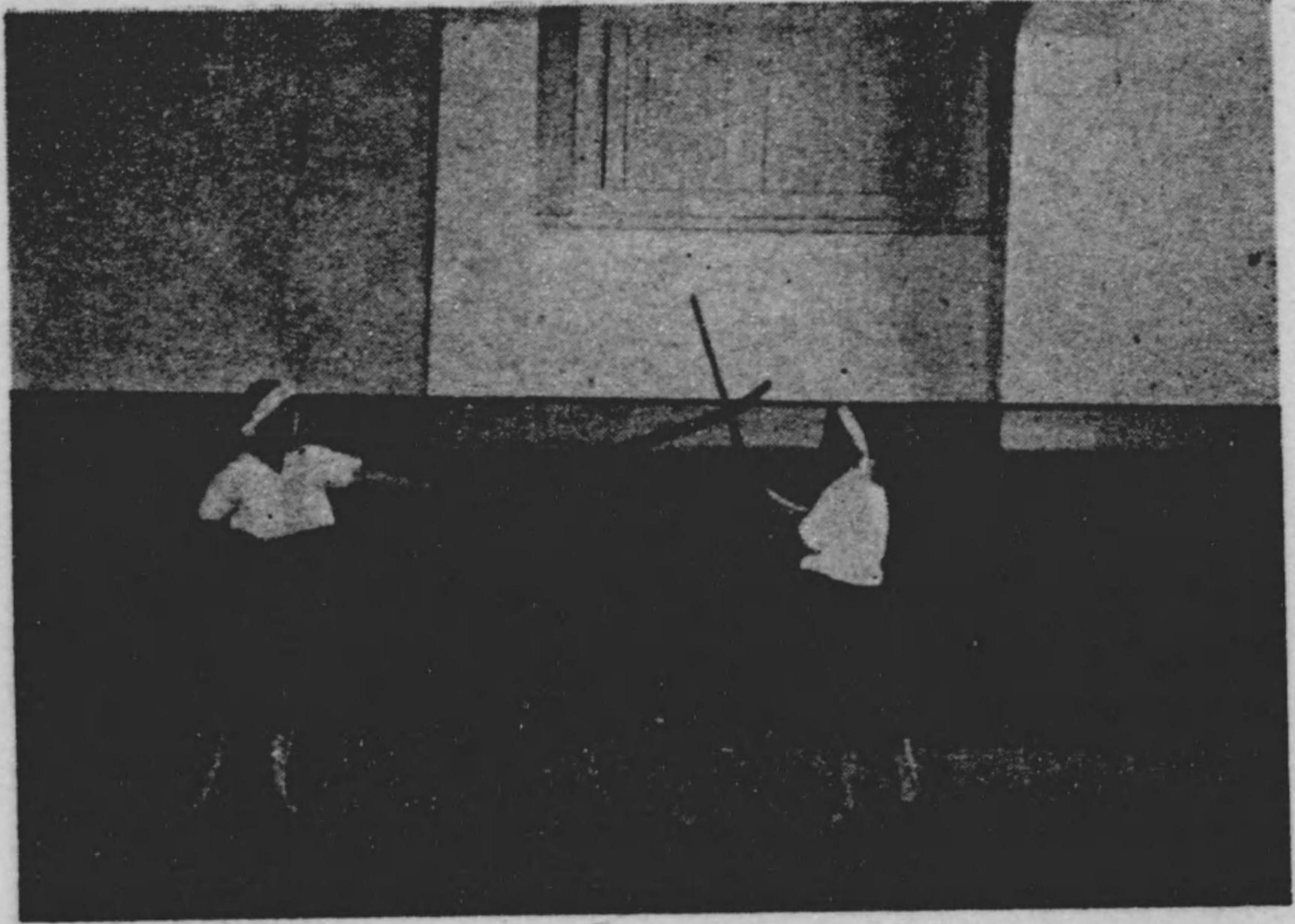
(二十百眞寫)

(共) 十六本目 突止

(イ) 脚一本

(1) 薙刀 左足引き薙刀を振返して受
の左足を切る。
(1) 受太刀 中段より右足を引き上段
に構へて「ヤツ」と云ふと同時に右
足を左足に寄せ交代して足を受ける
互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞一一二)

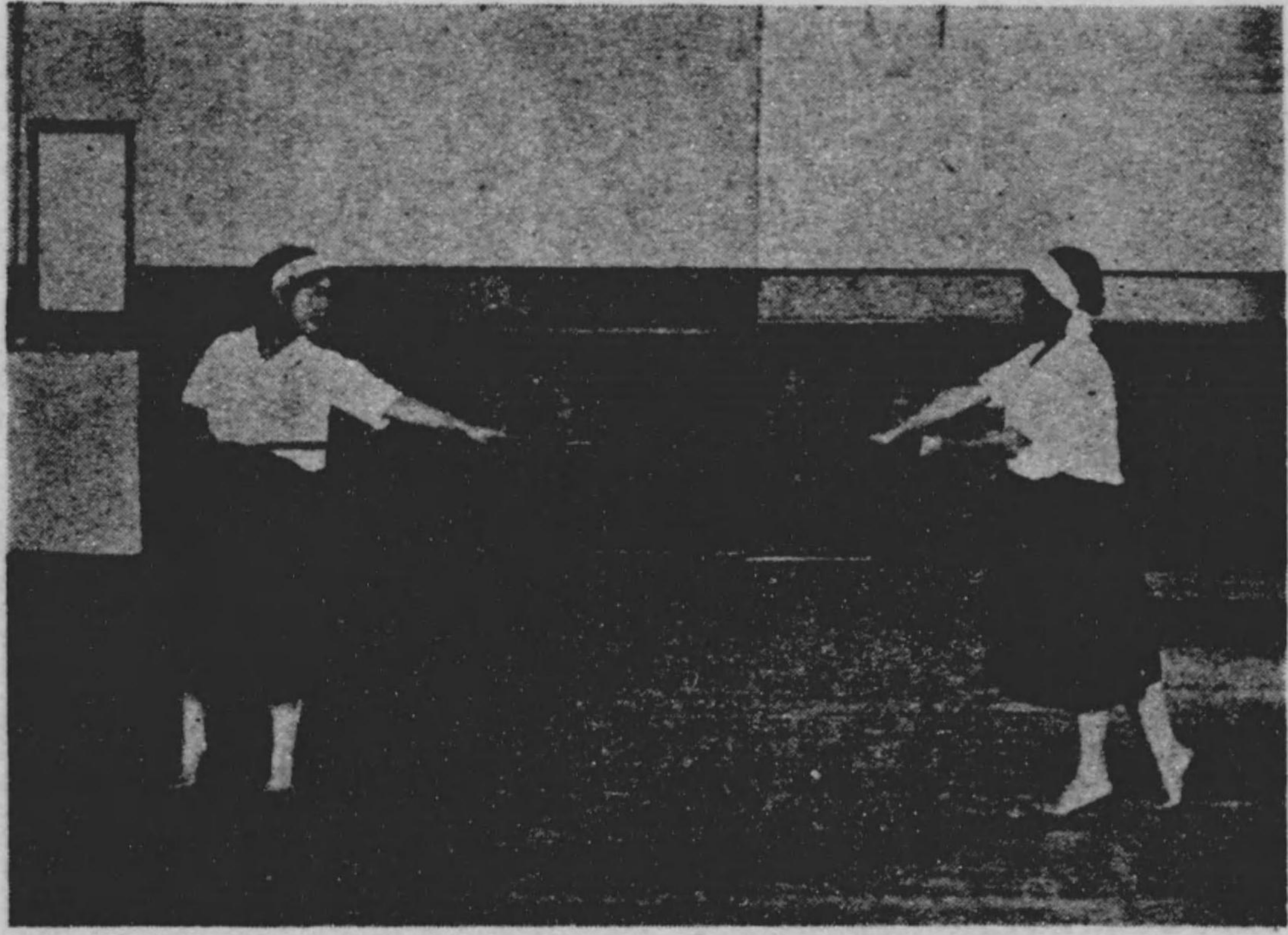
一四一



(三千百真寫)

(口) 面一本

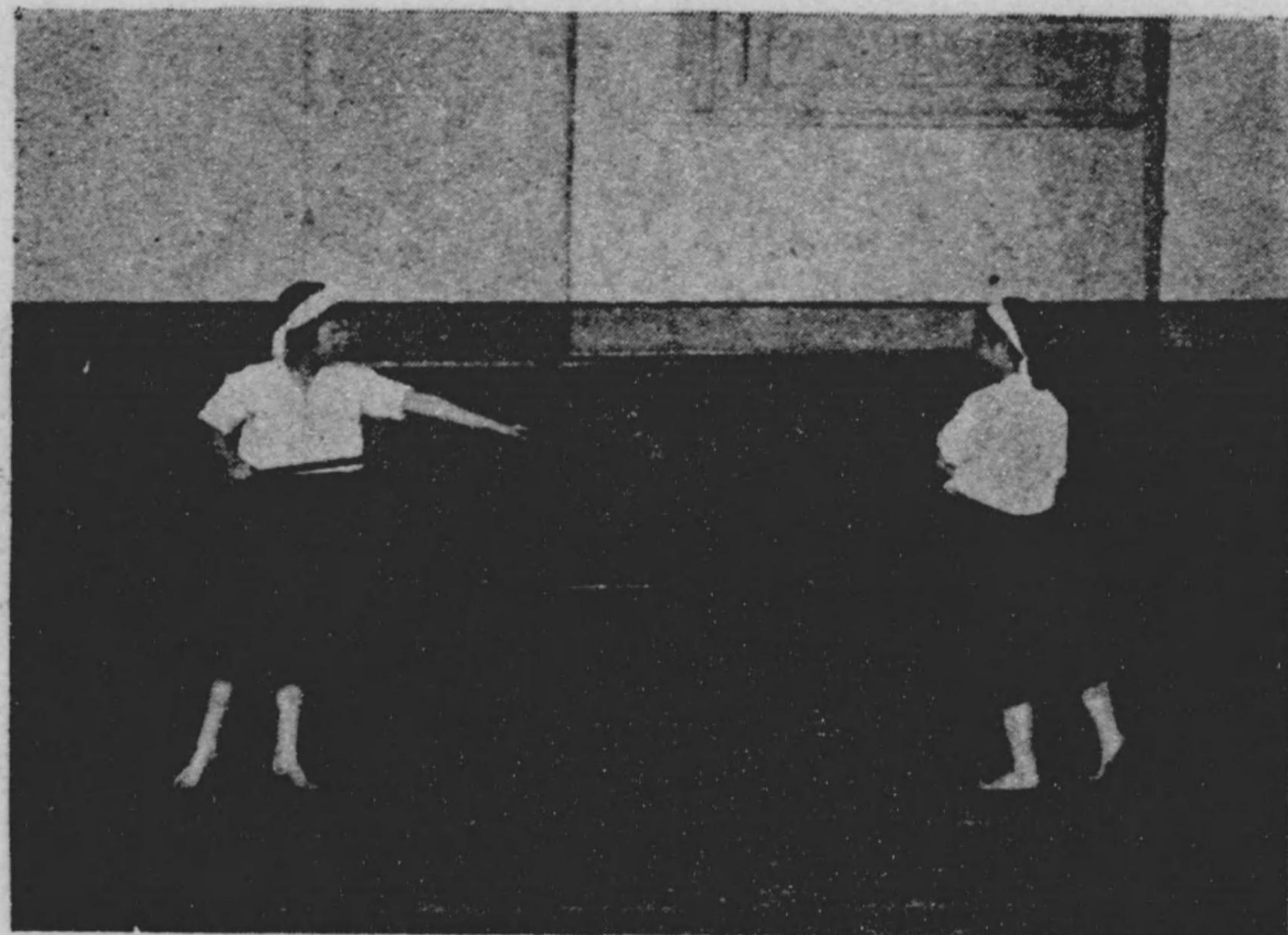
- (2) 薙刀 左足を右足に寄せ交代して
薙刀を振返して正面を切る。
- (2) 受太刀 左足を右足に寄せ交代し
て面を受ける。互に「トー」と云ふ。
- (寫真一一三)



(四十百真寫)

(ハ) 太刀を押さへる

- (3) 薙刀 面を切りたる左手は其まゝ
右手にて薙刀の刃を横になして鐔元
までオロスと同時に左手に力を入れ
體を少し前へ倒し劍先を受の胸の處
まで下げる。
- (3) 受太刀 面を受けたる太刀を左の
方へ向けて兩手を下げる。體は其ま
ま。互に「ヤツ」と云ふ。
- (寫真一一四)

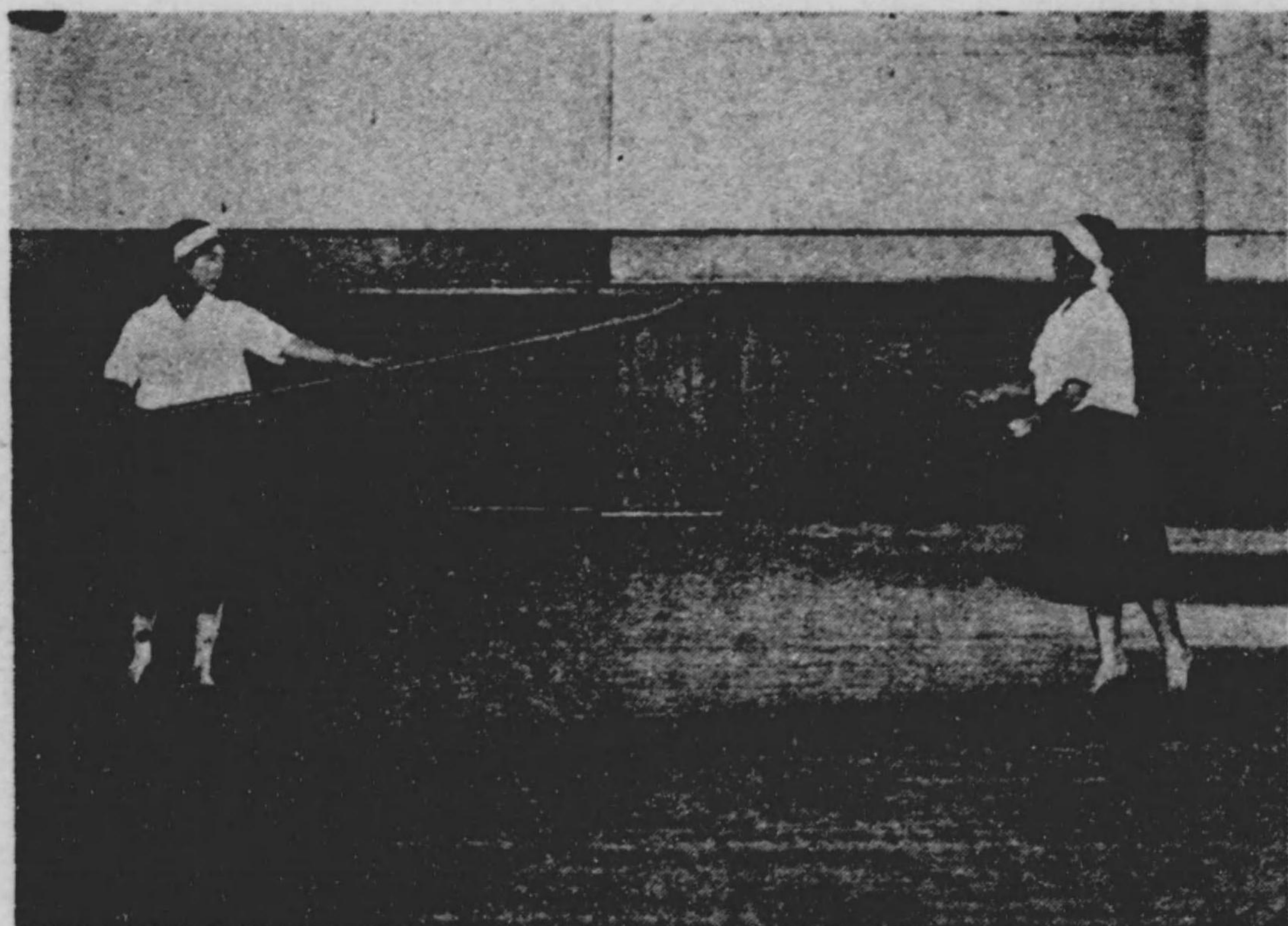


(五十百眞寫)

(二) 突き之事

(4) 薙刀 太刀を押へたれば刃を横になしたるまゝ兩手も其まゝにて左足より進みて胸部を突く。

(4) 受太刀 劍先を右の方へ倒して右足を引く。互に「エイツ」と云ふ。
(寫眞一一五)

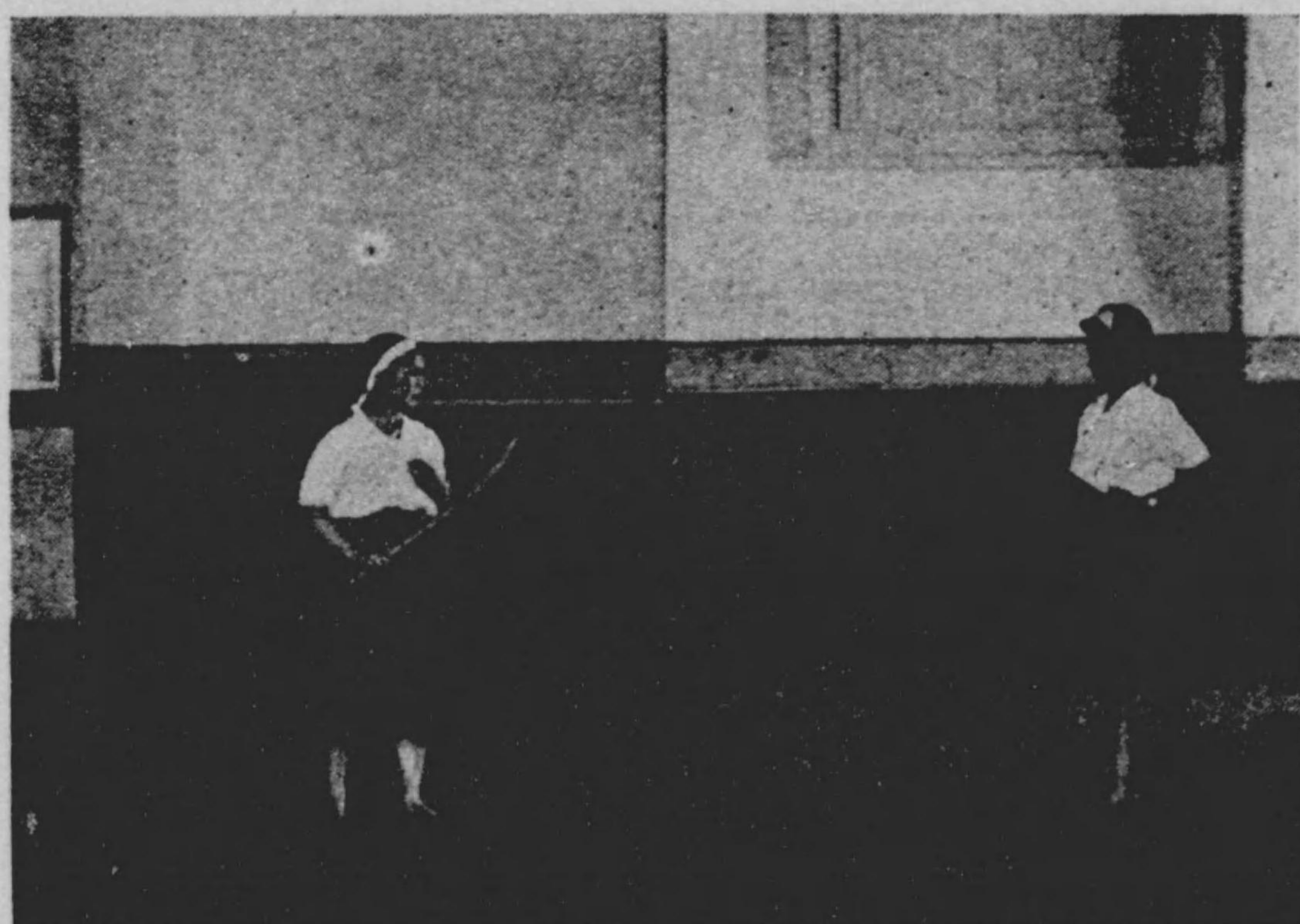


(六十百眞寫)

(木) 殘心

(5) 薙刀 右足より引くと同時に薙刀の刃を下にし殘心を示して右手と左手とを持ちかへて右足を左足に寄せ一足となりて元に復す。

(5) 受太刀 左足を引くと同時に太刀を中段にして殘心を示し下段となすと同時に右足を左足に寄せて一歩となりて元に復す。(寫眞一一六)



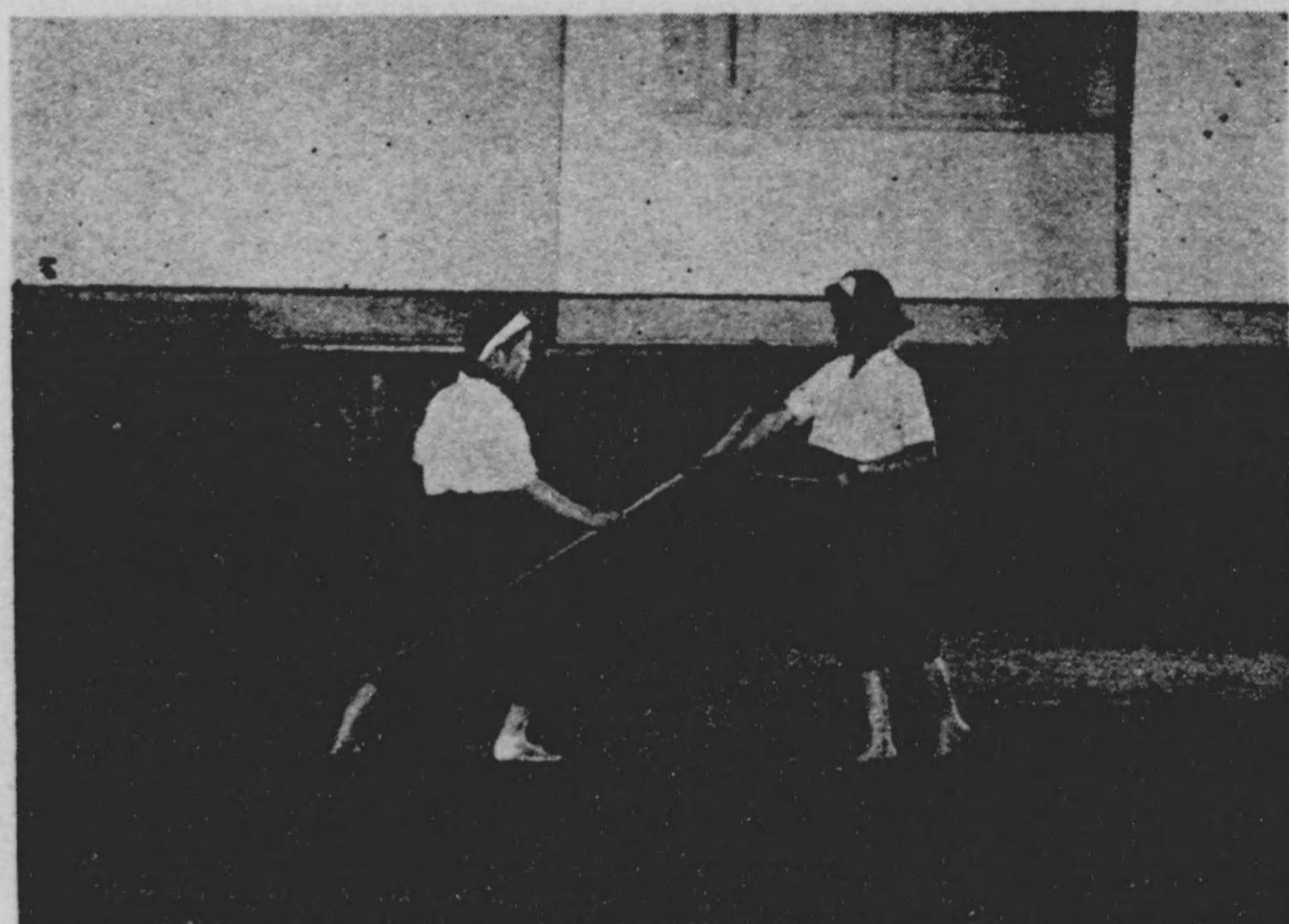
(七十百眞寫)

(十七) 十七本目 柄止

注意 此の形は薙刀受太刀共に鞘に納めある心にて使ふべし。

(1) 柄止の構へ(流す)

(1) 薙刀 オリシキの禮をなしたる處より左足から五歩引きて五歩目の左足にて一足となり、カヒ込みる薙刀の右手の前を左手にて持つと同時に右足を少し引き石突を後へながして右手を薙刀の刃の少々したを持つて左手を胸の處へをく。

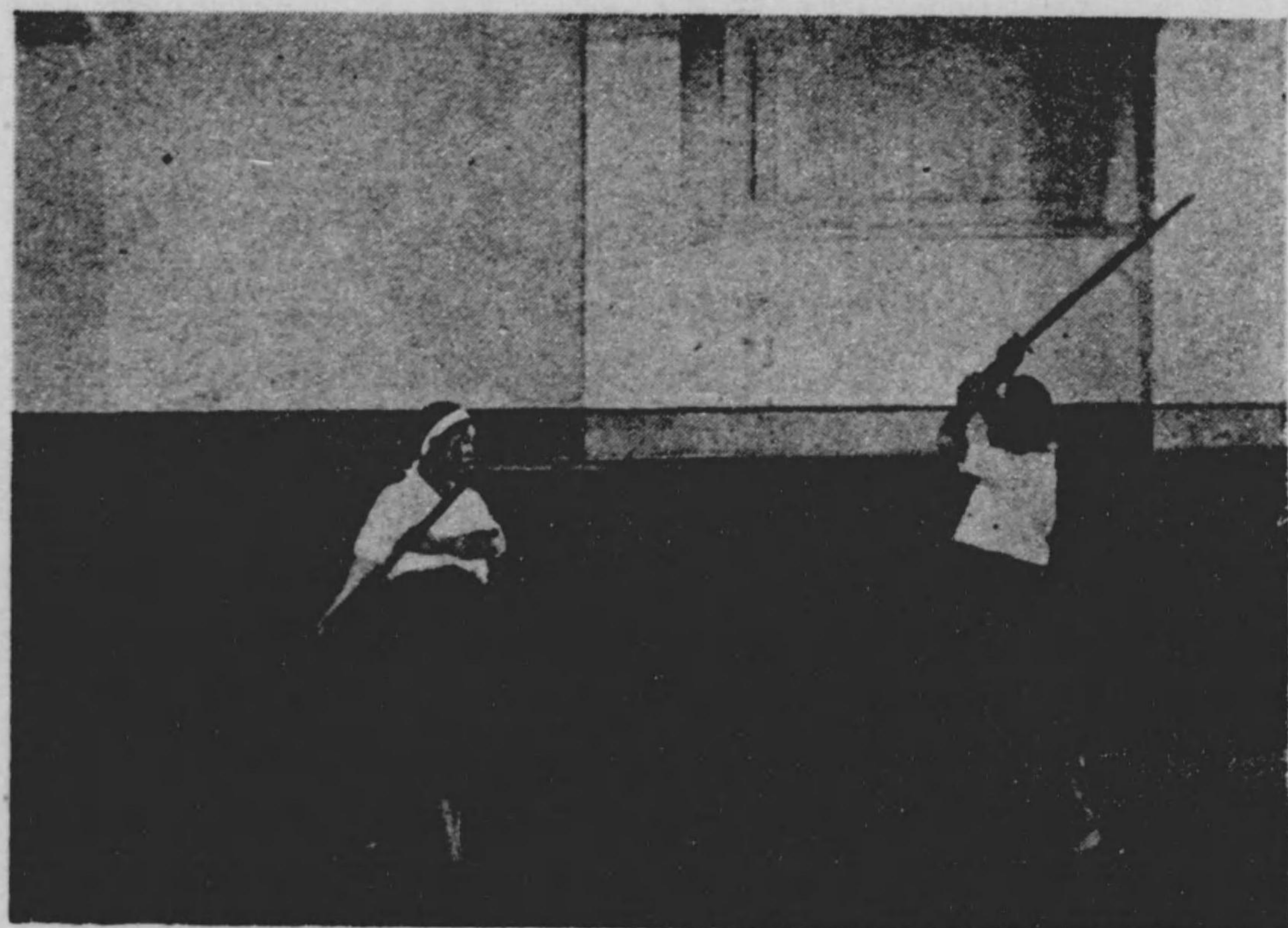


(八十百眞寫)

(1) 受太刀 之もオリシキの處より左足から太刀を下段にして五歩退き五歩めの左足を引く時に一足となりて太刀を右手にて左脇に納めると同時に左足を少々引く、右手は袴の相引の處を持つ。(寫眞一一七)

(口) 三步進む

(2) 薙刀 五歩引く處より大きく左右左と三步進めて受太刀が太刀を抜くと同時に右足を大きく一步進めて受の右手を押へる。
 (2) 受太刀 五歩引きたる處より大きく



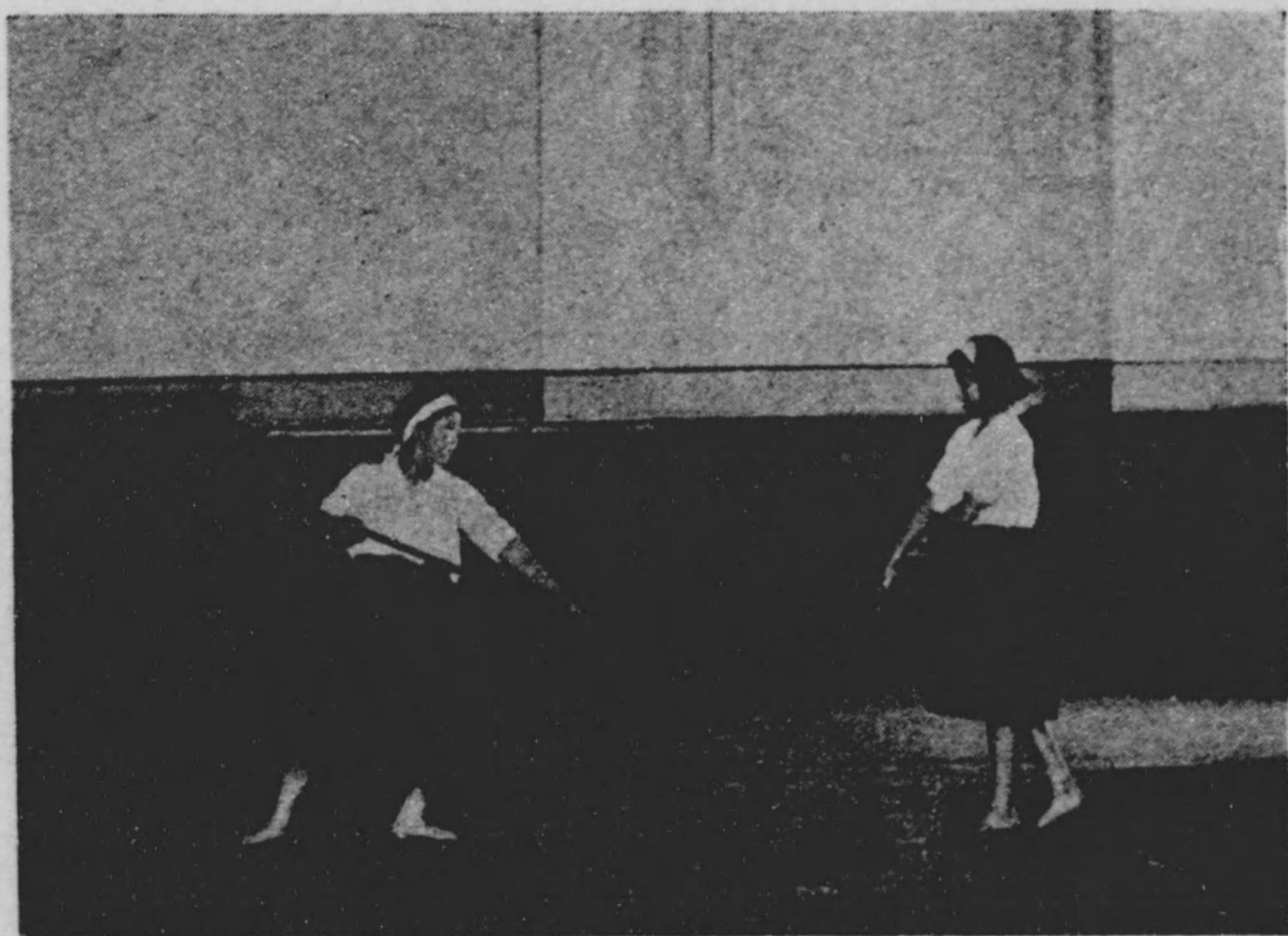
(九十百眞寫)

く左右左と三步進みて右手を鏢元に
かけて抜く處を薙刀で押へられる。
互に三步進みたる處にて「エイツ」
と懸聲をして太刀を抜く時に互に
「ヤツ」と云ふ。(寫眞一一八)

(ハ) 甲手を押へる

(ニ) 互に鞘より抜く事

(3) 薙刀 太刀をおさへし薙刀を右足
大きく一步引くと同時に劍先を前よ
り後へ倒して右手をのばし、左手を
右手の前にかけて右足を左足の後まで



(十二百眞寫)

引くと同時に右手を左手の方へ薙刀
持ちたるまゝ勢よく引くと同時に鞘
を抜く、左手は軽くして居る。

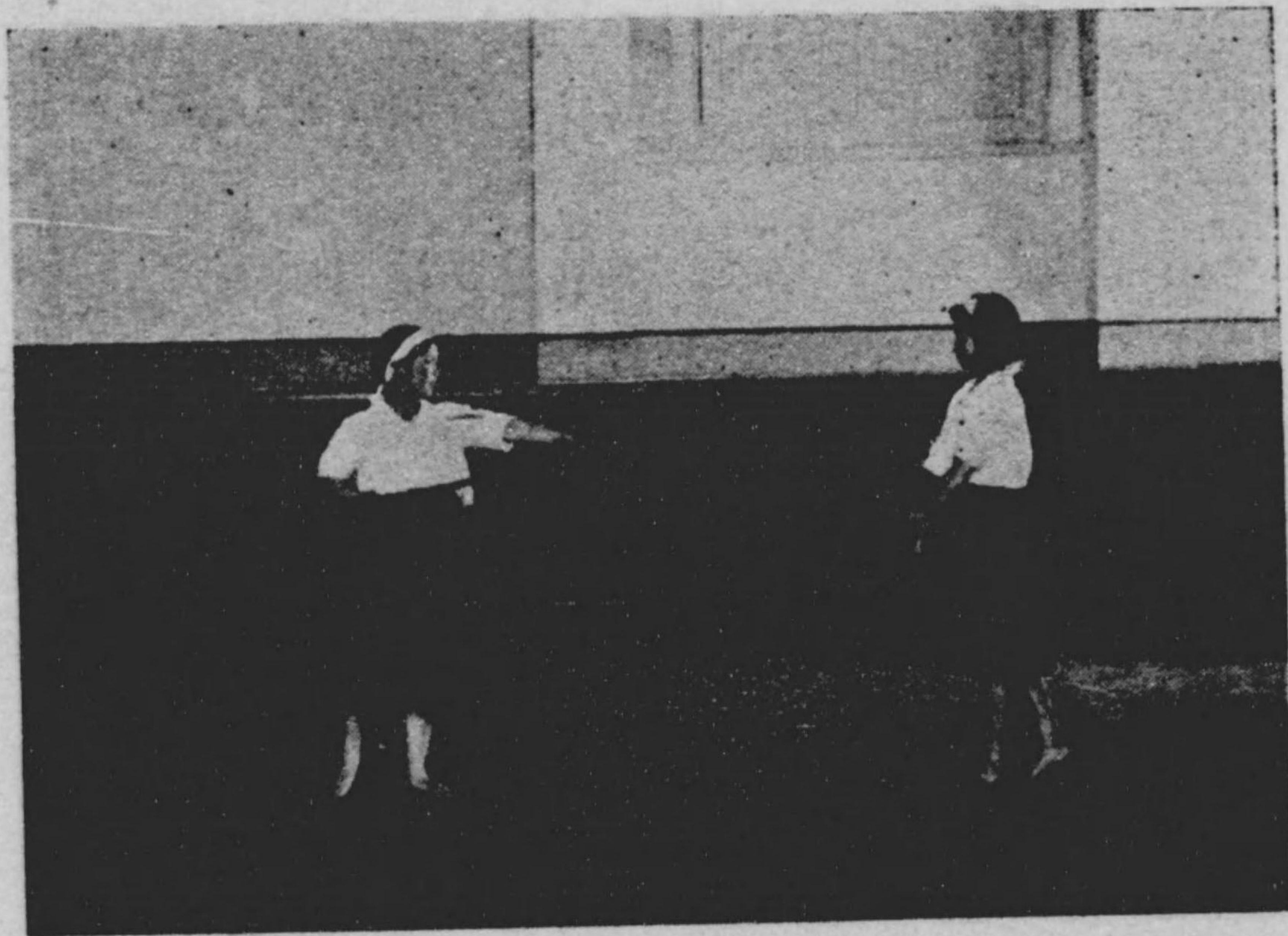
(3) 受太刀 軽く薙刀を引きたれば太
刀を抜きて右足引き上段に構へる、
互に鞘を抜く時に「トー」と云ふ。

(寫眞一一九)

(ホ) 足二本

(4) 薙刀 鞘を抜きたれば右足を左足
に寄せ交代して面を切る。

(4) 受太刀 右足を左足に寄せ交代し
て足を受ける。互に「エイツ」と云



(一十二百 眞寫)

ふ。(寫眞なし)

(5)(5)

薙刀 足を交代して面を切る。
受太刀 足を交代して足を受ける
互に「ト」^一と云ふ。(寫眞一二〇)

注意 薙刀二本目の足を切る時は

右足を少し引く、大きく引
かぬ様に氣を付けるべし。

注意 受太刀右足を受ける時に右

足大きく引かぬ様にすべし。

(へ) 突一本

(6)

薙刀 受太刀の右足を切りたる時
足の開きが少きゆゑ左足進めるだけ
進めると同時に刃を左横にして胸の

處を突く。

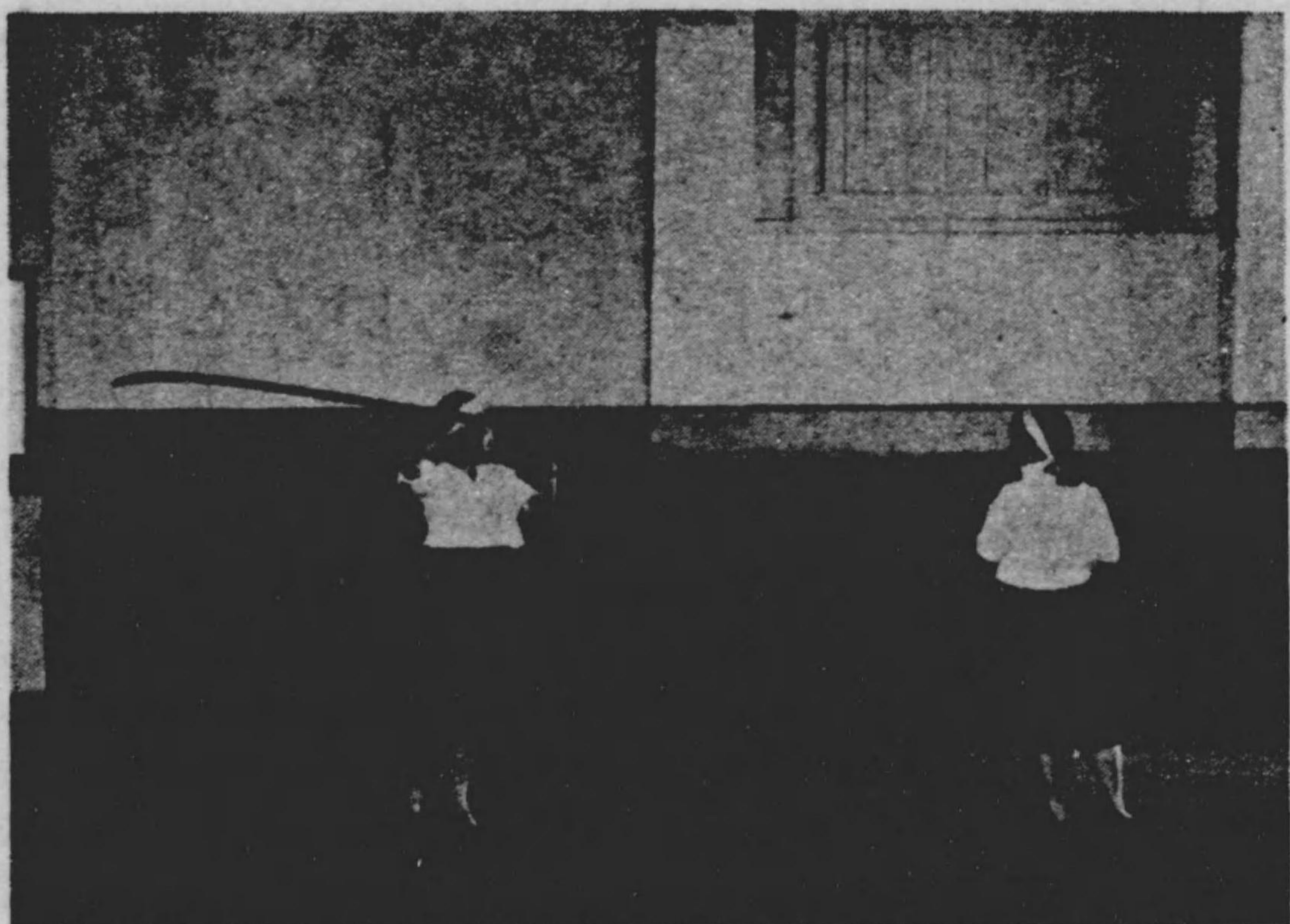
(6) 受太刀 右足を引けるだけ引いて劍先を右の方へ倒し、互に「エイツ」
と云ふ。(寫眞一二一)

(ト) 殘心の事

(7) 薙刀 右足より引くと同時に薙刀の刃を下に向けて殘心を示し、右脇に

カ。カ。込む、足は一足となる。

(7) 受太刀 左足を引くと同時に太刀を中段として殘心を示し下段にして足
を一足となして元に復す。



(二百二十三頁寫)

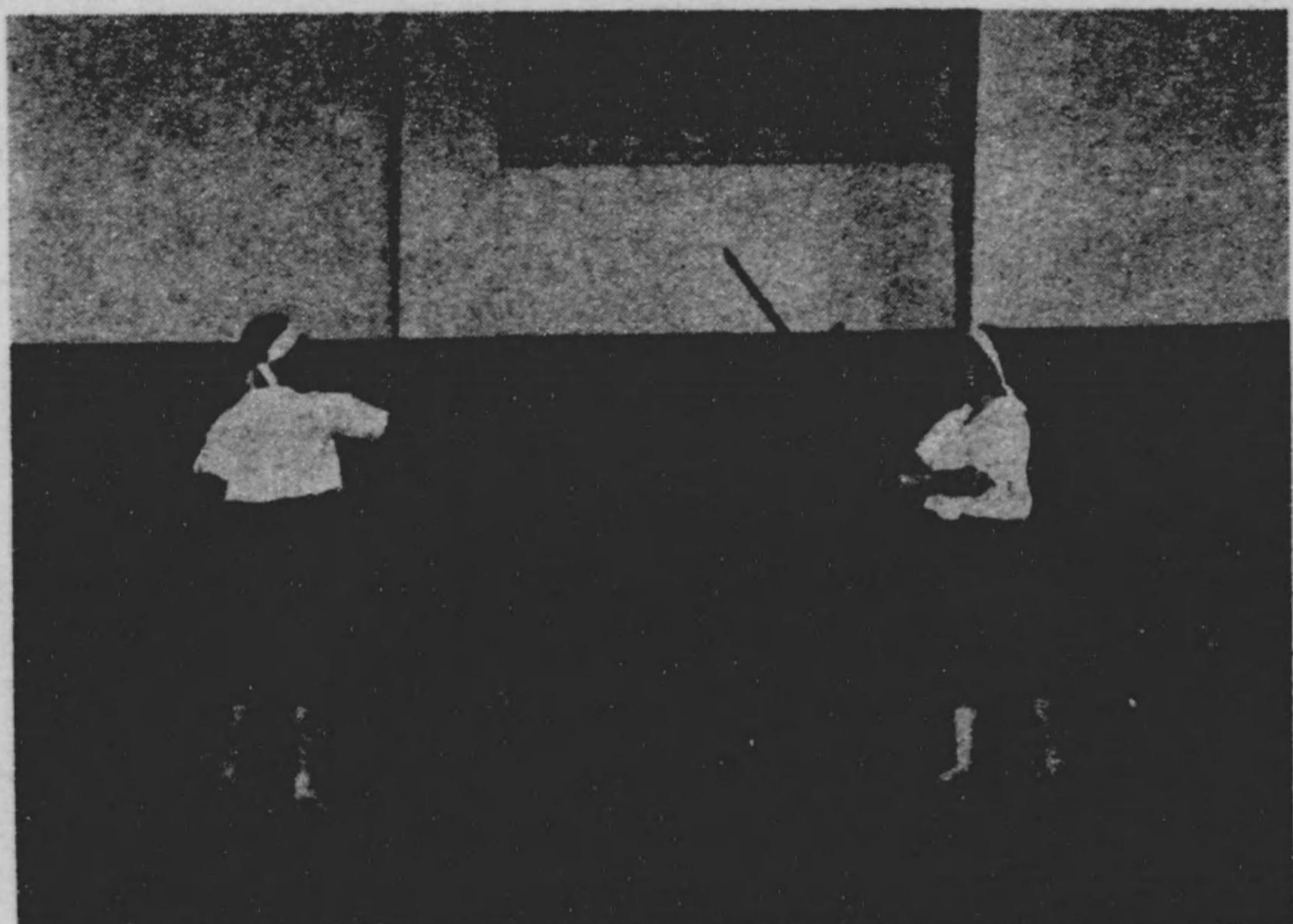
(六) 十八本目 水車

(1) 水車の横構へ(構へ)

- (1) 薙刀 カ。込みし薙刀の刃を上にして右足を引くと同時に脇より薙刀を取りて左手で石突の方を握り眼より三寸の處まであげて水平に構へる
- (1) 受太刀 中段より右足を引くと同時に太刀先を右の方へ倒して脇構へとなる。「エイツ」と云ふ。

(寫真一二二)

注意 受太刀は中段の時に「ヤツ



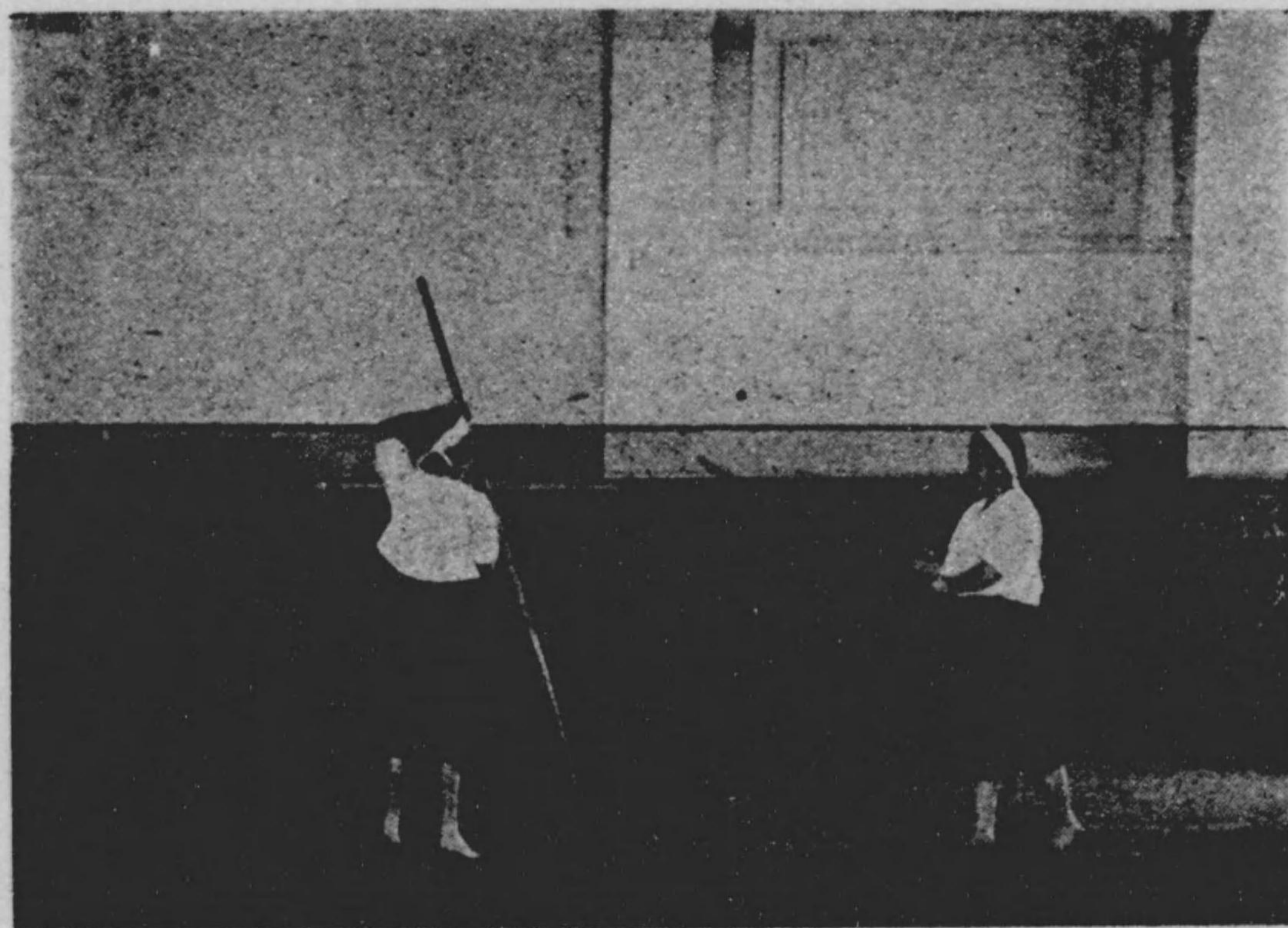
(二百三十三頁寫)

(口) 面一本

- (2) 薙刀 構へた薙刀を上段にあげると同時に右足を左足に寄せて交代して正面を切る。
- (2) 受太刀 右足を左足に寄せ交代して薙刀をかるくはねる様にして面を受ける。互に「トー」と云ふ。

(寫真一二三)

と云ふと同時に脇構へとなる。



(四十二百 眞寫)

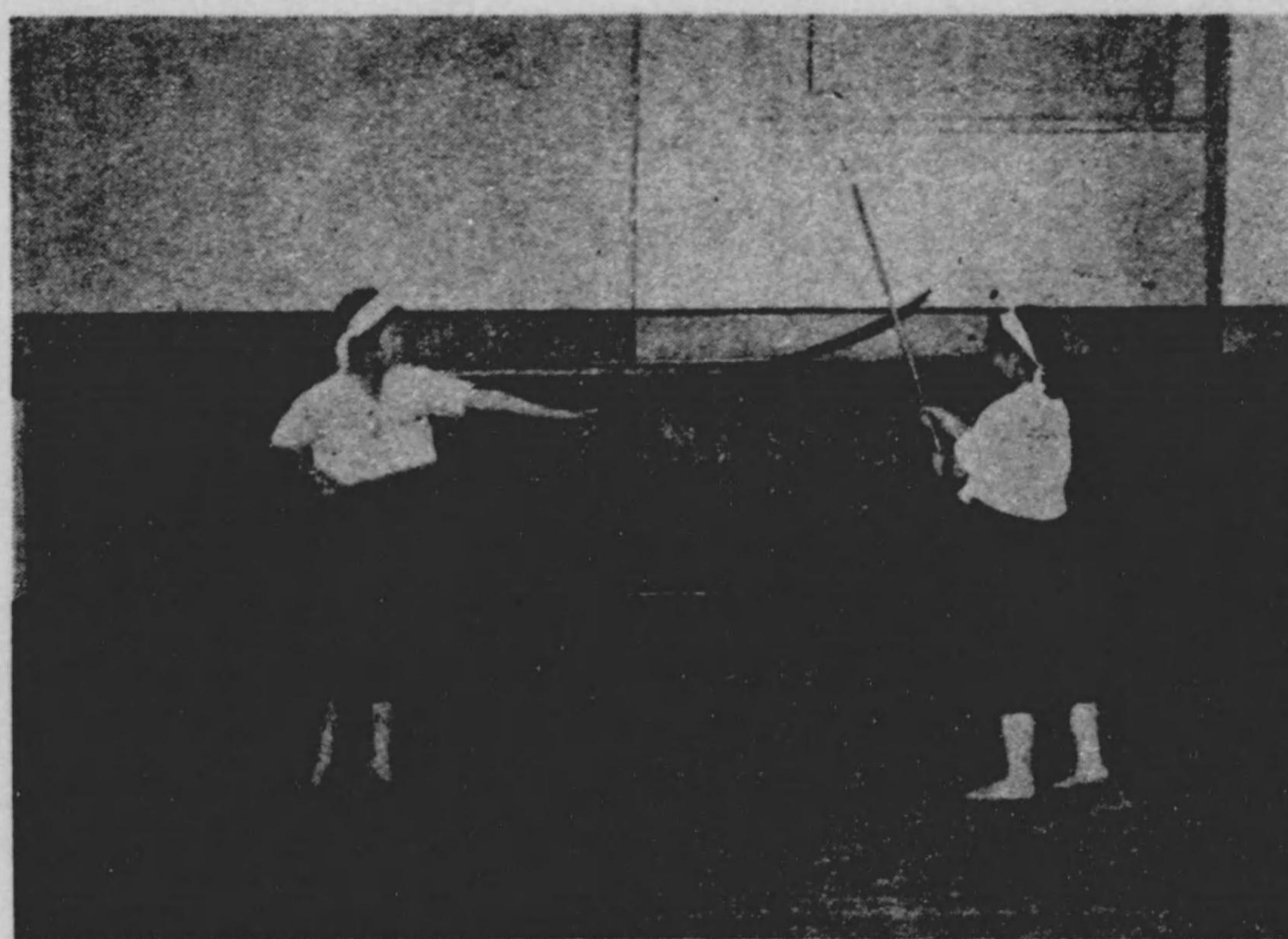
(ハ) 水車の振返の事

一五四

(3) 薙刀 體は其まゝにて薙刀を人差指にてハサミ、右手を左手の方へ引くと同時に劍先を下げ左手を右手の方へ寄せて左足一步引くと同時に薙刀を振返して左足を一步進める。

注意 左足引く時は右足共に左足の處まで引いて腰を少しさげる。

(3) 受太刀 面を受けたる太刀をさげて劍先を右の方へ倒して振返す。互に「ヤツ」と云ふ。(寫眞一二四)

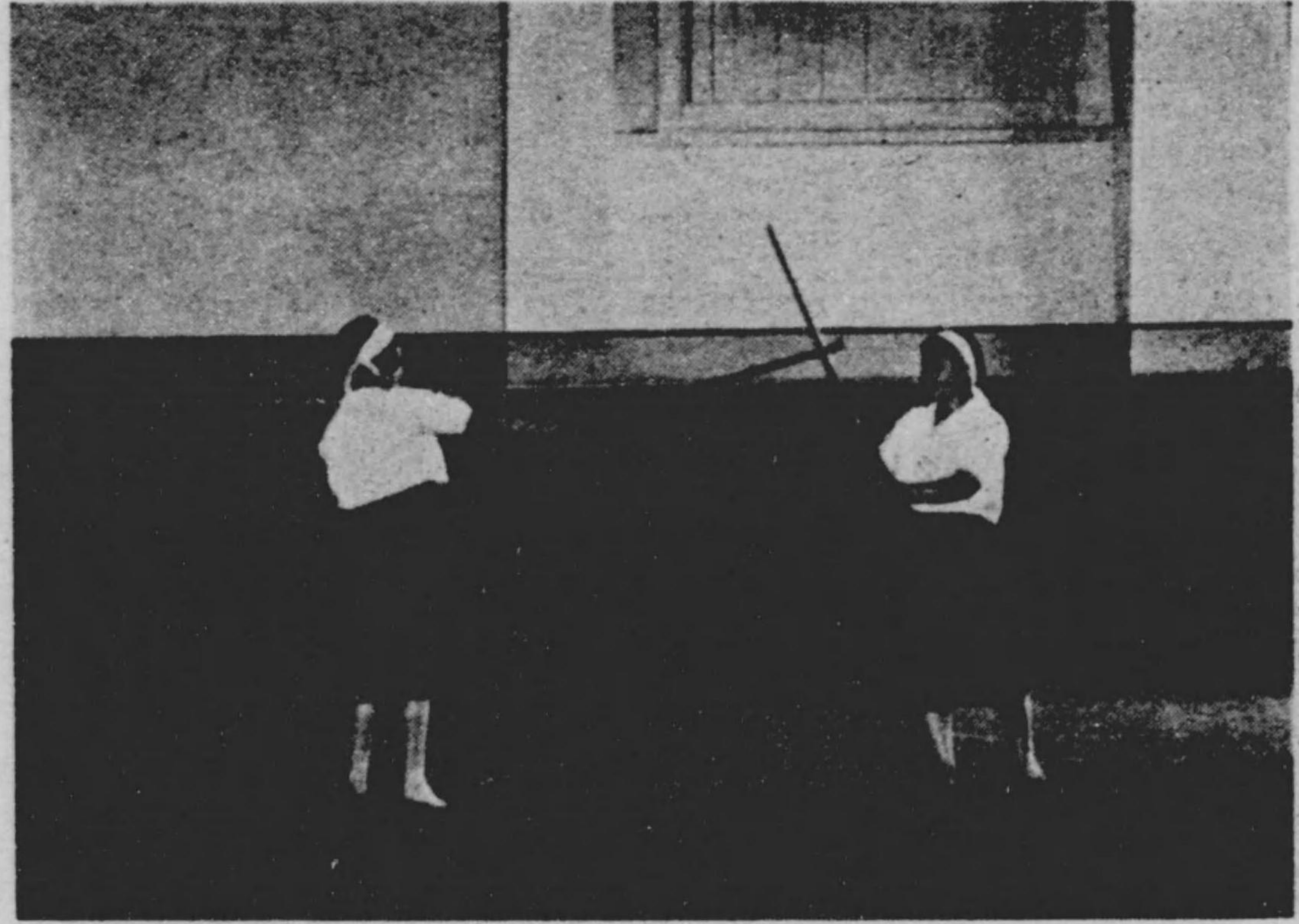


(五十二百 眞寫)

注意 受太刀、薙刀振返す間は力をぬかね様にすべし。

(ニ) 面一本

(4) 薙刀 前頁の寫眞の如くに振返して左足一步進めると同時に正面を切る
 (4) 受太刀 左足を右足に寄せ交代して面を受ける。互に「エイツ」と云ふ。(寫眞一二五)



(六十二百 眞 寫)

(ホ) 石突にて横面一本

一五六

(5) 薙刀 左手は其のまゝにて右手にて薙刀を繰込む、又右手を左手の方へ寄せて石突を繰出し右足一步進めて横面を打つ。

(5) 受太刀 左足を一步引きて石突を軽くをさへる、互に「トー」と云ふ。

(寫眞一二六)

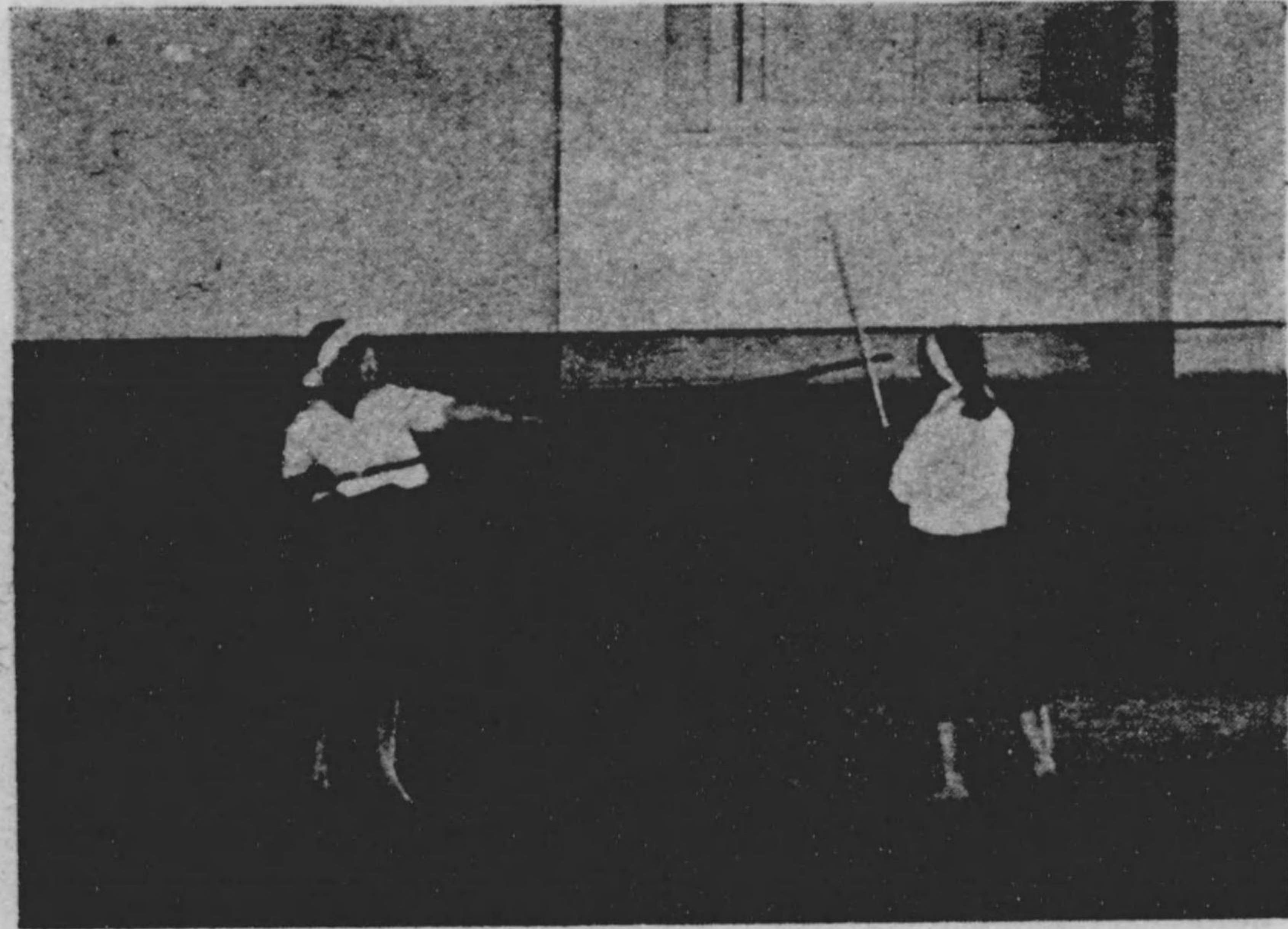
(ヘ) 横面一本

(6) 薙刀 足を交代して薙刀を繰出し刃を横にして横面を切る。

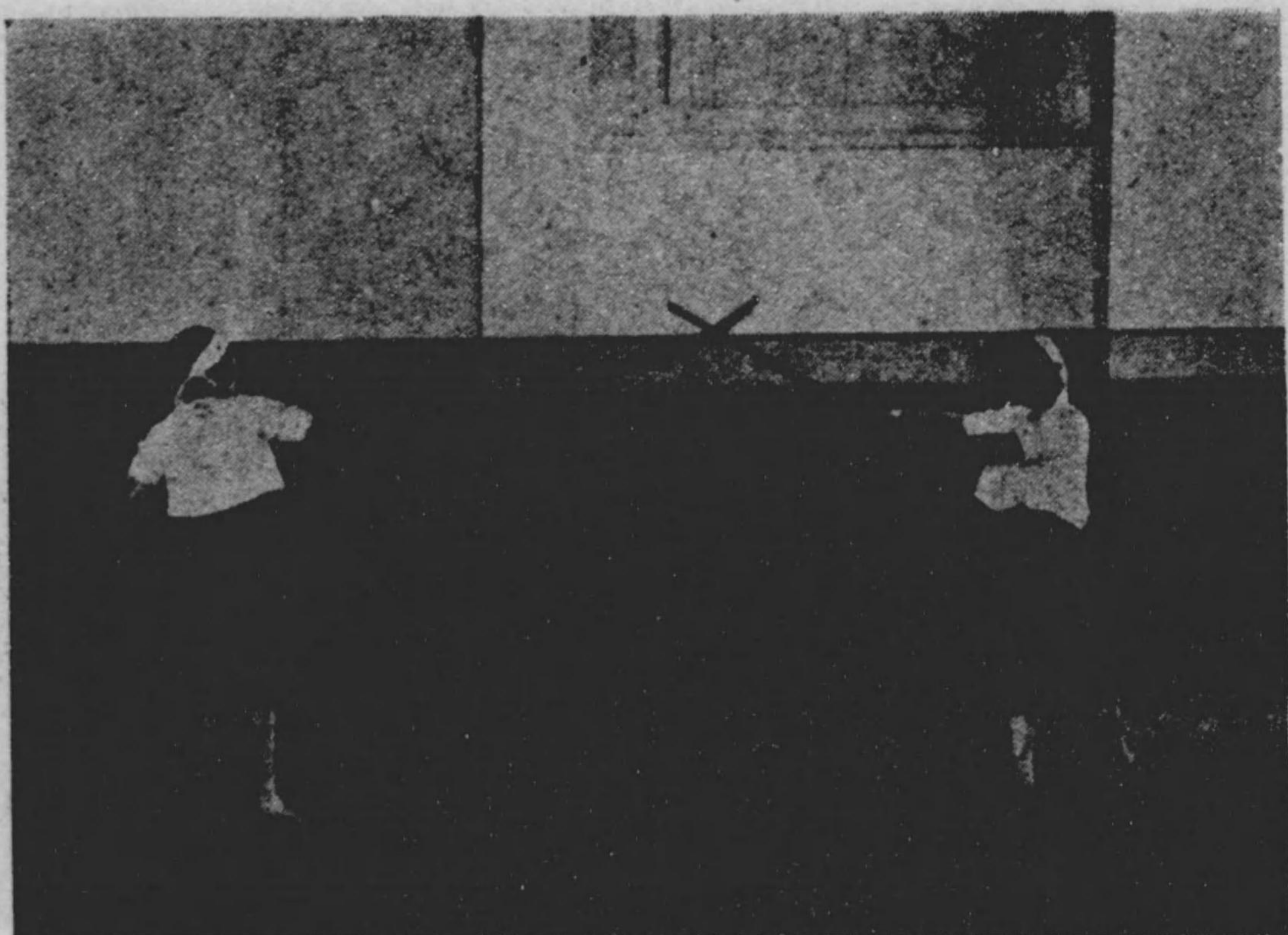
注意 薙刀を繰出す時は左手を右手の方へ寄せて右手を石突の方へ引く。

(6) 受太刀 足を交代して體を少々横むきになして横面を受ける。互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一二七)



(七十二百 眞 寫)



(八十二百 眞 寫)

(ト) 相打の事(面一本)

(7) 薙刀 振返し足を交代して正面を切る。

(7) 受太刀 足を交代して太刀を上段になすと同時に両手を伸ばして薙刀の正面を切つて互に相打ちとなる。互に「ト」と云ふ。

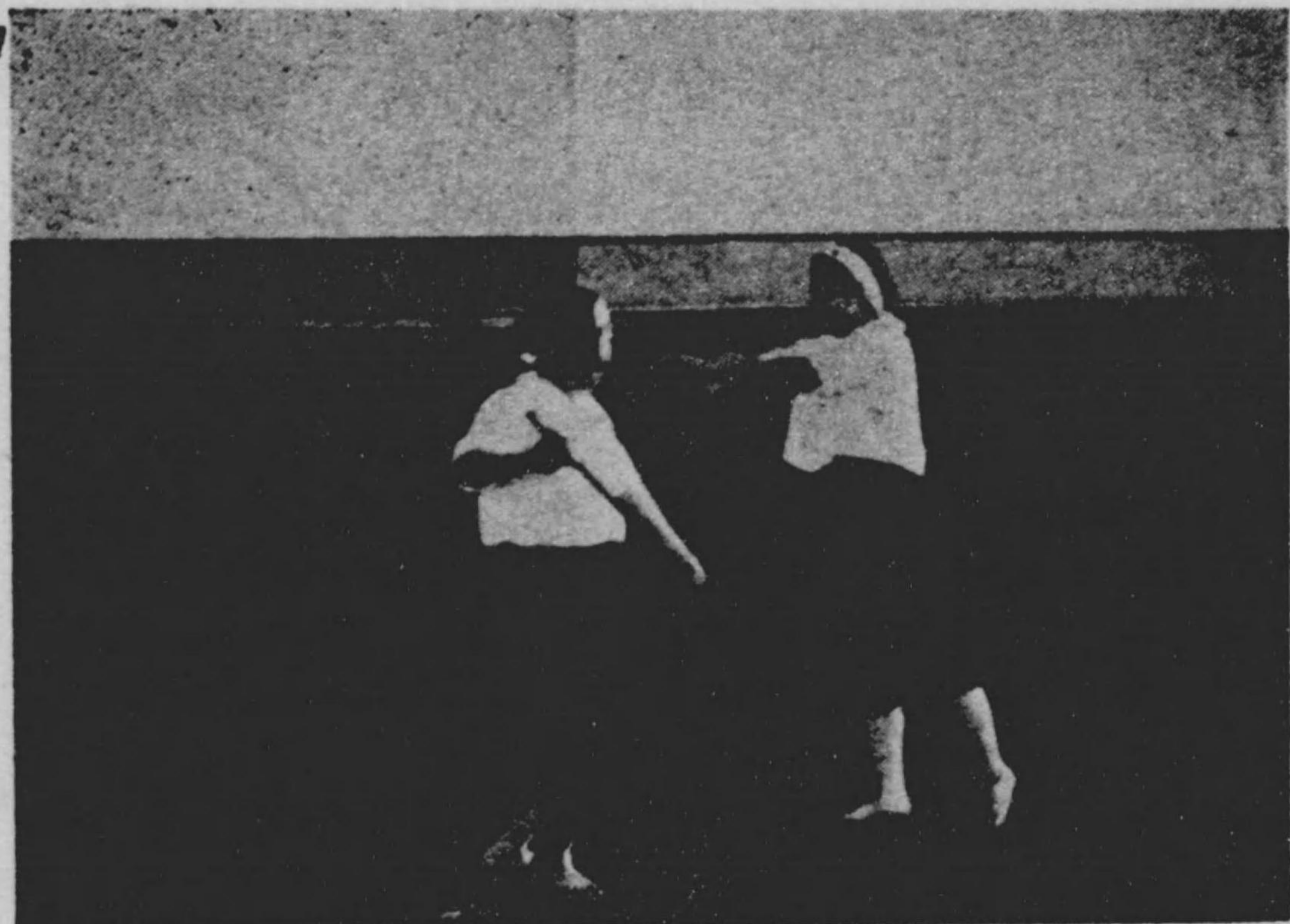
(寫眞一二八)

(チ) 残心の事

(8) 薙刀 左足より一步引くと同時に、右足共に左足の前まで引いて劍先を少々さげて残心を示し左足を右足に

寄せて一足となす、同時に薙刀を右脇にか。込みて元に復す。

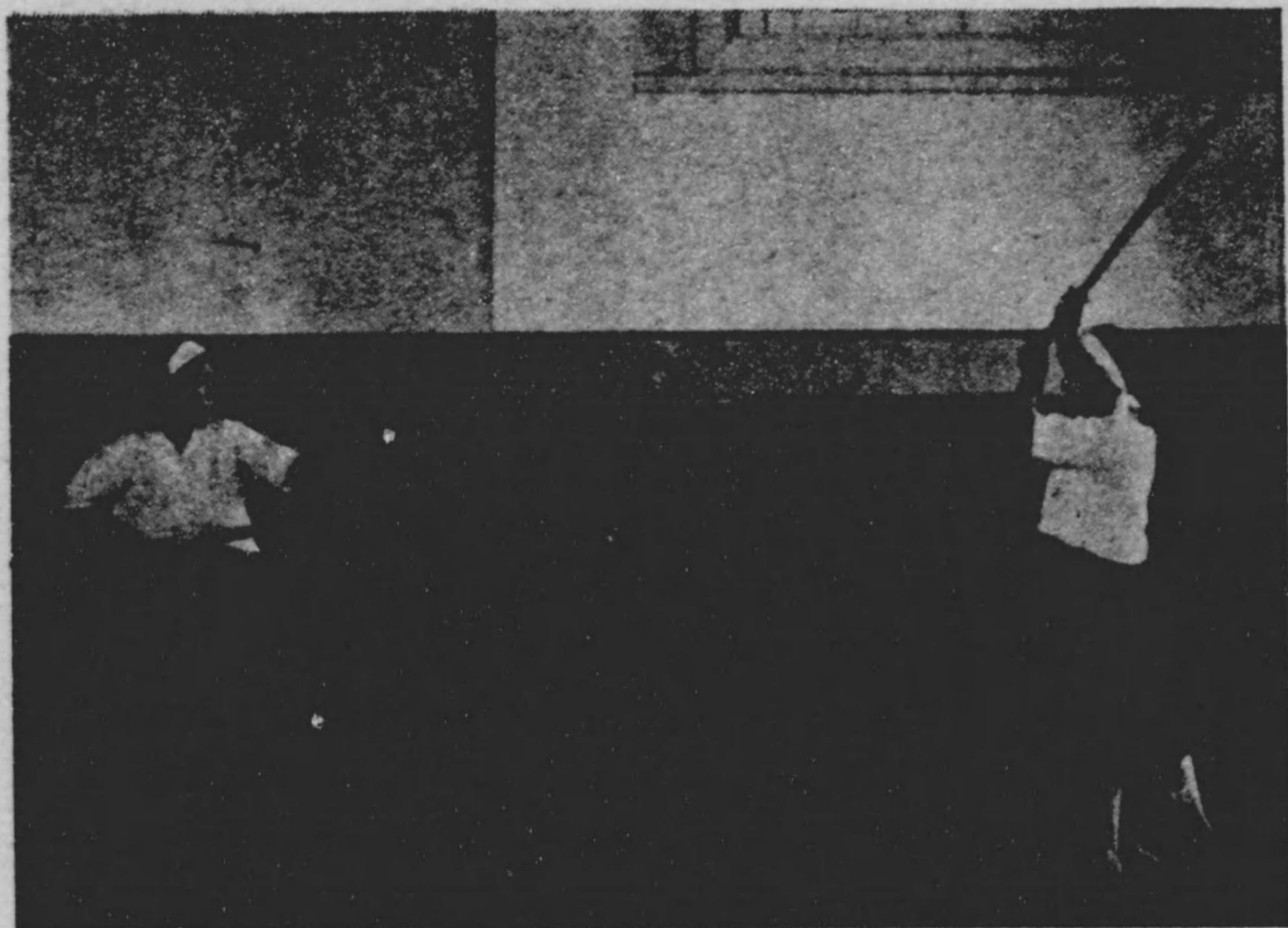
(8) 受太刀 左足より一步引くと同時に右足を左足の前まで引き両手も引き、中段となして残心を示し右足を左足に寄せて一足となす、同時に劍先をさげて下段になして元に復す。



(十三百眞寫)

(2) 受太刀 上段より右足一步大きく
進め、左足共に右足の後まで進めて
薙刀の正面を切る。

(2) 薙刀 受太刀が面にくる時右足大
きくナ。メ。前に進めると同時に、左
足も共に右足に寄せて兩足の膝を開
き腰を少々さげ薙刀を持ちたる兩手
は其まゝにて刃を受太刀の方へ向け
て薙刀を少々右の方へ引く心持にて
兩手を前へ伸ばして受の右足を切る
互に「エイツ」と云ふ。(寫眞一三〇)



(九十二百眞寫)

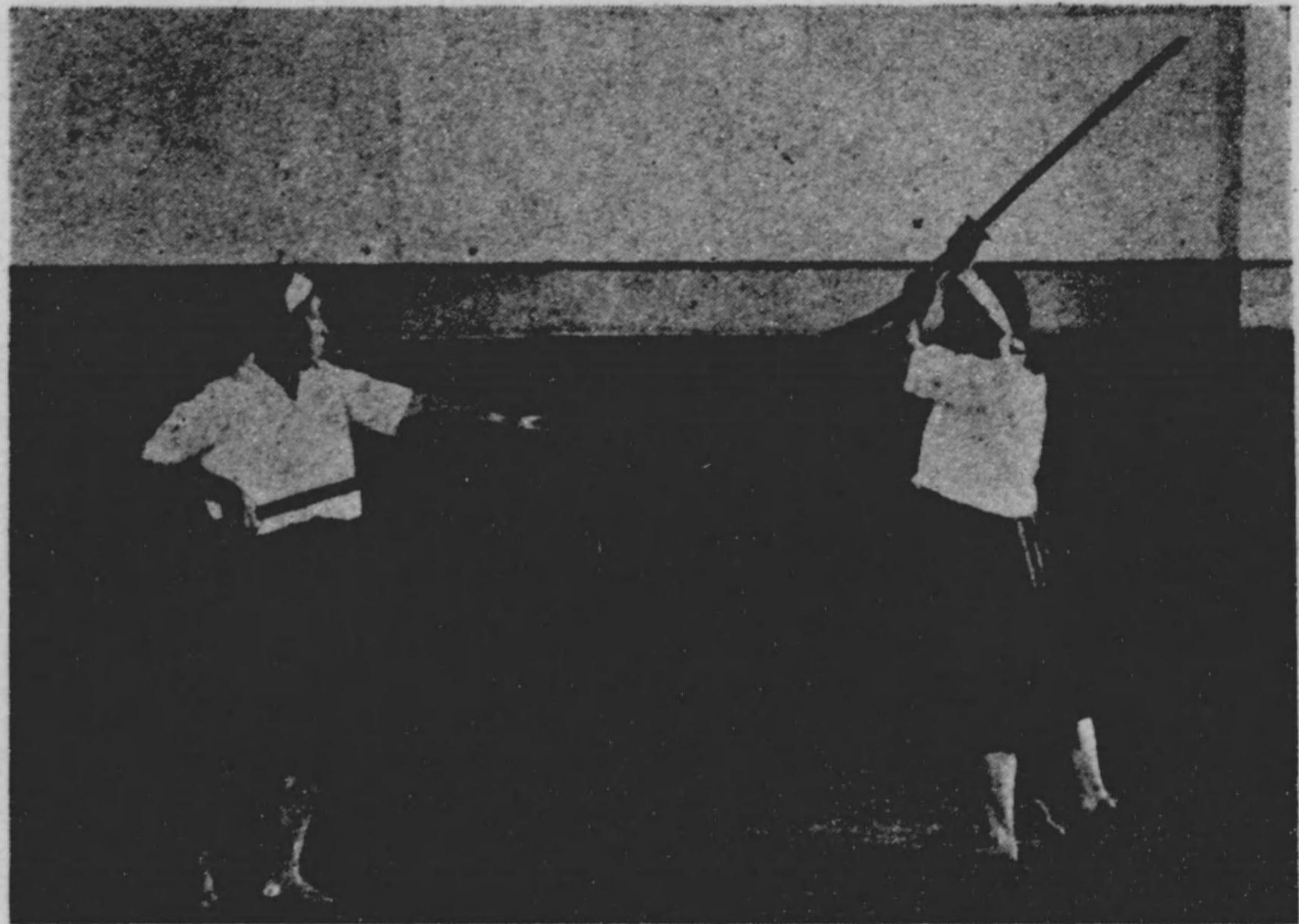
(元) 十九本目 拔止

(1) 拔止の構へ(中段の構へ)

(1) 薙刀 左足を少々引きて中段の構
へとなす。

(1) 受太刀 中段より右足少々引き上
段に構へて「ヤツ」と云ふ。

(寫眞一二九)



(一十三百 眞寫)

(ハ) 甲手一本

(3)

受太刀 面を切りたる太刀を上段に構へると同時に右足をナ。メ。後に引く、左足も共に右足の前まで引く

(3)

薙刀 受太刀が上段になして引く時に左手を上へ伸ばして左足一歩大きく進め右足共に左足の後まで進めて受の左手の動脈を上より切る。互に「トー」と云ふ。

(寫眞一三一)

(ニ) 残心の事

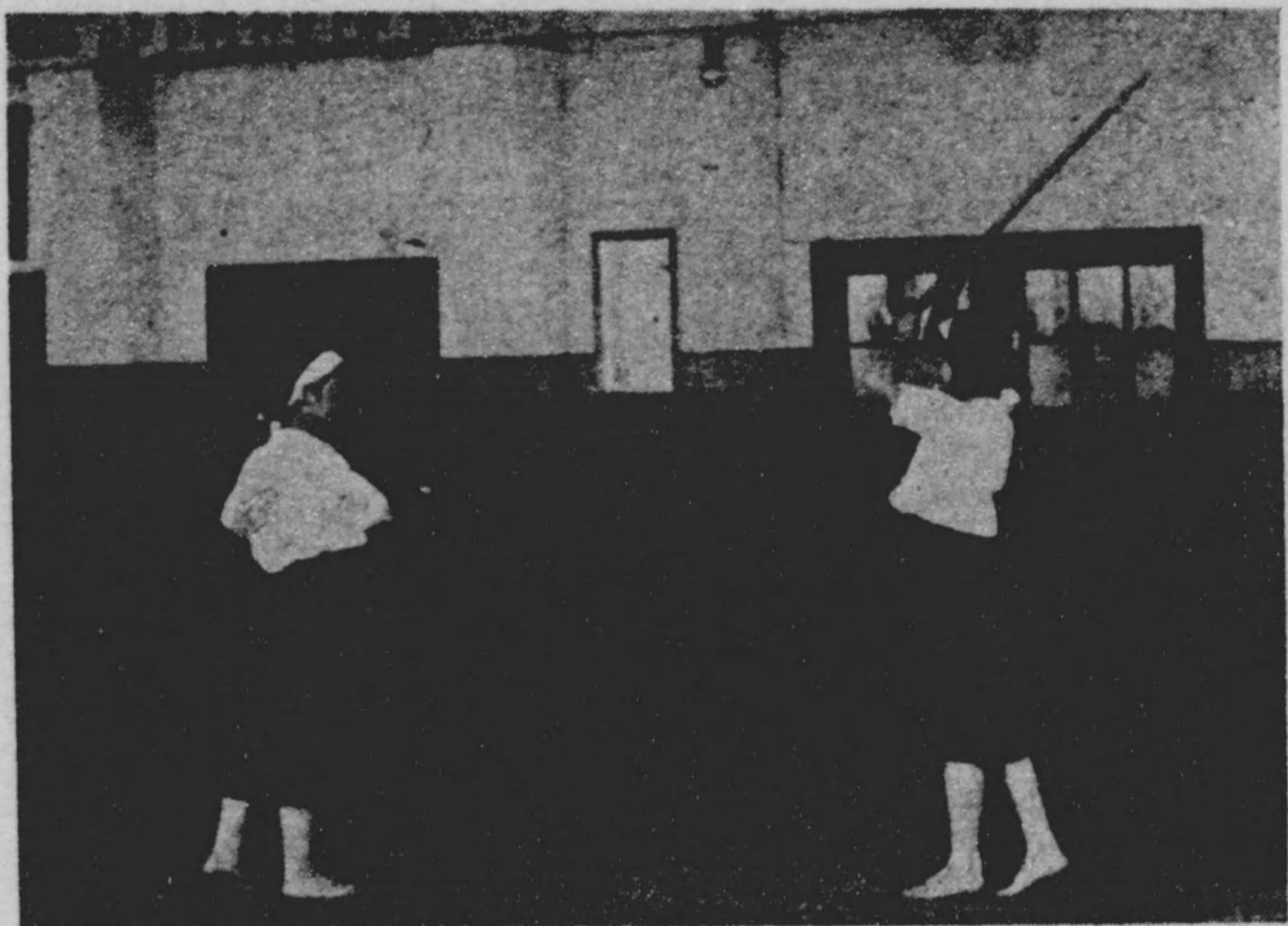
(4)

薙刀 右足を大きく引きて劍先をさげて中段となし、残心を示し薙刀をか。ヒ。込んで元に復す。

注意 右足引く時は左足共に足の前まで引く。

(4)

受太刀 左足を引いて太刀を中段となして残心を示し右足を左足に寄せ一足となし太刀を下段にして元に復す、互に元の位置に歸る。

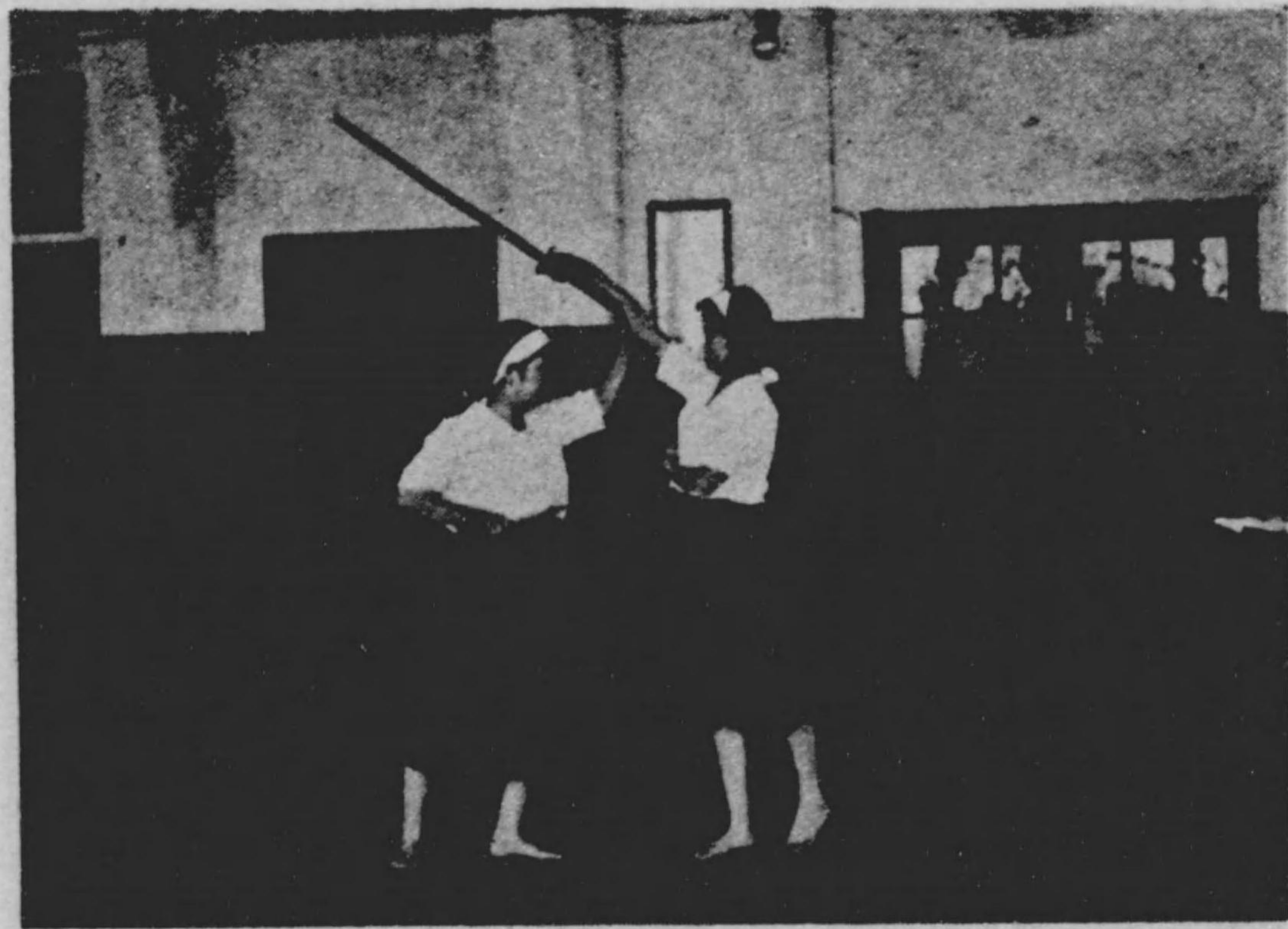


(二十三頁 寫真)

(三) 懐劍の形一本目

注意 懐劍の形は切る手がすくなく、きゆゑ力を抜かぬ様にして静になすべし。

- (1) 互にオリシキの禮をなしたる處より左足より五歩引き五歩目の左足を右足に寄せ一足となす。(寫真なし)
- (1) 打太刀 五歩引きたる處にて左足を少々引きて太刀を中段に構へ右足より大きく三歩進めて右足を引き太刀を上段に構へて「ヤツ」と云ふ。



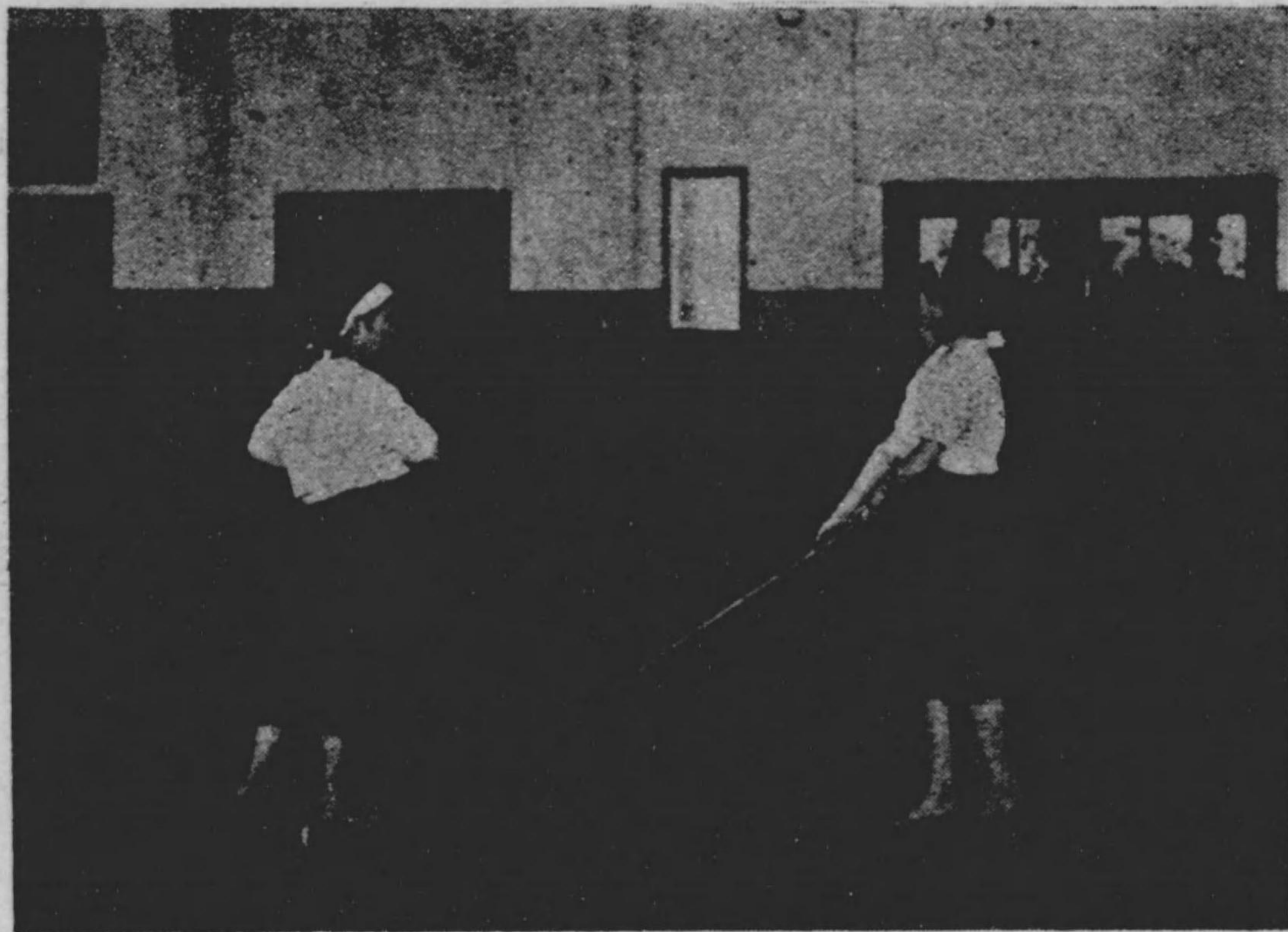
(三十三頁 寫真)

- (2) 仕太刀 五歩引きたる處より大きく右足より三歩進め、懐劍の柄に右手をかけ左手は懐劍をさしたる處にかける。

(寫真一三二)

注意 懐劍は袴の紐にさしてをく、兩手は袴の相引の處を持つ。

- (3) 打太刀 上段より右足大きく一步進め左足共に右足の後まで寄せて兩手を伸ばして面を切る。同時に左手をはなして右乳下にをく。
- (3) 仕太刀 打太刀が面に來ると同時に懐劍を抜き左足大きく一步進め右



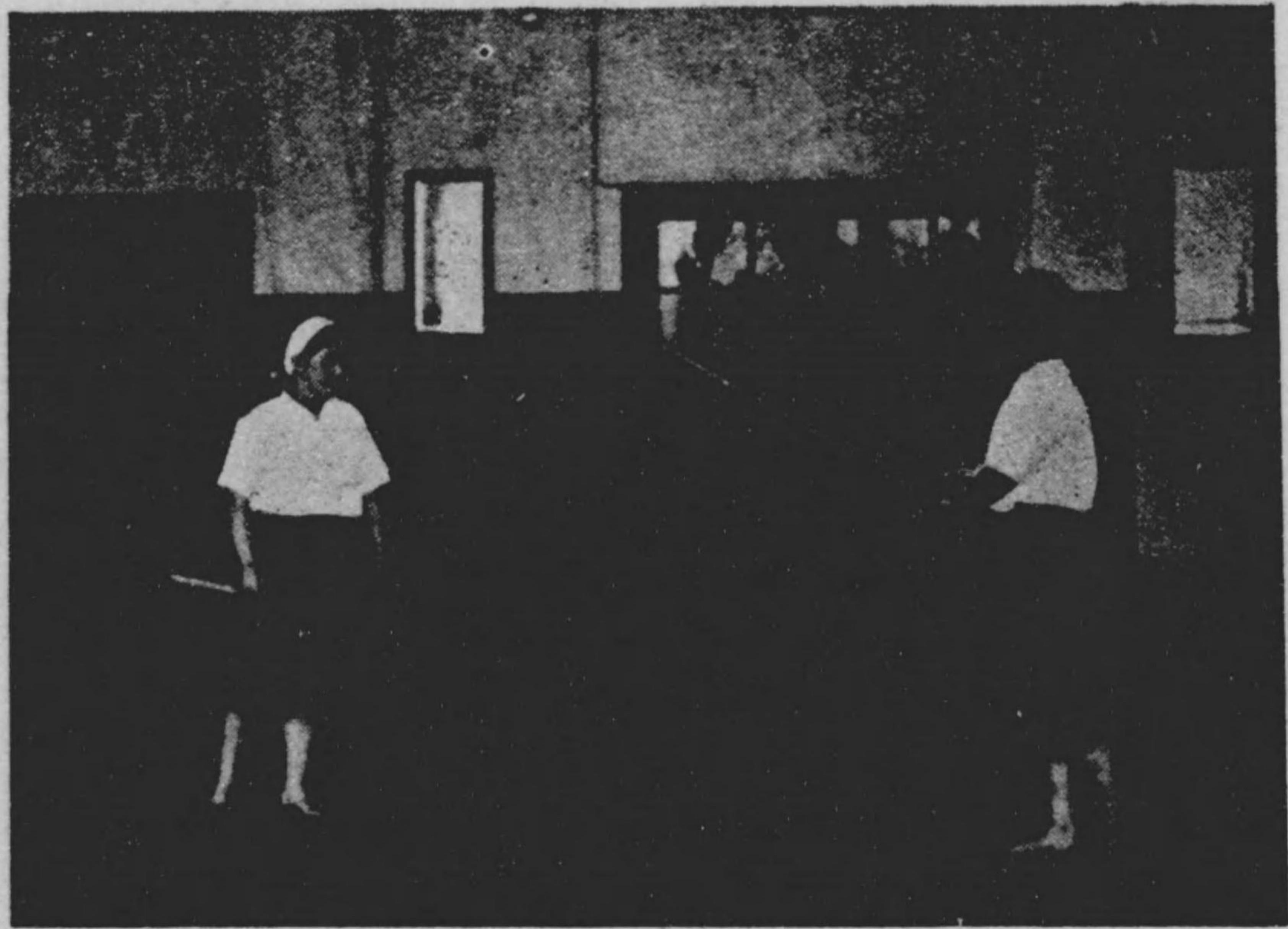
(四十三百 眞 寫)

足も共に左足の處まで進め左手にて太刀の右手を下より上げ右乳下を突く、互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一三三)

(4) 打太刀 右左と二歩引き太刀を中段にし残心を示して右足を左足に寄せ一足となし元に復す。

(4) 仕太刀 左足を引き懐劍を納めながら残心を示し足を一足となして元に復す。(寫眞一三四)



(五十三百 眞 寫)

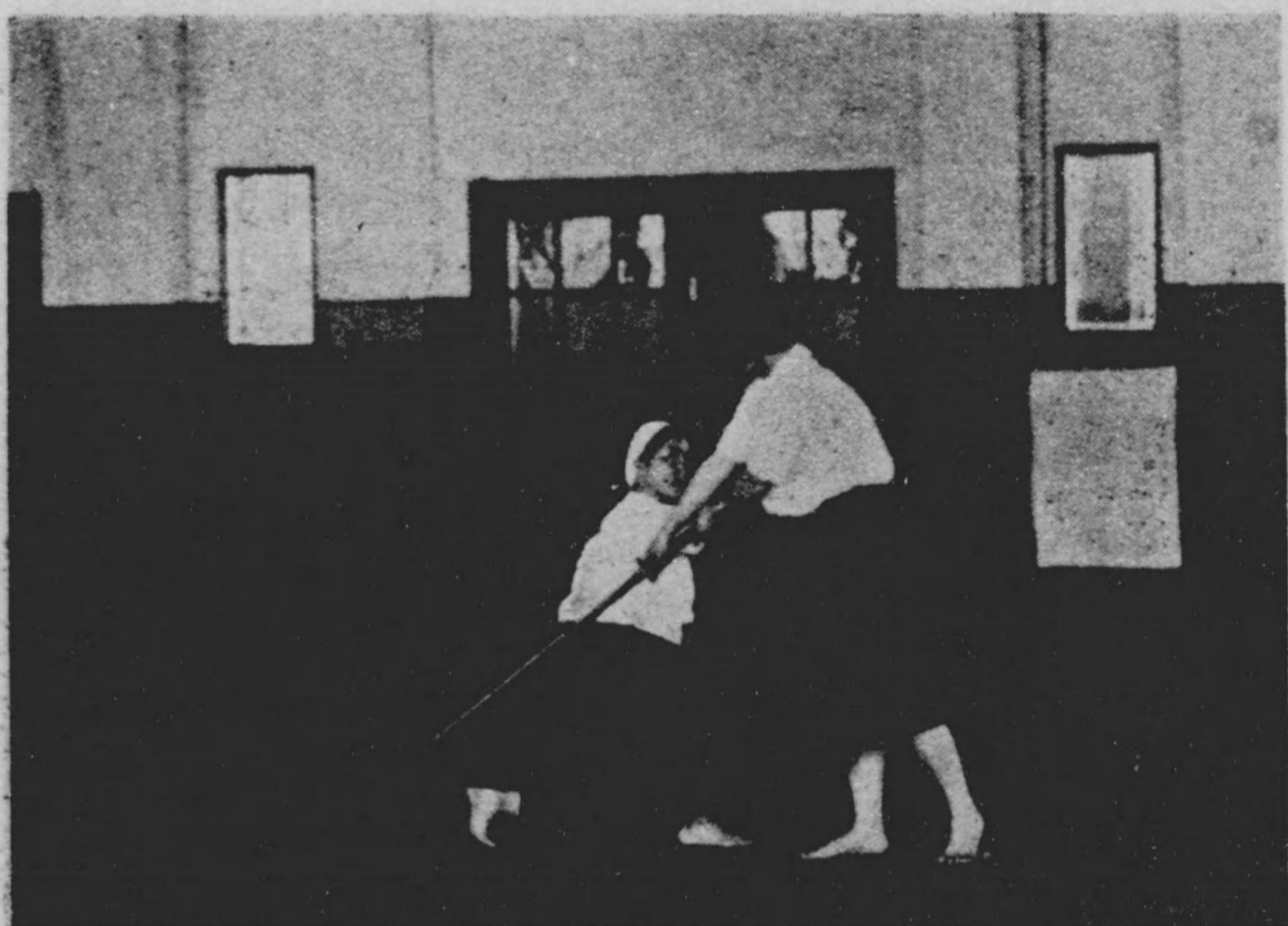
(三) 懐劍の形二本目

(1) 仕太刀 禮をなしたる處より五歩引きたる處から大きく左右左と三歩進む。(寫眞参照)

注意 禮をなしたれば右手を懐劍の柄頭にかけて抜きて懐劍のムネを右手の方へ向ける。寫眞の足はましがひなり。

(1) 打太刀 禮をなしたる處より太刀を下段にし五歩引きたる處にて中段となし右足より大きく三歩進む。

(寫眞一三五)



(六十三百頁寫)

(2) 打太刀 中段より右足を引きて上段に構へて「ヤツ」と云ふと同時に右足を一步進め両手を伸ばして面を切る。

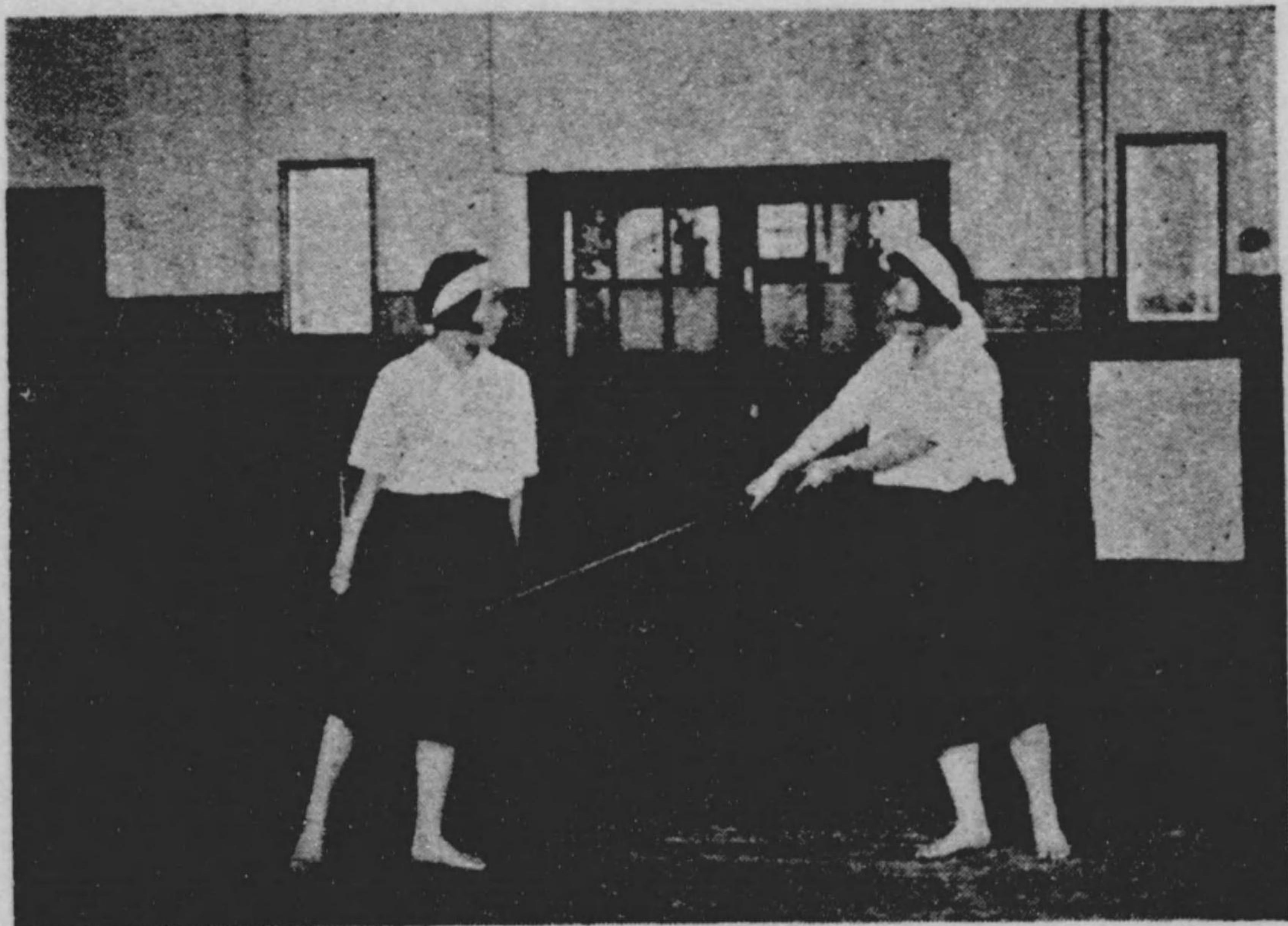
(2) 仕太刀 右足を打太刀の右足の向に進め左足共に進めると同時に左足を折敷き右足を立て太刀の右脇を突く、互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一三六)

残心の事

(3) 打太刀 右左と二歩引きて太刀を中段にして残心を示し右足を左足に寄せて一足となし太刀を下段にして元に復す。

(3) 仕太刀 右左と二歩引きて懐劍を納めながら残心を示し右足を左足に寄せて一足となして元に復す。



(七十三百 眞 寫)

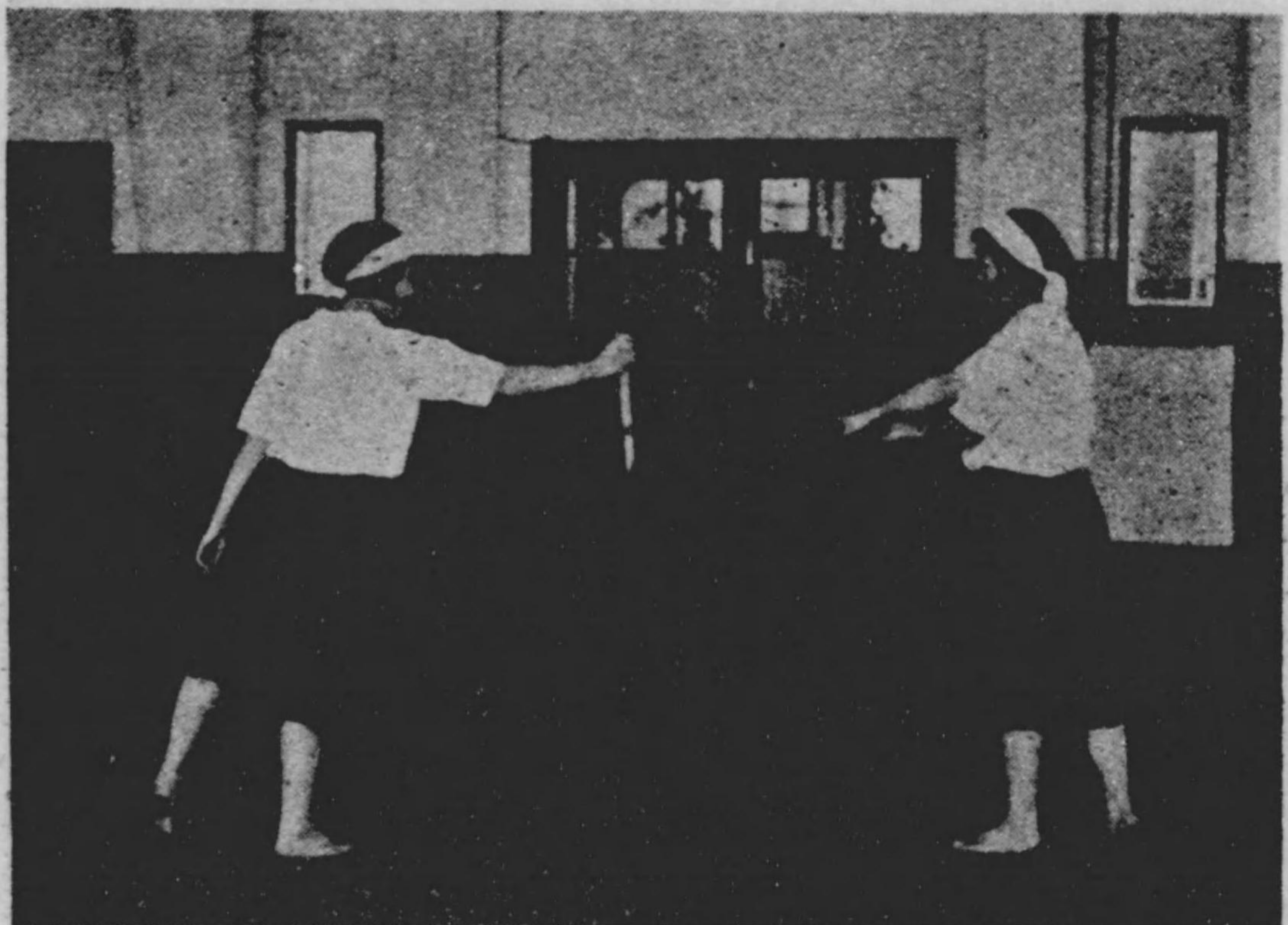
(三) 懐劍の形三本目

一七〇

(1) 打太刀 五歩引きたる處にて中段に構へ右足より三步進みて右足引き上段に構へて「ヤツ」と云ふと同時に仕太刀の正面を切る。

(1) 仕太刀 懐劍を抜きて五歩引きたる處より、右足より三步進み打太刀が面にくると同時に右足を左足の後へ引く、互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一三七)



(八十三百 眞 寫)

(2) 打太刀 左足一步進めて仕太刀の胴を切る。

(2) 仕太刀 左足を引き懐劍の刃を打太刀の方へ向けて胴を受ける。互に「トー」と云ふ。(寫眞一三八)

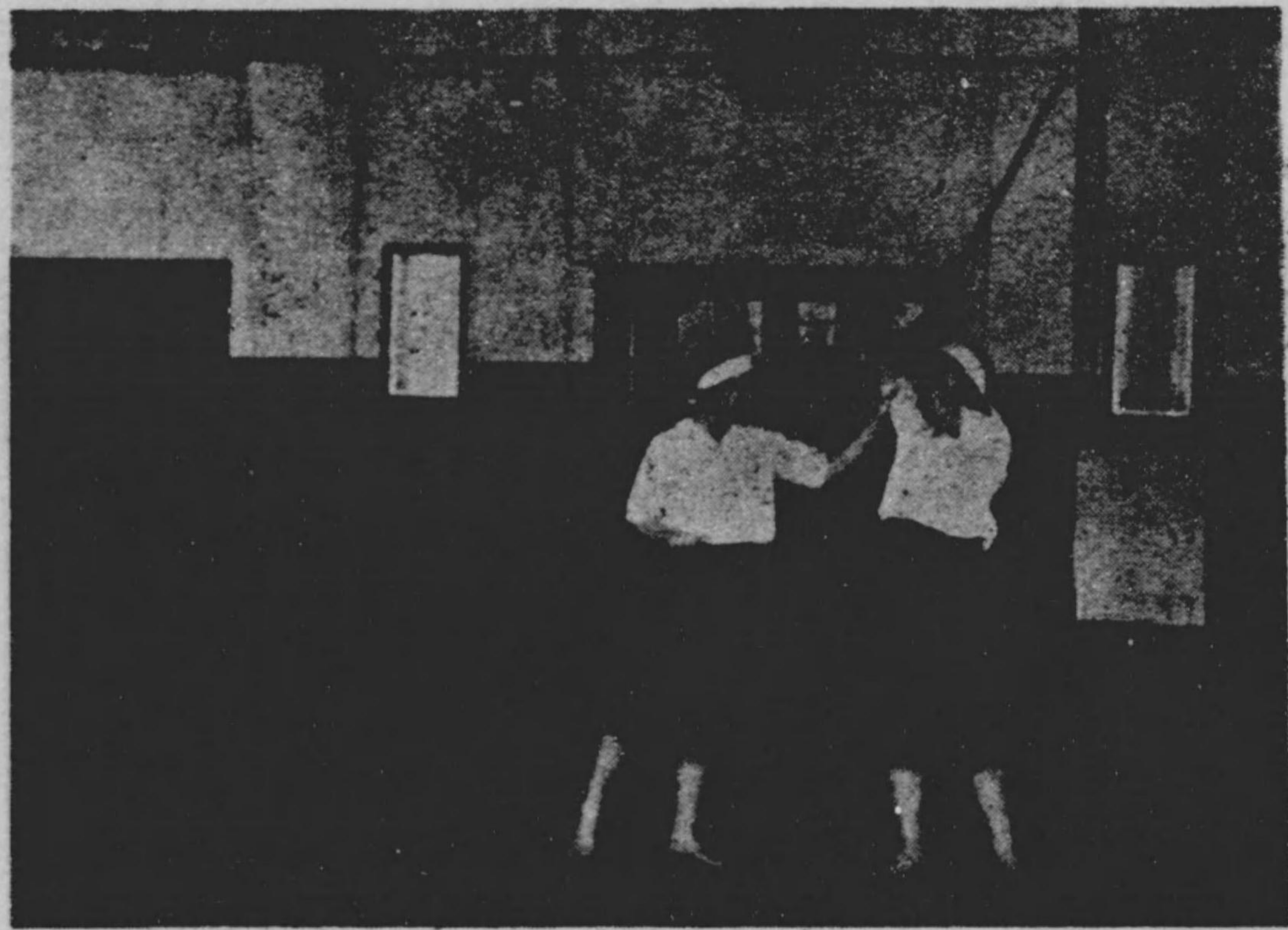
注意 胴を受ける時に太刀を打太刀の左の方へはらふ様にして受ける。

一七一

(3) 打太刀 右足一步進めると同時に上段になす。

(3) 仕太刀 打太刀が太刀を上段に構へなほす時に左足一步大きく進め左手にて打太刀の右手を上げて右脇下を突く、互に「エイツ」と云ふ。

(寫眞一三九)

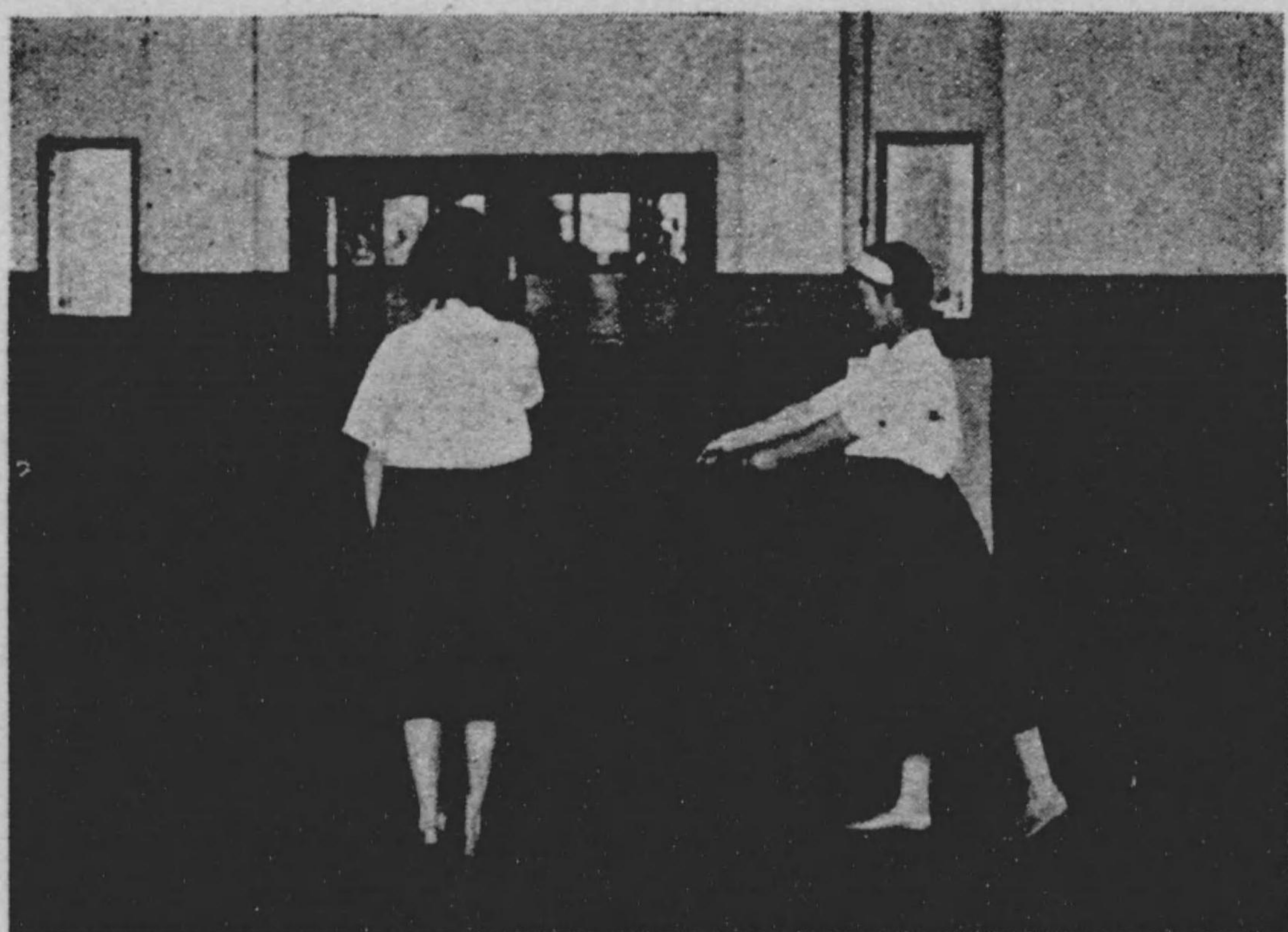


(寫眞百三十九)

残心の事

(4) 仕太刀 右左と引きて懐劍をおさめながら残心を示し右足を左足に寄せ一足となして元に復す。

(4) 打太刀 右左と二歩引き太刀を中段にして残心を示して下段になし右足を左足に寄せて一足として元に復す。



(十四百眞寫)

(三) 懐劍の形四本目

- (1) 互に禮をなしたる處より兩者共に左足から五歩引きて一足となる。
- (2) 仕太刀 懐劍を抜き五歩引きたる處より右足から三歩進み四歩目の左足にて一足となす、打太刀が面を切りにくる時左足引き懐劍のシノギで太刀を拂ふ。
- (2) 打太刀 太刀を下段にして五歩引きたる處にて中段となし、右足より大きく三歩進み右足少し引き上段に



(一十四百眞寫)

- 構へ「ヤツ」と云ふと同時に面を切りて太刀をはらはれる。互に「エイツ」と云ふ。
- (3) 仕太刀 太刀をはらひたれば左足大きく進めると同時に打太刀の右手を上から肱の關節を持ちてカ。タ。の處まで上げ右乳の下を突く。
- (3) 打太刀 面を切りたる太刀をはらはれたる故構へを變へる心にて劍先を右の方へ引く處を仕太刀に突かれ、足は面を切りたるまゝにしてる、互に「トー」と云ふ。

(寫眞一四一)